# 有年考古

## 創刊号

－赤穂市立有年考古館年報（平成 23・24 年度）－

赤穂市立有年考古館
平成２６年３月

# はじめに

有年考古館は、昭和 25 年 9 月に設立された、歴史ある博物館です。『播磨国風土記』に記載が見られない旧赤穂郡の歴史を解明するため、考古・民俗資料の蒐集、調査研究の拠点として、地元で眼科医院を営んでいた松岡秀夫が設立しました。しかし、その歴史も 60 年を経て幕を閉じ、平成 23 年 5 月、赤穂市に寄贈されました。

赤穂市では、松岡秀夫の設立当初の主旨を引き継ぎ、有年地域の歴史文化の調査研究、普及活用のさらなる推進を目指し、赤穂市立有年考古館として平成 23 年 11 月 11 日よりリニューアルオープンしました。

本書は、私立の財団法人有年考古館が、赤穂市立有年考古館へと引き継がれた平成 23 年度、そして本格的な活動を開始した平成 24 年度の事業概要を記したものです。事業は多岐にわたっており、館員が少ない中かなりの苦労をしました。しかし事業概要を見れば、赤穂市立有年考古館は幸先良いスタートを切ることができたと理解していただけることでしょう。

今後も、旧赤穂郡のちょうど中央に位置する赤穂市立有年考古館が、歴史文化の発信拠点となれるよう、努力してまいりますので、今後ともご支援のほどよろしくお願いいたします。

**赤穂市立有年考古館**

# 目　　次

**1．有年考古館の沿革** ―― 1

1　有年考古館の概要 …（1）
2　有年考古館の歴史 …（3）
3　財団法人有年考古館の解散から赤穂市立有年考古館開館の経過 …（8）
4　赤穂市立有年考古館としての再出発 …（9）
5　条例等の制定 …（11）

**2．平成２３年度事業の概要** ―― 13

1　開館準備から開館まで …（13）
2　事業概要 …（19）
3　特別展・企画展事業 …（20）
4　普及事業…（24）
5　出品目録 …（26）

**3．平成２４年度事業の概要** ―― 38

1　事業概要 …（38）
2　特別展・企画展事業 …（42）
3　普及事業 …（50）
4　出品目録 …（54）

**4．展示の記録** ―― 73

1　平成 23 年度特別展『松岡秀夫と有年考古館の歩み－地域とともに－』…（73）
2　平成 23 年度企画展「有年農村舞台の復活記録」…（87）
3　平成 24 年度特別企画展「松岡與之助医学博士没後８０年展－松岡眼科病院と有年文化活動を振り返る」…（94）
4　平成 24 年度特別展「装飾土器と搬入土器－弥生時代の墓とマツリ－」…（107）
5　平成 24 年度特別企画展「佐方渚果生誕１１０年」…（120）
6　平成 24 年度企画展「有年の遺跡発掘調査速報展」…（127）

付録　有年考古館　講演会記録一覧 …（139）

# １．有年考古館の沿革

## １　有年考古館の概要

有年考古館は、主に旧赤穂郡内の埋蔵文化財資料を収蔵、展示活用する私立博物館として、昭和25年９月に設立された。昭和26年４月の財団法人設立に係る寄附定款には、①調査と研究、②埋蔵文化財保護、③資料収集・陳列・展観、④啓蒙宣伝、⑤学術講演会の開催、⑥必要な図書・図録の出版、⑦その他必要な事業が挙げられており、当博物館は、単なる収蔵・展示施設に留まるものではなく、郷土の歴史研究に資し、これを公開活用することを目的としていた。

有年考古館を設立した故・松岡秀夫は、眼科医を営みながら私財を投じて、遺物の蒐集や発掘調査を実施し、旧赤穂郡の古代史を明らかにする基礎資料を一括して保管、公開した。

館内には、旧赤穂郡内出土遺物（赤穂市指定文化財）を中心に、比較資料として全国の出土資料も併せて収蔵されており、平成３年に刊行された『有年考古館蔵品図録』（西播流域史研究会編 1991）によって主な資料の図面、写真類が公開され、研究に供されている。また、有年考古館では開館した昭和25年以来、著名な研究者を招いての講演会を開催しており、地域の歴史研究を推進するとともに、一般市民への啓蒙活動を継続的に行ってきた。

このように有年考古館は、松岡秀夫が私財を投げ打って築いたものではあるが、そこに蒐集された資料によって、旧赤穂郡の古代史が築かれたと言っても過言ではない。有年考古館は、収蔵品と併せたその歴史自体が、きわめて価値の高いものと言える。

平成23年、財団法人有年考古館は解散し、有年考古館及び収蔵資料は一括して赤穂市に寄付された。赤穂市では、上記の有年考古館の設立経緯及び有年考古館の本旨を継承していくため、赤穂市立有年考古館として、平成23年11月にリニューアルオープンした。

**有年考古館の施設概要・規模**

※平成23年６月まで

（1）　位　　置　　赤穂市有年楢原１１６４番地１

（2）　敷地面積　　６３２．３９㎡

（3）　建築面積　　２４２．１４㎡

（4）　構　　造　　旧館　木造瓦葺平屋建

新館　木造瓦葺２階建

※平成23年11月からの追加施設

（5）収蔵庫　　軽量鉄骨造２階建　76.46㎡（敷地632.39㎡のうち）

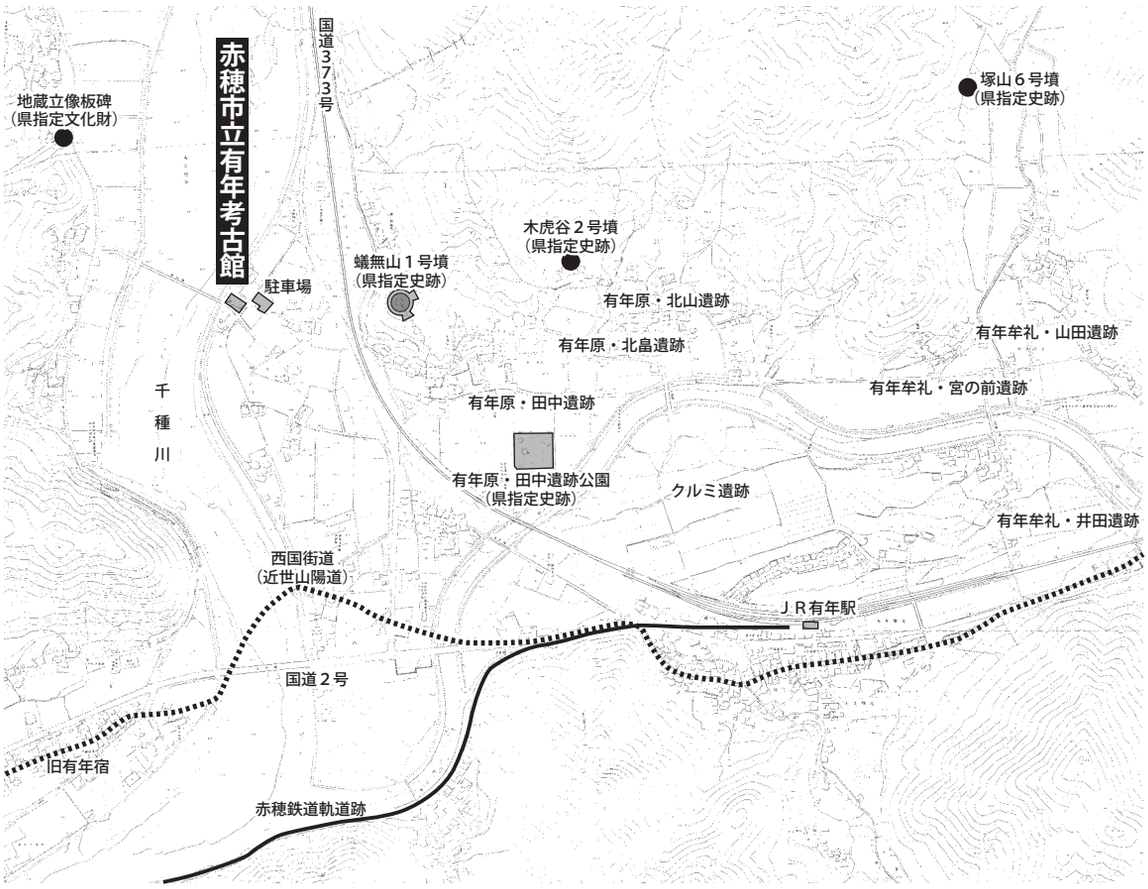
（6）駐車場　　普通車５台（敷地632.39㎡のうち）

※平成24年９月からの追加施設

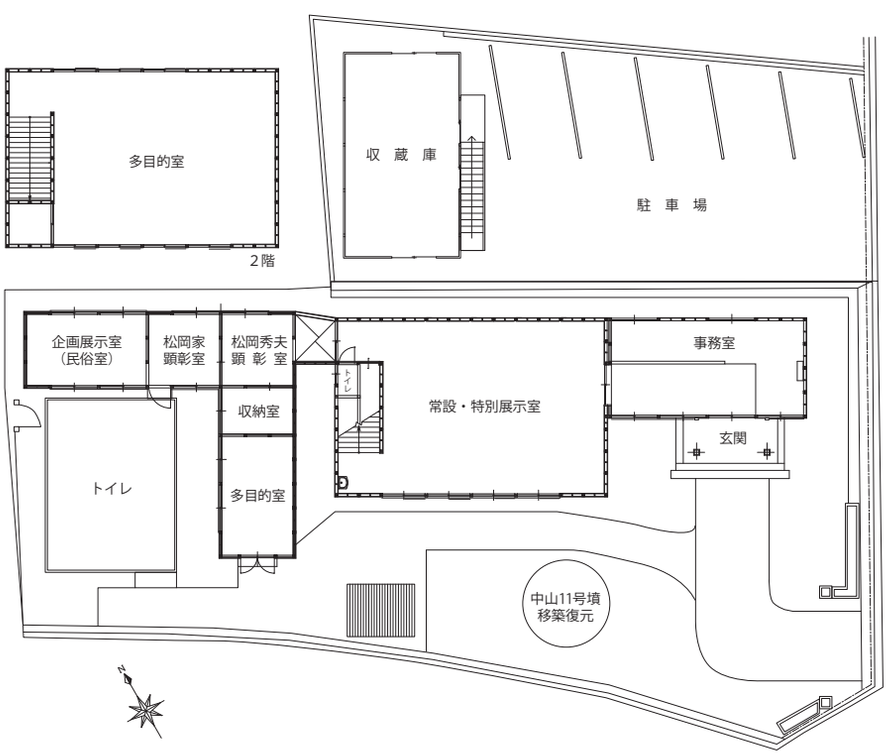
（7）トイレ　　男性・女性・多目的トイレ（おむつ交換台付き）

※平成25年４月からの追加施設

（8）大型駐車場　　普通車30台




赤穂市立有年考古館と周辺の文化財




赤穂市立有年考古館平面図（S=1:300）

## 2　有年考古館の歴史

有年考古館が設立された昭和 25 年とは、昭和 24 年 1 月に起こった法隆寺金堂壁画の火災を受けて、ようやく文化財保護法が制定（昭和 25 年 8 月）された年である。設立当時は、兵庫県には、公立の博物館はおろか美術館、郷土館、図書館すらなかった。

私立の美術館として白鶴美術館（昭和 9 年設立。西宮市所在）、神戸市の池長南蛮美術館（昭和 13 年設立 / 現神戸市文書館）があったが、考古資料館としては、川西市加茂遺跡の出土品を収集・陳列した宮川石器館（昭和 11 年設立。川西市所在）が唯一の存在であった。なお昭和 25 年 10 月には黒川古文化研究所（西宮市所在）が、同年 11 月には、岡山県倉敷市に倉敷考古館が設立（財団認可は昭和 27 年 12 月）されている。

**昭和 25 年 4 月**　有年考古館設立準備委員会（９名）発足、松岡秀夫代表。

**昭和 25 年 6 月**　『有年考古館設立趣意書』を印刷。

単なる陳列施設ではなく、「資料を蒐集保存するとともに、進んで積極的な調査研究」をも行う研究機関とするため、私設の施設とせず、当初から財団法人として発足させる準備をした。

**昭和 25 年 9 月**　第 1 期建物が完成。

幅 1 間半、長さ 4 間余りのＬ字形に曲がった木造平屋建、約４４平方メートルの展示館（第１期建物）が完成

**昭和 25 年 9 月 20 日**　総会にて「財団法人有年考古館寄附行為（定款）」を議決

理事長　島田　清、理事　松岡秀夫、谷精二、板倉一夫、松岡半助、河原重夫、桐谷政義

監事　小林久之助、廣山堯道

定款内容

「本郡に於ける埋蔵文化財、即ち上代の遺跡並に遺物の調査と保護を行い、考古学研究の進展に資すると共にその活用によってわが国の文化の向上発展に寄与する」ため、

①上代遺跡並に遺物の調査と研究　②上代遺跡並に遺物の保護
③上代遺物の収集・陳列・展観　④上代文化遺産の啓蒙宣伝
⑤学術講演会の開催　⑥必要な図書・図録の出版
⑦其の他必要なる事業　を行う。

**昭和 25 年 10 月 8 日**　有年考古館開館式　京都大学梅原末治教授、島田清氏の記念講演会

**昭和 26 年 4 月 27 日**　財団設立認可。

**昭和 26 年 5 月 3 日～ 5 月 13 日**　西野山三号墳の発掘調査。

兵庫県における戦後の学術調査の第 1 号となる。

**昭和 27 年 10 月**　『兵庫県赤穂郡西野山三號墳』報告書刊行。

**昭和 38 年 5 月 1 日**　有年考古館増改築により床面積１２０㎡となる。

**昭和 52 年**　有年考古館増改築により床面積２４０㎡となる。旧館に民俗資料館を併設する。

**昭和 60 年 8 月 30 日**　松岡秀夫館長逝去。松岡秀樹が館長となる。

**昭和 63 年 3 月 30 日**　有年考古館収蔵考古資料 1,250 点が赤穂市指定有形文化財となる。

**史料 1　有年考古館設立趣意書（有年考古館設立準備委員会　1950 年 6 月 25 日）**

我国最初の郷土誌の一つである「播磨風土記」には、どうしたわけか赤穂郡の記事が見当りません。われわれ郷土史を研究しようと思うものにとつて、このことはまことに残念なことであり、さびしい限りであります。どうして赤穂郡が「播磨風土記」の記載から洩れたか、これまでいろいろ研究されて来ましたが、まだ確定的な結論を得るまでには至つていません。

では、我々は、どのようにして古い時代のことを調べたらよいでしようか。風土記の出来た奈良時代或はそれより以前の古い時代になりますと文献で知ることの出来る事柄は非常に少なくなります。そして、それよりも、却て、当時の人々がのこしたいろいろの遺物や遺跡によつて、歴史や文化を教えられることが多くなるのです。

赤穂郡についても、遺跡や遺物を研究すること、即ち「考古学」の方面から調査を進めるならば、これまで知られている以上に古代の有様がはつきりして来ます。私が僅か数年の間に得た経験から言つても、このことは動かせない事実です。しかも、これらの遺跡や遺物は不注意な開墾や土木工事のために破壊湮滅される場合が非常に多く、もし、一旦破壊された場合には、再びもとのものを知ることが出来ません。われわれの祖先が努力に努力を重ねてつくりあげた貴重な文化財が、こうした心ない人々の鍬先で、次々と失われて来た事実は、わが赤穂郡だけについてみても数えきれぬほどたくさんあります。この上、いつまでも放置しておいたらどうでしよう。赤穂郡の古代文化は、伝説や文献の断片によつて僅かに想像するよりほか資料がないことになります。私はこれを心配し、今のうちに、こうした資料を蒐集保存するとともに、進んで積極的な調査研究をも行い、これまで全く不明であつた赤穂郡の古代史を明らかにしたいと考えたのであります。

「考古館」の設立はこうした仕事の中心機関となる場所となるために、先づ第一に着手されねばならぬことであります。そして、ここに郡内出土の遺物を蒐集陳列し遺跡のように動かせないものや、他所にあるものは写真、図面等で掲出し、赤穂郡の古文化財にどんなものがあるかを一目でわからせるようにせねばなりません。一般学界に知られている赤穂郡の考古資料があまり多くない現状から言つて、このこころみが広く県下乃至は国内全般のこうした研究に寄与することの少くないことも当然予想されるところであります。

赤穂郡第一の雄大な規模と優秀な遺物を出す蟻無山古墳に近く「有年考古館」を設立することになつたのは、全く如上の趣旨からにほかありません。「有年」の名を冠したのは、その所在地を現わしたのであつて、収蔵遺物の範囲は、先づ、赤穂郡内一円を対象としております。又考古館という名も、最も散佚破壊のおそれの多い考古学資料を第一に収めたい意味からつけたものであります。

しかしながら、赤穂郡の吉代遺物を理解するためには、広く日本の各地に出土するものを一応知つておく必要があります。又赤穂郡の歴史を知るためにも、古代の遺物ばかりでなく、歴史時代の遺物も陳列する必要があります。したがつて今後は、こうした方面にまで進め、歴史館、郷土館の性格をも持たせたい考えであります。けれども、このような計画を進めるにつきましては、到底、私一個の力でやりとげることが出来ません。広く郡内諸賢の厚い御同情と熱心な御協力があつて、はじめて出来るものであります。何卒上述しました趣旨に御賛同下さいまして微力なわれわれの上に御力添え下さいますよう懇願して己みません。

昭和二十五年六月
有年考古館設立準備委員会
代表者　松　岡　秀　夫

猶、早速に、あつかましい御願いをして恐縮でございますが、貴殿御所蔵の御品のうち、土器の一破片でも、又、古文書の一断簡にても結構で御座いますから、当館に御出品下さいまして、その内容充実に御協力下さいますならば有難き幸せに存じます。

それから、御出品は、失礼ながら、御委託、御売却もしくは御寄贈のいづれかの方法によつて御願い申し上げます。御譲り下さいました品は、これを法人の所有といたしまして御委託の分と共に御芳名を記して永くその御厚意に報いたいと思つています。目下第一期建物の工事中でありまして、出品物の蒐集も、八月一ぱいを以て終り、九月には開館のはこびに致したいと予定しています。重ねて御協力のほど御願い申し上げます。

**史料２　有年考古館開館式案内状**

謹啓　兼て御指導御協力を賜つてゐました有年考古館も九月末日を以て完成いたし、赤穂郡内に於ける各地の遺蹟からの出土品を殆んど網羅陳列することが出来ました。これ偏に諸賢の御協導の賜と深謝する次第であります。

つきましては来る十月八日（日曜日）晴雨不論午前十時よりこれが開館の式典を挙行いたし、併せて御協力に対する感謝の微意を表し度く計画いたしました。

御多忙中恐縮に存じますが、御繰合せ御臨席の栄を賜りたく此段御案内申上げます。

尚当日午後一時より京都大学考古学教室の先生を御招きして記念講演会を開催する予定であります。

併て御案内申し上げます。

昭和二十五年九月二十八日
有年考古館長　松岡秀夫

追て準備の都合がありますので御手数乍ら御臨席の有無御返事賜り度うございます。

梅原先生の御都合により開館式の順序を左の通り変更いたします

十月八日（日曜日）

午前九時　挙式

午前十時　記念講演会「有年考古館の意義について」

講師　京大教授　梅原末治先生

午後一時　「有年考古館と赤穂郡上代文化について」

講師　兵庫県史蹟調査委員　島田清先生

**史料３　赤穂市指定文化財指定文章　高井梯三郎（当時の辰馬考古資料館館長）執筆**

財団法人有年考古館は、戦後いちはやく松岡秀夫氏が、赤穂市有年（旧赤穂郡有年村楢原）に昭和 25 年 10 月設立された考古・民俗の資料館である。

設立者松岡秀夫氏は生地赤穂郡域が播磨・吉備両域の接壌地帯として重要な歴史的位置を占めながら、今日ついて見るべき資料の保存されるものの少なく、播磨国風土記においても当郡の部が欠落して遺らないことを遺憾とし、あらたに関係資料を収集保存して、一つには郷里の歴史の学術的研究に資し、一つにはこれを公開展示して郷党の子弟の育成に資したいとして設営された博物館施設である。

建物は木造瓦葺２階建の本館と木造瓦葺平屋建の別館の２館から成る。また、玄関は明治 33 年に建てられた旧有年村役場から移築したものである。

資料は、館内でつぎのように分類展示されている。

第１室　全国各地出土の考古資料

第２室　旧赤穂郡内出土の考古資料

階　上　近郊農村の生活民具

別　館　近郊農村の農具類

（収蔵資料の種類と価値）

収蔵資料を大別すれば、つぎのとおりである。

1　考古資料

（1）旧赤穂郡内出土の遺物

（2）域外出土の遺物

（3）伝統製造業の工具類

2　民俗資料

（1）近郊農村の生活民具類

（2）近郊農村の農具類

これら資料は、一地域に則した最も地域的なものであり、そのために全国的にみても独特の資料として評価されるものである。考古資料の内には域外の資料が含まれているが、これは地域資料の理解に資するために、特に収集されたものであり、設立者の自称される「日本最小の考古館」において、観覧者に対し全国的な視野に立って地域資料を理解する手がかりを与えるもので、本考古館に不可欠の資料である。

また、収蔵民俗資料は当地域の農民の生活とその推移とを語るものとして、埋もれた地方民の歴史を知るための別途の資料である。これら資料がまた周到な配慮によって収集され、適切に展示されて、さきの考古資料と相俟って、先史・古代より中・近世、近・現代までのこの地方の歴史の解明と理解との貴重な資料となっている。

このように、収蔵資料は全て設立者の高い識見と深い学殖とをもって収集されたものであり、資料の個々が第一等の資料として価値をもつだけではなく、地域を別にし種類を異にする諸資料も一つの理念のもと取捨され、一括統合して当地域の歴史解明の資料として収蔵されたものであり、地域博物館の資料として、まさに完好の価値をもっている。

（指定について）

以上のような価値を持つ財団法人有年考古館の収蔵資料のうち、「旧赤穂郡内出土の遺物」を有年考古館収蔵考古資料として赤穂市文化財に指定する。その品目は、別記のとおりである。

また、その収蔵考古資料は、その保存と活用を図るべきものであるため、今後綿密な分類・整理を推進していくべきと考える。

これら資料はそれぞれ、「旧赤穂郡内出土の遺物」としては第一等資料であり、中には当考古館が主体となって学術発掘をおこない、その実態と価値とを究明し日本の古墳研究に寄与した西野山３号墳の一括遺物などを含み、先縄文時代から奈良･平安時代にわたる地域資料として、旧赤穂郡内はもとより、我国全体としても先史・古代の歴史の研究と理解とにとって貴重な考古資料である。

**史料４　指定資料の選別に際する資料**

１　資料館及び資料の価値

（1）旧赤穂郡域の貴重な資料が一括して収蔵されていること。

ア　旧赤穂郡域は、播磨・吉備両地域の接壌地帯として、歴史的に重要な位置を占めている。

イ　播磨国風土記にも当郡の部が欠落しているため、出土遺物は学術的研究のためにも貴重な資料である。

（2）資料館は、松岡先生の学術探求の結晶である。

ア　戦後の混乱期にあって、遺物の散逸、紛失を防止するため、私財を投じ建設したものである。

イ　以後 30 数年にわたり、松岡秀夫氏は収蔵資料を充実させ、考古学を志す子弟（後輩）の育成に努められた。

ウ　資料館は、旧赤穂郡域はもとより、西播磨、県下の考古学を学ぶ者の研究拠点として、利用が図られてきた。

２　市指定考古資料点数（第１次）－旧赤穂郡内の出土遺物－

| 出土地 | 遺跡数 | 遺物点数 |
|---|---|---|
| 赤穂市 | ６２ | ７７４ |
| 相生市 | ２８ | １７４ |
| 上郡町 | ５１ | ３０２ |

３　分類理由

（1）赤穂郡域の歴史上重要な遺物で、学術的価値が高いこと。

（2）資料は、考古館設立者松岡秀夫氏の高い識見と深い学殖をもって収集されたものであること。

（3）赤穂郡内の資料を一定場所に収蔵、展示することによって、郡域の全貌が把握できること。

（4）資料散逸が防がれ、文化財としての保護が図れること。

（5）松岡秀夫氏の考古研究を通して、地域文化に尽された功績を高く評価し、これを顕彰するものであること。

（6）有年考古館収蔵資料のうち旧赤穂郡内出土遺物を遺跡ごとに時代、時期、形態別に分類し、系統的、総合的に収蔵・展示し、市指定文化財として、後世に永久に保存すること。

## 3　財団法人有年考古館の解散から赤穂市立有年考古館開館の経過

**平成 22 年 6 月 27 日**

財団法人有年考古館　理事会開催「今後の財団法人有年考古館の経営について」

建物の老朽化、維持管理の困難さ、入館者数の減少及び経営者達の高齢化により、財団の解散と、財団財産を赤穂市に寄付し、運営管理を赤穂市へ移管する提案が議決。

**平成 22 年 12 月 10 日**

松岡秀樹館長、「財団法人有年考古館の解散と寄付について」文書を赤穂市教育委員会経由で赤穂市に提出。

**平成 23 年 2 月 6 日**

財団法人有年考古館　理事会開催。解散のための寄付行為変更を承認議決、清算人の選任。

**平成 23 年 2 月 9 日**

財団法人有年考古館解散許可申請書を兵庫県文書課公益法人室に提出。

**平成 23 年 2 月 10 日**

兵庫県文書課公益法人室が寄付行為変更認可書及び残余財産処分許可書を発行（２月１２日受領）。

**平成 23 年 2 月 16 日**

神戸地方法務局龍野支局に対し、存続期間設定の登記申請。

**平成 23 年 2 月 23 日**

存立期間登記完了。

**平成 23 年 2 月 25 日**

財団法人有年考古館の寄付申出書を市に提出。

**平成 23 年 2 月 28 日**

財団法人有年考古館　解散。

**平成 23 年 5 月 20 日**

有年考古館の土地、建物及び収蔵資料その他を赤穂市に寄付。

**平成 23 年 6 月 30 日**

赤穂市立有年考古館条例を制定する（平成 23 年 6 月 30 日条例第 19 号）。

**平成 23 年 7 月 1 日**

有年考古館の収蔵品等の整理作業を開始。

**平成 23 年 8 月 12 日**

有年考古館の改修及び収蔵庫建設工事に着手する。

**平成 23 年 8 月 25 日**

赤穂市立有年考古館条例施行規則を制定する（平成 23 年 8 月 25 日教委規則第 10 号）。

**平成 23 年 10 月 12 日**

考古館改修工事完了。

**平成 23 年 11 月 11 日**

リニューアル開館式。

## 4　赤穂市立有年考古館としての再出発

（1）開館に伴う管理運営計画

赤穂市有年地区の歴史文化に関する資料の保管、調査研究及び展示等を行うとともに、有年歴史公園や有年地区に所在する歴史文化遺産と連携し、市民が歴史文化に触れ合う機会の創出とその活用ができるよう、赤穂市立有年考古館の運営を行う。

既存の建物配置や展示・陳列ケースの配置に規制を受けながらも、創意工夫により、従来の展示法（開館当時とほぼ同じ形態）から今日的な展示法（現在の標準的な展示法）へ変更する。

赤穂市への寄付・移管後の開館は、さほど期間を空けられず、中期的な計画を検討する必要はあるものの、できるだけ速やかな開館を目指す。

（2）運営方針

有年考古館の設立当初の趣旨は、地域歴史の学術研究に資し、関係資料の収集保存と公開展示及び地域研究者の育成であった。

赤穂市では今後の運営にあたり、同館の設立当初の趣旨を生かしながら、有年歴史公園や有年地区の豊かな歴史文化遺産を一体的に活用することにより、「日本一小さい考古館」と呼ばれた同館を有年地区の歴史学習拠点として、市民が地域の歴史文化に触れ合い、積極的に参加できる、特色ある運営を実施する。

ア　有年原・田中遺跡公園、東有年・沖田遺跡公園、赤穂ふれあいの森、あこう河鹿の森など周辺施設と連携した、一体的利用を図るための中核施設と位置づける。

イ　有年考古館（併設：有年民俗資料館）は歴史も古く全国的にも知れわたっており、専門博物館施設として、市民のみならず専攻学生及び研究者へも対応できる体制とする。

ウ　有年考古館の設立趣旨は、地域歴史の学術研究に資し、関係資料の収集保存と公開展示、及び地域研究者の育成であった。赤穂市への寄付・移管後もこれを踏襲し、地域社会と連携した、開かれた考古館づくりを目指す。

エ　今日的課題となっている学校教育への支援、生涯学習の充実、地域教育力の向上、市民福祉、幼児教育などに寄与できるよう努める。

（3）今後予定される活動

ア　文化財の学芸活動・・・特別展、企画展、特集展（新収蔵資料展）、発掘調査速報展
研究者等の調査への対応、有年地区の歴史解説拠点

イ　文化財の体験活動・・・歴史探検（小中学校向け）・現地探訪会（一般向け）、
民謡・民話の会、レコード鑑賞会、古老の話を聞く、
体験学習会（勾玉、石鏃、貫頭衣、竹トンボ、竹馬等）、
古代住居生活体験会（東有年・沖田遺跡公園）

ウ　文化財の普及活動・・・講演会、シンポジウム、研究会、出前講座、パンフレット、
友の会、会報の発行、Web サイトの開設

エ　学校教育支援活動・・・紙芝居による歴史学習、絵本読み聞かせ、

「うにゅ考古館」の開設（文化財マスコットキャラクター、「うにゅ」による学校教育支援）

オ　社会福祉支援活動・・・民具、古道具を用いた高齢者への回想法（出前・貸出し）

（4）管理運営

ア　運　営　　赤穂市直営

イ　入館料　　無料

ウ　休館日

（ア）　火曜日。ただし、火曜日が国民の祝日に関する法律（昭和23年法律第178号）に規定する休日に当たるときは、その翌日以後最初の国民の祝日に関する法律に規定する休日でない日とする。

（イ）　12月28日から翌年の1月4日までの日。

エ　開館時間　　午前10時から午後4時（入館は午後3時30分まで）

オ　配置人員　　文化財体験活動、学校教育支援活動及び社会福祉支援活動を館外において積極的に実施するため、原則2名による勤務体制とする。

名誉館長　1名　非常勤。原則無報酬。

館　　長　1名　非常勤。教育委員会事務局職員兼務。

専門員　1名　博物館学芸員資格相当の学識を有する者。常勤、パート。

調査員　1名　常勤、パート。

カ　その他　　特別展　年1回開催　　企画展　年1回開催

特集展示（新収蔵資料展）、企画展示（発掘調査速報展）等を随時開催。

（5）ユニークな事業展開

ア　誰にでもやさしい考古館づくり（誰もが気楽に解説を受けられる）

【日本一小さい考古館】から【日本一わかりやすく、楽しめる考古館】へ。

イ　高齢者の生きがいづくり

民俗資料を活用した回想法（出前講座、貸出方式）の実施。

民具・古道具等を使って福祉サイド（デイサービスセンター、高齢者大学）にアピール。

ウ　小学校教育の支援

歴史探検、体験学習、出前講座、展示・説明体験、トライやるウィークの受け入れ。

エ　幼児教育・両親教育の支援

体験教室の実施。

オ　探訪会

施設周辺の遺跡、石造物、旧山陽道、旧赤穂鉄道、古民家、古社寺、民話の地を歩く。

カ　伝統芸能の調査研究、開催支援

平成23年度　有年牟礼農村舞台復活（50年ぶり）

平成24年度　坂越船だんじり復活（60年ぶり）

平成25年度　坂越曳きとんど復活（29年ぶり）

## 5　条例等の制定

○赤穂市立有年考古館条例

平成２３年６月３０日
条例第１９号

（目的及び設置）
第１条　赤穂市有年地区の歴史文化に関する資料の保管、調査研究及び展示等を行うとともに、有年歴史公園や有年地区に所在する歴史文化遺産を活用し、市民が歴史文化に触れ合う機会の創出に資することを目的として、赤穂市立有年考古館（以下「考古館」という。）を設置する。
（位置）
第２条　考古館は、赤穂市有年楢原１１６４番地１に置く。
（開館時間及び休館日）
第３条　考古館の開館時間は、午前１０時から午後４時までとする。ただし、入館は、午後３時３０分までとする。
２　考古館の休館日は、次の各号に定める日とする。
（1）火曜日。ただし、火曜日が国民の祝日に関する法律（昭和２３年法律第１７８号）に規定する休日に当たるときは、その翌日以後最初の国民の祝日に関する法律に規定する休日でない日とする。
（2）１２月２８日から翌年の１月４日までの日
３　前２項の規定にかかわらず、赤穂市教育委員会（以下「教育委員会」という。）は、必要があると認めるときは、開館時間を変更し、又は休館日に臨時に開館し、若しくは臨時に休館することができる。
（事業）
第４条　考古館は、その目的を達成するため、次の各号に掲げる事業を行う。
（1）実物、複製、模写、模型、図書、フイルム、写真、文献、調査図面等の資料（以下「考古館資料」という。）を収集し、保管し、及び展示すること。
（2）考古館資料に関する調査研究を行い、案内書、解説書、目録、図録、調査研究の報告書等を作成し、及び頒布すること。
（3）有年歴史公園や有年地区に所在する歴史文化遺産を一体的に活用するため、学校その他の関係機関と連携し、文化財の体験活動、講演会、講習会、展覧会、研究会等を主催し、及びその開催を援助すること。
（4）前各号に掲げるもののほか、教育委員会が必要と認める事業
（職員）
第５条　考古館に必要な職員を置く。
（入館料）
第６条　考古館の入館料は、無料とする。
（特別利用）
第７条　考古館資料の模写、模造、撮影等をしようとする者は、教育委員会規則で定めるところにより、教育委員会の許可を受けなければならない。
（入館の制限）
第８条　教育委員会は、次の各号のいずれかに該当すると認める者に対し、入館を拒否し、又は退館を命ずることができる。
（1）他人に危害を及ぼし、又は他人に迷惑となるおそれがあるとき、及びこれらのおそれがある物又は動物を携帯するとき。
（2）考古館の施設、設備、考古館資料等を汚損し、損傷し、又は滅失するおそれがあるとき。
（3）考古館の管理上必要な指示に従わないとき。
（4）その他教育委員会が入館を不適当と認めるとき。
（原状回復義務等）
第９条　入館者は、考古館の施設、設備、考古館資料等を汚損し、損傷し、又は滅失したときは、教育委員会の指示するところに従い、これを原状に回復し、又はその損害を賠償しなければ　ならない。
（委任）
第１０条　この条例の施行に関し必要な事項は、教育委員会規則で定める。
付　則
この条例は、教育委員会規則で定める日から施行する。

○赤穂市立有年考古館条例施行規則

平成23年8月25日
教委規則第１０号

（趣旨）

第１条　この規則は、赤穂市立有年考古館条例（平成２３年赤穂市条例第１９号。以下「条例」という。）の施行に関し必要な事項を定めるものとする。

（特別利用の許可申請等）

第２条　条例第７条の規定に基づき、赤穂市立有年考古館（以下「考古館」という。）の資料（以下「考古館資料」という。）の特別利用をしようとする者は、あらかじめ赤穂市立有年考古館特別利用許可申請書（様式第１号）を教育委員会に提出し、その許可を受けなければならない。

２　前項の規定により許可したときは、赤穂市立有年考古館特別利用許可書（様式第２号）を交付する。

３　特別利用は、館内で行う場合は館内の所定の場所において、係員の指示に従つて行わなければならない。

４　他の資料館、博物館、図書館、研究所その他教育委員会が適当と認めるものは、前項の規定にかかわらず、考古館資料の館外貸出しを受けることができる。

５　前項の規定による館外貸出しを受けようとする者は、あらかじめ赤穂市立有年考古館館外貸出許可申請書（様式第３号）を教育委員会に提出し、その許可を受けなければならない。許可された事項を変更しようとするときも同様とする。

６　前項の規定により許可したときは、赤穂市立有年考古館館外貸出許可書（様式第４号）を交付する。

７　教育委員会は、第２項及び第６項に規定する許可に必要な条件を付すことができる。

（特別利用の制限）

第３条　次の各号の一に該当するときは、特別利用を許可しない。

（1）特別利用によつて考古館資料の保存に影響を及ぼすおそれがあると認めるとき。

（2）寄託された考古館資料で寄託者の同意を得ていないとき。

（3）著作権者がある考古館資料で、著作権者の同意を得ていないとき。

（4）その他教育委員会が特別利用をすることを不適当と認めるとき。

２　考古館資料の館外貸出しの期間は、１月以内とする。ただし、教育委員会が特に必要があると認めるときは、この限りでない。

３　教育委員会は、考古館の都合により必要があるときは、考古館資料の貸出期間中であつても当該資料の返還を求めることができる。

４　教育委員会は、特別利用の許可を受けた者が、許可条件に違反したとき又は違反するおそれがあると認められるときは、特別利用許可を取消し、利用の停止又は返還を命じることができる。

（遵守事項）

第４条　入館者は、次の事項を守らなければならない。

（1）考古館資料が、文化財として学術上貴重な価値を有していることを理解し、利用すること。

（2）考古館敷地内において、喫煙しないこと。

（3）所定の場所以外において、火気を使用しないこと。

（4）館内を汚損し、又は建物・設備及び考古館資料を損傷しないこと。

（5）その他考古館の管理運営上支障をきたすような行為をしないこと。

（資料の寄贈・寄託）

第５条　考古館に資料を寄贈又は寄託しようとする者は、教育委員会に申し出て、その承認を得なければならない。

２　教育委員会は前項の寄贈又は寄託を承認したときは、その資料と引きかえに受領書又は保管書を交付するものとする。

（損傷の届出等）

第６条　入館者は、入館に際し、考古館の施設、設備及び考古館資料等を汚損し、損傷し、又は滅失したときは、その旨を係員に届け出て、その指示に従わなければならない。

２　考古館資料の館外貸出しを受けた者が、当該資料を汚損し、損傷し、又は滅失した場合の処理については、条例第９条の規定を準用する。

（委任）

第７条　この規則に定めるほか、考古館の管理運営に関して必要な事項は、別に定める。

付　則

この規則は、平成２３年９月１日から施行する。

（様式第１号～第４号省略）

# 2．平成 23 年度事業の概要

## 1　開館準備から開館まで

（1）改修工事

赤穂市立有年考古館は、財団法人有年考古館を引き継ぐ形で、平成 23 年 11 月 11 日にリニューアルオープンした。それに先立ち、平成 23 年 9 月 14 日～ 10 月 12 日を工期とし、下記の改修工事を実施した。工事費は 11,988,900 円であった。

**平成 23 年度有年考古館改修工事の内容**

（玄関・外構外）

館名看板設置、漆喰壁塗替え、雨漏り修理、消火器設置、官庁届出申請、給排水工事、給水メーター変更、動力設備工事、屋外防水コンセント設置、誘導灯設置、既設土間及び基礎解体処分、土間コンクリート設置、土間スロープアプローチ敷設、駐車場舗設、足洗い場設置、屋外掲示板設置、既設花壇煉瓦修理、既設駐車場ブロック積み補修、整地張芝、公共枡高さ調整、Ｕ字溝設置、雨水排水管、会所工事、花壇土入替え、既設倉庫移動、エアコン電源工事

（1 階事務室）

南側破風板取替え、引違戸撤去、片引戸新設、玄関入口段差解消、網戸取付け、行事予定掲示板設置、建具調整、流し台設置、吊戸棚設置、ＩＨヒーター設置、床束補強

（新館 1 階）

既設展示ケース床シート張替え、スロープ工事、網戸取り付け、展示用掲示板設置、空調設備設置、床束補強、電気増設、電気配線増設

（新館 2 階）

塩ビシート貼り、サニタリーボード貼り、網戸取付け、流し台設置、既設窓ガラス入替え、空調設備設置、電気配線増設

（旧館）

既設天井解体処分、ジプトン天井改修、腰板補修、既設壁剥がし処分、聚楽上塗り、畳敷設、フロアーパネル貼り、段差解消、床補強、網戸取付け、床下換気孔取付け、オープン本棚設置、電灯コンセント設置、空調設備設置

（新館プレハブ）

警備機器設置、基礎、土間工事、本体工事、確認申請、ブラインド設置工事、電気設備工事

このほか、自動火災報知機、誘導灯及び消火器設置、施設周辺除草業務委託、インターネット契約、機械警備契約、コピー機リース契約、案内・誘導看板設置並びに兵庫県博物館協会への入会を行った。さらに、階段手摺設置や展示室改修等の工事を、「有年考古館階段外改修工事」として平成 24 年 3 月 2 日～ 3 月 27 日の工期（工事費 840,000 円）で実施している。

（2）整理作業

改修工事及びリニューアルオープンに備え、平成 23 年 7 月 1 日より整理作業を実施した。寄付を受けた段階の有年考古館は、まさに収蔵品で溢れかえっている状態であり、旧館は事実上の民具収蔵庫となっていた。そのため、隣接地にプレハブ倉庫を建築するまでは、これらの収蔵品を別施設に一旦搬出する必要があった。

有年考古館収蔵資料は、旧赤穂郡内から出土した考古資料 1,250 点（赤穂市指定有形文化財）の台帳が整理されてはいたが、このほか日本全国ないしは海外の考古資料が多く含まれており、その全容はまったく不明であった。幸いにして、収蔵考古資料の多くには、出土地や採集年月日、採集者などが墨書きにより記されており、遺物カードもあわせて参考としながら、台帳作成に取り掛かった。これらはコンテナに格納整理され、赤穂市埋蔵文化財調査事務所（赤穂市東有年 68 番地）に搬出された。また、民具資料については膨大な量が収蔵されており、農具を中心とした大型民具については赤穂市埋蔵文化財調査事務所に搬出し、生活用品を中心とした民具については、設置されたばかりのプレハブ 2 階に収蔵した。残念ながら、3 か月ですべての資料台帳の作成はできなかったため、開館後も順次実施することとなった。

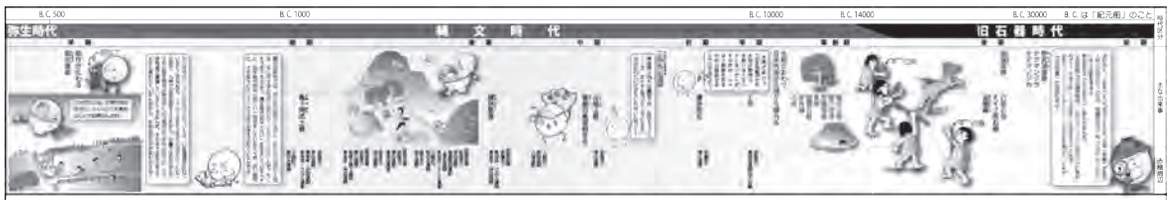
あわせて前館長であり名誉館長の松岡秀樹氏より、有年考古館および松岡秀夫氏ゆかりの諸資料を寄付いただき、リニューアルオープン記念特別展の展示資料とした。

（3）展示スペースの設定

旧来の有年考古館は、館内のほぼすべてが実質的な展示室となっていたが、リニューアルに際して事務室や収納室等を設定した。その結果、有年考古館の展示スペースは、新館の 1、2 階部分及び旧館の 4 部屋分となった。割振りは、新館 1 階を常設・特別展示室、2 階を体験学習等も可能な多目的室、旧館の各部屋を企画展示室（民俗展示室）、顕彰室、多目的室（畳敷き）とした（2 頁参照）。

新館 1 階の常設展示は考古資料展示を基本とし、年表展示及び地域展示とした（地域展示は特別展終了後から実施した）。年表展示は、縄文時代から室町時代末期までの日本全国及び旧赤穂郡（赤穂市、相生市、上郡町）の歴史を、イラストを利用してわかりやすく説明している。展示テキストは、小中学校の教科書からキーワードを抜出して作成し、また旧赤穂郡内の主要遺跡をリスト化することで、各小学校区の身近な遺跡がわかるようになっている。さらに

**財団法人有年考古館の展示状況（左）と、赤穂市立有年考古館の展示状況（右）**




## ヒトが住みはじめたころ

（旧石器時代～縄文時代）

お話は、「日本」という国ができる前、日本「列島」がまだ列島でない時代、言葉はあっても「文字」さえ、まだない時代にさかのぼります。考古学では「旧石器時代」と呼んでいます。

私たちの住む「日本列島」には、およそ3万年前には、すでに人々が生活をしていたことがわかっています。当時は、打製石器を用いて狩猟採集によって生活を営んでいました。時代はまだ氷期であり、寒冷な気候でした。

「日本列島」といっても、例えば約2万年前の海水面は現在より100m も低かったと言われており、「日本列島」と中国大陸とは陸続きでした。そのため、ナウマンゾウやオオツノジカなどを追って、人々が大陸から渡ってきたのです。

1万6千年ほど前、土器が発明されました。土器の発明は、水を貯えたり、食べ物を煮たり、ドングリのアク抜きをしたりと、人々の生活を大きく変えました。考古学ではこの時代を、土器に縄目が刻まれたことから「縄文時代」と呼んでいます。

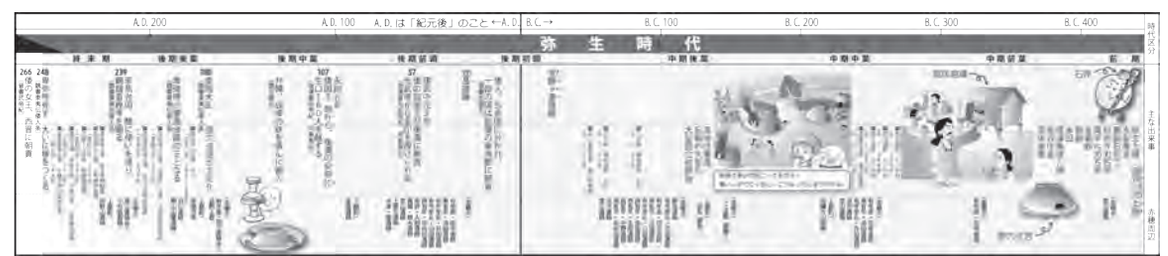
この頃には、ナウマンゾウやオオツノジカを狩るために必要だった大きな石器はなくなり、代わりにシカやイノシシなど小動物を狩るための小さな石器が使われ出します。

石器は、この周辺では奈良県二上山や、香川県金山周辺で採れるサヌカイトという、割るとそのまま刃物になる、特別な石材で作る打製石器がこれまで使用されていましたが、新しく磨製石器が加わりました。

縄文時代の人々は、地面を掘りくぼめた竪穴住居を建てて生活しました。動植物など自然の資源に恵まれたムラの場合、たくさんの人が同じ場所に長い期間住むことができました。こうしたムラでは、ゴミをずっと同じ場所に捨て続けたため貝塚ができ、この貝塚を発掘調査すれば、昔の人々が使っていたものや、何を食べていたのかがよくわかるのです。しかし、こうしたムラばかりではなく、ほとんどのムラでは、シカやイノシシといった獲物を求めて移動しながら生活をしていました。

紀元前500年頃（今から2500年前）になると、中国の長江流域や朝鮮半島南部から稲作が伝えられました。

「弥生時代」の始まりです。




## コメ作りと争い

（弥生時代）

稲作には、長い期間にわたる作業が必要ですが、コメは同じ場所で生産でき、また貯えることができるので、多くの人々が定住できるようになったのです。このとき各地の遺跡では、環濠集落、遠賀川式土器、磨製石器などの新しい文物がまとめて見つかることから、稲作は技術をもつ人々が東へ移動するにつれ、伝えられたと考えられています。

大陸からは青銅器や鉄器も伝えられ、日本列島では銅鏡、銅鐸、銅剣、銅鉾といった青銅器は祭りの道具として、鉄鏃や鉄剣といった鉄器は狩りや武器に使われました。一方で土器は、縄文土器のように形や文様の複雑なものは作られなくなり、シンプルな弥生土器が作られるようになりました。

収穫された米は、定住するムラの最大の敵である、動物の被害や洪水被害から守るため、高床倉庫に収納され、ムラのみんなの食料となったのです。

人々の生活は安定し、遠くの人々との交流も大いに広まりました。しかし、米をたくさん貯えることができたムラと、できなかったムラとに分かれ始めたのです。その結果、ムラの間に貧富の差ができ、食料、土地や水利などを取り合って争いが起こりました。

人々は、ムラの周りに溝をめぐらす環濠集落や、わざわざ山の頂上などに住む高地性集落などを作り、防備を固めるとともに、中国の国に応援を依頼する使いを送っていた例もあります。有名なクニとして、卑弥呼が魏から銅鏡100枚などを与えられた邪馬台国があります。

## ヤマト王権時代

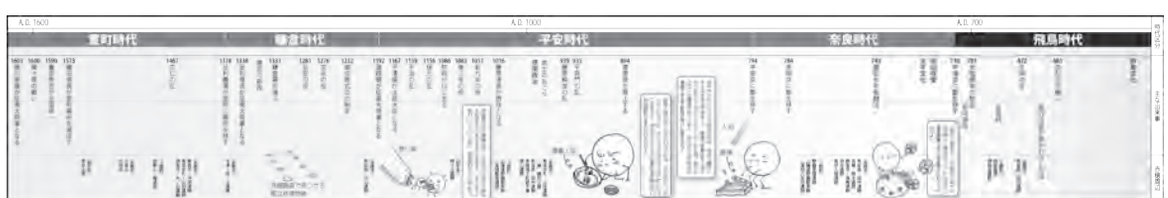
（古墳時代）

争いの結果小さなムラがまとめられて大きなクニが各地にできました。そしてクニの権力者一人のため、全長数百メートルの巨大な墓を造る時代がやってきます。**古墳時代**です。

初期の大型古墳は、**奈良盆地東南部**に築かれることから、ここに政治の中心があったと考えられ、考古学では「**ヤマト王権**」と呼んでいます。その支配者は、古墳出土の鉄剣に刻まれた文字から「**大王**」と呼ばれていたことがわかっています。

古墳時代前半期で、特にヤマト王権とかかわりの深い古墳は、**前方後円墳**と呼ばれる形のもので、埋葬施設には**竪穴式石室**が造られ、**銅鏡**や玉類、**鉄刀**や**鉄剣**などが副葬されます。古墳時代後半になると、全国的に古墳の数が激増しますが、その反対に大きさは小さくなり、**横穴式石室**が造られ、朝鮮半島伝来の**須恵器**などが副葬されます。これらの古墳は一か所に密集していることから「**群集墳**」と呼ばれています。

古墳は7世紀になっても築かれました。聖徳太子が摂政になったのが593年、つまり6世紀末のことですから、**飛鳥時代にも古墳が築かれていました**。「**終末期古墳**」と呼ばれています。




## 律令国家の時代以降

（飛鳥時代～）

飛鳥時代に整えられた、律令によって政治を行う方法は、遣隋使、遣唐使などの使節団を中国に送り、その政治の形を大いに参考にして作られたものでした。大宝律令の制定によって、古代の統一国家が完成したのです。

こうした律令国家には、古墳時代以来、中国や朝鮮半島から日本列島にやってきた渡来人が、大きな役目を果たしていました。古墳時代には、東漢氏、秦氏などが活躍し、飛鳥時代では蘇我氏、物部氏が有名です。815年に編纂された「新撰姓氏録」によると、都および畿内に住む1182氏族のうち326氏が渡来系氏族であり、その果たした役割は大きかったと言えるでしょう。

こうした影響のもと、人の埋葬も変わってきました。古墳時代まで、人の埋葬は土葬がふつうでしたが、西暦700年に日本で初めて火葬が行われたと言われています。持統天皇など身分の高い人が火葬されるとともに、古墳そのものがたくさん築かれなくなり、位の高い人だけが古墳を引き続き築くようになったのです。

また、人の住む建物も大きく変化します。古墳時代までの人々は、地面を掘りくぼめる竪穴住居に住み、床が高い高床倉庫に米などを保管していました。しかし飛鳥時代になると、地面を掘りくぼめることはせず、平地式、もしくは高床式の建物に住むようになるのです。

発掘調査は地面から下しか見つかりませんから、飛鳥時代以降の時代の発掘調査では、柱穴を見つけることが多くなります。また、後になると、**掘立柱造**の建物が出てくるため、柱の配置から間取りを考えることも難しくなるのです。

鎌倉時代から室町時代にかけては、戦争のための施設として居館や城が出てきます。こうした遺跡では、大きな礎に囲まれた建物跡が見つかることもあります。

ちなみに考古学から見ると、一般の人々が使う土器については、古墳時代から奈良、平安時代、鎌倉時代への移り変わりは、形が少しずつ変化し、現在の器に近い形になっていくことがわかっています。政治は様々に変わっていったとしても、一般の人々は日々を生活し生き続け、今に至っているのです。

年表展示キャプション（常設展）

年表は縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代以降と色分けしており、展示遺物のキャプションの色と整合させることで、より直感的に時代判別ができるようにした。地域展示は、当館に旧赤穂郡の出土遺物が多く収蔵されていることを活用し、各市町ごとに特徴的な資料及び優品を展示することとした。

（4）啓発資料の作成

開館にあたり、赤穂市立有年考古館パンフレット、エコバック及びクリアファイル、記念スタンプ、Web サイト（http:www.geocities.jp/unekoukokan/）の開設、特別展ポスター及びチラシの発行及び配布、封筒の作成を実施した。

（5）リニューアル開館式

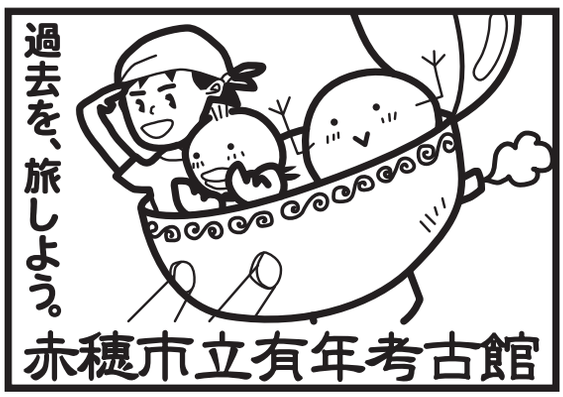
日時　平成 23 年 11 月 11 日（金）午前 10 時開催

場所　赤穂市立有年考古館　参加者 93 名

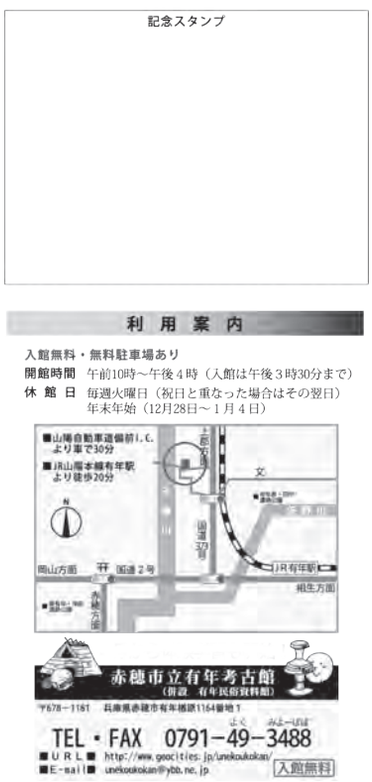
**赤穂市立有年考古館開館式次第**

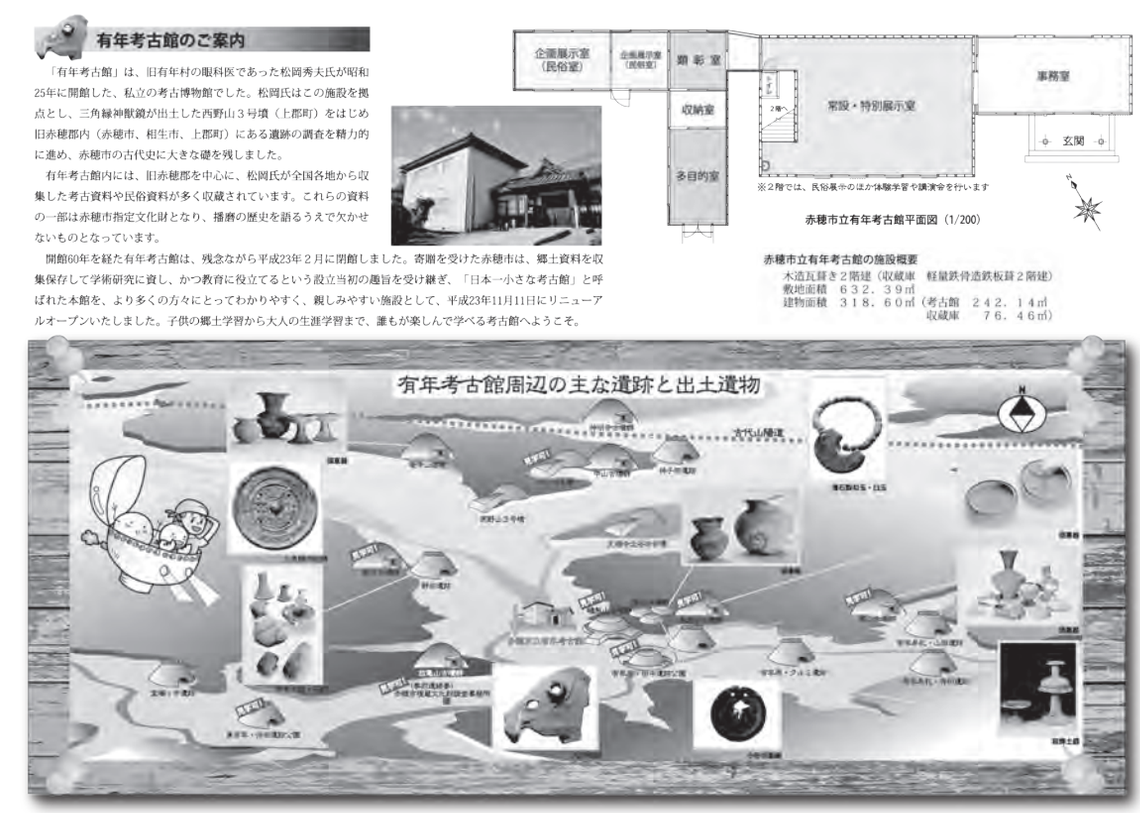
1. 開　会
2. テープカット（市長、兵庫県議会副議長、教育委員長、市議会議長、名誉館長）
   （雨天のため、以下は館内 2 階多目的室にて開催）
3. 開会挨拶（赤穂市長）
4. 式　　辞（教育委員長）
5. 祝　　辞（赤穂市議会議長・兵庫県議会副議長）
6. 経過報告（教育委員会事務局）
7. 活用宣誓（有年小学校・原小学校児童）
8. 閉会挨拶（赤穂市教育長）
9. 〔アトラクション〕はらっ子竹太鼓演奏（原幼稚園児）
10. 館内案内（内覧会）

**開館式の様子**



記念スタンプ（上）と公式 Web サイト（下）






赤穂市立有年考古館パンフレット（A4判・三つ折り）

## 2　事業概要

平成 23 年 11 月 11 日にリニューアルオープンした赤穂市立有年考古館では、地域の博物館として早く根付かせるため、矢継ぎ早に展示事業を行った。まずリニューアルオープン時には、特別展『松岡秀夫と有年考古館の歩み－地域とともに－』を、開館式とともに開催した。また関連事業として、記念講演会を 2 回、遺跡探訪会を 1 回、地元小学校との共同開催による企画展及び説明会を開催した。この特別展と重複させる形で、平成 23 年 10 月にプレ事業として開催した、有年牟礼八幡神社農村舞台復活事業についての小企画展『有年農村舞台復活の活動記録』を開催した。農村舞台の復活上演は、神社氏子らによる「有年農村舞台復活保存実行委員会」（室井伊佐夫代表）が主催し、「赤穂まちづくり研究会」（山本建志代表）が共催となって実施されたもので、50 年ぶりの復活となった。

その後、出前展示として、赤穂市坂越所在の旧坂越浦会所にて企画展『手描き友禅展－加藤知子の傑作－』（会期 2 月 8 日～ 3 月 5 日）を開催し、1,596 名の入館者を得た。3 月 7 日からは企画展『時計展－時・刻・とき－二人のコレクションを中心にして－』を開催した。本企画展は、若松繁之、町田幹夫両氏から寄贈いただいた時計コレクションを中心に、江戸時代以降における時計の変遷について展示解説を行ったものである。あわせて、東有年・沖田遺跡県指定 20 年を記念した小企画展『東有年・沖田遺跡県指定 20 年展』も同時開催している。また年度末となったが、平成 23 年 3 月の発掘調査で発見された有年牟礼・山田遺跡の大型方形周溝墓群とその出土遺物について、速報展を開催した。平成 23 年度の特別展、企画展は 7 件であった。

普及事業としては、一般向けの史跡探訪ガイドを 5 回、幼稚園児を対象とした教室を 1 回、小学児童を対象とした考古学・民俗学教室を 2 回、一般向けの考古学・歴史学・民俗学教室を 2 回、高齢者教室を 1 回、地域回想法教室を 5 回、出前講座を 3 回、行政視察受入れを 3 回開催した。

このように、開館からの期間がまもないなか、民俗資料館を併設した当館ならではの事業も積極的に展開した。入館者数は、開館日である 11 月 11 日からのおよそ 5 か月で、1,963 人であった。

**平成 23 年度の入館者数（11 月は 11 日から開館）**

| 月 | 開館日数 | 入館者数（人） | | | うち団体数（　）は人数 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 大人 | 小人 | 計 | |
| 11 月 | 17 | 407 | 90 | 497 | 4（216） |
| 12 月 | 23 | 327 | 33 | 360 | 9（181） |
| 1 月 | 23 | 260 | 25 | 285 | 6（122） |
| 2 月 | 25 | 141 | 1 | 142 | 2（26） |
| 3 月 | 27 | 603 | 76 | 679 | 5（185） |
| 計 | 115 | 1,738 | 225 | 1,963 | 26（730） |

## 3　特別展・企画展事業

（1）特別展『松岡秀夫と有年考古館の歩み―地域とともに―』

**会期・入館者数**

2011.11.11（金）～ 2012.1.9（月）

入館者数 916 人（開館日数 45 日）

**内　容**

リニューアルオープンに合わせ開催した特別展。松岡秀夫の生い立ちから、有年考古館設立やその活動など、秀夫の一生涯を追いかけるとともに、有年考古館に収蔵されている逸品を展示した。

**主な展示物**

・松岡與之助、松岡医院ゆかりの品々

遺稿、雑誌『郷土研究』、家族写真、郵便はがきなど

・松岡秀夫、有年考古館ゆかりの品々

『有年文化協会建設記』、幻灯機、『有年考古館設立趣意書』、西野山三号墳発掘調査時の埋蔵文化財発掘届出書、有年考古館ゴム印、抜刷り、発掘調査報告書、調査ノート、著名人との書簡、新聞記事、実測・測量・医療道具、句集、使用機材、表彰状・勲章など

・有年考古館収蔵考古遺物

西野山 3 号墳出土品（三角縁神獣鏡ほか）、赤穂市内出土遺物（上高野銅鐸鋳型片、原小校庭遺跡、堂山遺跡、周世宮裏山古墳群、塚山古墳群ほか）、上郡町内出土遺物（別名銅剣、中山 12 号墳、竹万山田遺跡、丸尾古墳ほか）、相生市内出土遺物（丸山窯跡ほか）、周辺地域出土遺物（揖保郡太子町黒岡古墳群）

特別展の状況（上）と記念講演会（下）

**関連事業**

ア　記念講演会１

講　師　石野博信先生（公益財団法人大阪府文化財センター理事長）

開催日　2011.11.20（日）　参加者数 83 人　　演　題　『松岡秀夫先生と有年考古館』

イ　記念講演会２

講　師　水野正好先生（兵庫県立考古博物館長）

開催日　2011.12.10(土)　参加者数 100 人　　演　題　『松岡秀夫先生と播磨の古代史』

ウ　史跡探訪会

『有年考古館周辺の史跡を訪ね歩く～有年原～』

開催日　2011.12.4（土）　参加者数 20 人

講　師　宮﨑素一、荒木幸治

訪問先　有年原・田中遺跡→塚山古墳群→木虎谷２号墳→蟻無山１号墳→有年考古館

（2）小企画展示『原小学校壁新聞「古代へタイムスリップ－有年原の遺跡を知ろう」』

**会期・入館者数**

2011.11.11（土）～ 2011.12.19（月）

入館者数 804 人（開館日数 34 日）

**内　容**

赤穂市立原小学校６年生が地元の遺跡を実際に見学し、調べたことをまとめた壁新聞展を開催した。リニューアルオープンの 11 月 11 日には、展示説明イベントも行った。

（3）小企画展示『有年農村舞台復活の活動記録』

**会期・入館者数**

2011.12.21（水）～ 2012.2.6（月）

入館者数 382 人（開館日数 35 日）

**内　容**

有年牟礼・八幡神社境内に、市内で唯一残された農村舞台。平成 23 年度に、神社氏子らによる「有年農村舞台復活保存実行委員会」が立ち上げられ、「赤穂まちづくり研究会」（山本建志代表）の協力を得て、地元小学校をも巻き込んで舞台の保存修理が実施された。そして平成 23 年 11 月 6 日、市内各団体の協力も得て、50 年ぶりの復活公演が実現した。その復活上演の活動記録を展示した。

**主な展示物**

古写真（昭和 6 年～ 35 年頃）、上演幕、行燈、鋲打ち太鼓、拍子木（複製）、背景図製作写真、弁当箱、「祭り舞台」プログラム（昭和 51 年）、農村舞台復活上演写真

（4）出前展示『手描き友禅展―加藤知子の傑作―』

**開催場所**

旧坂越浦会所

**会期・入館者数**

2012.2.8（水）～ 2012.3.5（月）

入館者数 1,596 人（開館日数 24 日）

**内　容**

布に手描きで模様を染めていく手描き友禅を精力的に製作していた故・加藤知子氏の作品を展示した。

（5）企画展『時計展―時・刻・とき―二人のコレクションを中心にして―』

**会期・入館者数**

2012.3.7（水）～ 2012.4.9（月）

入館者数 736 人（開館日数 30 日）

**内　容**

故若松繁之、故町田幹夫コレクションの寄贈を受け、整理調査が完了したため、両氏コレクションを中心に時計展を行った。おもちゃ時計から播陽時計まで、さまざまな時計を展示した。

展　示　風　景

**主な展示物**

尺時計、テンプ時計、播陽時計（姫路時計）、海外製時計、東浜塩業組合事務所や松岡医院等で使用されていた掛時計、海運丸で使用されていた船時計ほか 214 点。

（6）小企画展示『東有年・沖田遺跡県指定 20 年展』

**会期・入館者数**

2012.3.7（水）～ 2012.4.9（月）

入館者数 736 人（開館日数 30 日）

**内　容**

縄文時代後期からの人々の生活跡が確認された東有年・沖田遺跡は、市内随一の集落遺跡として平成 4 年 3 月 24 日に兵庫県指定史跡となった。指定後 20 年を記念し、出土遺物とパネルによる展示を行った。

展　示　風　景

**主な展示物**

東有年・沖田遺跡出土の縄文土器、弥生土器、石器等 65 点、パネル等

（7）小速報展『有年牟礼・山田遺跡発掘調査小速報展』

**会期・入館者数**

2012.3.22（木）～ 2012.4.9（月）

入館者数 736 人（開館日数 30 日）

**内　容**

平成 24 年 3 月に発掘調査を実施し、長辺約 19 mの方形周溝墓などが検出された有年牟礼・山田遺跡の調査成果について、速報展示を行った。

**主な展示物**

有年牟礼・山田遺跡出土の古式土師器、飛鳥時代の須恵器等、写真パネル、図面

## 4　普及事業

（1）有年農村舞台復活上演

有年牟礼・八幡神社（赤穂市有年牟礼 1310 番地 1）境内に所在する農村舞台は、昭和 21（1946）年に建てられ、秋祭りなどでは青年らによる田舎芝居や、にわか浪曲などの興行が行われた。こうした興行は昭和 36（1961）年頃まで続けられたが、その後使用されなくなった。

有年考古館では、リニューアル開館のプレ事業として、伝統芸能開催支援を計画した。そこで神社氏子らに働きかけた結果「有年農村舞台復活保存実行委員会」が結成され、「赤穂まちづくり研究会」（山本建志代表）の協力を得て、地元小学校をも巻き込んで舞台の保存修理を行い、平成 23 年 11 月 5・6 日に復活上演会を開催した。雨天のため 11 月 5 日は中止となったが、11 月 6 日は 8 団体 120 名の出演者を得、200 名の参加者を数えた。

**プ ロ グ ラ ム**

**平成２３年１１月５日（土）　午後１時から開演**

| 出　演　団　体 | 出　演　演　目 |
|---|---|
| 有年農村舞台復活保存実行委員会 | 会長あいさつ |
| 1．原小学校原っこ和太鼓（有年） | 和太鼓演奏（２０１１「和」） |
| 2．原幼稚園はらっこだいこ（有年） | 竹太鼓演奏（忍者参上） |
| 3．有年みらい会（有年） | 人形劇（ちくさ川） |
| 4．The 47 Black Cats Planning（赤穂） | 紙芝居（赤穂義士物語） |
| 5．西有年西龍会（有年） | 雅楽演奏（越天楽、五常楽、抜頭） |
| 6．木村勝代（塩屋） | 日本舞踊（雪の南部坂） |
| 7．赤穂宝専寺恵比寿大黒舞保存会（尾崎） | 恵比寿舞・大黒舞 |
| | （恵比寿舞　誕生の巻） |
| | （大黒舞　年徳玉の舞） |
| | 【兵庫県無形民俗文化財指定】 |
| 8．舞踊同好会（赤穂）福本久子 | 日本舞踊（黒田節） |
| 山下静代 | 日本舞踊（助六） |
| 9．詩吟同好会（有年） | 詩吟（合吟、独吟、合吟、構成吟） |
| 10．鍵盤ママクラブ（有年） | 鍵盤ハーモニカ演奏 |
| | （まるまる、アンパンマン、童謡赤とんぼ） |
| | （トトロ、キセキの花を咲かせよう） |
| 11．尾崎公民館サークル大正琴部（尾崎） | 大正琴演奏（黒田節、里の秋、ふるさと） |
| 12．赤穂民謡サークル（赤穂） | 民謡（ソーラン節、斎太郎節、花笠音頭） |
| 13．民謡さくら会（塩屋） | 民謡（四季の舞音頭、真室川音頭） |
| 14．友舞傘（尾崎） | 傘踊り（平成音頭） |
| 15．門前太鼓（高雄） | 和太鼓演奏（高雄ぼやし） |
| 16．有年中学校防犯委員会（有年） | 小劇・マモルンジャー |
| | （事件にまきこまれないために） |
| 17．赤穂義士ライダー47プロジェクト（赤穂） | 小劇（赤穂義士ライダー47ショー） |

**平成２３年１１月６日（日）　午前10時から開演**

| 出　演　団　体 | 出　演　演　目 |
|---|---|
| 有年農村舞台復活保存実行委員会 | 会長あいさつ |
| 1．この本だいすきの会（有年） | 大型絵本の読み語り |
| | （おまえうまそうだね） |
| | （ねずみくんのチョッキ） |
| 2．尾崎小学校恵比寿・大黒舞クラブ（尾崎） | 恵比寿舞・大黒舞 |
| | （恵比寿舞　誕生の巻） |
| | （大黒舞　年徳玉の舞） |
| 3．楢原松涛会（有年） | 雅楽演奏（越天楽、五常楽、抜頭） |
| 4．坂越船櫂尻囃子保存会（坂越） | 船櫂尻囃子 |
| | 海岸から沖へ出港の時 |
| | ①ドンガラカ　②ギオンバヤシ |
| | ③ナガシ |
| | 沖から入港接岸の時 |
| | ④ギオンバヤシ　⑤ドンガラカ |
| | ⑥シャギリ　⑦サガリ |
| 5．赤穂塩濱音頭保存会（尾崎） | 赤穂塩濱音頭 |
| 6．坂越盆踊り保存会（坂越） | 坂越盆踊り |
| | 【赤穂市無形民俗文化財指定】 |
| 7．赤穂浜働き唄保存会（尾崎） | 赤穂浜働き唄・実演振り付け |
| | 【赤穂市無形民俗文化財指定】 |
| 8．劇団『蔵』（塩屋） | 殺陣（赤穂浪士吉良邸討ち入り） |

**有年農村舞台復活上演プログラム**
**（平成 23 年 11 月 5 日は雨天のため中止）**

（2）その他のイベント・催し

1　考古学・歴史教室（小学生対象）　2 回　34 人
2　幼児教室　1 回　16 人
3　高齢者教室　1 回　7 人
4　地域回想法教室　4 回　64 人
5　考古学・歴史・民俗講座　2 回　7 人
6　出前講座　3 回　333 人
7　史跡案内ガイド　5 回　315 人
8　行政視察　3 回　39 人

**平成 23 年度の企画展一覧**

| 展示名 | | 会期 | 開催日数 | 入館者数（人） | | | うち団体数（　）は人数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 大人 | 小人 | 計 | |
| 特別展 | 「松岡秀夫と有年考古館の歩み－地域とともに－」 | H23.11.11 ～ H24.1.9 | 45 | 802 | 114 | 916 | 13 (397) |
| 小企画展示 | 原小学校壁新聞「古代へタイムスリップ－有年原の遺跡を知ろう」 | H23.11.11 ～ H23.12.19 | 34 | 687 | 117 | 804 | 9 (397) |
| 小企画展示 | 「有年農村舞台復活の活動記録」 | H23.12.21 ～ H24.2.6 | 35 | 366 | 16 | 382 | 7 (141) |
| 出前展示 | 手描き友禅展－加藤知子の傑作－（旧坂越浦会所） | H24.2.8 ～ H24.3.5 | 24 | 1,575 | 20 | 1,595 | － |
| 企画展 | 「時計展－時・刻・とき－二人のコレクションを中心にして－」 | H24.3.7 ～ H24.3.31 (H24.4.9) | 22 | 578 | 76 | 654 | 5 (185) |
| 小企画展示 | 「東有年・沖田遺跡県指定２０年展」 | H24.3.7 ～ H24.3.31 (H24.4.9) | 22 | 578 | 76 | 654 | 5 (185) |
| 速報展 | 「有年牟礼・山田遺跡発掘調査小速報展」 | H24.3.22 ～ H24.3.31 (H24.4.9) | 9 | 149 | 19 | 168 | 2 (35) |
| 計 | | | 191 | 4,735 | 438 | 5,173 | 41 (1,340) |

※開催日数・入館者数は平成 23 年度中の数値である

**平成 23 年度の館外事業一覧**

| 区分 | 開催日 | 内容 | 団体名 | 参加者数 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 大人 | 小人 | 計 |
| 出前講座 | H23.8.23 | 講演（赤穂城跡の保存と活用） | 坂越上高谷女性グループ | 23 | | 23 |
| 出前講座 | H24.2.15 | 地域回想法（昔のおもちゃ） | 有年公民館高齢者大学〈有年公民館〉 | 60 | | 60 |
| 出前講座 | H24.3.20 | 有年牟礼・山田遺跡発掘調査現地説明会 | 一般 | 250 | | 250 |
| 史跡ガイド | H23.9.18 | 木戸門跡、鳥井地蔵、坂越町並み館、妙道寺、奥藤酒造郷土館、坂越町並み、旧坂越浦会所、赤穂城跡、旧赤穂城庭園ほか | 龍野史談会（たつの市） | 40 | | 40 |
| 史跡ガイド | H24.1.29 | 板碑、野田２号墳、有年原・田中遺跡公園、蟻無山古墳、木虎谷古墳群、塚山古墳群、周世宮裏山古墳群、若狭野古墳 | 古代吉備探訪会（岡山） | 56 | | 56 |
| 史跡ガイド | H24.2.4 | 東有年・沖田遺跡公園、板碑、野田２号墳、有年原・田中遺跡公園ほか | 古田史学の会（大阪） | 19 | | 19 |
| 史跡ガイド | H24.2.25 | 東有年歴史ウォーク東有年・沖田公園、高瀬舟船着場、本陣跡、村役場跡、脇本陣跡 | 東有年自治会有年地区まちづくり推進協議会 | 73 | | 73 |
| 史跡ガイド | H24.3.20 | 有年歴史探訪ウォークラリー東有年・有年楢原・有年原地区内 | 赤穂市教育委員会 | 119 | 8 | 127 |

## 5　出品目録

特別展「松岡秀夫と有年考古館の歩み－地域とともに－」

| テーマ | 番号 | 資　料　名 | 数量 | 年代・時期 | 備　考 | 所　蔵 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 西野山三号墳出土遺物 | 1 | 西野山３号墳　三角縁神獣鏡 | 1 | 古墳時代前期 | | 当館 |
| | 2 | 西野山３号墳　ヒスイ製勾玉 | 2 | 古墳時代前期 | | 当館 |
| | 3 | 西野山３号墳　水晶製切子玉 | 6 | 古墳時代前期 | | 当館 |
| | 4 | 西野山３号墳　水晶製丸玉 | 2 | 古墳時代前期 | | 当館 |
| | 5 | 西野山３号墳　碧玉製管玉 | 69 | 古墳時代前期 | | 当館 |
| | 6 | 西野山３号墳　刀子 | 2 | 古墳時代前期 | | 当館 |
| | 7 | 西野山３号墳　ヤリガンナ | 2 | 古墳時代前期 | | 当館 |
| | 8 | 西野山３号墳　鉄剣 | 2 | 古墳時代前期 | | 当館 |
| | 9 | 西野山３号墳　鉄槍 | 1 | 古墳時代前期 | | 当館 |
| | 10 | 西野山３号墳　鉄斧 | 1 | 古墳時代前期 | | 当館 |
| | 11 | 西野山３号墳　鉄鏃 | 6 | 古墳時代前期 | | 当館 |
| | 12 | 西野山３号墳　銅鏃 | 4 | 古墳時代前期 | | 当館 |
| | 13 | 西野山３号墳　水銀朱 | 1 | 古墳時代前期 | | 当館 |
| 松岡秀夫の生い立ち | 14 | 『有年村楢原新田の郷土史的考察』（松岡興之助遺稿） | 1 | | 松岡秀夫（編） | 当館 |
| | 15 | 『郷土風土記と赤穂郡』（松岡興之助遺稿） | 1 | | 松岡秀夫（編） | 当館 |
| | 16 | 京都帝国大学陸上競技会優勝メダル | 1 | | | 当館 |
| | 17 | 松岡家家族写真 | 1 | 明治 42 年 1 月 6 日 | 松岡秀夫 5 歳 | 当館 |
| | 18 | 郷土研究１　第１年第１号 | 1 | 昭和 6 年 1 月 1 日 | 松岡興之助発行 | 当館 |
| | 19 | 郷土研究２　第１年第２号 | 1 | 昭和 6 年 5 月 27 日 | 松岡興之助発行 | 当館 |
| | 20 | 郷土研究３　第１年第３号 | 1 | 昭和 6 年 8 月 15 日 | 松岡興之助発行 | 当館 |
| | 21 | 郷土研究４　第１年第４号 | 1 | 昭和 6 年 11 月 3 日 | 松岡興之助発行 | 当館 |
| | 22 | 郷土研究５　第２年第１号 | 1 | 昭和 7 年 1 月 1 日 | 松岡興之助発行 | 当館 |
| | 23 | 郵便はがき（絵はがき） | 2 | | 松岡病院・病室 | 当館 |
| | 24 | 定期入れ・身分証明書 | 1 | 昭和 33 年 12 月 1 日 | | 当館 |
| | 25 | 松岡医院封筒 | 1 | | | 当館 |
| 松岡秀夫の社会事業と埋蔵文化財保護への一歩 | 26 | 『有年村に於ける昭和 17 年度田植え共同作業に関する調査』 | 1 | 昭和 17 年 10 月 30 日 | 有年文化協会発行 | 当館 |
| | 27 | 『兵庫県に於ける文化運動』第 1 輯 | 1 | 昭和 17 年 7 月 15 日 | 大政翼賛会兵庫支部 | 当館 |
| | 28 | 『有年文化協会建設記』 | 2 | 昭和 17 年 10 月 31 日 | 大政翼賛会兵庫支部 | 当館 |
| | 29 | 『有年』の創刊 | 1 | 昭和 16 年 | 有年文化協会 | 当館 |
| | 30 | 幻灯機 | 1 | | | 当館 |
| 有年考古館の開設 | 31 | 有年考古館蔵品の寄贈者メモノート | 1 | 昭和 10 年～昭和 25 年 | | 当館 |
| | 32 | 有年考古館設立準備委員会『有年考古館設立趣意書』 | 2 | 昭和 25 年 6 月 25 日 | | 当館 |
| | 33 | 有年考古館開館式案内状 | 1 | 昭和 25 年 6 月 25 日 | | 当館 |
| | 34 | 『有年考古館陳列品目録』 | 1 | 昭和 25 年 9 月 28 日 | 昭和 30 年 4 月 | 当館 |
| | 35 | 『改訂有年考古館陳列品目録』 | 1 | 昭和 25 年 10 月 1 日 | | 当館 |
| | 36 | 西野山三号墳発掘調査時埋蔵文化財発掘届出書 | 1 | 昭和 29 年 10 月 1 日 | | 当館 |
| 有年考古館ゆかりの品 | 37 | 『兵庫県赤穂郡西野山第３號墳』 | 1 | 昭和 27 年 10 月 | 有年考古館 | 当館 |
| | 38 | 所在地ゴム印 | 2 | | | 当館 |
| | 39 | 館名ゴム印 | 1 | | | 当館 |
| | 40 | 理事長ゴム印 | 1 | | | 当館 |
| | 41 | 理事長公印 | 1 | | | 当館 |
| 赤穂市での保存・調査活動（1） | 42 | 遺物カード　土馬 | 1 | | | 当館 |
| | 43 | 原小校庭遺跡　須恵器土馬 | 1 | 奈良時代 | | 当館 |
| | 44 | 原小校庭遺跡　須恵器円面硯 | 1 | 古墳時代後期 | | 当館 |
| | 45 | 原小校庭遺跡　不明須恵器 | 2 | 古墳時代後期 | | 当館 |
| | 46 | 周世入相遺跡　土製竈（かまど） | 2 | 平安時代 | | 当館 |
| | 47 | 上高野　石製銅鐸鋳型片（レプリカ） | 1 | 弥生時代中期か | | 当館 |

| テーマ | 番号 | 資　料　名 | 数量 | 年代・時期 | 備　考 | 所　蔵 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 赤穂市での保存・調査活動（2） | 48 | 堂山遺跡　甕 | 1 | 弥生時代前期 | 破片 | 当館 |
| | 49 | 堂山遺跡　甕 | 2 | 古墳時代初頭 | 吉備と同じ形 | 当館 |
| | 50 | 野田２号墳　耳環 | 1 | 古墳時代後期 | 完形・金メッキ | 当館 |
| | 51 | 周世宮裏山古墳群　耳環 | 1 | 古墳時代後期 | 完形・金メッキ | 当館 |
| | 52 | 周世宮裏山古墳群　須恵器脚付蓋坏 | 1 | 古墳時代後期 | 石膏復元 | 当館 |
| | 53 | 周世宮裏山古墳群　須恵器高坏 | 1 | 古墳時代後期 | 石膏復元 | 当館 |
| | 54 | 周世宮裏山古墳群　須恵器平瓶 | 1 | 古墳時代後期 | 石膏復元 | 当館 |
| | 55 | 周世宮裏山古墳群　須恵器長頸壺 | 1 | 古墳時代後期 | ほぼ完形 | 当館 |
| | 56 | 塚山古墳群　須恵器長頸壺 | 1 | 古墳時代後期 | 完形 | 当館 |
| | 57 | 塚山古墳群　須恵器坏蓋 | 2 | 古墳時代後期 | 完形 | 当館 |
| | 58 | 塚山古墳群　須恵器坏身 | 1 | 古墳時代後期 | 完形 | 当館 |
| | 59 | 塚山古墳群　須恵器台付長頸壺 | 1 | 古墳時代後期 | 石膏復元 | 当館 |
| | 60 | 塚山古墳群　須恵器台付長頸壺 | 1 | 古墳時代後期 | 口頸部欠 | 当館 |
| | 61 | 有年の史蹟を守る会　会員名簿 | 1 | 昭和 44 年 2 月 16 日 | | 当館 |
| 上郡町の保存・調査活動 | 62 | 別名遺跡　銅剣 | 3 | 弥生時代中期か | 青銅器 | 当館 |
| | 63 | 中山 12 号墳　鉄刀 | 1 | 古墳時代中期 | 鉄製品・完形 | 当館 |
| | 64 | 中山 12 号墳　素環頭大刀 | 1 | 古墳時代中期 | 鉄製品・完形 | 当館 |
| | 65 | 中山 12 号墳　袋状鉄斧 | 1 | 古墳時代中期 | 鉄製品・完形 | 当館 |
| | 66 | 中山 12 号墳　石突 | 1 | 古墳時代中期 | 鉄製品・破片 | 当館 |
| | 67 | 中山 12 号墳　不明鉄製品 | 1 | 古墳時代中期 | 鉄製品・破片 | 当館 |
| | 68 | 中山 12 号墳　鉄鏃片 | 1 | 古墳時代中期 | 鉄製品・破片 | 当館 |
| | 69 | 中山 12 号墳　ガラス小玉 | 702 | 古墳時代中期 | 朱・黄・青・緑色 | 当館 |
| | 70 | 中山 12 号墳　ガラス玉 | 67 | 古墳時代中期 | | 当館 |
| | 71 | 中山 12 号墳　滑石製小玉 | 51 | 古墳時代中期 | | 当館 |
| | 72 | 中山 12 号墳　滑石製勾玉 | 1 | 古墳時代中期 | | 当館 |
| | 73 | 中山 12 号墳　鉄鎌 | 1 | 古墳時代中期 | 破片 | 当館 |
| | 74 | 中山 12 号墳　紡錘車 | 1 | 古墳時代中期 | 完形 | 当館 |
| | 75 | 興井廃寺　複弁八葉蓮華紋軒丸瓦 | 2 | 飛鳥時代 | | 当館 |
| | 76 | 興井廃寺　平瓦片 | 1 | 飛鳥時代 | | 当館 |
| 相生市などでの保存・調査活動 | 77 | 佐方裏山古墳　円筒埴輪 | 2 | 古墳時代前期 | 破片 | 当館 |
| | 78 | 丸山窯跡　須恵器坏身・坏蓋 | 2 | 古墳時代前期 | 破片 | 当館 |
| | 79 | 丸山窯跡　須恵器広口壺 | 4 | 古墳時代前期 | 破片 | 当館 |
| | 80 | 丸山窯跡　須恵器甕 | 1 | 古墳時代前期 | 破片 | 当館 |
| | 81 | 西後明　須恵器台付子持壺 | 1 | 古墳時代前期 | 石膏復元 | 当館 |
| | 82 | 那波野古墳　紡錘車 | 1 | 古墳時代前期 | ほぼ完形 | 当館 |
| | 83 | 黒岡古墳群　須恵器高坏片 | 1 | 古墳時代前期 | 破片 | 当館 |
| | 84 | 黒岡古墳群　須恵器蓋坏 | 4 | 古墳時代前期 | ほぼ完形 | 当館 |
| | 85 | 遺物カード　壺 | 1 | | | 当館 |
| | 86 | 黒岡古墳群　須恵器短頸壺 | 1 | 古墳時代後期 | 完形 | 当館 |
| | 87 | 遺物カード　子持高坏 | 1 | | | 当館 |
| | 88 | 黒岡古墳群　須恵器子持器台 | 1 | 古墳時代後期 | 石膏復元 | 当館 |
| 研究者としての松岡秀夫 | 89 | 古代学研究 44 | 1 | 昭和 41 年 5 月 30 日 | 古代学研究会編 | 当館 |
| | 90 | 抜き刷り | 20 | | | 当館 |
| | | 「現地から見た農地改革ー兵庫県赤穂市における分析ー」 | | 昭和 34 年 7 月 | 『兵庫史学』第 20 号 | |
| | | 「現地から見た農地改革（二）ー兵庫県赤穂市における分析ー」 | | 昭和 34 年 9 月 | 『兵庫史学』第 21 号 | |
| | | 「現地から見た農地改革（三）ー兵庫県赤穂市における分析ー」（完結） | | 昭和 35 年 4 月 | 『兵庫史学』第 23 号 | |
| | | 赤穂高校社会研究班「千種川名考」 | | | 『人間』創刊号 | |
| | | 「中世山城の畝形阻塞」ー西播磨を中心にー | | 昭和 60 年 9 月 1 日 | 『兵庫史の研究』 | |
| | | 「近世宿駅助郷村における負担公平論について」 | | 昭和 60 年 9 月 1 日 | 『兵庫史の研究』 | |
| | | 「地方史研究者の問題について」 | | 昭和 48 年 6 月 | 『歴史評論』6　1973 号 | |

| テーマ | 番号 | 資　料　名 | 数量 | 年代・時期 | 備　考 | 所　蔵 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 研究者としての松岡秀夫 | | 「赤穂の私鉄」 | | 昭和 46 年 4 月 1 日 | 『歴史と神戸』第 10 巻第 2 号 | |
| | | 「近世播磨国赤穂郡原村の耕牛について」 | | 昭和 40 年 11 月 | 『兵庫史学』42 号 | |
| | | 「部落保護政策論批判ー近世播磨の部落温存施策について」 | | 昭和 47 年 3 月 | 『兵庫史学』58 号 | |
| | | 「矢野庄と條里」 | | 昭和 31 年 | 『兵庫史学』7 号 | |
| | | 「赤穂郡の一新資料」 | | 昭和 42 年 5 月 | 『播磨』68 号 | |
| | | 「赤穂市の縄文遺跡」 | | 昭和 41 年 5 月 | 『古代学研究』44 号 | |
| | | 「赤穂市上高野発見の銅鐸鎔笵」 | | 昭和 51 年 9 月 | 『考古学研究』第 23 巻第 2 号 | |
| | | 「赤穂地方出土の円筒埴輪とその編年」 | | 昭和 54 年 10 月 | 『考古学研究』第 26 巻第 2 号 | |
| | | 「千種川流域の古代遺跡について」 | | 昭和 37 年 6 月 | 『考古学研究』第 9 巻第 1 号 | |
| | | 「近世楢原未解放部落の成立について」 | | | | |
| | | 「近世一皮多村の人口について」 | | 昭和 44 年 12 月 | 『兵庫史学』52・53 号 | |
| | | 「幕藩体制下の皮革業」 | | | | |
| | | 「天領農民による趣意銀仕法の出銀について - 播州赤穂郡原村を中心としてー」 | | 昭和 42 年 11 月 | 『兵庫史学』48 号 | |
| | 91 | 『写真集　明治・大正・昭和　赤穂』 | 1 | 昭和 55 年 6 月 1 日 | 国書刊行会 | 当館 |
| | 92 | 『相生市入野窯跡発掘調査報告書』 | 1 | 昭和 56 年 8 月 | 相生市教育委員会・入野窯跡発掘調査団 | 当館 |
| | 93 | 『相生市大塚ハザ古墳調査報告書』 | 1 | 昭和 56 年 8 月 | 相生市教育委員会・大塚ハザ古墳調査団 | 当館 |
| | 94 | 『相生市陸池ノ上古墳発掘調査報告書』 | 1 | 昭和 55 年 8 月 | 相生市教育委員会・池ノ上古墳発掘調査団 | 当館 |
| | 95 | 『塩屋堂山遺跡発掘調査概要報告書』 | 1 | 昭和 59 年 10 月 1 日 | 赤穂市教育委員会・赤穂埋蔵文化財調査会 | 当館 |
| | 96 | 『相生市埋蔵文化財報告書第 9 集 相生市西後明古窯跡群発掘調査略報（そのⅡ）』 | 1 | 昭和 60 年 6 月 1 日 | 相生市教育委員会・西後明古窯跡発掘調査会 | 当館 |
| | 97 | 『相生市埋蔵文化財報告書第 7 集 相生市若狭野東部土地区画整備事業に伴う埋蔵文化財（西後明古窯跡群）発掘調査略報』 | 1 | 昭和 59 年 9 月 | 相生市教育委員会・西後明古窯跡発掘調査団 | 当館 |
| | 98 | 『相生市下土井遺跡発掘調査報告書』 | 1 | 昭和 59 年 3 月 31 日 | 相生市教育委員会・下土井遺跡発掘調査団 | 当館 |
| | 99 | 『相生市埋蔵文化財報告書第 5 集 緑ヶ丘一の谷 2 号窯跡発掘調査報告書』 | 1 | 昭和 59 年 3 月 31 日 | 相生市教育委員会・緑ヶ丘窯跡発掘調査団 | 当館 |
| | 100 | 『相生市埋蔵文化財報告書第 4 集 兵庫県相生市若狭野福井池ノ下遺跡調査報告書』 | 1 | 昭和 58 年 12 月 | 相生市教育委員会・福井池ノ下遺跡発掘調査団 | 当館 |
| | 101 | 『兵庫県相生市入野大谷 2 号墳大避山 1 号墳調査報告書』 | 1 | 昭和 57 年 | 相生市教育委員会･古墳（下土井･入野・緑ヶ丘）実測調査団 | 当館 |
| | 102 | 『相生市福井・野々（宮の尾）・奥入野地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財の調査結果報告』 | 1 | 昭和 56 年 | 相生市教育委員会 | 当館 |
| | 103 | 『赤穂市大津堂山遺跡試掘調査報告書 山陽自動車道大津インター』 | 1 | 昭和 54 年 3 月 | 赤穂市 | 当館 |
| | 104 | 『松岡秀夫先生講義集　有年史話　上』 | 1 | 昭和 56 年 3 月 1 日 | 有年公民館 | 当館 |
| | 105 | 『松岡秀夫先生講義集　有年史話　下』 | 1 | 昭和 60 年 10 月 1 日 | 有年公民館 | 当館 |
| | 106 | 『赤穂市文化財調査報告書 19 周世入相遺跡確認調査報告書Ⅱ』 | 1 | 昭和 61 年 3 月 | 赤穂市教育委員会・赤穂埋蔵文化財調査会 | 当館 |
| | 107 | 『赤穂市文化財調査報告書 4 御崎大塚遺跡』 | 1 | 昭和 59 年 6 月 | 赤穂市教育委員会・赤穂埋蔵文化財調査会 | 当館 |
| | 108 | 『兵庫県上郡町別名出土の銅剣』 | 1 | 昭和 44 年 7 月 20 日 | 有年考古館 | 当館 |
| | 109 | 『赤穂市文化財調査報告書 3 周世入相遺跡発掘調査報告書』 | 1 | 昭和 59 年 3 月 | 赤穂市教育委員会・赤穂埋蔵文化財調査会 | 当館 |
| | 110 | 『中山古墳群調査報告書』 | 1 | 昭和 48 年 9 月 | 兵庫県上郡町西野山古墳発掘調査研究会 | 当館 |
| | 111 | 『古代農業生産の発展過程』 | 1 | 昭和 50 年 10 月 20 日 | 有年考古館 | 当館 |

| テーマ | 番号 | 資　料　名 | 数量 | 年代・時期 | 備　考 | 所　蔵 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 研究者としての松岡秀夫 | 112 | 「赤穂市の考古遺跡と遺物」 | 1 | 昭和 59 年 3 月 31 日 | 赤穂市史第 4 巻抜刷 | 当館 |
| | 113 | 「考古学から見た赤穂」 | 1 | 昭和 56 年 9 月 1 日 | 赤穂市史第 1 巻抜刷 | 当館 |
| | 114 | 「有年の宿」 | 1 | 昭和 58 年 3 月 31 日 | 赤穂市史第 2 巻抜刷 | 当館 |
| | 115 | 『松岡秀夫先生論文集<br>千種川流域の歴史的考察』 | 1 | 昭和 51 年 1 月 24 日 | 記念出版委員会 | 当館 |
| | 116 | 松岡秀夫傘寿記念論文集『兵庫史の研究』 | 1 | 昭和 60 年 9 月 25 日 | 神戸新聞出版センター | 当館 |
| | 117 | 『兵庫史の研究』出版祝賀会の御案内<br>ハガキ | 1 | 昭和 60 年 9 月 21 日 | 神戸新聞出版センター | 当館 |
| | 118 | 松岡ノート | 45 | | | 当館 |
| 研究者たちとの書簡　数々の受賞 | 119 | 梅原末治氏からの書簡　ハガキ | 1 | | | 当館 |
| | 120 | 梅原末治氏からの書簡　封書 | 5 | | | 当館 |
| | 121 | 江坂輝弥氏からの書簡　ハガキ | 2 | | | 当館 |
| | 122 | 江坂輝弥氏からの書簡　封書 | 2 | | | 当館 |
| | 123 | ハーバード燕京図書館寄贈依頼　封書 | 1 | | | 当館 |
| | 124 | 英国博物館　受領書　封書 | 1 | | | 当館 |
| | 125 | 勲五等瑞宝章　ケース付 | 1 | 昭和 50 年 11 月 1 日 | | 当館 |
| | 126 | 総理大臣からの懇親会招待状　ハガキ | 1 | 昭和 51 年 3 月 27 日 | | 当館 |
| | 127 | 総理大臣招待　メダル　ケース付 | 1 | 昭和 51 年 3 月 27 日 | | 当館 |
| | 128 | 赤穂市文化賞　トロフィー | 1 | 昭和 60 円 8 月 30 日 | | 当館 |
| | 129 | 赤穂市塩谷賞　盾 | 1 | 昭和 52 年 2 月 3 日 | | 当館 |
| | 130 | 赤穂市塩谷賞　祝袋 | 1 | | | 当館 |
| | 131 | 赤穂市塩谷賞　名簿 | 1 | | | 当館 |
| 展示解説 | 132 | 竹万山田遺跡　陶棺　身部 | 1 | 古墳時代後期 | | 当館 |
| | 133 | 丸尾古墳　亀甲形陶棺　蓋 | 1 | 古墳時代後期 | 丸尾古墳は兵庫県指定史跡 | 当館 |
| | 134 | 精谷山遺跡　壺棺 | 1 | 弥生時代後期 | | 当館 |
| | 135 | 西田遺跡（高嶺住宅）装飾台付き壺 | 1 | 弥生時代後期 | | 当館 |
| | 136 | 松岡秀夫　略年譜 | | | | 当館 |
| | 137 | 新聞記事 | 9 | | | 当館 |
| 松岡秀夫３つの顔 | 138 | 『財団法人有年考古館』看板 | 1 | | | 当館 |
| | 139 | ディバイダー | 1 | | | 当館 |
| | 140 | コンパス | 1 | | | 当館 |
| | 141 | キャリパー | 1 | | | 当館 |
| | 141 | ノギス | 1 | | | 当館 |
| | 142 | 真孤 | 1 | | | 当館 |
| | 143 | 懐中電灯 | 1 | | | 当館 |
| 松岡秀夫３つの顔 | 144 | 高度計と方位磁石 | 1 | | | 当館 |
| | 145 | 携帯水準器 | 1 | | | 当館 |
| | 146 | トランシット（箱付） | 1 | | | 当館 |
| | 147 | 写真機（カメラ） | 1 | | | 当館 |
| | 148 | 三脚 | 1 | | | 当館 |
| | 149 | 露出計 | 1 | | | 当館 |
| | 150 | ストロボ | 1 | | | 当館 |
| | 151 | 調査時に使用していたピッケル | 1 | | | 当館 |
| | 152 | 医療道具 | 13 | | | 当館 |
| | | 内　ハサミ | 1 | | | 当館 |
| | | 内　ピンセット | 2 | | | 当館 |
| | | 内　毛抜き | 1 | | | 当館 |
| | | 内　ルーペ | 1 | | | 当館 |
| | 153 | 注射針 | 1 | | 箱付 | 当館 |
| | 154 | 薬品 | 1 | | 瓶入 | 当館 |
| | 155 | 携帯薬 5 本入 | 1 | | ケース付 | 当館 |
| | 156 | ガーゼ | 1 | | ケース入 | 当館 |

| テーマ | 番号 | 資　料　名 | 数量 | 年代・時期 | 備　考 | 所　蔵 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 松岡秀夫3つの顔 | 157 | 脱脂綿 | 1 | | ケース付 | 当館 |
| | 158 | 医療品カードケース | 1 | | | 当館 |
| | 159 | 血圧計 | 1 | | | 当館 |
| | 160 | 標本 | 2 | | | 当館 |
| | 161 | 万国式試視力表 | 1 | | | 当館 |
| | 162 | 発掘日記　句集 | 1 | | 箱入 | 当館 |
| | 163 | 蟻無山　歌集 | 1 | | 箱入 | 当館 |
| | 164 | 俳句のメモ帳 | 2 | | | 当館 |
| 顕彰室1での展示 | 165 | 記念講演会案内ハガキ | 37 | | 昭和 25 年以降 | 当館 |
| | 166 | 『文化財保護法』 | 1 | 昭和 25 年 5 月 30 日 | | 当館 |
| | 167 | 倉敷考古館の財団寄付行為書の写し | 1 | 昭和 36 年 4 月 14 日 | | 当館 |
| | 168 | 『有年考古館財団法人設立並発掘物の鑑査について』 | 1 | | | 当館 |
| | 169 | 『財団法人有年考古館資料館竣工落成式出席者名簿』 | 1 | 昭和 52 年 4 月 29 日 | | 当館 |
| | 170 | 有年考古館遺物カード | 3 | | | 当館 |
| | 171 | 8 ミリカメラ | 2 | | | 当館 |
| | 172 | ストロボ | 2 | | ケース付 | 当館 |
| | 173 | カセットレコーダー | 1 | | | 当館 |
| | 174 | ラジオ | 1 | | | 当館 |
| | 175 | 腕時計 | 2 | | | 当館 |
| | 176 | 兵庫県文化賞　表彰状 | 1 | 昭和 27 年 11 月 3 日 | | 当館 |
| | 177 | 兵庫県文化賞　記念品　硯箱 | 1 | 昭和 27 年 11 月 3 日 | | 当館 |
| | 178 | 文化庁長官表彰　表彰状 | 1 | 昭和 45 年 11 月 5 日 | | 当館 |
| | 179 | 勲五等瑞宝章　表彰状 | 1 | 昭和 50 年 11 月 3 日 | | 当館 |
| | 180 | 松岡先生叙勲記念写真 | 1 | 昭和 50 年 11 月 3 日 | 額入 | 当館 |
| | 181 | 神戸新聞平和賞 | 1 | 昭和 55 年 5 月 24 日 | | 当館 |
| | 182 | 「館則」 | 1 | | 木製 | 当館 |
| | 183 | 雛道具　ミニチュア　膳と什器 | 2 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 184 | 雛道具　ミニチュア　茶釜 | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 185 | 貝皿 | 4 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 186 | 香合 | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 187 | 土人形　座り狆 | 2 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 188 | 土人形　立ち狆 | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 189 | 七五三　筥迫 | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 190 | 七五三　髪飾り | 3 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 191 | 土人形 | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 192 | 花見弁当箱 | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| 顕彰室2での展示 | 194 | 重箱 4 段陶器製（箱入） | 1 | 松岡姓あり | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 195 | 盃台　朱塗 | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 196 | 盃　5 つ組　朱塗 | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 197 | 袱紗 | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 198 | 茶入 | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 199 | 茶合 | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 200 | 水差し | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 201 | 銚子 | 2 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 202 | 茶托 | 3 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 203 | 茶釜 | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 204 | 弁当箱　21 組箱入り（松岡姓あり） | 1 式 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 205 | 大硯蓋 | 2 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 206 | 大硯蓋　箱（松岡姓あり） | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 207 | 柳行李　皮革製握手付（松岡姓あり） | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |

| テーマ | 番号 | 資　料　名 | 数量 | 年代・時期 | 備　考 | 所　蔵 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 顕彰室2での展示 | 208 | 紺屋の型紙 | 3 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 209 | 紺屋の型紙　箱入 | 3 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 210 | 盤 | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 211 | 砧 | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 212 | 紋入風呂敷（銀杏文） | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 213 | ええじやないか手拭い　染型（額入） | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 214 | 看板　紺屋津右衛門 | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |
| | 216 | 横尾標柱 | 1 | | 松岡家ゆかり | 当館 |

## 小企画展示『有年農村舞台復活の活動記録』

| 番号 | 資　料　名 | 点数 | 備　考 | 所　蔵　者 | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 歌舞伎姿写真 | 1 | 昭和 6 年 | 医王山験行寺 | 個人 |
| 2 | 歌舞伎姿写真 | 1 | 昭和 6 年 | 個人 | |
| 3 | 昭和 21 年舞台写真（全体） | 1 | 昭和 21 年 | 個人 | |
| 4 | 昭和 21 年舞台写真（幕間） | 1 | 昭和 21 年 | 個人 | |
| 5 | 昭和 21 年舞台写真（出演者） | 1 | 昭和 21 年 | 個人 | |
| 6 | 「三番叟」写真 | 1 | 昭和 30 年代 | 個人 | |
| 7 | 大避神社舞台写真 | 3 | 昭和 35 年頃 | 西有年自治会 | |
| 8 | 昭和 24 年舞台写真 | 3 | 昭和 24 年 | 個人 | |
| 9 | 昭和 27 年舞台写真（舞台） | 1 | 昭和 27 年 | 個人 | |
| 10 | 昭和 27 年舞台写真（全体） | 1 | 昭和 27 年 | 個人 | |
| 11 | 昭和 35 年舞台写真 | 1 | 昭和 35 年 | 個人 | |
| 12 | 昭和 35 年舞台写真 | 8 | 昭和 35 年 | 個人 | |
| 13 | 有年農村舞台現況写真 | 1 | 平成 23 年 | 当館 | |
| 14 | 有年農村舞台現況図 | 1 | 平成 23 年 | 当館 | |
| 15 | 有年農村舞台修理工事写真 | 4 | 平成 23 年 | 当館 | |
| 16 | 有年農村舞台位置図 | 10 | 平成 23 年 | 当館 | |
| 17 | 有年農村舞台復活上演写真 | 10 | 平成 23 年 | 当館 | |
| 18 | 舞台幕 | 1 | 昭和 30 年代 | 八幡神社 | |
| 19 | 行燈 | 1 | | 当館 | |
| 20 | 鋲打ち太鼓 | 1 | | 当館 | |
| 21 | 拍子木（複製） | 1 | | 個人 | |
| 22 | 背景図製作写真 | 21 | | 当館 | |
| 23 | 弁当箱 | 1 | | 当館 | |
| 24 | 『祭り舞台」プログラム | 1 | 昭和 51 年 | 個人 | |

企画展『時計展・時・刻・とき－二人のコレクションを中心にして－』

| No. | 資　料　名 | 点数 | 型式 | 備　考 | 所蔵者 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 部品としくみ | 1 | | | 若松氏 |
| 2 | 部品（ケース入り） | 1 | | | 若松氏 |
| 3 | 部品 | 1 | | | 若松氏 |
| 4 | 四つ丸掛時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 5 | 四つ丸掛時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 6 | 丸型掛時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 7 | 丸型掛時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 8 | 丸型掛時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 9 | 丸型掛時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 10 | 八角型掛時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 11 | 自転車掛時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 12 | 肩掛け時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 13 | 恋人と白鳥置時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 14 | 船時計（丸型） | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 15 | 船時計（丸型） | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 16 | 腕時計型掛時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 17 | 腕時計型掛時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 18 | フクロウ時計 | 1 | | | 若松氏 |
| 19 | 長箱型掛時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 20 | 長箱型掛時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 21 | 丸型掛時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 22 | 丸型掛時計 | 1 | ネジ式 | アメリカ製 | 若松氏 |
| 23 | アンソニア時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 24 | 鳩時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 25 | 長箱型掛時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 26 | 長箱型掛時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 27 | 和時計 | 1 | 電池式 | 魚形 | 若松氏 |
| 28 | 防水時計 | 1 | 電池式 | 魚形 | 若松氏 |
| 29 | 防水時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 30 | 日付入八角型掛時計 | 1 | ネジ式 | ドイツ製 | 若松氏 |
| 31 | 長箱型掛時計 | 1 | ネジ式 | イタリア製 | 若松氏 |
| 32 | 大型置時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 33 | 大型置時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 34 | 大型置時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 35 | 枕時計 | 1 | ネジ式 | ドイツ製 | 若松氏 |
| 36 | チャイム型置時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 37 | 置時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 38 | チャイム型置時計 | 1 | ネジ式 | 愛知時計 | 若松氏 |
| 39 | 置時計 | 1 | ネジ式 | 愛知時計 | 若松氏 |
| 40 | 脚付置時計 | 1 | ネジ式 | 愛知時計 | 若松氏 |
| 41 | 置時計 | 1 | ネジ式 | 愛知時計 | 若松氏 |
| 42 | 置時計 | 1 | ネジ式 | アメリカ製 | 若松氏 |
| 43 | 大理石置時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 44 | 置時計　かいじゅう | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 45 | 置時計　チューリップ | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 46 | 置時計　ドラエモン | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 47 | 置時計　チャップリン | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 48 | 置時計　かえる | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 49 | 置時計　女の子 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 50 | 置時計　馬 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |

| No. | 資　料　名 | 点数 | 型式 | 備　考 | 所蔵者 |
|---|---|---|---|---|---|
| 51 | 置時計　牛 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 52 | 置時計　りんご | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 53 | 置時計　ロボット | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 54 | 置時計　てんとうむし | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 55 | 置時計　ネコ | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 56 | 置時計　かえる | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 57 | 置時計　カニ | 1 | 電池式 | 丸型 | 若松氏 |
| 58 | 目覚時計 | 1 | ネジ式 | 丸型 | 若松氏 |
| 59 | 目覚時計 | 1 | ネジ式 | 丸型 | 若松氏 |
| 60 | 目覚時計 | 1 | ネジ式 | 丸型 | 若松氏 |
| 61 | 目覚時計 | 1 | ネジ式 | 丸型 | 若松氏 |
| 62 | 目覚時計 | 1 | ネジ式 | 丸型 | 若松氏 |
| 63 | 目覚時計 | 1 | ネジ式 | 正方形 | 若松氏 |
| 64 | 目覚時計 | 1 | ネジ式 | 丸型 | 若松氏 |
| 65 | 目覚時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 66 | 置時計（ウランガラス製） | 1 | ネジ式 | ピンク | 若松氏 |
| 67 | 置時計 | 1 | ネジ式 | 丸型 | 若松氏 |
| 68 | 目覚時計 | 1 | ネジ式 | 丸型 | 若松氏 |
| 69 | 目覚時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 70 | 懐中時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 71 | 懐中時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 72 | 自転車型置時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 73 | 日時計 | 1 | | 水の中　カモ | 若松氏 |
| 74 | 置時計 | 1 | | | 若松氏 |
| 75 | 置時計 | 1 | | | 若松氏 |
| 76 | ミニ三角置時計 | 1 | 電池式 | バラの花 | 若松氏 |
| 77 | 置時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 78 | ミニクマ型置時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 79 | 丸型置時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 80 | 置時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 81 | 置時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 82 | 置時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 83 | 置時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 84 | 置時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 85 | 置時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 86 | 置時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 87 | 置時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 88 | 置時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 89 | カレンダー付置時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 90 | レコード型置時計 | 1 | 電池式 | 江戸時代 | 若松氏 |
| 91 | 和時計（尺時計） | 1 | | 江戸時代 | 若松氏 |
| 92 | 和時計（大名時計） | 1 | | | 若松氏 |
| 93 | 把手付置時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 94 | 目覚時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 95 | 把手付置時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 96 | ガラス梅皿置時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 97 | 汽車型置時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 98 | 小人置時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 99 | ピエロ型置時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 100 | お寿司屋さん時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |

| No. | 資　料　名 | 点数 | 型式 | 備　考 | 所蔵者 |
|---|---|---|---|---|---|
| 101 | 絵皿置時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 102 | ゴルフ置時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 103 | ガラス絵皿置時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 104 | 目覚時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 105 | 電車時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 106 | ピエロ置時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 107 | 樽型置時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 108 | ミニチュア鳩時計 | 1 | 電池式 | | 若松氏 |
| 109 | 櫓時計 | 1 | 電池式 | 東浜塩業組合事務所で使用 | 若松氏 |
| 110 | 丸型掛時計 | 1 | ネジ式 | | 若松氏 |
| 111 | 新聞切抜き | 4 | | | 若松氏 |
| 112 | 赤穂ジャーナル切り抜き | 1 | | | 若松氏 |
| 113 | 読売ファミリーニュース切り抜き | 1 | | | 若松氏 |
| 114 | 相生ライフ切り抜き | 1 | | | 若松氏 |
| 115 | 腕時計 | 1 | | | 個人蔵 |
| 116 | 腕時計 | 1 | | | 個人蔵 |
| 117 | 腕時計 | 1 | | | 個人蔵 |
| 118 | 腕時計 | 1 | | | 個人蔵 |
| 119 | 腕時計 | 1 | | | 個人蔵 |
| 120 | 腕時計 | 1 | | | 個人蔵 |
| 121 | 腕時計 | 1 | | | 個人蔵 |
| 122 | 若松繁之氏写真 | 1 | | | 当館 |
| 123 | 長箱型掛時計 | 1 | ネジ式 | Seiko 日付曜日付 | 当館 |
| 124 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | Seiko 日付曜日付 | 当館 |
| 125 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | Seiko 日付曜日付・ローマ数字 | 当館 |
| 125 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | 愛知時計 | 当館 |
| 126 | 長箱型掛時計 | 1 | ネジ式 | Seiko | 当館 |
| 127 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | 愛知時計 | 当館 |
| 128 | 長箱型掛時計 | 1 | ネジ式 | 愛知時計 | 当館 |
| 129 | 長箱型掛時計 | 1 | ネジ式 | 愛知時計 | 当館 |
| 130 | 長箱型掛時計 | 1 | ネジ式 | 愛知時計 | 当館 |
| 131 | 長箱型掛時計 | 1 | ネジ式 | TAKANO | 当館 |
| 132 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | Seiko | 当館 |
| 133 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | Seiko 日付曜日付 | 当館 |
| 134 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | シチズン・ベル切替付 | 当館 |
| 135 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | Seiko・ベル切替付 | 当館 |
| 136 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | Seiko（標準時） | 当館 |
| 137 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | Seiko | 当館 |
| 138 | ひし形時計 | 1 | 電池式 | ナショナル | 当館 |
| 139 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | ファインディンフル | 当館 |
| 140 | 正方形時計 | 1 | 電池式 | シチズン・ローマ数字 | 当館 |
| 141 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | マルマン | 当館 |
| 142 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |
| 143 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | Seiko | 当館 |
| 144 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |
| 145 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |
| 146 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | 手作り | 当館 |
| 147 | 正方型掛時計 | 1 | 電池式 | Seiko | 当館 |
| 148 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | Seiko | 当館 |
| 149 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |
| 150 | 長箱型掛時計 | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |

| No. | 資　料　名 | 点数 | 型式 | 備　　考 | 所蔵者 |
|---|---|---|---|---|---|
| 151 | 隅丸長方型掛時計 | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |
| 152 | 隅丸長方型掛時計 | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |
| 153 | 隅丸長方型掛時計 | 1 | 電池式 | Seiko | 当館 |
| 154 | 隅丸長方型掛時計 | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |
| 155 | 隅丸長方型掛時計 | 1 | 電池式 | Seiko | 当館 |
| 156 | 丸型掛時計 | 1 | 電池式 | Equrity | 当館 |
| 157 | 丸型掛時計 | 1 | 電池式 | マルマン | 当館 |
| 158 | 丸型掛時計 | 1 | 電池式 | 日本製 | 当館 |
| 159 | 丸型掛時計 | 1 | 電池式 | Equrity | 当館 |
| 160 | 丸型掛時計 | 1 | 電池式 | ― | 当館 |
| 161 | 丸型掛時計 | 1 | 電池式 | NAKO クォーツ・ローマ数字 | 当館 |
| 162 | 丸型掛時計 | 1 | 電池式 | クォーツ | 当館 |
| 163 | 丸型掛時計 | 1 | 電池式 | クォーツ | 当館 |
| 164 | 丸型掛時計 | 1 | 電池式 | CHORAL　キングベル・足つき | 当館 |
| 165 | 丸型置時計 | 1 | 電池式 | VERCHRON・足付き | 当館 |
| 166 | 八角型時計 | 1 | 電池式 | ローマ数字 | 当館 |
| 167 | 八角型時計 | 1 | 電池式 | | 当館 |
| 168 | 八角型時計 | 1 | 電池式 | | 当館 |
| 169 | 八角型時計 | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |
| 170 | 八角型時計 | 1 | 電池式 | 飾り時計 | 当館 |
| 171 | 八角型時計 | 1 | 電池式 | 飾り時計 | 当館 |
| 172 | 鳩時計 | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |
| 173 | サーカス飾り時計 | 1 | 電池式 | CAPTAIN　Clock　co. | 当館 |
| 174 | 星座時計 | 1 | 電池式 | カネボウ | 当館 |
| 175 | 丸型置時計 | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |
| 176 | 手作り時計 | 1 | 電池式 | 手作り | 当館 |
| 177 | 城額縁入時計 | 1 | 電池式 | ㈱アイセキ　Custom Clock | 当館 |
| 178 | 富士山額縁入時計 | 1 | 電池式 | Seiko | 当館 |
| 179 | 腕時計型掛時計 | 1 | 電池式 | MK ７７ | 当館 |
| 180 | 和箪笥型置時計 | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |
| 181 | チャイム付置時計 | 1 | ネジ式 | 愛知時計 | 当館 |
| 182 | 厨子型置時計 | 1 | 電池式 | 東京時計・三本足 | 当館 |
| 183 | 和箪笥型置時計 | 1 | 電池式 | フジタ　４本足・真鍮製取手 | 当館 |
| 184 | 置時計 | 1 | 電池式 | シチズン・４本足 | 当館 |
| 185 | 置時計（目覚し時計） | 1 | 電池式 | Seiko | 当館 |
| 186 | 把手付置時計（目覚し時計） | 1 | 電池式 | 東京時計・ローマ数字・把手付 | 当館 |
| 187 | 置時計（振り子付） | 1 | 電池式 | 振り子付 | 当館 |
| 188 | スロット台型置時計（目覚し時計） | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |
| 189 | 飾り時計 | 1 | 電池式 | Excellemce | 当館 |
| 190 | ウサギ型振り子時計 | 1 | 電池式 | シチズン　振り子付 | 当館 |
| 191 | 置時計 | 1 | 電池式 | Queen | 当館 |
| 192 | 置時計 | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |
| 193 | デジタルラジオ時計 | 1 | 電　気<br>コード式 | Seiko | 当館 |
| 194 | デジタル目覚し時計 | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |
| 195 | デジタル目覚し時計 | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |
| 196 | デジタル目覚し時計 | 1 | 電池式 | シチズン | 当館 |
| 197 | 石花入額縁時計 | 1 | 電池式 | Seiko・ローマ数字 | 当館 |
| 198 | 手作り置時計 | 1 | 電池式 | 手作り | 当館 |
| 199 | ペンギン置時計 | 1 | 電池式 | | 当館 |
| 200 | 目覚し時計 | 1 | 電池式 | カシオ・ベル・アラーム付 | 当館 |

| No. | 資　料　名 | 点数 | 型式 | 備　考 | 所蔵者 |
|---|---|---|---|---|---|
| 201 | ベル型目覚し時計 | 1 | 電池式 | LABELLE　2本足 | 当館 |
| 202 | 目覚し時計 | 1 | 電池式 | PHYTHM 日本製 | 当館 |
| 203 | 置時計 | 1 | 電池式 | | 当館 |
| 204 | 腕時計 | 1 | 電池式 | カシオ・ベル・アラーム付　ベルトなし | 当館 |
| 205 | バイク型置時計 | 1 | 電池式 | RIVL | 当館 |
| 206 | 算数セット時計 | 1 | | 算数セット | 当館 |
| 207 | 八角型掛時計 | 1 | ネジ式 | 学習用 | 三村邦彦 |
| 208 | 置時計 | 1 | 電池式 | | 田中宏子 |
| 209 | 置時計 | 1 | 電池式 | | 田中宏子 |
| 210 | 置時計 | 1 | ネジ式 | | 田中宏子 |
| 211 | 丸型掛時計 | 1 | ネジ式 | 東浜塩業組合作業所で使用 | 赤穂市立民俗資料館 |
| 212 | カレンダー付八角型掛時計 | 1 | ネジ式 | アメリカ製 | 赤穂市立民俗資料館 |
| 213 | 八角型掛時計 | 1 | ネジ式 | アメリカ製 | 赤穂市立民俗資料館 |
| 214 | 説明　町田幹夫 | 1 | | | 当館 |
| 215 | 説明　置時計 | 1 | | | 当館 |
| 216 | 置時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 217 | 説明　掛時計 | 1 | | | 当館 |
| 218 | 掛時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 219 | 説明　携帯時計 | 1 | | | 当館 |
| 220 | 携帯時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 221 | 説明　懐中時計 | 1 | | | 当館 |
| 222 | 懐中時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 223 | 説明　船舶時計 | 1 | | | 当館 |
| 224 | 船舶時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 225 | 説明　卦算時計 | 1 | | | 当館 |
| 226 | 卦算時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 227 | 説明　印籠時計 | 1 | | | 当館 |
| 228 | 印籠時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 229 | 説明　硯屏時計 | 1 | | | 当館 |
| 230 | 硯屏時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 231 | 説明　お籠時計 | 1 | | | 当館 |
| 232 | お籠時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 233 | 説明　火時計 | 1 | | | 当館 |
| 234 | 火時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 235 | 説明　台時計 | 1 | | | 当館 |
| 236 | 台時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 237 | 説明　枕時計 | 1 | | | 当館 |
| 238 | 枕時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 239 | 説明　尺時計 | 1 | | | 当館 |
| 240 | 尺時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 241 | 説明　櫓時計 | 1 | | | 当館 |
| 242 | 櫓時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 243 | 説明　掛時計 | 1 | | | 当館 |
| 244 | 掛時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 245 | 説明　日時計とは | 1 | | | 当館 |
| 246 | 説明　日時計 | 1 | | | 当館 |
| 247 | 日時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 248 | 説明　砂時計 | 1 | | | 当館 |
| 249 | 砂時計写真 | 1 | | | 当館 |
| 250 | 説明　日本の時計 | 1 | | | 当館 |

小企画展示『東有年・沖田遺跡県指定 20 年展』

| 番号 | 遺　跡　名 | 種　類 | 器　種 | 点数 | 時　代 | 備　考 | 所　蔵　機　関 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 東有年・沖田遺跡 | 弥生土器 | 壺 | 8 | 弥生中期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 2 | 東有年・沖田遺跡 | 弥生土器 | 甕 | 2 | 弥生中期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 3 | 東有年・沖田遺跡 | 弥生土器 | 高坏 | 2 | 弥生中期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 4 | 東有年・沖田遺跡 | 弥生土器 | 台付鉢 | 1 | 弥生中期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 5 | 東有年・沖田遺跡 | 石器 | 石鏃 | 1 | 弥生中期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 6 | 東有年・沖田遺跡 | 石器 | 石錐 | 1 | 弥生中期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 7 | 東有年・沖田遺跡 | 弥生土器 | 壺 | 6 | 弥生後期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 8 | 東有年・沖田遺跡 | 弥生土器 | 甕 | 1 | 弥生後期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 9 | 東有年・沖田遺跡 | 弥生土器 | 鉢 | 1 | 弥生後期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 10 | 東有年・沖田遺跡 | 弥生土器 | 高坏 | 3 | 弥生後期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 11 | 東有年・沖田遺跡 | 弥生土器 | 器台 | 2 | 弥生後期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 12 | 東有年・沖田遺跡 | ガラス玉 | | 1 | 弥生後期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 13 | 東有年・沖田遺跡 | 土師器 | 壺 | 2 | 古墳初頭 | 山陰系 | 赤穂市教育委員会 |
| 14 | 東有年・沖田遺跡 | 土師器 | 甕 | 1 | 古墳初頭 | 酒津式（吉備産） | 赤穂市教育委員会 |
| 15 | 東有年・沖田遺跡 | 土師器 | 鼓形器台 | 1 | 古墳初頭 | 山陰系 | 赤穂市教育委員会 |
| 16 | 東有年・沖田遺跡 | 須恵器 | 子持器台 | 1 | 古墳後期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 17 | 東有年・沖田遺跡 | 土製品 | 土馬 | 1 | 古墳後期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 18 | 東有年・沖田遺跡 | 土製品 | 土玉 | 1 | 古墳後期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 19 | 東有年・沖田遺跡 | 土製品 | ミニチュア土器 | 2 | 古墳後期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 20 | 東有年・沖田遺跡 | 土製品 | 土製紡錘車 | 1 | 古墳後期 | | 赤穂市教育委員会 |
| 21 | 東有年・沖田遺跡 | 鉄製品 | 鉄鏃 | 1 | 古墳後期 | | 赤穂市教育委員会 |

郷土の歴史紙芝居の展示

マスコット〝うにゅ〟

# 3. 平成 24 年度事業の概要

## 1　事業概要

平成 24 年度は、赤穂市立有年考古館にとって初めての通年運営となり、年間スケジュールの大枠を決定づける年度となった。具体的には、特別展、新収蔵展、新発見速報展に加え、地元の偉人を顕彰する企画展、民俗資料企画展などを開催し、これらに伴う講演会やシンポジウムを実施した。また今年度からはじめて、バスツアーや親子体験教室を開催し、博物館内に留まらない、積極的な博物館活動を行った。

平成 24 年度は、昨年度の企画展が開催されるなかで始まったが、4 月 13 日からは『新収蔵展 2012』を開催し、昨年度の 5 ヶ月間で寄贈、寄託いただいた資料を展示した。次に、特集展示『松岡與之助医学博士没後 80 年』展を開催した。この企画展は、有年考古館創立者、松岡秀夫の兄である松岡與之助にクローズアップし、その生い立ちから地域に果たした貢献について、詳細を明らかにしたものである。7 月 13 日からは、赤穂市立有年考古館初の本格的な特別展『装飾土器と搬入土器』を開催した。本展は、平成 23 年度の発掘調査で価値が再評価された有年牟礼・山田遺跡出土の装飾土器の初公開を兼ねたものである。有年原・田中遺跡や有年牟礼・山田遺跡など、赤穂市内で出土した装飾土器が、瀬戸内地域においてどのような意義を持つのか、また弥生時代後期から古墳時代前期までの装飾土器が果たした役割とその社会変化について、その実態に迫った。西は島根県、高松市から、東は八尾市までの当該期資料を、12 施設・個人から借受け、展示した。関連事業として、シンポジウムを開催し、好評を得た。

この展示と一部会期が重なる形で、企画展『茅葺から語るもの、知り得るもの』を開催した。これは、市内在住のミニチュア民具を製作している個人より、ミニチュア民家模型を借受け、展示したものである。この企画展は、会期こそ短かったものの大変好評を博したことにより、民俗資料が潜在的な訴求力、集客力を持っていることがよく理解できた。続いて 9 月 7 日からは赤穂市、上郡町、岡山県備前市との協働で開催している定住自立圏形成推進事業埋蔵文化財巡回展『備前焼』展を開催した。この企画展は、各市町の資料館を巡回展示するもので、本年度が 3 回目を数えた。この企画展に際し、有年考古館ではギャラリートークを開催している。その後、特別企画展『佐方渚果生誕 110 年』を、旧坂越浦会所と同時開催の形で実施した。佐方渚果は、表具師を職業とした郷土史家で、数々の古文書や美術品を蒐集したほか、坂越を中心とした年表『越浦年表』を完成させた人物である。関連事業として、郷土史家による講演会を行っている。

11 月に入り、赤穂市立有年考古館開館 1 周年記念事業として、リサイクルブックフェア、史跡探訪バスツアー及び遺跡公園レクリエーションイベントを開催した。バスツアーは、旧播磨国と旧備前国の旧国境にある境石等などの文化財を、バスや船により見学した。11 月 16 日から 1 月 14 日までは、『有年の遺跡新発見速報展』を開催した。この展示は、2007 年度から継続的に実施されている、有年土地区画整理事業に伴う発掘調査を主な主題とし、6 年間の発掘調査を通じて明らかになった有年の歴史を、縄文時代から近代まで一覧するものであった。また開催中に実施されていた赤穂城下町跡発掘調査などにより、17 世紀初頭にあった鉄砲屋

敷関連遺物、18 世紀後半の木簡多数や墨書土器が発見されたため、「2012 新発見発掘調査速報展」として小企画展示を開催した。

平成 25 年 1 月から 3 月には、市内在住のミニチュア製作家らに出品を依頼し、企画展『ミニチュア創作の世界』を開催した。細かい手作業で製作された農機具などが人形とともに再現されたもので、大好評であった。さらにこの企画展とあわせ、赤穂市立原小学校 6 年児童による手作り新聞展も開催された。

3 月からの企画展として、『鋳型から銅鐸を考える－上高野銅鐸鋳型県指定 20 年記念』展を開催した。これは、赤穂市高野に安置されていた石仏が、松岡秀夫によって石製銅鐸鋳型であると見出され、兵庫県指定されてから 20 年を記念して開催したもので、兵庫県内 9 施設・個人の銅鐸・絵画関係資料を借受けて実施したものである。関連事業として、連続講演会も開催している。また旧坂越浦会所での出前展示として『平井正年生誕 130 年展　里帰り・坂越幼稚園天井画を中心にして』も開催した。坂越生まれの画家平井正年の作品を数多く展示し、開館日数 17 日にして 1,194 名の来館者を得た。

普及事業としては「夏休みちびっ子特別体験教室」及び「歳末ちびっ子特別体験教室」を開催した。前者は夏休み、後者は冬休みにあわせて開催したものである。特に前者は、うなぎやアユの伝統漁法体験やつかみ取りの後、その場で食べることができるもので、大変人気であった。このほか後述のように様々な講座を開催したほか、坂越船（海）檀尻の復活支援も行った。さらに常設ポスターを作成して各施設に掲示を依頼するとともに、『学習支援ブック』を作成し、周辺市町の小中学校 500 校に配布した。またオリジナルグッズとして、マグネットを作成した。

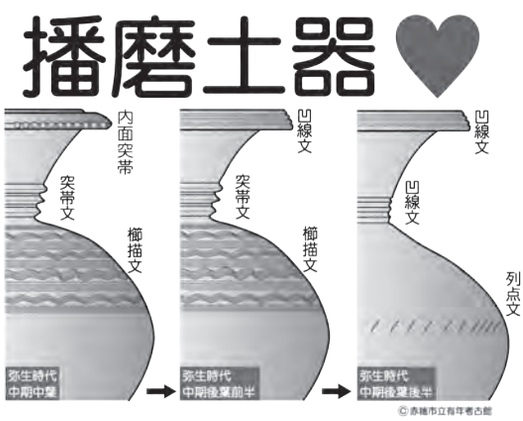
また西播磨県民局の「西播磨歴史再発見プロジェクト」拠点整備事業の補助採択を受け、平成 24 年 5 月 25 日～ 8 月 31 日を工期とし、有年考古館便所整備工事を実施した（事業費 8,963,850 円）。有年考古館に隣接して多目的トイレを含めた大型トイレが整備されたことにより、史跡探訪の際の拠点となることが期待される。

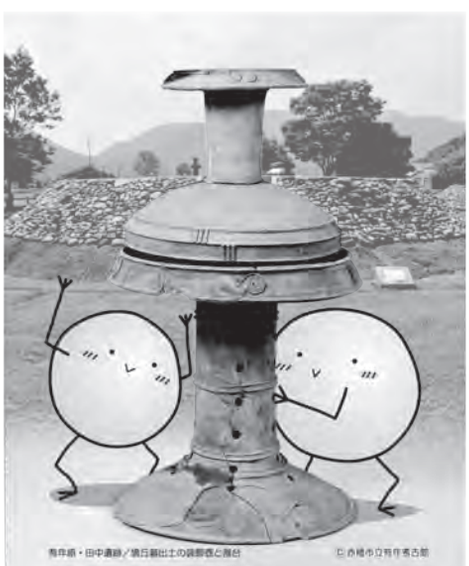
平成 25 年 2 月 14 日には、初代館長松岡秀夫の親類にあたる松岡徹氏より有年考古館の近隣地についての寄付申出があり、3 月 13 日に赤穂市へと寄付された。1,484.57㎡の更地は、有年考古館の駐車場として有効に活用されている。

**平成 24 年度の入館者数**

| 月 | 開館日数 | 入館者数（人） | | | うち団体数（　）は人数 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 大人 | 小人 | 計 | |
| 4 月 | 26 | 286 | 19 | 305 | 4（111） |
| 5 月 | 24 | 320 | 106 | 426 | 13（153） |
| 6 月 | 26 | 246 | 23 | 269 | 1（8） |
| 7 月 | 24 | 392 | 80 | 472 | 8（161） |
| 8 月 | 27 | 757 | 154 | 911 | 9（207） |
| 9 月 | 24 | 445 | 29 | 474 | 3（30） |
| 10 月 | 26 | 394 | 21 | 415 | 13（245） |
| 11 月 | 24 | 239 | 175 | 414 | 5（202） |
| 12 月 | 23 | 109 | 57 | 166 | 4（76） |
| 1 月 | 23 | 489 | 37 | 526 | 6（60） |
| 2 月 | 24 | 492 | 104 | 596 | 8（133） |
| 3 月 | 25 | 464 | 17 | 481 | 5（190） |
| 計 | 296 | 4,633 | 822 | 5,455 | 79（1,576） |

赤穂市立有年考古館常設ポスター・チラシ





赤穂市立有年考古館オリジナルマグネット（4枚）

赤穂市立有年考古館学習支援ブック

## 2　特別展・企画展事業

（1）企画展『新収蔵展 2012 －開館から 5 ヶ月－』

**会期・入館者数**

2012.4.13（金）～ 2012.5.21（月）

入館者数　531 人（開館日数 34 日）

**内　容**

有年考古館が赤穂市立としてスタートしてから 5 ヶ月の間で、寄贈、寄託いただいた資料を展示した。

**主な展示物**

高雄山神護寺縁起、北條文信・長安義信画屏風、赤松滄州墨跡、神崎与五郎墨跡、播州箕・竹籠類製作道具、赤穂緞通織製作用ハサミ、高瀬舟運送業許可書、ルソン島戦車第 2 師団戦車第 6 連隊作戦関係資料、甲冑（紅威胴丸）、鬼瓦ほか。

（2）特別企画展『松岡與之助医学博士没後 80 年－松岡眼科病院と有年文化活動をふり返る－』

**会期・入館者数**

2012.5.25（金）～ 2012.7.9（月）

入館者数　493 人（開館日数 40 日）

**内　容**

明治 21 年（1888）に赤穂郡楢原村で生まれた松岡與之助は、京都帝国大学で医学博士の学位を受けた後、有年の地に眼科病院を設立して地域医療や生活改善に力を注いだ。一方、研究雑誌「郷土研究」を発刊し、郷土の子弟を育てあげ、地域文化の発展にも大きく寄与した。その活動は、

展　示　風　景

有年考古館の設立者である弟の松岡秀夫に医業のみならず、郷土史研究などに大きな影響を与えたといわれている。没後 80 年にあたり氏の功績を再評価し、更に後世に末永く顕彰するため、與之助の生涯と松岡病院の歴史、有年文化活動を振り返る企画展を行った。

**主な展示物**

與之助購入のヴァイオリン、シルクハット、論文原稿、研究ノート、中学校時代の教科書、賞状、書簡、古写真、ベンチ、医学雑誌ほか。

（3）特別展『装飾土器と搬入土器－弥生時代の墓とマツリ－』

**会期・入館者数**

2012.7.13（金）～ 2012.9.3（月）

入館者数　1,366 人（開館日数 44 日）

**内　容**

弥生時代から古墳時代への社会変化は、日本列島の国家形成を考えるうえで非常に重要な問題であり、日本考古学は、この問題を主に墓制の分析によって明らかにしようとしている。そして近年の調査により、装飾土器の墓への供献、さらには他地域からの搬入土器の増加といった現象が、この時期にはじまることが明らかとなってきた。

こうした社会変化は、国家形成を考えるうえで極めて重要であり、市内に所在する、有年原・田中遺跡や有年牟礼・山田遺跡といった当該期の大型墳墓が検出された遺跡を、東瀬戸内地域においてどのように位置づけることができるのか、また東瀬戸内地域が国家形成にどのような役割を果たしたか等を検証するため、関連遺物を展示した。

赤穂市立有年考古館の、はじめての本格的な特別展であった。西は島根県、南は香川県、東は大阪府まで 12 施設から資料を借用し、弥生時代後期から古墳時代前期までの墓とマツリに

展　示　風　景

ついて、最新の研究成果から迫った。

**主な展示物**

島根県／中野清水遺跡出土古式土師器、香川県／天満・宮西遺跡出土古式土師器、岡山県／中山遺跡出土特殊器台・特殊壺、平岡西遺跡特殊壺、津寺遺跡出土器台等、奥坂遺跡出土器台、百間川今谷遺跡出土器台、今岡中山遺跡出土器台等、兵庫県／川島遺跡出土古式土師器、長越遺跡出土古式土師器、半田山 1 号墓出土土器等、鵤石田遺跡出土古式土師器、吉福遺跡出土土器、明神山遺跡出土壺、小神辻の堂遺跡出土土器、南山 2 号墳出土壺、北山遺跡出土土器、龍子三ツ塚古墳出土土器、権現山 51 号墳出土埴輪、新宮宮内遺跡出土土器、新宮東山 1 号墳出土土器、丁瓢塚古墳出土土器、伊和中山 4 号墳出土埴輪、蛇の杖遺跡出土器台、本位田遺跡出土土器、有年原・田中遺跡出土装飾土器、有年牟礼・山田遺跡出土土器ほか

**関連事業**

ア　特別展示解説

開催日　2012.8.5（日）　参加者数　65 人

イ　記念シンポジウム『邪馬台国時代の墓・マツリ・社会変化』（於：有年公民館）

開催日　2012.8.5（日）

参加者数　120 人

コーディネーター（基調講演）　寺沢　薫先生（桜井市纒向学研究センター）

パネラー　森岡　秀人先生（日本考古学協会理事）

岸本　一宏先生（公益財団法人兵庫県まちづくりセンター）

シンポジウム風景

（4）特集展示『茅葺から語るもの、知り得るもの－ミニチュア模型から見るもの、見えるもの』

**会期・入館者数**

2012.7.13（金）～ 2012.9.24（月）

入館者数　1,711 人（開館日数 65 日）

**内　容**

有年横尾在住の島津義弘、美保子夫妻製作のミニチュア民家、人形展を開催しました。

**主な展示物**

ミニチュアの茅葺民家と人形 26 点

展　示　風　景

（5）定住自立圏形成推進事業埋蔵文化財巡回展

『備前焼－変容する伝統』

**会期・入館者数**

2012.9.7（金）～ 2012.9.24（月）

入館者数　320 人（開館日数 16 日）

**内　容**

定住自立圏域の赤穂市、備前市、上郡町が協働して行う定住自立圏推進事業として、第 3 回埋蔵文化財巡回展を開催した。

**主な展示物**

赤穂市　赤穂城跡・赤穂城下町跡出土陶器、上水道関係遺物、六道山遍照院跡出土陶器

上郡町　梨ヶ原宿遺跡、山野里宿遺跡出土土器、瓦器類

備前市　医王山東麓出土備前焼、伊部南大窯出土備前焼

**関連イベント**

ア　ギャラリートーク

開催日　2012.9.8（土）

参加者数　20 名

内　容　赤穂市・備前市・上郡町の学芸員が集い、ギャラリートークを行った。

（6）特別企画展『佐方渚果生誕 110 年』

**会期・入館者数**

2012.9.28（金）～ 2012.11.12（月）

入館者数　568 人（開館日数 40 日）

**内　容**

明治 35 年 9 月に坂越で生まれた佐方渚果の生誕 110 年を記念し、旧坂越浦会所と同時開催

で特別企画展を開催した。

**主な展示物**

表具師道具（鉋、包丁、鋏、鋸、鑿、糊桶、刷毛、軸先、金箔、蝶番、道具箱など）、一級技能証、落款、看板、渚果愛用の品々（懐中時計、秤、分銅、腕時計、キセル、水滴、硯、茶臼、柳行李、置きランプ、燭台、提灯、行灯など）、蒐集美術品（染付、軸物、絵図）、パネルほか

**関連事業**

ア　記念講演会

開催日　2012.9.30（日）（坂越公民館）

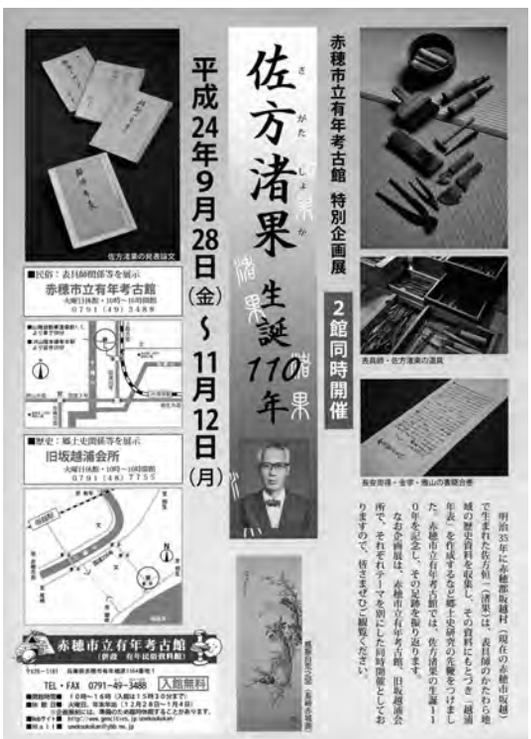
参加者数 30 人

講　師　佐方直陽先生（赤穂山鹿素行研究会会長）

演　題　「佐方渚果という人」

イ　同時開催（出前展示）

旧坂越浦会所特別企画展「佐方渚果生誕 110 年」　入館者数　2,230 人（開館日数 40 日）




（7）企画展『有年の遺跡発掘調査速報展－土中からのメッセージ－』

**会期・入館者数**

2012.11.16（金）～ 2013.1.14（月）

入館者数　622 人（開館日数 45 日）

**内　容**

この 6、7 年、赤穂市の有年地域では多くの測量調査や発掘調査が行われ、これまでの有年の歴史を塗り替える成果が多く見つかっている。赤穂市のみならず兵庫県が実施した発掘調査資料を一同に会し、近年の発掘調査で得られた新しい有年の歴史を紹介した。

**主な展示物**

有年原・クルミ遺跡出土縄文土器・石器、有年牟礼・井田遺跡出土弥生土器・石器、有年牟礼・山田遺跡出土古式土師器、蟻無山古墳群測量図面、有年牟礼・井田遺跡出土古式土師器・土師器・須恵器、有年牟礼・山田遺跡出土土師器・須恵器、有年原・クルミ遺跡出土墨書土器、大避神社跡出土陶磁器類

(8) 小企画展示『2012 新発見発掘調査速報展』

**会期・入館者数**

2013.1.9（水）～ 2013.1.14（月）

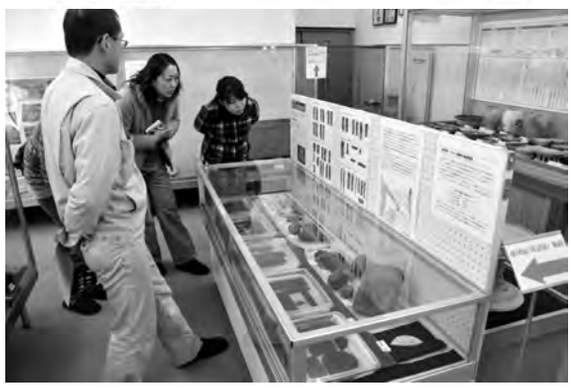
入館者数　97 人（開館日数 6 日）

**内　容**

2012 年 12 月に発掘調査された赤穂城下町跡では多数の木簡等が発見され、有年土地区画整理事業に伴う有年原・クルミ遺跡の調査では墨書土器が見つかった。これらの成果を速報展示した。

**主な展示物**

赤穂城下町跡出土ガラス滓、銅滓、鉄滓、ガラス片、銅塊、鉄塊、木炭、炉壁、肥前、唐津（池田時代）、木簡 35 点（森時代）、有年原・クルミ遺跡出土墨書土器 1 点



展　示　風　景

(9) 特集展示『ミニチュア創作の世界－幼なじみの作品展』

**会期・入館者数**

2013.1.18（金）～ 2013.3.4（月）

入館者数　1,023 人（開館日数 40 日）

**内　容**

赤穂市有年横尾在住で幼なじみの上山長一、谷本昌己両氏は、15 年前からミニチュア創作を手がけ、民家をはじめとして農具・民具・和船・塔・檀尻、祭り屋台に領域を広めている。

今回、『ミニチュア創作の世界―幼なじみの作品展』と題し、両氏の全作品を展示紹介した。

**主な展示物**

ミニチュア製作品（民家、農具、和船、塔、だんじり、赤穂城、鐘つき堂、生活道具、瓢箪、草履）、図面、模型、型、サンダー、幕ほか総数 140 点

(10) 小企画展示『原小学校 6 年「タイムトラベル遺跡探検―地域の遺跡を紹介します」』

**会期・入館者数**

2013.2.8（金）～ 2013.2.18（月）

入館者数　331 人（開館日数 10 日）

**内　容**

校区内にある赤穂市立原小学校と連携し、6 年生児童が、校区内にあるたくさんの遺跡を実際に歩いて学んだ成果を、みずから説明する展示会を開催した。

**関連事業**

ア　児童による解説会

開催日　2013.2.8（火）

参加者数　48 人

（11）　企画展示『鋳型から銅鐸を考える―上高野銅鐸鋳型県指定 20 年記念―』

**会期・入館者数**

2013.3.8（金）～ 2013.4.15（月）

入館者数　468 人（開館日数 34 日）

**内　容**

大正 5 年（1916）頃に上高野の川原で採集された石は、昭和 51 年（1976）7 月 18 日に故松岡秀夫有年考古館長により銅鐸の鋳型片であると判明した。この銅鐸鋳型片は、昭和 56 年（1981）9 月 1 日に赤穂市指定有形文化財に、平成 5 年（1993）3 月 26 日には兵庫県指定有形文化財（考古資料）となった。

今回の展示は、県指定 20 周年を記念して開催したもので、兵庫県出土の銅鐸鋳型を集成展示した。また銅鐸、銅鐸形土製品、絵画土器などの関連資料も併せて展示して、銅鐸の謎の一端を探った。

**主な展示物**

絵画土器（たつの市／北山遺跡、養久山・前池遺跡、新宮・宮内遺跡、上郡町／船坂・土井ノ内遺跡、竹万宮ノ前遺跡、神戸市／玉津・田中遺跡、西脇市／大垣内遺跡、三木市／貝谷遺跡、三田市／奈カリ与遺跡）、銅鐸型土製品（赤穂市／有年原・田中遺跡、たつの市尾崎遺跡、宍粟市／田井遺跡）、銅鐸鋳型（赤穂市／上高野遺跡銅鐸鋳型片、姫路市／名古山遺跡鋳型、今宿丁田遺跡鋳型、茨木市／東奈良遺跡鋳型、三田市／平方遺跡）、小銅鐸（三木市／高篠遺跡）、銅鐸（姫路市／玉手遺跡、宍粟市／岩野辺穴尾遺跡）、青銅塊（たつの市／北山遺跡）、銅鐸レプリカ（姫路市／神種遺跡銅鐸、丹波市／野々間遺跡 2 号銅鐸、宝塚市／中山遺跡 1 号銅鐸、淡路市／本興寺遺跡銅

展　示　風　景

鐸、豊岡市／気比遺跡２号銅鐸、赤穂市／上高野遺跡復元銅鐸）、銅鐸製作の道具類（姫路市／玉手遺跡出土鋳型外枠、吹子の羽口、砥石）、中子・石製舌（三田市／平方遺跡）

**関連事業**

ア　記念講演会１　2013.3.10（日）（於：有年考古館）

参加者数　70 人

講　師　水野　正好氏（公益財団法人辰馬考古資料館館長）

演　題　「上高野鋳型と銅鐸の世界」

イ　記念講演会２　2013.3.24（日）（於：有年考古館）

参加者数　70 人

講　師　篠宮　正氏（公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部副課長）

演　題　「上高野鋳型からみた弥生時代の播磨」

（12）出前展示『平井正年生誕 130 年展―里帰り・坂越幼稚園天井画を中心にして』

**開催場所**

旧坂越浦会所

**会期・入館者数**

2013.3.13（水）～ 2013.5.13（月）

入館者数（3 月 31 日まで）　1,194 人（開館日数 17 日）

**内　容**

日本画家の平井正年は明治 16 年（1883）に坂越に生まれ、円山派の重鎮・今尾景年に師事し、円山・四条派の花鳥画を学んだ。坂越に帰郷後も積極的に活動し、作品は坂越を中心に 40 数点残されている。

今回の企画展は平井正年生誕 130 年を記念して開催したもので、「里帰り」と題し、かつて旧坂越幼稚園の天井にあった巨大な花鳥画 44 面を中心に約 30 点を展示した。

**主な展示物**

天井画「花鳥画」（204㎝× 364㎝）１点、「韓信股くぐり図」絵馬１点、「紅葉群鳥図」屏風１点、「雪松図」など短冊３点、「瀑布図」など掛軸 13 点、「白鷺図」など粉本 32 点。

展　示　風　景

## 3　普及事業

（1）特別企画『開館 1 周年記念事業』

赤穂市立有年考古館が、平成 23 年 11 月 11 日にリニューアルオープンして以来 1 年が経過したことを記念し、各種事業を実施した。

内　容

ア　無料リサイクルブックフェア

開催期間　2012.11.10（土）～ 11.11（日）

参加者数　39 人

イ　史跡探訪バスツアー「播磨備前国境石等めぐり」

開催日　2012.11.23（金）、12.2（日）

参加者数　35 人

内　容　赤穂市、備前市、上郡町内にある、播磨備前国境石、及び明治天皇行在所等の石碑を訪ねた。タテ軸の国境石とヨコ軸の旧山陽道（西国街道）沿いにある明治天皇行在所跡の石碑を訪ね、石造物の意義を考えた。

行　程　11 月 10 日　9：10 有年考古館発→ 9：35　綱崎国境石見学→ 10：15 光明寺見学　明治天皇行在所跡→ 10：45　帆坂峠見学　国境石等→ 11：45 梨ヶ原見学　明治天皇標石→ 12：05 昼食→ 13：25 馬路見学　明治天皇標石→ 13：40 柳原本陣跡見学　明治天皇標石→ 14：50 山伏峠国境石見学→ 15：35　有年考古館着、見学解散。（悪天候のため、取揚島は順延。）

12 月 5 日　9：10 赤穂港発→ 9：20 取揚島見学→ 10：00 赤穂港着、解散。

史跡探訪バスツアー風景

ウ　レクリエーション「遺跡公園で遊ぼう！」

開催日　2012.11.28（水）

参加者数　90 人

内　容　原幼稚園児、有年幼稚園児の親子レクリエーションイベントを開催した。

（2）夏休みちびっ子特別体験教室

開催期間・参加者数

2012.7.22（日）～ 2012.8.26（日）８回開催

参加者数　計 170 人

内　容

7.22（日）　伝統川漁でウナギかご付け & 炭火焼きのウナギ丼を食べよう　参加者数 33 人

7.25（水）、8.8（水）　勾玉をつくろう　参加者数 39 人

8.1（水）、8.22（水）　古墳「中山 12 号墳」出土の大刀をつくろう　参加者数 41 人

8.18（土）、8.25（土）　土粘土で土器や埴輪をつくろう　参加者数 16 人

8.26（日）　伝統川漁でアユつかみ体験 & アユ炭火焼きを食べよう　参加者数 41 人

赤穂市立有年考古館　小学児童対象・申込み先着順

**夏休みちびっ子特別体験教室**

うにゅちゃん

夏休み特別イベントとして、ちびっ子の親子体験教室を下記の日程で行います。
定員がございますので、お早めにお申し込みください！

**【６月２７日から申し込みを受け付けます】**

| | | 定員 | 対象 | 参加費 |
|---|---|---|---|---|
| **7月** | | | | |
| 22日（日）10:00～14:00 | 伝統の川漁法でウナギかご付け体験＆炭火焼のウナギ丼を食べよう！ 大きなミミズ掛けからウナギかご付け、ウナギ丼の試食まで体験します。小魚つかみ取りもあり。 保護者同伴 | 16名 | 小学児童 | 1,000円 |
| 25日（水）13:30～15:30 | 勾玉をつくろう！ 滑石製の石材をみがいて、オリジナルの勾玉（まがたま）をつくります。 保護者同伴 | 16名 | 小学児童 | 300円 |
| **8月** | | 定員 | 対象 | 参加費 |
| 1日（水）13:30～15:30 | 古墳（中山12号墳）出土の大刀をつくろう！ 軽い材料とアルミホイルで、大刀（たち）をつくります。 保護者同伴 | 16名 | 小学児童 | 300円 |
| 8日（水）13:30～15:30 | 勾玉をつくろう！ 滑石製の石材をみがいて、オリジナルの勾玉（まがたま）をつくります。 保護者同伴 | 16名 | 小学児童 | 300円 |
| 18日（土）13:30～15:30 | 土粘土で土器や埴輪をつくろう！（２週連続講座） 展示品等の古代遺物を、焼かない土粘土でつくります。 保護者同伴 | 10名 | 25日に参加可能な児童 | 400円 |
| 22日（水）13:30～15:30 | 古墳（中山12号墳）出土の大刀をつくろう！ 軽い材料とアルミホイルで、大刀（たち）をつくります。 保護者同伴 | 16名 | 小学児童 | 300円 |
| 25日（土）13:30～15:30 | 土粘土で土器や埴輪をつくろう！（２週連続講座） 展示品等の古代遺物を、焼かない土粘土でつくります。 保護者同伴 | 10名 | 18日に参加できる児童 | － |
| 26日（日）10:00～14:00 | 伝統の川漁法でアユつかみ体験＆アユの炭火焼きを食べよう！ アユの掛けでからアユつかみ、アユ炭焼きまで体験します。小魚つかみ取りもあり。 保護者同伴 | 16名 | 小学児童 | 1,000円 |

※定員は、保護者を含みません。

■申込みについて

・申込みは、保護者同伴の小学児童に限ります（市内外問わず）。
・申込みは、原則として児童１名につき１回とします。
（ただし、定員に満たない場合はこの限りではありません。
申込みの際に、第３希望まで伝えてください。）
・保護者１名につき、児童の参加者は２名までとします。
・未就学児も、参加者の家族であれば見学できます。
・赤穂市立有年考古館（0791-49-3488）に電話連絡し、住所、氏名、連絡先、人数、学校名と学年を伝えてください。
・定員を超えた場合は、お断りすることがあります。
・川漁体験は、川の環水等で中止することがあります。その場合は当日朝８時までにご連絡します。
・川漁体験は、えさのミミズ掛け、ミミズの練りつぶしがありますので、できる児童とします。
・川漁体験の集合場所は、赤穂市立有年考古館となります。

**赤穂市立有年考古館**
**（併設　有年民俗資料館）**

〒678－1151　兵庫県赤穂市有年楢原1164番地１

TEL・FAX　0791－49－3488　入館無料

■開館時間■　１０時～１６時（入館は１５時３０分まで）
■休 館 日■　火曜日、年末年始（１２月２８日～１月４日）
※企画展前には、準備のため臨時休館することがあります。
■Webサイト■　http://www.geocities.jp/unekoukokan/
■Ｍａｉｌ■　unekoukokan@ybb.ne.jp

特別体験教室風景（左上：ウナギ取り、右上：大刀づくり、右下：勾玉づくり、右下：アユつかみ）

（3）その他のイベント・催し

1　考古学・歴史教室（小学生対象）　26 回　634 人
2　出前教室（小学生対象）　15 回　540 人
3　大人向け体験教室　1 回　9 人
4　女性歴史教室　1 回　9 人
5　幼児教室　1 回　90 人
6　高齢者教室　1 回　9 人
7　地域回想法教室　12 回　114 人
8　考古学・歴史・民俗講座　21 回　662 人
9　出前講座　3 回　150 人
10　館長講話　2 回　165 人
11　史跡案内ガイド　8 回　254 人
12　行政視察　3 回　39 人
13　トライやるウィーク受け入れ　1 回（5 日間）　3 人
14　出前展示（旧坂越浦会所）巡回展　2 回（57 日間）　3,424 人
15　坂越船檀尻復活上演支援協力（2012.11.3 上演）　出演 20 団体 150 人、観客約 700 人

坂越（海）船檀尻の復活上演

## 平成 24 年度の企画展一覧

| 展示名 | | 会期 | 開催日数 | 入館者数（人） | | | うち団体数（　）は人数 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 大人 | 小人 | 計 | |
| 企画展 | 「新収蔵展 2012 －開館から 5 ヶ月」 | H24.4.13 ～ H24.5.21 | 34 | 439 | 92 | 531 | 13（228） |
| 特別企画展 | 「松岡與之助医学博士没後 80 年－松岡眼科病院と有年文化活動を振り返る」 | H24.5.25 ～ H24.7.9 | 40 | 438 | 55 | 493 | 6（105） |
| 特別展 | 「装飾土器と搬入土器－弥生時代の墓とマツリ」 | H24.7.13 ～ H24.9.3 | 44 | 1,128 | 238 | 1,366 | 16（349） |
| 特集展示 | 「茅葺から語るもの、知り得るもの－ミニチュア模型から見るもの、見えるもの」 | H24.7.13 ～ H24.9.24 | 65 | 1,460 | 251 | 1,711 | 19（327） |
| 定住自立圏巡回展 | 「圏域内備前焼展－変容する伝統」 | H24.9.7 ～ H24.9.24 | 16 | 307 | 13 | 320 | 3（30） |
| 特別企画展 | 「佐方渚果生誕 110 年」(有年考古館会場) | H24.9.28 ～ H24.11.12 | 40 | 539 | 29 | 568 | 11（222） |
| 出前展示 | 「佐方渚果生誕 110 年」（旧坂越浦会所会場） | H24.9.28 ～ H24.11.12 | 40 | 2,104 | 126 | 2,230 | － |
| 企画展 | 「有年の遺跡発掘調査速報展－土中からのメッセージ」 | H24.11.16 ～ H25.1.14 | 45 | 376 | 246 | 622 | 10（293） |
| 小企画展示 | 「2012 新発見速報展」 | H25.1.9 ～ H25.1.14 | 6 | 83 | 14 | 97 | 1（15） |
| 特集展示 | 「ミニチュア創作の世界－幼なじみの作品展」 | H25.1.18 ～ H25.3.4 | 40 | 889 | 134 | 1,023 | 13（167） |
| 小企画展示 | 「原小学校 6 年「タイムトラベル遺跡探検－郷土遺跡を紹介します」」 | H25.2.8 ～ H25.2.18 | 10 | 244 | 87 | 331 | 3（79） |
| 企画展示 | 「鋳型から銅鐸を考える－上高野銅鐸鋳型片県指定 20 年記念－」 | H25.3.8 ～ H25.3.31（H25.4.15） | 21 | 389 | 7 | 396 | 5（190） |
| 出前展示 | 「平井正年生誕 120 年展　里帰り・坂越幼稚園天井画を中心にして」（旧坂越浦会所） | H25.3.13 ～ H25.3.31（H25.4.15） | 17 | 1,128 | 66 | 1,194 | － |
| 計 | | | 418 | 9,524 | 1,358 | 10,882 | 100（2,005） |

※開館日数、入館者数は平成 24 年度中の数値である

## 平成 24 年度の館外事業一覧

| 区分 | 開催日 | 内容 | 団体名 | 参加者数 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 大人 | 小人 | 計 |
| 出前講座 | H24.7.29 | 講演（赤穂市の文化財の保存と活用） | 県立歴史博物館歴史フォーラム（県立歴史博物館） | 78 | | 78 |
| 出前講座 | H25.2.15 | 講演（新有年考古館の活動記録－財団法人 60 年、そして市立へ－） | 赤穂プロバスクラブ（赤穂商工会館） | 34 | | 34 |
| 出前講座 | H25.2.28 | 講演（新有年考古館の活動記録－財団法人 60 年、そして市立へ－） | 有年公民館ふるさと文化財講座（有年公民館） | 38 | | 38 |
| 史跡探訪会 | H24.11.23<br>H24.12.2 | 播磨備前国境石めぐり | | 19<br>16 | | 35 |
| 史跡ガイド | H24.7.8 | 有年原・田中遺跡公園 | 相生歴史研究会 | 19 | | 19 |
| 史跡ガイド | H24.8.8 | 有年原・田中遺跡公園 | 教員新任者研修会 | 13 | | 13 |
| 史跡ガイド | H24.10.5 | 東有年・沖田遺跡公園 | 郵政ＯＢ | 7 | | 7 |
| 史跡ガイド | H24.10.6 | 定住自立圏指定文化財・文化施設巡りツアー | 備前市民 22<br>上郡町民 33<br>赤穂市民 35 | 90 | | 90 |
| 史跡ガイド | H24.10.25 | 東有年沖田遺跡公園、野田 2 号墳、有年原・田中遺跡公園、蟻無山 1 号墳、木虎谷 2 号墳、塚山古墳群 | 川西・古代学友の会 | 82 | | 82 |
| 史跡ガイド | H24.11.5-6 | 井の端 7･8 号墳、鳳張 1･2 号墳、丸尾古墳、赤穂城跡、野田 2 号墳、東有年・沖田遺跡公園、周世宮裏山古墳群、塚山古墳群 | 古代遊学学会 | 3 | | 3 |
| 史跡ガイド | H25.3.17 | 松岡眼科病院跡、松岡與之助銅像、有年原・田中遺跡公園、蟻無山古墳群 | 赤穂有年歴史ウォーク（有年地区まちづくり推進協議会） | 40 | | 40 |
| 計 | | | | 254 | 0 | 254 |

## 4　出品目録

企画展『新収蔵展 2012 －開館から 5 ヶ月－』

| 番号 | 資　料　名 | 年代・時期 | 数　量 | 備　考 | 所蔵・管理者 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 紅威胴丸 | 昭和初期～ 30 年代 | 1 式 | | 木本忠勝氏寄贈 |
| 2 | 『高雄山神護寺縁起』 | 元禄 5（1692）年 | 1 | | 石原敏成氏寄贈 |
| 3 | 赤松滄州墨跡 | 18 世紀後半 | 1 | | 松岡秀樹氏寄贈 |
| 4 | 神崎与五郎墨跡 | 元禄 15（1702）年 | 1 | 掛軸 | 田中宏子氏寄託 |
| 5 | 長安義信画「漢人武者画屏風」 | 19 世紀中頃 | 2 曲 1 隻 | | 山本博道氏寄贈 |
| 6 | 北條暉水画「武者画屏風」 | 19 世紀後半 | 2 曲 1 隻 | | 山本博道氏寄贈 |
| 7 | 赤穂緞通 | | 1 | | 赤穂市教育委員会 |
| 8 | 古銭ブック | 江戸～昭和 | 2 | | 木津自治会寄贈 |
| 9 | 高瀬舟運送業許可書 | 明治 35（1902）年 | 1 | | 松本武氏寄贈 |
| 10 | 阪口キリヱ氏使用の握り鋏 | 昭和 | 7 | | 阪口キリヱ氏寄贈 |
| 11 | 備前焼壺 | 室町？ | 2 | | 木本忠勝氏寄贈 |
| 12 | 切子コップ | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 13 | 切子 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 14 | ランプ | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 15 | 秉燭 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 16 | 大工道具類　錐 | | 6 | 目打ち等含む | 田中宏子氏寄贈 |
| 17 | 大工道具類　罫引き | | 5 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 18 | 大工道具類　糸 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 19 | 大工道具類　釘抜き | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 20 | 大工道具類　秤 | | 2 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 21 | 大工道具類　決り鉋 | | 8 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 22 | 大工道具類　鉋 | | 5 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 23 | 故谷本拙三氏使用　前掛 | | 4 | 内皮製 1 | 谷本一幸氏寄贈 |
| 24 | 故谷本拙三氏使用　鋏 | | 3 | | 谷本一幸氏寄贈 |
| 25 | 故谷本拙三氏使用　ヤスリ | | 3 | | 谷本一幸氏寄贈 |
| 26 | 故谷本拙三氏使用　砥石 | | 4 | 内砥石 1 | 谷本一幸氏寄贈 |
| 27 | 故谷本拙三氏使用　鋸 | | 4 | | 谷本一幸氏寄贈 |
| 28 | 故谷本拙三氏使用　竹割り包丁 | | 2 | | 谷本一幸氏寄贈 |
| 29 | 故谷本拙三氏使用　けずり包丁 | | 3 | | 谷本一幸氏寄贈 |
| 30 | 故谷本拙三氏使用　錐 | | 4 | | 谷本一幸氏寄贈 |
| 31 | 故谷本拙三氏使用　針金 | | 3 | 内銅製 1（針付） | 谷本一幸氏寄贈 |
| 32 | 故谷本拙三氏使用　播州箕 | | 2 | | 赤穂市立民俗資料館 |
| 33 | 衣桁 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 34 | 鳥籠 | | 2 | 全 6 点の内 2 点 | 田中宏子氏寄贈 |
| 35 | 麻袋 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 36 | 畚 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 37 | 鳶口 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 38 | 銃剣 | | 2 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 39 | 練炭製造機 | | 1 式 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 40 | 牛の鞍 | | 1 式 | | 大田克己氏寄贈 |
| 41 | パーマコテ | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 42 | 練炭コンロ | | 1 式 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 43 | 五徳 | | 2 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 44 | 提灯 | | 1 | 箱付 | 森川潤子氏寄贈 |
| 45 | ランプ | | 1 式 | ブリキ缶付 | 田中宏子氏寄贈 |
| 46 | 踏み台 | | 1 | | 三村邦彦氏寄贈 |
| 47 | 柳行李 | | 1 | 蓋付 | 田中宏子氏寄贈 |
| 48 | 笊 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 49 | 蠅帳 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 50 | 丼セット | | 1 式 8 個 | わら包み | 田中宏子氏寄贈 |

| 番号 | 資　料　名 | 年代・時期 | 数　量 | 備　考 | 所蔵・管理者 |
|---|---|---|---|---|---|
| 51 | 小皿 | | 8 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 52 | 粉ふるい | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 53 | 飯切 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 54 | 手籠 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 55 | 手付笊 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 56 | 茶碗籠 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 57 | 吊し籠 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 58 | 買い物籠 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 59 | 青田籠 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 60 | 蓋付手提籠 | | 1 | | 福井詔生氏寄贈 |
| 61 | 黒電話 | | 1 | | 三村邦彦氏寄贈 |
| 62 | 太陽の塔 | 昭和 45（1970）年 | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 63 | 算盤 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 64 | 箱メガネ | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 65 | 箱枕（高枕） | | 2 | 箱付 | 森川潤子氏寄贈 |
| 66 | 暖房器 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 67 | 炮烙 | | 3 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 68 | 箸箱 | | 1 | 箸なし | 田中宏子氏寄贈 |
| 69 | 高脚膳 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 70 | アルマイト製弁当箱 | | 2 | 内容器あり | 田中宏子氏寄贈 |
| 71 | 入れ子 | | 1 式 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 72 | 岡持ち | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 73 | 拍子木 | | 2 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 74 | トカキ棒 | | 1 | | 田中宏子氏寄贈 |
| 75 | 鬼瓦（恵比寿） | | 1 | | 室井澄隆氏寄贈 |
| 76 | 鬼瓦（大黒） | | 1 | | 室井澄隆氏寄贈 |
| 77 | 香時計 | | 1 | | 籠貴大氏寄贈 |
| 78 | ルソン島戦車第２師団戦車第６連隊作戦関係資料（薮林弘毅氏） | 昭和 10（1935）年 | 1 式 8 枚 | 地図付 | 薮林質美氏寄贈 |

**特別企画展『松岡與之助医学博士没後 80 年』**

| No. | 資　料　名 | 点数 | 備　考 | 所蔵者 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 研究ノート | 1 式 | | 当館 |
| 2 | 與之助購入のバイオリン | 1 | | 当館 |
| 3 | 奉公袋 | 1 式 | 袋内の兵役証書に大正 3 年 9 月 20 日の記載 | 当館 |
| 4 | 與之助着用のモーニング | 1 | 長崎時代に購入 | 当館 |
| 5 | 與之助着用のシルクハット | 1 | 箱に「大正 13 年 12 月」の記載 | 当館 |
| 6 | 研究論文のための原稿、抜粋 | 1 式 | 明治 40（1907）年 11 月 9 日 | 当館 |
| 7 | 教科書・ノート | 1 式 | 龍野中学校時代 | 当館 |
| 8 | 「ローンテニス」教本 | 1 | 龍野中学時代に使用 | 当館 |
| 9 | 入費記載帳 | 1 | 龍野中学校 1 年生の時に記していた金銭出納簿 | 当館 |
| 10 | 原尋常小学校 賞状 | 1 | 明治 31（1898）年 3 月 27 日 | 当館 |
| 11 | 卒業生徒心得書 | 1 | | 当館 |
| 12 | 龍野中学校校長よりのハガキ | 1 | | 当館 |
| 13 | 原尋常小学校同窓会会報第一号 | 1 | 昭和 7（1932）年 11 月 3 日 | 個人 |
| 14 | 松岡與之助医学博士銅像<br>除幕式　写真 | 1 | 昭和８（1933）年５月２７日 | 当館 |
| 15 | 與之助　写真 | 1 | 『故松岡與之助論文集より』 | 当館 |

| No. | 資　料　名 | 点数 | 備　考 | 所蔵者 |
|---|---|---|---|---|
| 16 | 上郡高等小学校通信簿 | 1 | 明治 34 年度 | 当館 |
| 17 | 上郡高等小学校賞状 | 1 | 明治 34 年度 | 当館 |
| 18 | 松岡家の人々のハガキ | 1 式 | 明治 34 年度 | 当館 |
| 19 | 手紙（與之助→半助） | 1 | 綾子の誕生を知らせたもの | 当館 |
| 20 | 手紙（兼助→與之助） | 1 | 洪水の見舞いに対する礼状 | 当館 |
| 21 | 原尋常小学校 賞状 | 1 | 明治 34 年度 | 当館 |
| 22 | 手紙<br>（與之助→圭三・秀夫・ヒサヱ） | 1 | 近況報告。 | 当館 |
| 23 | 手紙（與之助→兼助） | 1 | 明治 34 年度 | 当館 |
| 24 | 小学千字文 | 1 | | 当館 |
| 25 | 子ども向け絵葉書 | 1 | 明治 34 年度 | 当館 |
| 26 | 数学三千題　上 | 1 | 明治 15（1833）年 9 月 20 日 | 個人 |
| 27 | 與之助　写真 | 1 | 大正 5（1916）年<br>（京都帝国大学・医学部助手時代） | 当館 |
| 28 | 松岡家の人々　写真 | 1 | 明治 42（1909）年 1 月 6 日（行列真ん中が與之助） | 当館 |
| 29 | 龍野中学校 4 年生時　写真 | 1 | 明治 38（1905）年 4 月 24 日 | 当館 |
| 30 | 第三高等学校短艇部時　写真 | 1 | | 当館 |
| 31 | 第三高等学校入試時　写真 | 1 | 明治 40（1907）年 5 月 3 日 | 当館 |
| 31 | 龍野中学校卒業時　写真 | 1 | 明治 40（1907）年 3 月 25 日<br>昭和 7（1932）年 5 月 | 当館 |
| 32 | 松岡秀夫結婚式　写真 | 1 | | 当館 |
| 33 | 山崎来代矩先生を囲んで　写真 | 1 | 明治 34 年度 | 当館 |
| 34 | ベンチ | 1 | 松岡眼科病院にて使用 | 当館 |
| 35 | 視力表 | 1 | 明治 35（1902）年 3 月出版 | 当館 |
| 36 | プレパラート | 1 | 與之助が研究のために使用 | 当館 |
| 37 | 研究のためのデータ、図表 | 1 式 | | 当館 |
| 38 | 医学雑誌 | 1 式 | 1863 年以降の研究雑誌（和書・洋書） | 当館 |
| 39 | 出席簿 | 1 | 長崎医学専門学校教授時代 | 当館 |
| 40 | 研究ノート | 1 式 | | 当館 |
| 41 | 研究論文のための原稿、抜粋 | 1 式 | | 当館 |

**特別展『装飾土器と搬入土器－弥生時代の墓とマツリー』**

| 番号 | 遺　跡　名 | 器　種 | 点数 | 所　蔵　機　関 | 文献番号 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 東有年・沖田遺跡 | 高坏 | 1 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 2 | 東有年・沖田遺跡 | 鼓形器台 | 1 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 3 | 東有年・沖田遺跡 | 甕 | 2 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 4 | 西有年・中野遺跡 | 高坏 | 1 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 5 | 西有年・畑田遺跡 | 高坏 | 2 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 6 | 西有年・畑田遺跡 | 広口壺 | 1 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 7 | 有年原・田中遺跡 | 装飾壺 | 1 | 赤穂市教育委員会 | 12 | － |
| 8 | 有年原・田中遺跡 | 装飾器台 | 1 | 赤穂市教育委員会 | 12 | － |
| 9 | 有年原・田中遺跡 | 装飾土器片 | 10 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 10 | 有年原・田中遺跡 | 広口壺 | 1 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 11 | 有年原・田中遺跡 | 器台 | 4 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 12 | 有年原・田中遺跡 | 長頸壺 | 1 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 13 | 有年原・田中遺跡 | 甕 | 1 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 14 | 有年原・田中遺跡 | 高坏 | 1 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 15 | 西田遺跡（高嶺住宅） | 装飾長頸壺 | 1 | 当館 | 14 | 図 34-58 |

| 番号 | 遺　跡　名 | 器　　種 | 点数 | 所　蔵　機　関 | 文献番号 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 16 | 有年牟礼・山田遺跡 | 装飾器台 | 1 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 17 | 有年牟礼・山田遺跡 | 装飾壺 | 1 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 18 | 有年牟礼・山田遺跡 | 大型壺 | 1 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 19 | 有年牟礼・山田遺跡 | 小型丸底壺 | 1 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 20 | 有年牟礼・山田遺跡 | 器台片 | 5 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 21 | 有年牟礼・山田遺跡 | 甕片 | 8 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 22 | 有年牟礼・山田遺跡 | 高坏 | 1 | 赤穂市教育委員会 | 未報告 | |
| 23 | 丁・瓢塚古墳 | 装飾壺片 | 1 | 当館 | 14 | 図 55-7 |
| 24 | 川島遺跡 | 壺 | 4 | 兵庫県立考古博物館 | 1 | 5・17・54・55 |
| 25 | 川島遺跡 | 甕 | 2 | 兵庫県立考古博物館 | 1 | 241・245 |
| 26 | 長越遺跡 | 甕 | 5 | 兵庫県立考古博物館 | 4 | 59・165・184<br>・191・194 |
| 27 | 長越遺跡 | 小型器台 | 1 | 兵庫県立考古博物館 | 4 | 320 |
| 28 | 長越遺跡 | 広口壺 | 1 | 兵庫県立考古博物館 | 31 | 305 |
| 29 | 長越遺跡 | 壺 | 2 | 兵庫県立考古博物館 | 31 | 360・361 |
| 30 | 長越遺跡 | 器台 | 1 | 兵庫県立考古博物館 | 31 | 540 |
| 31 | 半田山１号墓 | 器台 | 1 | 兵庫県立考古博物館 | 10 | 3 |
| 32 | 半田山１号墓 | 高杯 | 1 | 兵庫県立考古博物館 | 10 | 5 |
| 33 | 半田山１号墓 | 長頸壺 | 1 | 兵庫県立考古博物館 | 10 | 6 |
| 34 | 半田山２号墓 | 広口壺 | 1 | 兵庫県立考古博物館 | 10 | 1 |
| 35 | 堂山遺跡 | 甕 | 6 | 兵庫県立考古博物館 | 17 | C4・C95・C101・C201<br>・C204・C208 |
| 36 | 堂山遺跡 | 小型丸底壺 | 1 | 兵庫県立考古博物館 | 17 | C5 |
| 37 | 堂山遺跡 | 小型鉢 | 1 | 兵庫県立考古博物館 | 17 | C6 |
| 38 | 堂山遺跡 | 壺 | 1 | 兵庫県立考古博物館 | 17 | C16 |
| 39 | 鵤石田遺跡 | 甕 | 3 | 兵庫県立考古博物館 | 29 | 40・102・127 |
| 40 | 鵤石田遺跡 | 壺 | 3 | 兵庫県立考古博物館 | 29 | 216・217・218 |
| 41 | 鵤石田遺跡 | 器台 | 3 | 兵庫県立考古博物館 | 29 | 316・336・337 |
| 42 | 吉福遺跡 | 器台 | 4 | 兵庫県立考古博物館 | 2 | 2・3・6・7 |
| 43 | 吉福遺跡 | 広口壷 | 1 | 兵庫県立考古博物館 | 2 | 10 |
| 44 | 吉福遺跡 | 高杯 | 1 | 兵庫県立考古博物館 | 2 | 12 |
| 45 | 明神山４号墳 | 壺棺 | 1 | たつの市教育委員会 | 8 | ― |
| 46 | 小神辻の堂遺跡 | 甕 | 1 | たつの市教育委員会 | 22 | 19 |
| 47 | 小神辻の堂遺跡 | 壺 | 1 | たつの市教育委員会 | 22 | 28 |
| 48 | 小神辻の堂遺跡 | 鉢 | 1 | たつの市教育委員会 | 22 | 29 |
| 49 | 小神辻の堂遺跡 | 高杯 | 1 | たつの市教育委員会 | 22 | 35 |
| 50 | 小神辻の堂遺跡 | 器台 | 2 | たつの市教育委員会 | 22 | 36・37 |
| 51 | 南山２号墳 | 壺 | 1 | たつの市教育委員会 | 19 | 4 |
| 52 | 南山２号墳 | 壺 | 1 | たつの市教育委員会 | 19 | 5 |
| 53 | 北山遺跡 | 壺 | 3 | たつの市教育委員会 | 23 | 451・452・453 |
| 54 | 北山遺跡 | 甕 | 6 | たつの市教育委員会 | 23 | 473・475・687<br>・697・705・707 |
| 55 | 北山遺跡 | 高杯 | 1 | たつの市教育委員会 | 23 | 477 |
| 56 | 北山遺跡 | 鉢 | 1 | たつの市教育委員会 | 23 | 493 |
| 57 | 北山遺跡 | 壺 | 2 | たつの市教育委員会 | 23 | 688・700 |
| 58 | 龍子三ツ塚１号墳 | 器台 | 1 | たつの市教育委員会 | 30 | 73 |
| 59 | 龍子三ツ塚１号墳 | 壺 | 6 | たつの市教育委員会 | 30 | 29・30・31<br>・35・36・38 |
| 60 | 新宮宮内遺跡 | 甕 | 1 | たつの市教育委員会 | 25 | Y575 |

| 番号 | 遺　跡　名 | 器　　種 | 点数 | 所　蔵　機　関 | 文献番号 | 遺物番号 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 61 | 新宮宮内遺跡 | 壺 | 1 | たつの市教育委員会 | 25 | Y586 |
| 62 | 新宮宮内遺跡 | 台付壺 | 1 | たつの市教育委員会 | 25 | Y598 |
| 63 | 新宮宮内遺跡 | 高杯 | 1 | たつの市教育委員会 | 25 | Y599 |
| 64 | 新宮宮内遺跡 | 台付鉢 | 1 | たつの市教育委員会 | 25 | Y609 |
| 65 | 新宮東山１号墳 | 鉢 | 1 | たつの市教育委員会 | 18 | 5 |
| 66 | 新宮東山１号墳 | 大型壺 | 1 | たつの市教育委員会 | 18 | 6 |
| 67 | 丁瓢塚古墳 | 特殊土器 | 1 | たつの市教育委員会 | | — |
| 68 | 伊和中山４号墳 | 埴輪 | 6 | 宍粟市教育委員会 | 9 | 1･2･6･7<br>･8･ 未報告 |
| 69 | 蛇の杖遺跡 | 器台 | 1 | 佐用町教育委員会 | 22 | 16 |
| 70 | 本位田遺跡 | 甕 | 1 | 佐用町教育委員会 | 3 | 150 |
| 71 | 本位田遺跡 | 器台 | 5 | 佐用町教育委員会 | 3 | 262･286･293<br>･294･295 |
| 72 | 本位田遺跡 | 壺 | 1 | 佐用町教育委員会 | 3 | 296 |
| 73 | 今岡中山遺跡 | 長頸壺 | 1 | 岡山県古代吉備文化財センター | 28 | 20 |
| 74 | 今岡中山遺跡 | 器台 | 1 | 岡山県古代吉備文化財センター | 28 | 54 |
| 75 | 百間川今谷遺跡 | 器台 | 1 | 岡山県古代吉備文化財センター | 6 | 1747 |
| 76 | 奥坂遺跡 | 器台 | 1 | 岡山県古代吉備文化財センター | 7 | 832 |
| 77 | 津寺遺跡 | 器台 | 2 | 岡山県古代吉備文化財センター | 20 | 5135･5137 |
| 78 | 津寺遺跡 | 甕 | 2 | 岡山県古代吉備文化財センター | 20 | 6733･6741 |
| 79 | 平岡西遺跡 | 特殊壺 | 2 | 岡山市教育委員会 | 15 | 354･355 |
| 80 | 中山遺跡 | 特殊器台 | 1 | 真庭市教育委員会 | 5 | 特殊器台１ |
| 81 | 中山遺跡 | 特殊壺 | 1 | 真庭市教育委員会 | 5 | 特殊壺２ |
| 82 | 中山遺跡 | 器台 | 3 | 真庭市教育委員会 | 5 | 1･2･3 |
| 83 | 権現山 51 号墳 | 器台形埴輪 | 2 | 岡山大学文学部考古学研究室 | 13 | 8･25 |
| 84 | 権現山 51 号墳 | 壷形埴輪 | 1 | 岡山大学文学部考古学研究室 | 13 | 66 |
| 85 | 中野清水遺跡 | 壺 | 2 | 島根県埋蔵文化財調査センター | 26 | 45･199 |
| 86 | 中野清水遺跡 | 甕 | 1 | 島根県埋蔵文化財調査センター | 26 | 200 |
| 87 | 中野清水遺跡 | 鼓形器台 | 1 | 島根県埋蔵文化財調査センター | 26 | 332･361 |
| 88 | 中野清水遺跡 | 小型丸底壷 | 1 | 島根県埋蔵文化財調査センター | 26 | 366 |
| 89 | 中野清水遺跡 | 甕 | 1 | 島根県埋蔵文化財調査センター | 26 | 40 |
| 90 | 天満・宮西遺跡 | 広口壺 | 1 | 高松市教育委員会 | 24 | 525 |
| 91 | 天満・宮西遺跡 | 長頸壺 | 1 | 高松市教育委員会 | 24 | 528 |
| 92 | 天満・宮西遺跡 | 小型丸底壷 | 1 | 高松市教育委員会 | 24 | 534 |
| 93 | 天満・宮西遺跡 | 甕 | 2 | 高松市教育委員会 | 24 | 536･539 |
| 94 | 小阪合遺跡 | 小型器台 | 2 | 八尾市文化財調査研究センター | 11 | 8･9 |
| 95 | 久宝寺遺跡 | 甕 | 2 | 八尾市文化財調査研究センター | 16 | 50･51 |

**文献一覧**（上記表の文献番号と一致）


1　太子町教育委員会 1971『川島・立岡遺跡』

2　兵庫県教育委員会 1974『吉福遺跡』兵庫県埋蔵文化財調査集報第２集

3　兵庫県教育委員会 1976『中国縦貫自動車道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』兵庫県文化財調査報告第 11 冊

4　兵庫県教育委員会 1978『播磨・長越遺跡』兵庫県文化財調査報告書第 12 冊

5　落合町教育委員会 1978『中山遺跡』

6　岡山県古代吉備文化財センター 1982　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 51

7　岡山県古代吉備文化財センター 1983　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 53

8　龍野市 1984『龍野市史』第４巻

9　一宮町教育委員会 1986『伊和中山古墳群Ｉ－１・２号墳発掘調査概要報告―』一宮町文化財調査報告３

10　兵庫県教育委員会 1989『半田山 - 山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅸ -』兵庫県文化財調査報告第 65 冊

11　（財）八尾市文化財調査研究センター 1990『小阪合遺跡　- 八尾市計画事業南小阪合土地区画整理事業に伴う発掘

調査 -』八尾市文化財調査研究報告 26
12　赤穂市教育委員会 1991『有年原・田中遺跡』
13　近藤義郎編 1991『権現山 51 号墳 - 兵庫県揖保郡御津町 -』
14　西播流域史研究会編 1991『有年考古館蔵品図録』財団法人有年考古館
15　御津町教育委員会 1992『平岡西遺跡Ⅰ』御津町報告 8
16　（財）八尾市文化財調査研究センター 1993『久宝寺遺跡（第 6 次)』八尾市文化財調査研究会報告 37
15　兵庫県教育委員会 1995『堂山遺跡』兵庫県文化財調査報告第第 142 冊
16　龍野市教育委員会 1996『新宮東山古墳群』龍野市文化財調査報告 16
17　龍野市教育委員会 1997『南山古墳群・南山高屋遺跡』龍野市文化財調査報告 17 集
18　岡山県古代吉備文化財センター 1998　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 127　『津寺 5 』
19　置田雅昭ほか 1998「兵庫県佐用郡三日月町下本郷銅鐸出土地の研究」『兵庫県の歴史』34
20　龍野市教育委員会 1998『小神辻の堂遺跡』龍野市文化財調査報告 20
21　龍野市教育委員会 2001『北山遺跡』龍野市文化財調査報告 23 集
22　高松市教育委員会 2002『天満・宮西遺跡～集落・水田編～』　60 集
23　新宮町教育委員会 2005『新宮宮内遺跡』新宮町文化財調査報告 30
24　島根県埋蔵文化財調査センター 2006『中野清水遺跡（3）・白枝本郷遺跡　一般 25 国道 9 号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 7 』
26　岡山県古代吉備文化財センター 2008　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 213
27　兵庫県教育委員会 2009『鵤石田遺跡』兵庫県文化財調査報告第 363 冊
28　大手前大学史学研究所 2010『龍子三ツ塚古墳群の研究－播磨揖保川流域における前期古墳群の調　査－』
29　兵庫県教育委員会 2012『播磨・長越遺跡Ⅲ』兵庫県文化財調査報告第 432 冊

## 特集展示「茅葺から語るもの、知り得るもの－ミニチュア模型から見るもの、見えるもの－」

| 番号. | 資　料　名 | 点数 | 所　蔵　者 |
|---|---|---|---|
| 1 | 古民家 | 1 | 島津義弘 |
| 2 | 古民家 | 1 | 島津義弘 |
| 3 | 古民家 | 1 | 島津義弘 |
| 4 | 古民家 | 1 | 島津義弘 |
| 5 | 古民家 | 1 | 島津義弘 |
| 6 | 鐘つき堂 | 1 | 島津義弘 |
| 7 | 古民家 | 1 | 島津義弘 |
| 8 | 茅葺民家 | 1 | 島津義弘 |
| 9 | 茅葺民家 | 1 | 島津義弘 |
| 10 | 古民家と土蔵 | 1 | 島津義弘 |
| 11 | 川上郡吹家　岡山県 | 1 | 島津義弘 |
| 12 | べんがら塗り町屋　岡山県 | 1 | 島津義弘 |
| 13 | べんがら造り　岡山県 | 1 | 島津義弘 |
| 14 | 茶室 | 1 | 島津義弘 |
| 15 | 曲屋　岩手県 | 1 | 島津義弘 |
| 16 | 古民家　「秋祭り」子供みこし | 1 | 島津義弘 |
| 17 | 古民家　和菓子屋 | 1 | 島津義弘 |
| 18 | 茅葺民家　ホーホーホタルコイ | 1 | 島津義弘 |
| 19 | 茅葺民家 | 1 | 島津義弘 |
| 20 | 茅葺民家　「雪化粧」 | 1 | 島津義弘 |
| 21 | 茅葺民家　「お正月」 | 1 | 島津義弘 |
| 22 | 茅葺民家　「俵あみ」 | 1 | 島津義弘 |
| 23 | 茅葺民家　「盆踊り」(8 月) | 1 | 島津義弘 |

| 番号. | 資　料　名 | 点数 | 所　蔵　者 |
|---|---|---|---|
| 24 | 茅葺民家　「花見」(4 月) | 1 | 島津義弘 |
| 25 | 茅葺民家　「わらぐらのぼり」 | 1 | 島津義弘 |
| 26 | 茅葺民家　「通りやんせ」 | 1 | 島津義弘 |
| 27 | 古民家 | 1 | 島津義弘 |
| 28 | 古民家 | 1 | 島津義弘 |
| 29 | 古民家と土蔵 | 1 | 島津義弘 |
| 30 | 古民家　おだんご屋 | 1 | 島津義弘 |
| 31 | 茅葺民家　たき火 | 1 | 島津義弘 |
| 32 | 茅葺民家　汽車ポッポ | 1 | 島津義弘 |
| 33 | 茅葺民家　早春 | 1 | 島津義弘 |
| 34 | 茅葺民家　重要文化財姫路市安富町　千年家（旧古井家） | 1 | 島津義弘 |
| 35 | 茅葺民家「なわとび」 | 1 | 島津義弘 |

**東備西播定住自立圏形成推進事業　平成 24 年度埋蔵文化財巡回展「備前焼」**

| 番号 | 資　料　名 | 点数 | 遺　跡　名 | 時　代 | 所蔵機関 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 蓋（経筒容器か） | 2 | 医王山東麓２号窯 | 平安時代末～鎌倉時代 | 備前市 |
| 2 | 注口 | 1 | 医王山東麓２号窯 | | 備前市 |
| 3 | 線刻のある破片（椀） | 1 | 医王山東麓２号窯 | | 備前市 |
| 4 | 線刻のある破片（壺） | 1 | 医王山東麓２号窯 | | 備前市 |
| 5 | 鉢 | 1 | 医王山東麓２号窯 | | 備前市 |
| 6 | 椀 | 3 | 医王山東麓２号窯 | | 備前市 |
| 7 | 小皿 | 7 | 医王山東麓２号窯 | | 備前市 |
| 8 | 丸瓦 | 2 | 医王山東麓２号窯 | | 備前市 |
| 9 | 軒平瓦 | 1 | 医王山東麓２号窯 | | 備前市 |
| 10 | 平瓦 | 1 | 医王山東麓２号窯 | | 備前市 |
| 11 | 甕 | 1 | 医王山東麓２号窯 | | 備前市 |
| 12 | 雀口壺 | 1 | 梨ケ原宿遺跡 | 南北朝時代～室町時代 | 上郡町 |
| 13 | 小皿 | 7 | 山野里宿遺跡 | | 上郡町 |
| 14 | 砥石として使用した破片 | 3 | 山野里宿遺跡 | | 上郡町 |
| 15 | 擂鉢（把手付き） | 1 | 山野里宿遺跡 | | 上郡町 |
| 16 | 擂鉢 | 5 | 山野里宿遺跡 | | 上郡町 |
| 17 | 甕 | 1 | 山野里宿遺跡 | | 上郡町 |
| 18 | 壺 | 1 | 山野里宿遺跡 | | 上郡町 |
| 19 | 壺 | 1 | 六道山遍照院跡 | | 赤穂市 |
| 20 | 徳利 | 1 | 伊部南大窯東３号窯 | 安土・桃山時代～江戸時代 | 備前市 |
| 21 | 小杯 | 1 | 伊部南大窯中央窯 | | 備前市 |
| 22 | 小壺 | 1 | 伊部南大窯中央窯 | | 備前市 |
| 23 | 硯 | 1 | 伊部南大窯中央窯 | | 備前市 |
| 24 | 角形匣鉢（窯道具） | 1 | 伊部南大窯西１号窯 | | 備前市 |
| 25 | 蓋 | 1 | 赤穂城下町跡 | | 赤穂市 |
| 26 | 徳利 | 2 | 赤穂城下町跡 | | 赤穂市 |
| 27 | 水屋甕 | 1 | 赤穂城下町跡 | | 赤穂市 |
| 28 | 大皿 | 1 | 赤穂城下町跡 | | 赤穂市 |
| 29 | 擂鉢 | 2 | 赤穂城下町跡 | | 赤穂市 |
| 30 | 鉢 | 1 | 赤穂城本丸跡 | | 赤穂市 |
| 31 | 土管 | 2 | 赤穂城跡 | | 赤穂市 |
| ※このほか、岡山県立博物館より写真３点を借用し、参考資料とした。 | | | | | |

特別企画展『佐方渚果生誕 110 年』

※展示資料はすべて佐方直陽・さよ子氏より借用

| 番号 | 資　料　名 | 数量 | 内　容 | 備　考 | 展示会場 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 丸行灯 | 1 | 引き出し付（灯心より） | | 有年考古館 |
| 2 | 行灯 | 1 | 壁に掛けて使用 | | 有年考古館 |
| 3 | 手持行灯 | 1 | 持ち手あり | | 有年考古館 |
| 4 | 手持蓋 | 1 | 紙製 | | 有年考古館 |
| 5 | 丸行灯 | 1 | ぼんぼり | | 有年考古館 |
| 6 | 手持行灯 | 1 | ろうそく付 | | 有年考古館 |
| 7 | 提灯 | | 箱入 | | 有年考古館 |
| 8 | ランプ台 | 1 | 木製 | | 有年考古館 |
| 9 | 燭台 | 1 | | | 有年考古館 |
| 10 | 竹筒ランプ | 2 | | | 有年考古館 |
| 11 | 船ランプ | 1 | | | 有年考古館 |
| 12 | 置ランプ | 1 | | | 有年考古館 |
| 13 | 舷灯 | 1 | | | 有年考古館 |
| 14 | 柳行李 | 1 | | | 有年考古館 |
| 15 | 小物入れ | 1 | 把手付　引き出し付 | | 有年考古館 |
| 16 | 小物箪笥 | 1 | 引き出し付 | | 有年考古館 |
| 17 | 塗盤 | 1 | ほうすう | | 有年考古館 |
| 18 | 焙烙 | 1 | 瓦質 | | 有年考古館 |
| 19 | こね鉢 | 1 | | | 有年考古館 |
| 20 | 火鉢の蓋 | 1 | 紙製 | | 有年考古館 |
| 21 | 蓋付バケツ | | 把手付 | | 有年考古館 |
| 22 | 洗い桶 | 1 | | | 有年考古館 |
| 23 | 飯櫃 | 1 | 蓋付　持ち手付 | | 有年考古館 |
| 24 | 桶 ( 小) | 1 | 豆腐用 | | 有年考古館 |
| 25 | 桶（大） | 1 | 魚用 | | 有年考古館 |
| 26 | おぶきさん | 1 | 仏飯入れ | | 有年考古館 |
| 27 | 釜 | 1 | 蓋付 | | 有年考古館 |
| 28 | 草鞋作台 | 1 | | | 有年考古館 |
| 29 | 薬研 | 1 | 台付 | | 有年考古館 |
| 30 | 乾瓢剥き | 1 | | | 有年考古館 |
| 31 | ちんちょー | 1 | | | 有年考古館 |
| 32 | 番傘 | 4 | | | 有年考古館 |
| 33 | 背負子（大） | 1 | | | 有年考古館 |
| 34 | 背負子 ( 小 ) | 1 | | | 有年考古館 |
| 35 | 鏡台 | 1 | 手鏡台・手鏡・引き出し付 | | 有年考古館 |
| 36 | 鉄漿付け箱 | 1 式 | | | 有年考古館 |
| 37 | 鉄漿付け道具 | 1 式 | 毛抜き (4 点 ) | お歯黒道具 | 有年考古館 |
| 38 | 団扇 | 1 | | | 有年考古館 |
| 39 | 団扇受け | 1 | | | 有年考古館 |
| 40 | 置時計 | 1 | | | 有年考古館 |
| 41 | 灰皿 | 2 | 大・小 | | 有年考古館 |
| 42 | 棹秤 ( 小) | 1 | | | 有年考古館 |
| 43 | 棹秤 ( 大) | 1 | | | 有年考古館 |
| 44 | 乳鉢・乳棒セット | 1 | ガラス製（小） | | 有年考古館 |
| 45 | 乳鉢・乳棒セット | 1 | ガラス製（大） | | 有年考古館 |
| 46 | 乳鉢・乳棒セット | 1 | 陶器製 | | 有年考古館 |
| 47 | 算盤 | 1 | 四玉 | | 有年考古館 |

| 番号 | 資　料　名 | 数量 | 内　　容 | 備　考 | 展示会場 |
|---|---|---|---|---|---|
| 48 | 五玉算盤 | 2 | 大・小 | | 有年考古館 |
| 49 | 屑籠 | 1 | 竹製 | | 有年考古館 |
| 50 | 硯箱 | 1 | 引き出し付 | | 有年考古館 |
| 51 | 桶板（一枚） | 1 | 「明治参五季秋月製之佐方店」 | | 有年考古館 |
| 52 | 御殿豆雛 | 1式 | | | 有年考古館 |
| 53 | 染付鉢 | 1 | 蝶文・山水文 | | 有年考古館 |
| 54 | 染付鉢 | 1 | 山水文・松・椿文 | | 有年考古館 |
| 55 | 染付重鉢 | 1 | 三段　梅文 | | 有年考古館 |
| 56 | 染付輪花鉢 | 1 | 大　コバルト釉 | | 有年考古館 |
| 57 | 染付輪花鉢 | 1 | 中　コバルト釉 | | 有年考古館 |
| 58 | 染付小鉢 | 1 | 矢羽文「成化年製」 | | 有年考古館 |
| 59 | 染付小皿 | 3 | 見込・松竹梅文・芙蓉手文 | | 有年考古館 |
| 60 | 染付中皿 | 1 | 山水文・家文 | | 有年考古館 |
| 61 | 染付大皿 | 1 | コバルト釉 | | 有年考古館 |
| 62 | 染付大皿 | 1 | 鳳凰文・牡丹文・梅文 | | 有年考古館 |
| 63 | 染付徳利 | 2 | 大・中 | | 有年考古館 |
| 64 | 長火鉢 | 1 | 五徳入り　引き出し付 | | 有年考古館 |
| 65 | 茶臼 | 1 | 石製 | | 有年考古館 |
| 66 | 水鉄砲 | 1 | 霧吹き | | 有年考古館 |
| 67 | 水滴 | 1 | 備前　獅子 | | 有年考古館 |
| 68 | 水滴 | 1 | 備前　袋製 | | 有年考古館 |
| 69 | 水滴 | 1 | 備前　兎 | | 有年考古館 |
| 70 | 水滴 | 1 | 瀬戸系　花型 | | 有年考古館 |
| 71 | 水滴 | 1 | 染付　扇に桜 | | 有年考古館 |
| 72 | 水滴 | 1 | 染付　花文 | | 有年考古館 |
| 73 | 煙草入 | 2 | 皮革製 | | 有年考古館 |
| 74 | 煙草入 | 1 | ケース | | 有年考古館 |
| 75 | 刻み煙草用煙草入 | 1 | 木の実 | | 有年考古館 |
| 76 | 刻み煙草用煙草入 | 1 | カゴと象牙の飾り | | 有年考古館 |
| 77 | 巾着 | 1 | 布製　象牙の飾り | | 有年考古館 |
| 78 | 煙管 | 7 | うち６点袋入り | | 有年考古館 |
| 79 | 小銭入 | 2 | 皮革製・皮革製ガマ口 | | 有年考古館 |
| 80 | 小銭入 | 1 | 旅行用　皮革製　分銅型 | | 有年考古館 |
| 81 | 矢立て | 5 | うち３点印あり | | 有年考古館 |
| 82 | 硯（梅型） | 1 | 菅公千年祭記念　筑紫復古堂造 | | 有年考古館 |
| 83 | 硯 | 1 | 紙製ケース入 | | 有年考古館 |
| 84 | 墨つぼ | 1 | | | 有年考古館 |
| 85 | 手鏡 | 3 | 木箱入 | | 有年考古館 |
| 86 | 懐中時計 | 3 | うち１点布製袋入・蓋付 | | 有年考古館 |
| 87 | 腕時計 | 1 | | | 有年考古館 |
| 88 | たんころ | 2 | 大・小　秉燭 | | 有年考古館 |
| 89 | 薬秤セット | 1式 | 匙付・分銅付<br>真鍮　亀甲皿 | | 有年考古館 |
| 90 | 皿秤セット | 1 | 分銅付 | | 有年考古館 |
| 91 | マッチ | 244 | | | 有年考古館 |
| 92 | 作業台（大） | 1 | | | 有年考古館 |
| 93 | 直角定規 | 1 | 木製 | | 有年考古館 |
| 94 | 直角定規 | 1 | プラスティック製 | | 有年考古館 |
| 95 | 定規（大） | 1 | 木製 | | 有年考古館 |
| 96 | 定規 | 1 | プラスティック製 | | 有年考古館 |

| 番号 | 資　料　名 | 数量 | 内　容 | 備　考 | 展示会場 |
|---|---|---|---|---|---|
| 97 | 軸棒（木製） | 3 | 大・中・小 | | 有年考古館 |
| 98 | 表木 | 1 | 半月　木製 | | 有年考古館 |
| 99 | 打木 | 1 | 木製 | | 有年考古館 |
| 100 | 額の縁 | 7 | | | 有年考古館 |
| 101 | 屏風の縁 | 2 | 黒塗り | | 有年考古館 |
| 102 | 竹差し | 2 | 中・小 | | 有年考古館 |
| 103 | 付け廻し刷毛 | 1 | | | 有年考古館 |
| 104 | 裁ち包丁 | 1 | | | 有年考古館 |
| 105 | 道具箱 | 1 | 引き出し２段 | | 有年考古館 |
| 106 | 四ツ目錐 | 2 | | | 有年考古館 |
| 107 | 星突き | 1 | | | 有年考古館 |
| 108 | 三つ目錐 | 1 | | | 有年考古館 |
| 109 | 二分鑿 | 1 | | | 有年考古館 |
| 110 | 三分鑿 | 2 | | | 有年考古館 |
| 111 | 竹べら | 1 | | | 有年考古館 |
| 112 | 三分丸鑿 | 1 | | | 有年考古館 |
| 113 | 五分丸鑿 | 1 | | | 有年考古館 |
| 114 | 五厘鑿 | 1 | | | 有年考古館 |
| 115 | 裁ち包丁 | 3 | | | 有年考古館 |
| 116 | 金槌 | 2 | | | 有年考古館 |
| 117 | 道具箱 | 1 | 引き出し１段 | | 有年考古館 |
| 118 | 錐 | 1 | | | 有年考古館 |
| 119 | 片刃鋸 | 1 | | | 有年考古館 |
| 120 | はた金 | 1 | | | 有年考古館 |
| 121 | 鉋 | 1 | | | 有年考古館 |
| 122 | 釘抜き | | | | 有年考古館 |
| 1 | 坂越船檀尻囃子笛曲符 | 1 | ガリ刷り　歌詞<br>昭和 44 年 10 月　厚紙 | | 旧坂越浦会所 |
| 2 | 兒島高徳卿之歌 | 2 | 楽譜　550 年紀念大祭典 | | 旧坂越浦会所 |
| 3 | 坂越中學校乃歌 | 1 | 歌詞 | | 旧坂越浦会所 |
| 4 | 坂越町制祝賀音頭坂越音頭 | 1 | 歌詞　ガリ刷り | | 旧坂越浦会所 |
| 5 | 恵美寿須舞の歌詞 | 1 | 歌詞　昭和拾四年壱月　坂越浦梢影洞 | | 旧坂越浦会所 |
| 6 | 矢野名勝小唄 | 1 | 歌詞 | | 旧坂越浦会所 |
| 7 | 赤穂市讃歌 | 1 | 楽譜　ガリ刷り　B4 判 | | 旧坂越浦会所 |
| 8 | 赤穂義士軍歌 | 1 | 奥藤弘 | | 旧坂越浦会所 |
| 9 | 大典奉祝歌 | 1 | 楽譜 | | 旧坂越浦会所 |
| 10 | 四十七義士の歌 | 1 | 歌詞 | | 旧坂越浦会所 |
| 11 | 赤穂御崎小唄 | 1 | 歌詞 | | 旧坂越浦会所 |
| 12 | 赤穂郡唱歌 | 1 | 片岡源之助　作歌<br>附録　赤穂郡誌イロハ歌 | | 旧坂越浦会所 |
| 13 | 赤穂郡郷土唱歌 | 1 | 前賀卯太郎作歌 | | 旧坂越浦会所 |
| 14 | 褒状　坂越尋常小学校 | 2 | 尋常科第六學年　大正四年 | | 旧坂越浦会所 |
| 15 | 習字帖 | 2 | 新撰習字帖　五　國語習字帖　巻一 | | 旧坂越浦会所 |
| 16 | 尋常小学校教科書 | 1 | 日本修身書　巻四 | | 旧坂越浦会所 |
| 17 | 尋常小学校教科書 | 1 | 尋常小學校讀本 | | 旧坂越浦会所 |
| 18 | 尋常小学校教科書 | 1 | 小學内國史甲種　巻二 | | 旧坂越浦会所 |
| 19 | 尋常小学校教科書 | 1 | 小學日本歴史一 | | 旧坂越浦会所 |
| 20 | 尋常小学校教科書 | 1 | 四體吉話千字文 | | 旧坂越浦会所 |
| 21 | 尋常小学校教科書 | 1 | 高等小學修身書 | | 旧坂越浦会所 |
| 22 | 尋常小学校教科書 | 1 | 修身教本　巻四 | | 旧坂越浦会所 |

| 番号 | 資　料　名 | 数量 | 内　　容 | 備　考 | 展示会場 |
|---|---|---|---|---|---|
| 23 | こどもの本 | 1 | 下 | | 旧坂越浦会所 |
| 24 | 人民必携 | 1 | 8 合冊 | | 旧坂越浦会所 |
| 25 | 短冊集 | 1 式 | 渡海洲蓬・長崎赤城・宮崎霞谷・<br>長安義信（周得）・北條暉水（文信）<br>長安雅山・平井正年　など　表紙布製 | | 旧坂越浦会所 |
| 26 | 礬水刷毛 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 27 | 撫刷毛 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 28 | 糊漉し | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 29 | 金粉落とし | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 30 | 竹差し | 1 | 1 尺 | | 旧坂越浦会所 |
| 31 | 竹べら | 2 | | | 旧坂越浦会所 |
| 32 | ピンセット | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 33 | 直定規 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 34 | 止型（定規） | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 35 | 紙切り包丁 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 36 | 裁ち包丁 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 37 | 出刃包丁 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 38 | 胴付鋸 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 39 | ノミ | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 40 | 一分鑿 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 41 | 金槌 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 42 | 錐 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 43 | やっとこ | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 44 | ニッパー | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 45 | にぎり鋏 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 46 | 扁額　額装 | 1 | 「求放心」河原翠城 | 絹本 | 旧坂越浦会所 |
| 47 | 掛軸 | 1 | 「布」　平井正年 | 絹本着彩色 | 旧坂越浦会所 |
| 48 | 掛軸 | 1 | 「菊」　長崎赤城 | 絹本着彩色 | 旧坂越浦会所 |
| 49 | 掛軸 | 1 | 「紫陽花金魚之図」　笠堂 | 絹本着彩色 | 旧坂越浦会所 |
| 50 | 掛軸 | 1 | 「釣灯篭に鶯」　渡海洲蓬 | 絹本着彩色 | 旧坂越浦会所 |
| 51 | 額　額装 | 1 | 「雪消の沢　佐方さよ子 | | 旧坂越浦会所 |
| 52 | 幕晫 | 1 | 河原翠水が佩用 | 袋付 | 旧坂越浦会所 |
| 53 | 携帯算盤 | 1 | 紙製 | | 旧坂越浦会所 |
| 54 | 手帳 | 5 | スケジュール帳 | | 旧坂越浦会所 |
| 55 | 葉書　往復書簡 | 5 | 牟禮氏（友人） | | 旧坂越浦会所 |
| 56 | 葉書 | 3 | 孫への手紙 | | 旧坂越浦会所 |
| 57 | 「年中行事小色紙」 | 4 | 昭和 10 年の作　渡海洲蓬 | 袋付 | 旧坂越浦会所 |
| 58 | 切り抜き文型 | 1 | 「鳥井町」頭人船飾り紋　昭和 23 年 9 月 | | 旧坂越浦会所 |
| 59 | 切り抜き文型 | 2 | 鳥井町　反転の紋 | | 旧坂越浦会所 |
| 60 | 切り抜き | 1 | ガラス戸に貼っていた | | 旧坂越浦会所 |
| 61 | 巻物 | 1 | 周得・金額・雅山　書巻合巻 | | 旧坂越浦会所 |
| 62 | 巻物 | 1 | 河原翠城書状 | | 旧坂越浦会所 |
| 63 | 巻物 | 1 | 茶屋氏孝友傳　赤松蘭室 | | 旧坂越浦会所 |
| 64 | 葉書 | 3 | 柳田國男からの葉書 | | 旧坂越浦会所 |
| 65 | 「越浦年表」 | 1 | 原本・論文 | | 旧坂越浦会所 |
| 66 | 「越浦年表他」 | 1 | 佐方渚果遺稿　復刻<br>B5 判　（107 頁） | | 旧坂越浦会所 |
| 67 | 「赤穂茶人考」 | 1 | 原本・論文 | | 旧坂越浦会所 |
| 68 | 「赤穂茶人考」 | 1 | 遺稿　復刻（70 頁） | | 旧坂越浦会所 |
| 69 | 「坂越の言葉」 | 1 | 原本・論文 | | 旧坂越浦会所 |

| 番号 | 資　料　名 | 数量 | 内　　容 | 備　考 | 展示会場 |
|---|---|---|---|---|---|
| 70 | 「坂越の言葉」 | 1 | 遺稿Ⅱ　復刻（48 頁） | | 旧坂越浦会所 |
| 71 | 「坂越の栞」 | 1 | 原本（55 頁） | | 旧坂越浦会所 |
| 72 | 「光塩丸漂流資料」 | 2 | 上・下　原本 | | 旧坂越浦会所 |
| 73 | 新聞の切り抜き | 1 | スクラップ帳 | | 旧坂越浦会所 |
| 74 | 「越浦驕人録」 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 75 | 「越浦歳時記」 | 1 | 昭和 8（1932）年 9 月 | | 旧坂越浦会所 |
| 76 | 「越浦名所考」 | 1 | 昭和 8（1933）年 | | 旧坂越浦会所 |
| 77 | 「大避大明神勧請鎮座地について」 | 1 | 昭和 38（1963）年 6 月稿 | | 旧坂越浦会所 |
| 78 | 「坂越考」 | 1 | 『地理・歴史』　昭和 36（1961）年 | | 旧坂越浦会所 |
| 79 | 「赤穂郡洪水史」 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 80 | 「黒崎墓所記」 | 1 | 6 月 6 日 | | 旧坂越浦会所 |
| 81 | 「千種川の今昔　『赤穂』新聞史」 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 82 | 「坂越の学校　坂越考」 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 83 | 「大避太明神観請鎮居地について」 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 84 | 「あこ高まん」 | 1 | 「赤穂高慢」 | | 旧坂越浦会所 |
| 85 | 「茶人利直」 | 1 | 昭和 25（1950）年 | | 旧坂越浦会所 |
| 86 | 「越浦昔ばなし」 | 1 | 昭和 13（1938）年 | | 旧坂越浦会所 |
| 87 | 「落葉籠」 | 2 | 一・二　昭和 10（1935）年 | | 旧坂越浦会所 |
| 88 | 「越浦遊戯・童謡の今昔」 | 1 | 昭和 9 年 4 月 | | 旧坂越浦会所 |
| 89 | 「播州赤穂郡志　赤穂郡志」 | 1 | 復刻 | | 旧坂越浦会所 |
| 90 | 「赤穂郡志」 | 1 | 私立赤穂郡教育會編<br>明治 41 年 8 月 5 日発行 | | 旧坂越浦会所 |
| 91 | 「赤穂郡志　雑感」 | 1 | 原稿用紙 | | 旧坂越浦会所 |
| 92 | 「宝船」 | 1 | 明治 44 年 6 月号　6 冊合本 | | 旧坂越浦会所 |
| 93 | 「西播史談會乃報　播磨」 | 6 | 復刻　全揃　第 1 ～第 6 巻 | | 旧坂越浦会所 |
| 94 | 「西播史談会　会報　」 | 14 | 1 ～ 76 号　全揃 | | 旧坂越浦会所 |
| 95 | 「神社明細帳」 | 1 | 赤穂郡役所発行　明治 41(1908）年 | | 旧坂越浦会所 |
| 96 | 「播磨」58 号 | 1 | 学術雑誌　昭和 39 年 5 月 | | 旧坂越浦会所 |
| 97 | 「播磨」54 号 | 1 | 学術雑誌　昭和 38 年 1 月 | | 旧坂越浦会所 |
| 98 | 文机 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 99 | 肥後の守 | 2 | | | 旧坂越浦会所 |
| 100 | 名刺 | 1 | 箱入 | | 旧坂越浦会所 |
| 101 | 五玉算盤 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 102 | インク汲取紙 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 103 | 文鎮 | 1 | 大黒石製 | | 旧坂越浦会所 |
| 104 | 火鉢 | 1 | 丸型　五徳入り | | 旧坂越浦会所 |
| 105 | 鉄瓶 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 106 | 菓子器 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 107 | 新漢和大辞典 | 1 | 六合館　大正 5 年 7 月 5 日発行 | | 旧坂越浦会所 |
| 108 | 新語交り　和漢大辞典 | 1 | 玉井清文堂　大正 12 年 4 月 30 日発行 | | 旧坂越浦会所 |
| 109 | 讀史備要 | 1 | 東京帝国大学<br>昭和 10 年 11 月 1 日発行<br>発行所内外書籍株式会社 | | 旧坂越浦会所 |
| 110 | 本立て | 1 | 引き出し付 | | 旧坂越浦会所 |
| 111 | 置時計 | 1 | 1934 年　卒業紀念　奥藤教<br>大黒石製 | | 旧坂越浦会所 |
| 112 | 花入れ | 1 | 備前焼 | | 旧坂越浦会所 |
| 113 | 筆立て | 1 式 | 竹製鉛筆 2・万年筆 2・赤ボールペン 1 | | 旧坂越浦会所 |
| 114 | 筆箱 | 1 | 手製（消影洞） | | 旧坂越浦会所 |
| 115 | 硯箱 | 1 式 | 引き出し付　硯 1・墨 1・筆 2 | | 旧坂越浦会所 |

| 番号 | 資　料　名 | 数量 | 内　　容 | 備　考 | 展示会場 |
|---|---|---|---|---|---|
| 116 | 屑籠 | 1 | 昭和 19 年 9 月 20 日 | | 旧坂越浦会所 |
| 117 | 花入れ | 1 | 備前焼 | | 旧坂越浦会所 |
| 118 | 小物箪笥 | 1 | 引き出し 4 | | 旧坂越浦会所 |
| 119 | 印章 | 10 | | | 旧坂越浦会所 |
| 120 | 煙管雁首 | 1 | 陶器製 | | 旧坂越浦会所 |
| 121 | 煙管吸口 | 1 | 石製 | | 旧坂越浦会所 |
| 122 | 作業台 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 123 | 茶盆 | 1 式 | 茶器一式 | | 旧坂越浦会所 |
| 124 | 急須 | 1 | 湯冷とセット | | 旧坂越浦会所 |
| 125 | 湯冷 | 1 | 急須とセット | | 旧坂越浦会所 |
| 126 | 抹茶茶碗 | 1 | 備前焼 | | 旧坂越浦会所 |
| 127 | 湯冷 | 1 | 菊文染付 | | 旧坂越浦会所 |
| 128 | 煎茶茶碗 | 4 | 染付東山焼 | | 旧坂越浦会所 |
| 129 | 茶巾 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 130 | 茶盆 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 131 | 茶筅 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 132 | 棗 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 133 | 茶托 | 3 | | | 旧坂越浦会所 |
| 134 | 茶杓 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 135 | 帛紗 | 1 | | | 旧坂越浦会所 |
| 136 | 報事風土 | 8 | コピー | | 旧坂越浦会所 |
| 137 | 越浦年表 | 11 | コピー | | 旧坂越浦会所 |
| 138 | 「新赤穂」 | 1 | 第 134 号<br>昭和 31（1956）年 4 月 15 日 | | 旧坂越浦会所 |
| 139 | 「赤穂タイムス」 | 1 | 第 2 号<br>昭和 35（1960）年 10 月 11 日 | | 旧坂越浦会所 |
| 140 | 「週刊赤穂」 | 1 | 第 27 号<br>昭和 31（1956）年 3 月 28 日 | | 旧坂越浦会所 |
| 141 | 「赤穂又新日報」 | 1 | 第 126 号<br>昭和 31（1956）年 5 月 22 日 | | 旧坂越浦会所 |
| 142 | 「赤穂新聞」 | 1 | 第 450 号<br>昭和 32(1957) 年 9 月 22 日 | | 旧坂越浦会所 |
| 143 | 「赤穂民報」 | 1 | 第 7 号<br>昭和 44（1969）年 11 月 5 日 | | 旧坂越浦会所 |
| 144 | 「ながれ」 | 1 | 創刊号<br>昭和 33（1958）年 8 月 1 日 | | 旧坂越浦会所 |
| 145 | 「赤穂通信」 | 1 | 第 1 号<br>昭和 35（1960）年 6 月 8 日 | | 旧坂越浦会所 |
| 146 | 「広報あこう」 | 1 | №.100<br>昭和 35（1960）年 4 月 28 日 | | 旧坂越浦会所 |
| 147 | 播州赤穂沿岸図 | 1 | 江戸時代後期 | | 旧坂越浦会所 |
| 148 | 坂越灣沿岸図 | 2 | 文化 11（1814）年 9 月 | | 旧坂越浦会所 |
| 149 | 坂越の年中行事写真 | 7 | ラミネート | | 旧坂越浦会所 |
| 150 | 絵葉書 | 111 | 坂越地区関連 | | 旧坂越浦会所 |
| 151 | 絵葉書 | 55 | 赤穂地区関連 | | 旧坂越浦会所 |
| 152 | 絵葉書 | 3 | 上郡町関連 | | 旧坂越浦会所 |
| 153 | 絵葉書 | 17 | 相生市関連 | | 旧坂越浦会所 |
| 154 | 絵葉書 | 9 | 絵画関連 | | 旧坂越浦会所 |
| 155 | 絵葉書 | 8 | 書画関連 | | 旧坂越浦会所 |
| 156 | 絵葉書袋 | 17 | | | 旧坂越浦会所 |

## 企画展『有年の遺跡発掘調査速報展ー土中からのメッセージ』

| テーマ | 番号 | 遺跡名 | 種類 | 器種 | 点数 | 備考 | 所蔵機関 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 有年のあけぼのー縄文時代 | 1 | 有年原・クルミ遺跡 | 縄文土器 | 深鉢 | 29 | | 赤穂市教育委員会 |
| | 2 | 有年原・クルミ遺跡 | 石器 | 削器 | 2 | | 赤穂市教育委員会 |
| | 3 | 有年原・クルミ遺跡 | 縄文土器 | 深鉢 | 2 | | 赤穂市教育委員会 |
| 有年、大いに栄えるー弥生時代中期 | 4 | 有年牟礼・井田遺跡 | 弥生土器 | 甕 | 9 | | 赤穂市教育委員会 |
| | 5 | 有年牟礼・井田遺跡 | 弥生土器 | 壺 | 2 | | 赤穂市教育委員会 |
| | 6 | 有年牟礼・井田遺跡 | 弥生土器 | 無頸壺 | 1 | | 赤穂市教育委員会 |
| | 7 | 有年牟礼・井田遺跡 | 石器 | 石鏃 | 13 | | 赤穂市教育委員会 |
| | 8 | 有年牟礼・井田遺跡 | 石器 | 石匙 | 1 | | 赤穂市教育委員会 |
| | 9 | 有年牟礼・井田遺跡 | 石器 | 削器 | 4 | | 赤穂市教育委員会 |
| | 10 | 有年牟礼・井田遺跡 | 石器 | 方柱状片刃石斧 | 2 | 微小破片有 | 赤穂市教育委員会 |
| | 12 | 有年牟礼・井田遺跡 | 石器 | 石錐 | 6 | | 赤穂市教育委員会 |
| | 13 | 有年牟礼・井田遺跡 | 弥生土器 | 高杯 | 3 | | 兵庫県立考古博物館 2010191 |
| | 14 | 有年牟礼・井田遺跡 | 弥生土器 | 壺 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010191 |
| | 15 | 有年牟礼・井田遺跡 | 弥生土器 | 器台 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010191 |
| | 16 | 有年牟礼・井田遺跡 | 弥生土器 | 大型鉢 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010191 |
| | 19 | 有年牟礼・井田遺跡 | 弥生土器 | 壺 | 2 | | 兵庫県立考古博物館 2010191 |
| | 21 | 有年牟礼・井田遺跡 | 石器 | 環状石斧 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2009222 |
| | 22 | 有年牟礼・井田遺跡 | 石器 | 石鏃 | 3 | | 兵庫県立考古博物館 2010191 |
| | 25 | 有年牟礼・井田遺跡 | 石器 | 刃器 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010191 |
| | 26 | 有年牟礼・井田遺跡 | 弥生土器 | 台付鉢 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010247 |
| | 27 | 有年牟礼・井田遺跡 | 弥生土器 | 壺 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010247 |
| | 28 | 有年牟礼・井田遺跡 | 石器 | 打製石庖丁 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010247 |
| | 29 | 有年牟礼・井田遺跡 | 石器 | 石鏃 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010247 |
| | 30 | 有年牟礼・井田遺跡 | 石器 | 太型蛤刃石斧 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010247 |
| | 31 | 有年牟礼・井田遺跡 | 石器 | 磨製石斧 | 2 | | 兵庫県立考古博物館 2010247 |
| | 33 | 有年牟礼・井田遺跡 | 石器 | 磨製石庖丁 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010247 |
| 地域の拠点へ　ー弥生時代後期末～古墳時代初頭ー | 34 | 有年牟礼・山田遺跡 | 土師器 | 高坏 | 3 | | 赤穂市教育委員会 |
| | 35 | 有年牟礼・山田遺跡 | 土師器 | 甕 | 10 | 酒津式<br>畿内系 | 赤穂市教育委員会 |
| | 36 | 有年牟礼・山田遺跡 | 土師器 | 壺 | 3 | | 赤穂市教育委員会 |
| | 37 | 有年牟礼・山田遺跡 | 土師器 | 器台 | 4 | | 赤穂市教育委員会 |
| | 38 | 有年牟礼・山田遺跡 | 土師器 | 大型装飾器台 | 1 | 完形復元 | 赤穂市教育委員会 |
| | 39 | 有年牟礼・山田遺跡 | 土師器 | 大型壺 | 1 | ほぼ完存 | 赤穂市教育委員会 |
| | 40 | 有年牟礼・山田遺跡 | 土師器 | 装飾壺 | 1 | ほぼ完存 | 赤穂市教育委員会 |
| | 41 | 有年牟礼・井田遺跡 | 土師器 | 小型丸底壺 | 10 | | 赤穂市教育委員会 |
| | 42 | 有年牟礼・井田遺跡 | 弥生土器 | 把手付鉢 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010191 |
| | 44 | 有年牟礼・井田遺跡 | 土師器 | 小型器台 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010317 |
| | 45 | 有年牟礼・井田遺跡 | 土師器 | 把手付広片口鉢 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010317 |
| | 46 | 有年牟礼・井田遺跡 | 石製勾玉 | | 1 | 完存 | 兵庫県立考古博物館 2010317 |
| | 47 | 有年牟礼・井田遺跡 | 土師器 | 鼓形器台 | 2 | | 兵庫県立考古博物館 2010317 |
| | 48 | 有年牟礼・井田遺跡 | 土師器 | 山陰系甕 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010317 |
| | 50 | 有年牟礼・井田遺跡 | 土師器 | 山陰系鉢 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010317 |
| | 51 | 有年牟礼・井田遺跡 | 土師器 | 吉備産甕 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010317 |
| | 52 | 有年牟礼・井田遺跡 | 土師器 | 布留甕 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010317 |
| 蟻無山古墳の時代ー古墳時代前期～中期ー | 53 | 蟻無山古墳群 | | | 1 | | 当館 |
| | 54 | 蟻無山古墳群 | 初期須恵器 | 器台 | 4 | | 当館 |
| | 55 | 蟻無山古墳群 | 円筒埴輪 | | 4 | うち１点は<br>船の線刻 | 当館 |
| | 56 | 蟻無山古墳群 | 形象埴輪 | 船 | 2 | スイジガイ<br>の線刻 | 当館 |
| | 57 | 蟻無山古墳群 | 形象埴輪 | 動物 | 1 | | 当館 |
| | 58 | 蟻無山古墳群 | 形象埴輪 | 家 | 2 | | 当館 |
| | 59 | 蟻無山古墳群 | 形象埴輪 | 楯 | 1 | | 当館 |

| テーマ | 番号 | 遺　跡　名 | 種　類 | 器　種 | 点数 | 備　考 | 所　蔵　機　関 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 横穴式石室の時代ー古墳時代後期ー | 60 | 有年牟礼・井田遺跡 | 土師器 | 甕 | 3 | 竪穴建物跡一括 | 赤穂市教育委員会 |
| | 61 | 有年原・クルミ遺跡 | 土師器 | 甕 | 1 | 完存 | 赤穂市教育委員会 |
| | 62 | 塚山古墳群 | 須恵器 | 長頸壺 | 1 | | 当館 |
| | 63 | 有年牟礼・井田遺跡 | 土製品 | 鞴羽口 | 1 | 未使用、完存 | 兵庫県立考古博物館 2010191 |
| | 64 | 有年原・クルミ遺跡 | 土師器 | 壺 | 1 | 線刻土器 | 兵庫県立考古博物館 2009147 |
| | 65 | 有年牟礼・井田遺跡 | 須恵器 | 坏蓋 | 4 | | 兵庫県立考古博物館 2010191 |
| | 66 | 有年牟礼・井田遺跡 | 須恵器 | 坏身 | 6 | | 兵庫県立考古博物館 2010191 |
| | 69 | 有年牟礼・井田遺跡 | 須恵器 | 高杯 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010191 |
| | 70 | 有年牟礼・井田遺跡 | 須恵器 | 高杯 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010191 |
| | 77 | 有年牟礼・井田遺跡 | 須恵器 | 坏蓋 | 2 | | 兵庫県立考古博物館 2010247 |
| | 79 | 有年牟礼・井田遺跡 | 須恵器 | 坏身 | 2 | | 兵庫県立考古博物館 2010247 |
| | 80 | 有年牟礼・井田遺跡 | 須恵器 | 高杯 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2010247 |
| 古代の集落ー飛鳥～奈良時代ー | 82 | 有年原・クルミ遺跡 | 須恵器 | 坏身 | 1 | 墨書「奥津家」 | 赤穂市教育委員会 |
| | 83 | 有年原・クルミ遺跡 | 須恵器 | 坏蓋 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2009147 |
| | 85 | 有年原・クルミ遺跡 | 須恵器 | 坏蓋 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2009147 |
| | 86 | 有年原・クルミ遺跡 | 須恵器 | 坏身 | 2 | 内面黒色 | 兵庫県立考古博物館 2009147 |
| | 87 | 有年原・クルミ遺跡 | 土師器 | 甕 | 1 | | 兵庫県立考古博物館 2009147 |
| | 88 | 有年原・クルミ遺跡 | 土師器 | 高杯 | 2 | | 兵庫県立考古博物館 2009147 |
| 水田化と大避神社ー中世～近代ー | 90 | 有年原・クルミ遺跡 | 磁器 | | 41 | 大避神社跡地 | 赤穂市教育委員会 |
| | 91 | 有年原・クルミ遺跡 | 陶器 | | 1 | 大避神社跡地 | 赤穂市教育委員会 |
| | 92 | 有年原・クルミ遺跡 | ガラス製品 | | 2 | 大避神社跡地 | 赤穂市教育委員会 |

**小企画展『2012　新発見発掘調査速報展』**

| 番号 | 遺　跡　名 | 種　類 | 器種 | 点数 | 備　考 | 所　蔵　機　関 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 有年原・クルミ遺跡 | 須恵器 | 坏身 | 1 | 「枚□」墨書 | 赤穂市教育委員会 |
| 2 | 赤穂城下町跡 | 白磁 | 碗 | 1 | 17 世紀初頭の鉄砲屋敷関連遺物 | 赤穂市教育委員会 |
| 3 | 赤穂城下町跡 | 肥前磁器 | 碗 | 1 | 17 世紀初頭の鉄砲屋敷関連遺物 | 赤穂市教育委員会 |
| 4 | 赤穂城下町跡 | 唐津陶器 | 皿 | 3 | 17 世紀初頭の鉄砲屋敷関連遺物 | 赤穂市教育委員会 |
| 5 | 赤穂城下町跡 | 瀬戸陶器 | 碗 | 1 | 17 世紀初頭の鉄砲屋敷関連遺物 | 赤穂市教育委員会 |
| 6 | 赤穂城下町跡 | ガラス滓 | ― | 12 | 17 世紀初頭の鉄砲屋敷関連遺物 | 赤穂市教育委員会 |
| 7 | 赤穂城下町跡 | 銅滓 | ― | 6 | 17 世紀初頭の鉄砲屋敷関連遺物 | 赤穂市教育委員会 |
| 8 | 赤穂城下町跡 | 鉄製品 | 不明 | 3 | 17 世紀初頭の鉄砲屋敷関連遺物 | 赤穂市教育委員会 |
| 9 | 赤穂城下町跡 | 鉄滓 | ― | 3 | 17 世紀初頭の鉄砲屋敷関連遺物 | 赤穂市教育委員会 |
| 10 | 赤穂城下町跡 | 木炭 | ― | 約 40 | 17 世紀初頭の鉄砲屋敷関連遺物 | 赤穂市教育委員会 |
| 11 | 赤穂城下町跡 | 炉壁 | ― | 5 | 17 世紀初頭の鉄砲屋敷関連遺物 | 赤穂市教育委員会 |
| 12 | 赤穂城下町跡 | 木製品 | 木簡 | 23 | 18 世紀後半土坑一括 | 赤穂市教育委員会 |
| 13 | 赤穂城下町跡 | 木製品 | 箸ほか | 15 | 18 世紀後半土坑一括 | 赤穂市教育委員会 |

## 特集展示『ミニチュア創作の世界ー幼なじみの作品展』

| 番号 | 資　料　名 | 点数 | 所蔵者 |
|---|---|---|---|
| 1 | 箕 | 1 | 上山長一 |
| 2 | 唐箕 | 1 | 上山長一 |
| 3 | 万石 | 1 | 上山長一 |
| 4 | まんが（砕土機） | 1 | 上山長一 |
| 5 | まんが（五月まんが） | 1 | 上山長一 |
| 6 | 牛鞍 | 1 | 上山長一 |
| 7 | うしんが（牛犂鍬） | 1 | 上山長一 |
| 8 | 鍬 | 1 | 上山長一 |
| 9 | ばいぶり | 1 | 上山長一 |
| 10 | 万力（千歯）米用 | 1 | 上山長一 |
| 11 | 万力（千歯）麦用 | 1 | 上山長一 |
| 12 | じゃぐるま（水車） | 1 | 上山長一 |
| 13 | 台篩 | 1 | 上山長一 |
| 14 | 小麦たたき | 1 | 上山長一 |
| 15 | とうす（唐臼） | 1 | 上山長一 |
| 16 | からんす | 1 | 上山長一 |
| 17 | むしろばた | 1 | 上山長一 |
| 18 | 俵あみ | 1 | 上山長一 |
| 19 | 車力 | 1 | 上山長一 |
| 20 | はねつるべ | 1 | 上山長一 |
| 21 | 田すき（牛鞍・うしんが） | 1 | 谷本昌己 |
| 22 | 米の脱穀（万力） | 1 | 谷本昌己 |
| 23 | 麦の脱穀（万力） | 1 | 谷本昌己 |
| 24 | 足踏脱穀 | 1 | 谷本昌己 |
| 25 | 脱穀調整（唐箕） | 1 | 谷本昌己 |
| 26 | 俵あみ | 1 | 谷本昌己 |
| 27 | 荷運び（大八車） | 1 | 谷本昌己 |
| 28 | 薪運び（背負子） | 1 | 谷本昌己 |
| 29 | 万石（万穀） | 1 | 谷本昌己 |
| 30 | むしろばた | 1 | 谷本昌己 |
| 31 | 俵あみ | 1 | 谷本昌己 |
| 32 | まんが（砕土機） | 1 | 谷本昌己 |
| 33 | まんが（田植えまんが） | 1 | 谷本昌己 |
| 34 | はったんこ（除草機） | 1 | 谷本昌己 |
| 35 | ずんたて（麦のすじまき） | 1 | 谷本昌己 |
| 36 | ばいぶり | 1 | 谷本昌己 |
| 37 | 台篩 | 1 | 谷本昌己 |
| 38 | 小麦たたき | 1 | 谷本昌己 |
| 39 | からんず | 1 | 谷本昌己 |

| 番号 | 資　料　名 | 点数 | 所蔵者 |
|---|---|---|---|
| 40 | 餅作り用具 | 1 | 谷本昌己 |
| 41 | まぜぼう（むしろ干し用） | 1 | 谷本昌己 |
| 42 | 播州屋台 | 1 | 谷本昌己 |
| 43 | 播州屋台 | 1 | 上山長一 |
| 44 | 布団屋台 | 1 | 上山長一 |
| 45 | ヒデ | 1 | 上山長一 |
| 46 | 五重塔 | 1 | 谷本昌己 |
| 47 | 五重塔 | 1 | 上山長一 |
| 48 | 赤穂城製作図面 | 1 式 | 上山・谷本 |
| 49 | 石垣加工片 | 1 式 | 上山・谷本 |
| 50 | 落棟 | 1 | 谷本昌己 |
| 51 | 落棟 | 1 | 上山長一 |
| 52 | 赤穂城 | 1 | 谷本昌己 |
| 53 | 赤穂城 | 1 | 上山長一 |
| 54 | 赤穂城 | 1 | 谷本昌己 |
| 55 | 赤穂城 | 1 | 上山長一 |
| 56 | 赤穂城 | 1 | 上山長一 |
| 57 | 合掌造り | 1 | 谷本昌己 |
| 58 | 合掌造り | 1 | 上山長一 |
| 59 | 合掌造り | 1 | 谷本昌己 |
| 60 | 合掌造り | 1 | 上山長一 |
| 61 | まがりや | 1 | 上山長一 |
| 62 | サンダーグラインダー | 1 式 | 上山・谷本 |
| 63 | 播州屋台 | 1 | 谷本昌己 |
| 64 | 播州屋台 | 1 | 上山長一 |
| 65 | 台車 | 1 | 谷本昌己 |
| 66 | 台車 | 1 | 上山長一 |
| 67 | 台車 | 1 | 上山長一 |
| 68 | 火消し | 1 | 谷本昌己 |
| 69 | 火消し | 1 | 上山長一 |
| 70 | 三重塔 | 1 | 谷本昌己 |
| 71 | 三重塔 | 1 | 上山長一 |
| 72 | まがりや | 1 | 谷本昌己 |
| 73 | 自在鉤 | 1 | 谷本昌己 |
| 74 | 万力・千歯（稲こぎ用） | 1 | 当館 |
| 75 | 田植えまんが（しろかき用） | 1 | 当館 |
| 76 | まんが（砕土機）　大正３年 | 1 | 当館 |

## 企画展示『鋳型から銅鐸を考える－上高野銅鐸鋳型県指定 20 年記念－』

| 番号 | 名　　称 | 遺　跡　名 | 文献番号 | 遺物番号 | 所蔵機関・所蔵者 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 銅鐸鋳型 | 上高野遺跡 | 1 | 図版 78 | 赤穂市立歴史博物館 | 県指定文化財 |
| 2 | 復元銅鐸鋳型 | 上高野遺跡 | 1 | 図版 79 | 赤穂市立歴史博物館 | 復元 |
| 3 | | 上高野遺跡 | 1 | 図版 80 | 赤穂市立歴史博物館 | |
| 4 | 銅鐸片 | 岩野辺穴尾遺跡 | 1 | 図版 46 | 村上鉱揚 | |
| 5 | 青銅塊 | 北山遺跡 | 2 | 250 | たつの市教育委員会 | |
| 6 | 鋸歯文土器 | 北山遺跡 | 2 | 80 | たつの市教育委員会 | |
| 7 | 鋸歯文・斜格子文土器 | 北山遺跡 | 2 | 84 | たつの市教育委員会 | |
| 8 | 銅鐸形土製品 | 尾崎遺跡Ⅱ | 4 | 6 | たつの市教育委員会 | |
| 9 | 絵画土器 (一括) | 養久山・前地遺跡 | 5 | 86-1 ～ 7 | たつの市教育委員会 | |
| 10 | 鋸歯文土器 | 新宮宮内遺跡 | 6 | Y 294 | たつの市教育委員会 | |
| 11 | 綾杉文土器 | 新宮宮内遺跡 | 6 | Y 454 | たつの市教育委員会 | |
| 12 | 瓢箪型土器 | 新宮宮内遺跡 | 6 | Y 495 | たつの市教育委員会 | |
| 13 | 絵画土器「鳥」 | 船坂・土井ノ内遺跡 | 7 | ― | 上郡町教育委員会 | |
| 14 | 銅鐸形土製品 | 田井遺跡 | 1 | | 宍粟市教育委員会 | |
| 15 | 鋳型 | 名古山遺跡 | 8 | 図 14 | 姫路市埋蔵文化財センター | |
| 16 | 鋳型 | 今宿丁田遺跡 | 8 | 図 91 | 姫路市埋蔵文化財センター | |
| 17 | 銅鐸片 | 玉手遺跡 | 8 | 図 148 | 姫路市埋蔵文化財センター | |
| 18 | 土製鋳型外枠 | 玉手遺跡 | 8 | 図 148 | 姫路市埋蔵文化財センター | |
| 19 | 吹子の羽口 | 玉手遺跡 | 8 | 図 148 | 姫路市埋蔵文化財センター | |
| 20 | 砥石 | 玉手遺跡 | 8 | 図 148 | 姫路市埋蔵文化財センター | |
| 21 | 銅鐸鋳型 1 号 | 東奈良遺跡 | 1 | 図 67 | (財) 辰馬考古資料館 | レプリカ |
| 22 | 復原銅鐸 | 神種遺跡 | 9 | 図版 2 | 兵庫県立考古博物館 | 復原 |
| 23 | 2 号銅鐸 | 野々間遺跡 | 9 | 図版 25 | 兵庫県立考古博物館 | レプリカ |
| 24 | 1 号銅鐸 | 中山遺跡 | 9 | 図版 6 | 兵庫県立考古博物館 | レプリカ |
| 25 | (伝) 淡路国出土銅鐸 | 本興寺 | 9 | 図版 34 | 兵庫県立考古博物館 | レプリカ |
| 26 | 2 号銅鐸 | 気比遺跡 | 9 | 図版 30 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 27 | 鋳型 | 今宿丁田遺跡 | ― | | 兵庫県立考古博物館 | 復原 |
| 28 | 小銅鐸鋳型 | 平方遺跡 | 10 | 701 | 兵庫県立考古博物館 | レプリカ |
| 29 | 小銅鐸鋳型 | | 10 | 702 | 兵庫県立考古博物館 | レプリカ |
| 30 | 中子 | | 10 | 703 | 兵庫県立考古博物館 | レプリカ |
| 31 | 石製舌 | | 10 | 801 | 兵庫県立考古博物館 | レプリカ |
| 32 | 絵画土器「龍」 | 竹万宮ノ前遺跡 | 11 | 169 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 33 | 銅鐸形土製品 | 玉津田中遺跡 | 12 | 1158 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 34 | 銅鐸形土製品 | 玉津田中遺跡 | 13 | 7159 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 35 | 絵画土器「鹿」 | 玉津田中遺跡 | 13 | 7160 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 36 | 絵画土器「鹿」 | 玉津田中遺跡 | 13 | 7163 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 37 | 土器（鋸歯文施文） | 玉津田中遺跡 | 13 | 7506 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 38 | 土器（綾杉文施文） | 玉津田中遺跡 | 13 | 7984 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 39 | 土器（鋸歯文・綾杉文施文） | 玉津田中遺跡 | 13 | 8017 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 40 | 土器（鋸歯文・綾杉文施文） | 玉津田中遺跡 | 13 | 8026 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 41 | 土器（鋸歯文施文） | 玉津田中遺跡 | 13 | 8027 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 42 | 土器（流水文施文） | 玉津田中遺跡 | 13 | 6130 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 43 | 土器（流水文施文） | 玉津田中遺跡 | 13 | 6885 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 44 | 土器（流水文施文） | 玉津田中遺跡 | 13 | 6980 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 45 | 土器（流水文施文） | 玉津田中遺跡 | 13 | 6966 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 46 | 絵画土器「鹿」 | 大垣内遺跡 | 14 | 331 | 兵庫県立考古博物館 | |

| 番号 | 名　　称 | 遺　跡　名 | 文献番号 | 遺物番号 | 所蔵機関・所蔵者 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 47 | 絵画土器「鹿」 | 貝谷遺跡 | 15 | 18 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 48 | 蕨手文土器 | 奈カリ与遺跡 | 16 | 406 | 兵庫県立考古博物館 | |
| 49 | 小銅鐸 | 細川町高篠出土 | 1 | 17 | 三木市教育委員会 | 市指定文化財 |

**文献一覧**（上記表の文献番号と一致）


1　赤穂市立歴史博物館 1994『平成 4 年度特別展銅鐸』
2　龍野市教育委員会 2001『1988・1989 年度県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』龍野市文化財調査報告 23
4　龍野市教育委員会 1995『市道北山長尾線新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』龍野市文化財調査報告 14
5　龍野市教育委員会 1995『揖龍広域ごみ処理施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』龍野市文化財調査報告 15
6　新宮町教育委員会 2005『史跡公園化構想に基づく発掘調査ー第 1 分冊』新宮町文化財調査報告 30
7　上郡町教育委員会 1997.3「発掘されたかみごおり」- 平成元年～ 8 年度発掘調査の成果より
8　姫路市 2010『姫路市史第七巻』下　考古資料編
9　兵庫県 1992『兵庫県史』考古資料編
10　兵庫県教育委員会 1993『（三田市）北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ - 図版編』兵庫県文化財調査報告書第 125 冊
11　兵庫県教育委員会 2009『（主）姫路上郡線住宅宅地関連道路整備事業に伴う発掘調査報告書ー兵庫県文化財調査報告第 357 冊
12　兵庫県教育委員会 1994『徳政・二ノ郷・黒岡地区の調査』- 田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書　兵庫県文化財調査報告第 135-1 冊 - 第 1 分冊
13　兵庫県教育委員会 1996『竹添地区・池ノ内地区の調査』ー田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書ー兵庫県文化財調査報告第 135-5 冊ー第 5 分冊（図版編）
14　兵庫県教育委員会 1991『加古川河川改修に）伴う埋蔵文化財調査報告書』－兵庫県文化財調査報告第 98 冊
15　兵庫県教育委員会 2002『山陽自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸＸⅤⅢ
16　財団法人兵庫県文化協会 1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ－図版編』兵庫県文化財調査報告書第 16 冊


**出前展示『平井正年生誕 130 年展－里帰り・坂越幼稚園天井画を中心にして』**

| 番号 | 分　　類 | 点　数 | 寸　　法 | 図録 No | 所蔵機関・所蔵者 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 天井画「花鳥画」 | 1 | 204.0 × 364.0　（全 44 面）<br>1 辺　37.5 × 37.5 | P40 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 2 | 絵馬「韓信股くぐり図」 | 1 | 108.8 × 108.9 | ― | 大避神社 |
| 3 | 屏風「紅葉群鳥図」 | 2 曲 1 隻 | 145.7 × 156.3 | 29 | 個人 |
| 4 | 刷毛 | 6 | （最大）　長 29.9　幅 11.8 | 7 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 5 | 画譜 | 2 | 8.5 × 5.7 | ― | 赤穂市立歴史博物館 |
| 6 | パレット（6 色） | 1 | 17.7 × 6．0 | ― | 赤穂市立歴史博物館 |
| 7 | 筆巻 | 1 | 30.0 × 48.0 | ― | 赤穂市立歴史博物館 |
| 8 | 筆洗（東山焼青磁） | 1 | 径 16.7　高 3.0 | 8 | 個人 |
| 9 | 短冊「雪松図」 | 1 | 36.2 × 7.6 | 37 | 個人 |
| 10 | 短冊「竹図」 | 1 | 36.3 × 6.1 | ― | 個人 |
| 11 | 短冊「へちま図」 | 1 | 36.3 × 6.1 | ― | 個人 |
| 12 | 書院天袋「蝶の図」<br>戸板絵「蝶の図」 | 2 | 93.0 × 31.0 | ― | 個人 |
| 13 | 掛軸「菊花双鶏図」 | 1 | 113.5 × 49.1 | 27 | 個人 |
| 14 | 掛軸「唐美人図」 | 1 | 123.0 × 49.5 | 42 | 個人 |
| 15 | 掛軸「瀑布図」 | 1 | 54.0 × 172.0 | 38 | 個人 |
| 16 | 掛軸「川蝉図」 | 1 | 172.0 × 30.5 | 26 | 個人 |
| 17 | 掛軸「簾に青楓図」 | 1 | 30.5 × 121.9 | 36 | 個人 |
| 18 | 掛軸「垂桜に雉図」 | 1 | 111.5 × 41.1 | 19 | 個人 |
| 19 | 掛軸「牡丹に雀図」 | 1 | 117.4 × 31.0 | 20 | 個人 |
| 20 | 掛軸「秋圃群鶏図」 | 1 | 132.2 × 61.9 | 21 | 個人 |

| 番号 | 分　　類 | 点　数 | 寸　　法 | 図録 No | 所蔵機関・所蔵者 |
|---|---|---|---|---|---|
| 21 | 掛軸「鶏と菜の花図」 | 1 | 193.0 × 37.0 | ― | 個人 |
| 22 | 掛軸「躑躅に雉図」 | 1 | 108.4 × 41.4 | 23 | 個人 |
| 23 | 掛軸「竹に水禽図」 | 1 | 111.3 × 41.3 | 24 | 個人 |
| 24 | 掛軸「老松図」 | 1 | 108.3 × 34.0 | 34 | 個人 |
| 25 | 掛軸「漁家干網図」 | 1 | 112.7 × 23.6 | 45 | 個人 |
| 26 | 粉本「鷹・啄木鳥図」 | 1 | 27.4 × 38.0 | 48 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 27 | 粉本「薔薇に小禽図」 | 1 | 83.7 × 40.7 | 53 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 28 | 粉本「槿に小禽図」 | 1 | 28.1 × 75.5 | 54 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 29 | 粉本「白鷺図」 | 1 | 27.2 × 39.5 | 62 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 30 | 粉本「薔薇に双鶏図」 | 1 | 109.0 × 39.5 | 63 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 31 | 粉本「恵比寿図」 | 1 | 81.8 × 32.5 | 65 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 32 | 粉本「金閣図」 | 1 | 100.6 × 46.6 | 96 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 33 | 粉本「牡丹に孔雀図」 | 1 | 132.4 × 74.8 | 101 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 34 | 粉本「雛図」 | 1 | 33.2 × 24.6 | 103 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 35 | 粉本「小禽図」 | 1 | 27.3 × 37.8 | 104 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 36 | 粉本「小禽図」 | 1 | 38.0 × 27.2 | 105 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 37 | 粉本「鶉図」 | 1 | 27.4 × 37.8 | 106 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 38 | 粉本「鴛鴦図」 | 1 | 27.2 × 38.0 | 107 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 39 | 粉本「鳩図」 | 1 | 27.4 × 37.6 | 108 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 40 | 粉本「鳩図」 | 1 | 27.3 × 37.9 | 109 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 41 | 粉本「鳩図」 | 1 | 27.3 × 37.9 | 110 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 42 | 粉本「水禽・川蝉図」 | 1 | 27.2 × 37.9 | 111 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 43 | 粉本「鸚哥・鸚鵡図」 | 1 | 27.4 × 37.7 | 112 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 44 | 粉本「鸚哥・砂糖鳥図」 | 1 | 27.4 × 37・7 | 113 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 45 | 粉本「島鷗図」 | 1 | 27.2 × 38.0 | 114 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 46 | 粉本「雉子図」 | 1 | 37.9 × 27.2 | 115 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 47 | 粉本「鳩・金鶏銀鶏図」 | 1 | 38.0 × 27.3 | 116 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 48 | 粉本「鴨・双鶏図」 | 1 | 27.2 × 38.0 | 117 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 49 | 粉本「鳥図（鴨・小燕・叭々鳥）」 | 1 | 27.2 × 38.0 | 118 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 50 | 粉本「鳥図（百舌・コンヨウキン）」 | 1 | 27.2 × 37.9 | 119 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 51 | 粉本「鳥図（山鳥・サンゴチョウ）」 | 1 | 27.2 × 37.9 | 120 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 52 | 粉本「鳥図（椋鳥・綬帯鳥・仏法僧）」 | 1 | 27.2 × 38.0 | 121 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 53 | 粉本「鍾馗図」 | 1 | 38.0 × 27.2 | 122 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 54 | 粉本「群雁図」 | 1 | 27.3 × 37.8 | 124 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 55 | 粉本「群雁図」 | 1 | 27.4 × 37.8 | 125 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 56 | 粉本「立雛図」 | 1 | 45.8 × 27.2 | 粉 120 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 57 | 粉本「福禄寿図」 | 1 | 39.8 × 27.9 | 粉 219 | 赤穂市立歴史博物館 |
| 58 | 天井画写真 | 1 | | ― | 個人 |
| 59 | 平井正年宅跡写真 | 1 | | ― | 個人 |

※「図録 No」は、赤穂市立歴史博物館 1994『知られざる夭折の画家　平井正年』展図録掲載番号を指している。

# 4.　展　示　の　記　録

## 1　平成 23 年度特別展『松岡秀夫と有年考古館の歩み―地域とともに―』

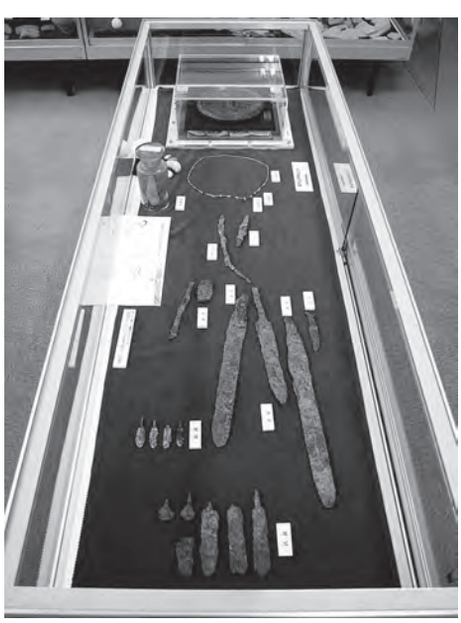
（0）　西野山３号墳出土遺物

有年考古館を全国に知らしめたのは、上郡町西野山３号墳の発掘調査とその報告書によるものでした。西野山３号墳は、千種川流域で唯一、「卑弥呼の鏡」と言われる三角縁神獣鏡が見つかった古墳です。調査は、名古屋大学の楢崎彰一教授や大阪市立美術館の上田宏範氏などが携わった本格的な発掘調査で、兵庫県では戦後の学術調査第１号となるものでした。

西野山３号墳は、赤穂郡上郡町与井新（旧赤穂郡上郡村高田大字與井新）にある西野山古墳群中の１つで、全長 32 mの前方後方墳と言われています。発掘調査の結果、後方部から粘土で保護された（舟形）木棺跡が見つかり、そこから鏡をはじめとした数々の副葬品が出土しました。出土品から、古墳時代前期（４世紀後半）とされています。

展示は、木棺内で見つかった出土状況を再現したもので、右側が北になっています。骨の一部が見つかりましたので、遺体がどのあたりに埋葬されていたのかもわかりました。木棺の最も北側には、漆塗りの短甲と思われる繊維製品が置かれていましたが、現在は朽ち果ててしまっています。頭部より北側には三角縁神獣鏡１面とガラス製勾玉、碧玉製管玉、水晶製切子玉・丸玉が出土し、足元あたりに刀子（一部骨片付着、布巻き）が、その南側には鉄剣、鉄槍、鉄鏃や銅鏃などがありました。

勾玉、管玉といった玉類は、ばらばらに見つかりましたが、もともとはネックレスであったと考えられています。また足元付近にあった刀子類と、より南側にあった鉄剣、鉄槍、鉄鏃類は、切っ先の方向が逆を向いていることから、刀子類は身に着けていたもので、鉄剣などは副葬品として供えられた可能性が高いでしょう。西播磨を代表する古墳として、大変貴重なものです。



西野山３号墳出土鏡（左）と出土状況を復元した展示状況（右）

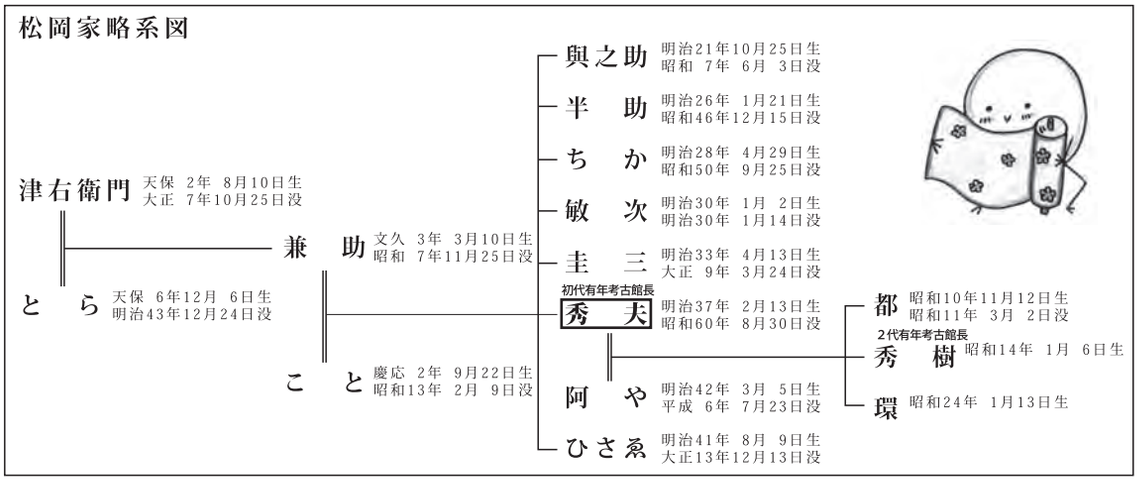
（1）　松岡秀夫の生い立ち・眼科医としての松岡秀夫

松岡秀夫は、明治 37 年（1904）2 月 13 日、有年楢原にて父・兼助、母・ことの四男として生まれました。実家は祖父・津右衛門が紺屋（染物屋）を営んでおり、小さい頃は「紺屋の子」と呼ばれていました。

有年村立原尋常小学校を卒業後は、私立同志社中学校に入学、兵庫県立龍野中学校に編入したのち、金沢市にあった第四高等学校（全国を 5 つの学区に分けた官立の高等学校の一つ）理甲に入学しました。大正 12 年（1923）京都帝国大学医学部に入学、陸上部に所属していました。卒業後は、京都帝国大学医学部助手、島根県立松江病院眼科部長を経て、京都帝国大学大学院に入学。同医学部講師を勤めたのち、三重県津市立病院眼科部長に就任しました。しかし、就任後わずか 4 か月で、赤穂市有年楢原の松岡医院長であった兄の與之助が死去、代わって松岡医院を継ぐため、赤穂に帰ってきたのです。

明治 42 年 1 月 6 日の松岡家家族写真

大正 5 年（左）・同 8 年（右）の松岡秀夫




松岡家系図

兄、與之助は地域の名士であり、様々な文化事業を行っていました。なかでも『郷土研究』は、国家掲揚の手段にされていたとは言え、「郷土を知れ !! 郷土を誇れ !! 郷土を愛せ !!」というスローガンのもと、コミュニティの維持形成に大いに役立っていました。松岡医院を継いだ秀夫は、こうした地域の盛り上がりを、再び活性化させることを考えていきます。

大学時代の松岡秀夫

(2)　松岡秀夫の社会事業と埋蔵文化財保護への一歩

兄、與之助のこれまでの活動により、文化活動の地盤は、すでにできていました。そこで、松岡秀夫は昭和８年に蓼風社を結成、本部を松岡医院内に置きます。蓼風社は、短歌や俳句を詠むサークルでしたが、その後、有年村内の多くの文化活動を行う団体を吸収して有年文化協会を結成、会長となりました。その活動内容は「なんでもやった」と言われるほど多彩なものでした。

**有年文化協会の昭和 16 年度事業**

会員数　205 名

農事講演会、衛生講演会、時局講演会、中南米事情講演会、座談会、蘭印事情を聴く会、大政翼賛会文化部員を囲む座談会、一夜講習会、出征軍人家庭カメラ訪問、慰問袋作製、新英霊初盆慰問、遺家族招待慰安映画大会、現役入営者壮行会、大詔奉戴記念武運長久祈願祭、映画会、演奏会、芸能大会、紙芝居、活映機の活用、郷土史研究会、史蹟標柱建立、高齢者調査、台所改善調査、ラジオ聴取状況調査、農繁託児所解説及び既設のものへ応援、剣道大会、青年角力大会・体育会・ラジオ体操会援助、月報発行、短歌・俳句会、吟行会、図書館経営、開墾作業奉仕　(『兵庫縣に於ける文化運動』第一輯より)

ちなみに、横山の開拓のため集められていた囚人を対象に幻燈機映写を行い、その御礼として山羊を 1 頭もらったことがあります。この山羊を育てるために山羊小屋を建てましたが、昭和 25 年にこの建物を改修して、有年考古館の建物としたことは有名です。このようにして、活発な文化活動を行ってきた松岡でしたが、終戦を迎えると、大政翼賛会の下部組織であった有年文化協会は廃止に追い込まれ、また松岡自身が大政翼賛会兵庫支部の理事を兼ねていたことから、昭和 46 年 11 月 8 日に発表された地方公職者に対する覚書の適用拡大を受け、公職

松岡病院での記念撮影

追放されてしまったのです。

その後、周辺地域の文化協会が再結成されるのに対して、有年文化協会の文化活動を継承する動きがまったくないことを悲しみ、浅く広く活動を行ったことが、後にその成果を残せなかった原因と考えていました。深く、一つの物事に取り掛かろうと思い始めたのがこの時期でした。

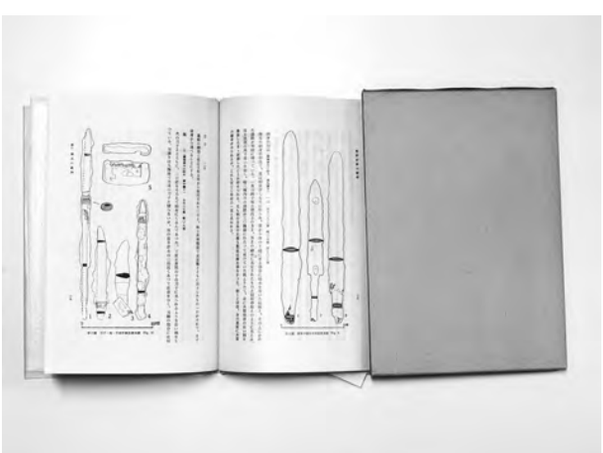
蟻無山古墳の標柱設置

松岡は、第二次世界大戦中、食糧増産のために上郡町の釜島字柏原で、持ち山の山麓を開墾していたときに偶然弥生土器を発見し、考古学に関心をもったようです。有年文化協会の活動の一環として蟻無山古墳に標柱を立てていることから、戦中においても一定の認識があったことがわかります。しかし決定的となったのは、昭和 22 年、有年村立原小学校の裏山で行われていた砂防工事で土器を発見したことで、このとき埋蔵文化財の保存を決意したと言います。松岡秀夫は 43 歳でした。

松岡は、さっそく砂防工事の作業員に「土器等が出てきたら捨てないで集めておくように」と依頼するなど、地域の考古資料収集に走り出します。そして、考古学者としての松岡秀夫が誕生したのは、昭和 23 年、高田村與井（現・上郡町）での西山瓦窯での初めての発掘調査でした。こうした精力的な活動を見て資料を寄贈する人々が現れはじめ、収蔵資料の一般公開を考えるようになりました。

（3）　有年考古館の開設

そこで松岡は、昭和 25 年 4 月、有年考古館設立準備委員会を結成、代表者となります。同 6 月には『有年考古館設立趣意書』を刊行、有年考古館の位置づけを明確にしました。有年考古館は、昭和 25 年 7 月に着工して 9 月に完成しましたが、山羊小屋を改修した本建物の面積はわずか 44㎡と、本当に小さな建物でした。これを評して、文部省（現在の文部科学省）の技官であった斎藤忠氏は「日本一小さな考古館」と揶揄しましたが、松岡はこれを逆に誇りとし、キャッチフレーズとしました。有年考古館はこうして始まったのです。建物は小さくても志は大きなもの。昭和 25 年 10 月 8 日に行われた有年考古館の開館式には、梅原末治京都大学教授を招いて記念講演会を行いました。



発掘調査報告書『兵庫県赤穂郡西野山第三號墳』

ちょうどそのころ、上郡村の高田地区で大規模な造成事業がはじまり、砂防工事で古墳の一部が破壊されるという事件が起きました。そこで有年考古館は、西野山 3 号墳の発掘調査を開始し、多大な成果を収め

ることができました。この調査は、正式な手続きをもって行った学術調査としては兵庫県で戦後第1号のものでした。200部刊行されたこの報告書は、報告書の「序」を記した梅原末治氏により配布先が選定され、日本全国の著名な学者に配布されました。ここに、有年考古館の名が全国に知れ渡ったのです。なお、昭和26年4月27日には、兵庫県より財団法人の認可を受け、松岡は晴れて財団法人有年考古館初代館長となりました。

（4） 赤穂市での保存・調査活動（1）

赤穂市の歴史を語るうえで欠かせない『赤穂市史』が刊行された当時、市内の先史時代を物語る考古資料のほとんどは、松岡が自ら調査・収集し、有年考古館に収蔵してきた品々でした。つまり、松岡秀夫が赤穂市の先史時代の歴史を残した、といっても過言ではありません。

例えば、赤穂市立原小学校の下に眠る「原小学校庭遺跡」。後の赤穂市教育委員会や兵庫県教育委員会の発掘調査成果につながるような、大変珍しい須恵質の土馬や円面硯、土製竈などが見つかりました。赤穂市の弥生時代を語るうえで欠かせないのが、上高野で松岡が発見した石製銅鐸鋳型です。もともと住民の手によって「お地蔵さん」として祀られていたものを、調査の結果、銅鐸鋳型片と認定したもので、当時は全国で3例目の石製鋳型の発見となりました。

松岡は、埋蔵文化財資料のみならず古文献についても精通しており、荘園や地名、代官研究などを行っています。真殿村検地帳（赤穂市指定文化財）などは、処分される直前に保存し、谷中進氏と調査を実施しました。

昭和44年には、有年楢原新田、有年横尾、有年原、そして有年牟礼の全戸400戸中、約100名を会員とした「有年の史蹟を守る会」を発足させ、開発事業によって破壊の危機にさらされ始めた文化財を、地域ぐるみで守る体制を整えています。このような活動の結果、現在の有年の住民にとっても、文化財は身近なものに感じておられるようです。さらに松岡は、赤穂歴史研究会の会長も務めており、赤穂市文化財保護条例の制定や赤穂市史の編纂、赤穂市立歴史資料館（現在の赤穂市立歴史博物館）の建設、日本専売公社赤穂支局旧庁舎（現在

上高野出土銅鐸鋳型

有年の史蹟を守る会結成大会

木虎谷古墳群の看板設置

自宅での講義

の赤穂市立民俗資料館／兵庫県指定文化財）の保存要望をするなど、赤穂市の文化財保護行政にも多くの提言をし、実現にこぎつけています。

（5） 赤穂市での保存・調査活動（２）

当時、遺跡の調査を行う際には、調査団を組織するのが常でした。松岡も、赤穂市では赤穂市埋蔵文化財調査会を結成し、数々の調査を手掛けています。例えば、周世入相遺跡の発掘調査時の調査員は、河原隆彦（東洋大附属姫路高校教諭）、松岡秀樹（兵庫県播磨高校教諭）、谷崎良晴（神戸野田高校教諭）、石塚太喜三（姫路市立朝日中学校教諭）、竹本敬市（明石市立望海中学校教諭）、松本保（赤穂市立赤穂東中学校教諭）、谷中進（赤穂市立坂越中学校教諭）、福田昭宏、前田靖幸、河部元一であり、近隣地域に勤務地をもつ学校教諭（いずれも当時）であったり、歴史に興味のある方々が参加していました。そのため、発掘調査は学校の休業期間中か土日を中心に行いました。堂山遺跡もその例で、古墳時代初頭の吉備からの搬入品や、古代塩田跡を示唆する土層見つかるなど、多大な成果を収めています。こうして得られた資料は、市教育委員会の所蔵となっていますが、調査自体は有年考古館館長の松岡秀夫を団長とした調査団によって行われたのでした。

松岡は『赤穂市史』編さん委員に委嘱され、その基礎資料充実のため、学術的な測量調査や発掘調査を数多く実施していきます。なかには、塚山６号墳や野田２号墳などのように、現在兵庫県指定文化財となっているものも含まれており、貴重な資料が有年考古館に収蔵されることになりました。周世宮裏山古墳群や塚山古墳群は、『赤穂市史』編さん時に分布調査が行われ、樹木が茂っているなか多くの古墳を発見し、分布図が作成されました。赤穂市教育委員会では、この成果を生かし、平成 21 年度にさらに充実した分布・測量調査を実施した結果、周世宮裏山古墳群ではその詳細な墳丘規模と位置関係が、塚山古墳群では古墳数が約 50 基にのぼることが判明するなど、大きな成果が得られました。

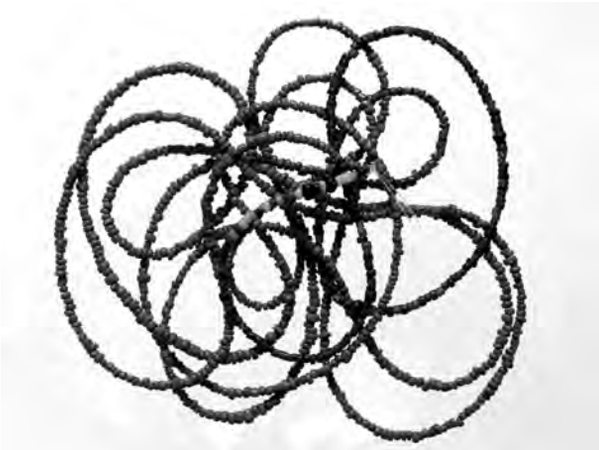
このように、文化財の調査記録とは蓄積され、次の世代に受け渡していくものであり、松岡はその基礎を築いたと言えます。

（6） 上郡町での保存・調査活動

有年考古館は、旧赤穂郡内の考古学調査研究の拠点となっており、周辺で見つかった考古遺物が持ち寄られることも多くありました。上郡町別名で見つかった銅剣もその一つで、昭和 33 年、山麓で採土作業中に発見され、有年考古館に寄贈されました。松岡は、出土した銅剣の調査報告として、有年考古館名義で昭和 44 年に『兵庫県上郡町別名出土の銅剣』を刊行し、周辺地域の銅剣との比較分析を行っています。

有年考古館が実施した西野山３号墳の発掘調査によって、当地域の重要性は高まりましたが、開発の波は休むことなく押し寄せていました。隣接する中山古墳群に大規模な造成計画が起こっており、昭和 45 年、その予定地で古墳４基が発見されたのです。

中山古墳群は、上郡町高田中山にある 11 基（当時）からなる古墳群でした。造成計画は



中山 12 号墳出土　ガラス玉

1,800 戸のベッドタウンをつくるものであり、松岡は、有年に続いて昭和 46 年に「上郡町の史蹟を守る会」を結成、町民に保存嘆願の署名運動を行いました。町人口約 16,000 人の 4 分の 1 にあたる約 4,000 人の署名が集まり、県と事業者が協議した結果、一部の古墳を保存することが決定したのです。このうち保存された中山 13 号墳は、のちの平成 18 ～ 20 年度の確認調査で、隣接していた 15 号墳とあわせ、千種川流域で最初期の前方後円墳であることが判明しました。また、発掘調査されたうち中山 12 号墳（当時 8 号墳）では、素環頭大刀や多量のガラス玉類などが出土し、当時の権力者の存在を物語る貴重な資料が得られています。この調査成果は有年考古館により『中山古墳群調査報告』として昭和 48 年に刊行公開されています。

なお上郡町高田から与井周辺は、古代の旧赤穂郡で最も栄えた場所であり、当時の赤穂郡衙（役所）や、赤穂郡唯一の白鳳寺院（飛鳥時代の寺院）があるほか、当時の主要道路である古代山陽道も、ここに整備されました。上郡町落地では、当時の駅家跡が発見され、現在、国の史跡に指定されています。

（7）　相生市などでの保存・調査活動

相生市は、早くから造成と宅地化が進み、相生市で初の古墳調査となった陸池の上古墳（調査後消滅）の調査報告を松岡が昭和 55 年度に刊行した時点で、すでにかなりの古墳が消滅していました。有年考古館にも収蔵資料のある、佐方裏山古墳や陸狐塚古墳のほか丸山古墳など、5 世紀代の古墳さえ次々に消滅していったことに、松岡は心を痛めていたのです。

丸山窯跡の発掘調査

その後は、相生市が実施する重要遺跡を保存するための記録調査委託を受け、入野窯跡や入野大谷 2 号墳、緑ヶ丘 2 号墳、大避山 1 号墳、大塚ハザ古墳、緑ヶ丘一の谷 2 号窯跡といった測量・発掘調査をする一方、農業基盤整備事業やほ場整備事業、土地区画整理事業などの開発に伴う全面発掘調査を行っています。そうした中で、丸山窯跡は確認調査の結果を受けて一部が保存され、測量調査を実施した大塚ハザ古墳や塚森古墳、那波野古墳や若狭野古墳も現在に残されており、実際に見学することができます。

有年考古館の活動は旧赤穂郡にとどまらず、昭和 51

年、揖保郡太子町黒岡神社裏の丘陵（現在の黒岡古墳群）が土砂崩れを起こした土から採集された土器が、上郡高校社会研究部員によって有年考古館に寄贈されるなどしています。このうち須恵器の子持ち器台は大変珍しいものです。

ほかにも、龍野市（現たつの市）、揖保郡御津町（同）、揖保川町（同）、揖保郡太子町、姫路市の資料が多く収蔵されているほか、大阪府内の古墳から出土した円筒埴輪、関東地方から東北、北海道にかけての縄文土器や石器など、広い地域から集められた資料もあります。これらは、旧赤穂郡の資料をより広い視野から見るという松岡秀夫の構想のもと、集められたものでした。これらの資料は、今後の資料整理により明らかにしていきたいと考えています。

（8）　研究者としての松岡秀夫

松岡が考古学を志したのは昭和 22 年、43 歳の時でした。次女の環さんが当時を振り返り「考古学に自分の生活を捧げた」と語るほどの努力家で、大きな功績を数多く残したのでした。西野山 3 号墳の調査報告書刊行で全国に知られるようになった松岡は、古文献の調査成果については『播磨』『兵庫史学』に、考古学の研究成果については『考古学研究』『古代学研究』といった学術雑誌に論文を投稿し始めました。

昭和 47（1972）年の有年考古館内部

昭和 52（1977）年改築前の有年考古館

昭和 52（1977）年改築直後の有年考古館

有年考古館名義の研究調査報告書は、『兵庫県赤穂郡西野山第三號墳』（1952 年）『赤穂郡原村百年史』（1969 年）『兵庫県上郡町別名出土の銅剣』（1969 年）『中山古墳群発掘調査報告』（1973 年）などを中心とした 8 冊、発掘調査報告書は 19 冊、執筆文章は「播磨千種川流域の古代遺跡について」（『考古学研究』1962 年）「赤穂市の縄文遺跡」（『古代学研究』1966 年）「赤穂市上高野発見の銅鐸鎔笵」（『考古学研究』1976 年）「赤穂地方出土の円筒埴輪とその編年」（『考古学研究』1979 年）など 100 本を超えています。

その原動力は「松岡ノート」とも言うべき、多数の調査研究ノートの存在です。資料の調査カード、考古資料の検討、論文の写し、古文献の解読、論文メモなど、あらゆる情報が書き込まれています。松岡は研究の途上で逝去したため、今後これらのノートを再整理することで、まだ未発見の資料や論文も出てくるかもしれません。今後は、赤穂市立有年考古館および赤穂市教育委員会職員による整理調査を行い、松岡のこうした卓越した高い見識を、さらに明らかにしていきます。

（9）　研究者たちとの書簡　数々の受賞

西野山３号墳の発掘調査報告書を刊行したことに加え、有年考古館では年１回、著名な考古学者を招いて講演会を開催しており、松岡の学術的な交友関係は広がっていきました。なかでも、開館時に記念講演会を依頼した梅原末治京都大学教授とは何度も書簡の往復があり、懇意にしていたようです。姫路城の修復工事落成式にも、松岡が行動を共にしました。そのほか、近畿圏の文献学者との意見交換の書簡や、関東の研究者から縄文土器や石器、貝類の寄贈を受けた書簡、アメリカのハーバード燕京図書館からの図書寄贈依頼や、米国議会図書館、英国博物館、駐神戸大韓民国領事館からの図書受領書も残されています。

このような多大な功績を残した松岡には、各方面からの受賞が相次ぎました。昭和 27 年に兵庫県文化賞受賞、昭和 45 年に文化庁長官表彰、昭和 50 年に勲五等瑞宝章受章、昭和 52 年に塩谷賞受賞、昭和 55 年に神戸新聞平和賞受賞、昭和 59 年に姫路文化賞受賞、昭和 60 年に姫路市民芸術文化大賞受賞。ただ、勲五等瑞宝章受章の時に「文化財　保護に一生を　かけしが　その破壊者より　賞をもらいぬ」と自らの立場を問い直すような短歌を詠んだのは、松岡らしいと言えるでしょう。また、松岡は数々の団体の委員や会長も務めました。自らが結成した団体も多く、まず目的があって手段を作るという、バイタリティあふれる人物でした。

（10）　松岡逝去とその後の有年考古館

松岡は、昭和 60 年８月 30 日に 81 歳で逝去しましたが、この前後を見てみると、昭和 59 年１月から、赤穂市堂山遺跡、同尾崎大塚古墳、相生市西後明窯跡、上郡町高田小学校地区の発掘調査をはじめ、上郡町の遺跡分布調査をたてつづけに実施するなど、まさに脂が乗った時期でした。傘寿記念祝賀会が開催された後、松岡の「先生」と「教え子」たちによって計画された記念論文集への謝辞を書いた翌日に倒れ、５日後に突然の訃報となりました。記念論文集刊行祝賀会は、「松岡先生を偲ぶ会」になってしまったのです。

松岡秀夫と松岡眼科病院

しかし有年考古館は、同じく考古学を研究していた子息の松岡秀樹が二代目館長として跡を継ぎ、博物館活動を継続することになりました。周囲には、松岡に育てられた多くの人々がおり、理事などの役員として館運営にご助力され、平成 23 年までの 25 年間にわたり、有年考古館の管理運営を実施できたのです。現在、有年地区は「文化財の宝庫」と言われていますが、もし松岡秀夫がいなければ、宝庫にはなっていなかったかもしれません。今、私たちが良好に残る古墳を直接見ることができるのは、松岡秀夫やその周辺の数多くの人々の活動と、またそれらを支えた地域の人々がいたからこそであり、これからも地域の宝を私たちの時

代で途絶えさせることなく、次世代の子供たちへと継承していくために努力していかなくてはなりません。

余談　松岡秀夫　三つの顔

松岡秀夫には、考古学者としての顔、眼科医としての顔、俳人としての顔がありました。

**考古学者としての松岡秀夫**

有年考古館設立当時、発掘調査等を行う予算は全くなく、調査は手弁当で行われるのが普通でした。有年考古館はこうした活動の拠点となり、とても高価であった測量機器「トランシット」の貸出しなど、多くの調査支援を行いました。考古学の調査は発掘調査だけではなく、出土遺物の調査もあります。これらを観察し、実測図を作成するため、様々な道具が使用されました。形取器である「真弧（まこ）」は、手作りのものです。

**眼科医としての松岡秀夫**

眼科医としての松岡秀夫は、評判の医者だったようで、有年駅まで行列が続いた、との逸話が残されているほどです。また「怖い」という評判も多くあり、注射をするときに思わず腕を引くと、「腕を注射器に持って来い」と迫ったという伝え話も残されています。一方で子供には優しく、学校医を務めるなか、子供と一緒に遊んでいたというエピソードも残されています。

**歌人としての松岡秀夫**

松岡は、昭和 7 年に家業を継いでまもなく、村に 1 軒しかない駅前の理髪店主、平田氏と懇意になり、短歌の歌誌『吾妹』の存在を知ります。平田氏に導かれて作歌生活が始まり、昭和 8 年には蓼風社を立ち上げました。その後、めきめき頭角を現し、昭和 12 年には『短歌研究』の新人賞 50 首に「城銀之助」の筆名で入選、一躍新進歌人として注目を浴びました。

昭和 10 年からは俳句も始め、「松岡秀峰」として 50 年以上、俳句を詠んでいます。昭和 60 年には句集『発掘日記』を刊行、秀夫逝去後も、子息の秀樹が平成元年に遺稿歌集『蟻無山』を刊行しています。秀夫の短歌、俳句は考古学に関するテーマも多く、異彩を放っていたことでしょう。

土器を掘る細き竹箆かじかむ手　　炎天下玉掘る

有年考古館にて

## 松岡秀夫　著作目録

| 著　作　名 | 書　籍　名 | 出　版　者 | 年　月 |
|---|---|---|---|
| 〔文化運動理念研究〕（九）農村文化運動の問題 | 『やまと新聞』昭和 16 年 4 月 11 日付 | | 1941 年 4 月 |
| 有年文化協会建設記（共著） | | 大政翼賛会兵庫県支部 | 1942 年 10 月 |
| 莚の餅 | 『神戸新聞』昭和 18 年 1 月 4 日付 | | 1943 年 1 月 |
| 有年考古館設立趣意書（編） | | 有年考古館設立準備委員会 | 1950 年 6 月 25 日 |
| 有年考古館陳列品目録 | | 有年考古館 | 1950 年 10 月 1 日 |
| 「有年庄」について | 『播磨』19 | 西播史談会 | 1951 年 7 月 |
| 兵庫県赤穂郡西野山第三號墳（編） | | 有年考古館 | 1952 年 10 月 |
| 矢野庄の「住」について | 『播磨』27 | 西播史談会 | 1954 年 1 月 |
| 改訂・有年考古館陳列品目録 | | 有年考古館 | 1954 年 10 月 1 日 |
| 西播史談会十周年を祝す | 『播磨』31 | 西播史談会 | 1955 年 4 月 |
| 矢野庄と條里 | 『兵庫史学』7 | 兵庫史学会 | 1956 年 2 月 |
| 郷土地名の研究 | 『播磨』37 | 西播史談会 | 1957 年 9 月 |
| 道場垣内と寺院の改宗 | 『播磨』40 | 西播史談会 | 1959 年 1 月 |
| 現地からみた農地改革－兵庫県赤穂市における分析（1） | 『兵庫史学』20 | 兵庫史学会 | 1959 年 7 月 |
| 現地からみた農地改革－兵庫県赤穂市における分析（2） | 『兵庫史学』21 | 兵庫史学会 | 1959 年 9 月 |
| 現地からみた農地改革－兵庫県赤穂市における分析（3） | 『兵庫史学』23 | 兵庫史学会 | 1960 年 4 月 |
| 小林楓村の古稀を祝して | 『播磨』48 | 西播史談会 | 1961 年 4 月 |
| 矢野庄の一資料－特に村について | 『播磨』50 | 西播磨史談会 | 1961 年 10 月 |
| 君島について | 『播磨』52 | 西播磨史談会 | 1962 年 4 月 |
| 播磨千種川流域の古代遺跡について | 『考古学研究』32 | 考古学研究会 | 1962 年 6 月 |
| 「のうけい谷」の開発 | 『播磨』53 | 西播史談会 | 1962 年 10 月 |
| 矢野庄の開発について | 『播磨』56 | 西播史談会 | 1963 年 5 月 |
| 春宵雑感 | 『播磨時報』昭和 39 年 6 月 28 日付 | | 1964 年 6 月 |
| 赤穂石塩荘について | 『播磨』60 | 西播史談会 | 1964 年 10 月 |
| 原村の天領支配について | 『播磨』63 | 兵庫史学会 | 1965 年 8 月 |
| 近世播磨国赤穂郡原村の耕牛について | 『兵庫史学』42 | 兵庫史学会 | 1965 年 11 月 |
| 赤穂市の縄文遺跡について | 『古代学研究』44 | 古代学研究会 | 1966 年 5 月 |
| 祐義歌集の出版を祝う | 『播磨』66 | 西播史談会 | 1966 年 7 月 |
| 播美鉄道の話 | 『播磨』67 | | 1967 年 1 月 |
| 播磨国赤穂郡原村における幕末御用献金について | 『兵庫史学』46 | 兵庫史学会 | 1967 年 4 月 |
| 赤穂郡の一新資料 | 『播磨』68 | 西播史談会 | 1967 年 5 月 |
| 天領農民による趣意銀仕法の出銀について－播州赤穂郡原村を中心として | 『兵庫史学』48 | 兵庫史学会 | 1967 年 11 月 |
| 西播先賢百人選－北畠定保 | 『播磨』72 | 西播史談会 | 1968 年 1 月 |
| 明治の虎列刺 | 『神戸史談』224 | 神戸史談会 | 1968 年 1 月 |
| 資料から見た明治初年の小学校教員 | 『播磨』73 | 西播史談会 | 1968 年 3 月 |
| 赤穂市における明治初年の教育資料（2） | 『播磨』74 | 西播史談会 | 1968 年 7 月 |
| 明治初年の赤穂郡原村の貢租について | 『兵庫史学』50 | 兵庫史学会 | 1968 年 11 月 |
| 赤穂の埋蔵文化財（編） | | 赤穂市教育委員会 | 1969 年 2 月 |
| 赤穂郡原村史料百年史（編） | | 有年考古館 | 1969 年 3 月 |
| 赤穂市における明治初年の教育資料（3） | 『播磨』76 | 西播史談会 | 1969 年 5 月 |
| 兵庫県上郡町別名出土の銅剣（共著） | | 有年考古館 | 1969 年 7 月 |
| 赤穂郡の代官支配（上） | 『兵庫県の歴史』2 | 兵庫県 | 1969 年 12 月 |
| 近世一皮多村の人口について | 『兵庫史学』52・53 | 兵庫史学会 | 1969 年 12 月 |
| 上郡の古墳と遺跡 | | 上郡町教育委員会 | 1970 年 3 月 |
| 赤穂郡の代官支配（下） | 『兵庫県の歴史』3 | 兵庫県 | 1970 年 5 月 |
| 赤穂の私鉄 | 『歴史と神戸』47 | 神戸史学会 | 1971 年 4 月 |
| 文政度抜参宮について | 『兵庫史学』57 | 兵庫史学会 | 1971 年 10 月 |
| 部落保護政策批判－近世播磨の部落温存施策について | 『兵庫史学』58 | 兵庫史学会 | 1972 年 3 月 |
| 〈座談会〉西播の歴史 | 『兵庫県の歴史』7 | 兵庫県 | 1972 年 5 月 |
| 郷土の城ものがたり | 西播編（共著） | 兵庫県学校厚生会 | 1973 年 3 月 |
| 郷土の民話 | 西播編（共著） | 兵庫県学校厚生会 | 1973 年 4 月 |
| 地方史研究者の問題について | 『歴史評論』277 | 歴史科学協議会 | 1973 年 6 月 |
| 中山古墳群発掘調査報告（編） | | 有年考古館 | 1973 年 11 月 |
| 赤穂部落文書（編） | | 赤穂市教育委員会 | 1974 年 1 月 |
| 赤穂森藩における差別施策と部落民の抵抗について | 『紀要部落史』2 | 西播地域皮多村文書研究会 | 1974 年 2 月 |
| ″ええじゃないか″手拭染型紙 | 『兵庫県の歴史』11 | 兵庫県 | 1974 年 7 月 |
| 近世宿駅助郷村における負担公平論について | 『兵庫史学』64 | 兵庫史学会 | 1974 年 12 月 |
| 古代農業生産の発展過程―収穫具を中心として（共著） | | 有年考古館 | 1975 年 10 月 |
| 助郷村における継立人足の割当方法 | 『兵庫史学』66 | 兵庫史学会 | 1975 年 12 月 |
| 部落保護政策批判－近世部落の温存施策について | 『近世部落史の研究』上 | 雄山閣 | 1976 年 1 月 |
| ″非人番″研究ノート | 『近世部落史の研究』下 | 雄山閣 | 1976 年 1 月 |
| 松岡秀夫先生論文集－千種川流域の歴史的考察 | | 記念出版委員会 | 1976 年 1 月 |
| 赤穂市上高野発見の銅鐸鎔笵 | 『考古学研究』90 | 考古学研究会 | 1976 年 9 月 |
| 赤穂郡の歴史 | 『兵庫－史蹟郷土史』 | 講談社 | 1977 年 10 月 |

| 著　作　名 | 書　籍　名 | 出　版　者 | 年　月 |
|---|---|---|---|
| 赤穂にも漆喰古墳？ | 『広報あこう』317 | 赤穂市 | 1978 年 5 月 |
| 赤穂市西有年（馬路池）地区埋蔵文化財試掘調査報告書 | | 赤穂市教育委員会 | 1978 年 10 月 |
| 赤穂市原地区埋蔵文化財試掘調査報告書 | | 赤穂市教育委員会 | 1978 年 11 月 |
| 赤穂とナウマン象 | 『広報あこう』325 | 赤穂市 | 1979 年 1 月 |
| 赤穂市大津堂山遺跡試掘調査報告書 | | 赤穂市教育委員会 | 1979 年 3 月 |
| 地蔵に化けた銅鐸の鋳型 | 『季刊兵庫』2 | 中央出版 | 1979 年 4 月 |
| 赤穂地方出土の円筒埴輪とその編年 | 『考古学研究』102 | 考古学研究会 | 1979 年 10 月 |
| 堂山から出土した馬 | 『広報あこう』334 | 赤穂市 | 1979 年 10 月 |
| 赤穂市西有年（馬路池）埋蔵文化財試掘調査報告書 | | 赤穂市教育委員会 | 1980 年 2 月 |
| 赤穂市尾崎（猪壷谷）埋蔵文化財試掘調査報告書 | | 赤穂市教育委員会 | 1980 年 3 月 |
| ふるさと想い出写真集　明治・大正・昭和赤穂（編） | | 国書刊行会 | 1980 年 6 月 |
| 康永四年銘の題目供養塔 | 『歴史と神戸』100 | 神戸史学会 | 1980 年 6 月 |
| 赤穂市西有年堂場ケ市埋蔵文化財試掘調査報告書 | | 赤穂市教育委員会 | 1980 年 7 月 |
| 題（はそう）と赤穂 | 『広報あこう』344 | 赤穂市 | 1980 年 8 月 |
| 相生市陸池ノ上古墳発掘調査報告書 | | 相生市教育委員会 | 1980 年 8 月 |
| 縄の浦の製塩 | 『古代学研究』94 | 古代学研究会 | 1980 年 10 月 |
| 赤い穂のタデ | 『播磨の植物』 | のじぎく文庫 | 1981 年 2 月 |
| 松岡秀夫先生講義集　有年史話　上 | | 有年公民館 | 1981 年 3 月 |
| 佐用郡・相生市・赤穂市の項 | 『日本城郭体系』第 12 巻 | 新人物往来社 | 1981 年 3 月 |
| 赤穂市有年原地区埋蔵文化財試掘調査報告書 | | 赤穂市教育委員会 | 1981 年 3 月 |
| 小島でみつかった「十字」印の石 | 『広報あこう』354 | 赤穂市 | 1981 年 6 月 |
| 相生市入野窯跡発掘調査報告書 | | 相生市教育委員会 | 1981 年 8 月 |
| 相生市大塚ハザ古墳調査報告書 | | 相生市教育委員会 | 1981 年 8 月 |
| 考古学からみた赤穂 | 『赤穂市史』第 1 巻 | 赤穂市 | 1981 年 9 月 |
| 播磨国風土記と平城宮出土の木簡 | 『歴史と神戸』109 | 神戸史学会 | 1981 年 12 月 |
| 浅田教授に申す | 『季刊　河』20 | 加古川流域史学会 | 1982 年 1 月 |
| 〔狭間〕古墳と文化 | 『毎日新聞』昭和 57 年 2 月 3 日付 | | 1982 年 2 月 |
| 〔狭間〕郷土史家 | 『毎日新聞』昭和 57 年 3 月 3 日付 | | 1982 年 3 月 |
| 〔狭間〕レプリカ | 『毎日新聞』昭和 57 年 3 月 31 日付 | | 1982 年 3 月 |
| 〔狭間〕雑魚に勲章 | 『毎日新聞』昭和 57 年 4 月 28 日付 | | 1982 年 4 月 |
| 〔狭間〕赤穂城址 | 『毎日新聞』昭和 57 年 5 月 26 日付 | | 1982 年 5 月 |
| 有年という地名のおこり | 『地域先輩に学ぶ講義集録』 | 有年中学校 | 1982 年 3 月 |
| 有年の宿駅について | 『地域先輩に学ぶ講義集録』 | 有年中学校 | 1982 年 3 月 |
| 験行寺の七不思議 | 『地域先輩に学ぶ講義集録』 | 有年中学校 | 1982 年 3 月 |
| 有年楢原周世地区分布調査報告書 | | 赤穂市教育委員会 | 1982 年 3 月 |
| 有年の宿 | 『赤穂市史』第 5 巻 | 赤穂市 | 1982 年 5 月 |
| 蓼を食った人 | 『広報あこう』368 | 赤穂市 | 1982 年 8 月 |
| 古城址探訪－姫路付近を中心に（1） | 『山陽ニュース』392 | 山陽ニュース発行所 | 1982 年 9 月 |
| 古城址探訪－姫路付近を中心に（2） | 『山陽ニュース』393 | 山陽ニュース発行所 | 1982 年 10 月 |
| 古城址探訪－姫路付近を中心に（3） | 『山陽ニュース』394 | 山陽ニュース発行所 | 1982 年 11 月 |
| 古城址探訪－姫路付近を中心に（4） | 『山陽ニュース』395 | 山陽ニュース発行所 | 1982 年 12 月 |
| 古城址探訪－姫路付近を中心に（5） | 『山陽ニュース』396 | 山陽ニュース発行所 | 1983 年 1 月 |
| 古城址探訪－姫路付近を中心に（終） | 『山陽ニュース』397 | 山陽ニュース発行所 | 1983 年 2 月 |
| 石棺石の刻印 | 『広報あこう』375 | 赤穂市 | 1983 年 3 月 |
| 有年宿 | 『赤穂市史』第 2 巻 | 赤穂市 | 1983 年 3 月 |
| 有年宿駅の終焉 | 『赤穂市史』第 2 巻 | 赤穂市 | 1983 年 3 月 |
| 辻井のむかし 1　円窓土器 | 『コミひめじ西』6 | | 1983 年 6 月 |
| 辻井のむかし 2　4 千年前に集団生活 | 『コミひめじ西』7 | | 1983 年 6 月 |
| 辻井のむかし 3　採集から栽培へ | 『コミひめじ西』8 | | 1983 年 7 月 |
| 辻井のむかし 4　古代人骨の発見 | 『コミひめじ西』9 | | 1983 年 8 月 |
| 周世入相遺跡分布調査報告書 | | 赤穂市教育委員会 | 1983 年 7 月 |
| 感状山城・下土井城 | 『兵庫県大百科事典』 | 神戸新聞出版センター | 1983 年 10 月 |
| 福井池ノ下遺跡発掘調査報告書 | | 相生市教育委員会 | 1983 年 12 月 |
| 赤穂城の刻文石 | 『広報あこう』384 | 赤穂市 | 1983 年 12 月 |
| 旧赤穂城の刻文石 | 『えとのす』23 | 新教育図書 | 1984 年 1 月 |
| 赤穂市の考古遺跡と遺物 | 『赤穂市史』第 4 巻 | 赤穂市 | 1984 年 3 月 |
| 中世の山城 | 『赤穂市史』第 4 巻 | 赤穂市 | 1984 年 3 月 |
| 周世入相遺跡発掘調査報告書 | | 赤穂市教育委員会 | 1984 年 3 月 |
| 緑ケ丘一の谷二号窯発掘調査報告書 | | 相生市教育委員会 | 1984 年 3 月 |
| 相生市下土井遺跡発掘調査報告書 | | 相生市教育委員会 | 1984 年 3 月 |
| 上郡町埋蔵文化財詳細分布調査報告書 | | 上郡町教育委員会 | 1984 年 3 月 |
| 御崎大塚遺跡 | | 赤穂市教育委員会 | 1984 年 6 月 |
| 塩屋堂山遺跡発掘調査概要報告書 | | 赤穂市教育委員会 | 1984 年 10 月 |
| 年貢米の川下げと「日の丸」 | 『広報あこう』395 | 赤穂市 | 1984 年 11 月 |
| 発掘日記（句集） | | 私家版 | 1985 年 1 月 |
| 松岡秀夫先生講義集　有年史話　下 | | 有年史話編集委員会 | 1985 年 2 月 |
| 有年の歴史と地名 | | 赤穂市教育委員会 | 1985 年 3 月 |

## 松岡秀夫　略年譜

| 年 | 月　日 | 年齢 | 内　　容 |
|---|---|---|---|
| 明治 37 年（1904） | 2 月 13 日 | | 兵庫県赤穂郡有年村楢原 1157 番地に生まれる |
| 明治 43 年（1910） | 4 月 | 6 歳 | 有年村立原尋常小学校に入学 |
| 大正 5 年（1916） | 4 月 | 12 歳 | 私立同志社中学校に入学 |
| 大正 7 年（1918） | 4 月 | 14 歳 | 同志社中学校より兵庫県立龍野中学校へ転入 |
| 大正 9 年（1920） | 6 月 | 16 歳 | 龍野中学在学中に四高受験 |
| | 9 月 | | 第四高等学校理甲に入学 |
| 大正 12 年（1923） | 3 月 | 19 歳 | 第四高等学校を卒業 |
| | 4 月 | | 京都帝国大学医学部へ入学 |
| 昭和 2 年（1927） | 3 月 30 日 | 23 歳 | 京都帝国大学医学部を卒業 |
| | 4 月 14 日 | | 京都帝国大学医学部副手となる |
| | 4 月 15 日 | | 医師免許証が交付される |
| | 9 月 23 日 | | 京都帝国大学医学部助手となる |
| 昭和 3 年（1928） | 1 月 | 24 歳 | 姫路歩兵第三十九連隊へ入隊、即日除隊 |
| | 6 月 30 日 | | 京都帝国大学医学部助手を免ぜられる |
| | 7 月 31 日 | | 島根県立松江病院眼科部長となる |
| 昭和 5 年（1930） | 6 月 30 日 | 26 歳 | 同上病院退職 |
| | 9 月 1 日 | | 京都帝国大学大学院へ入学 |
| 昭和 6 年（1931） | 1 月 31 日 | 27 歳 | 京都帝国大学医学部講師となる |
| 昭和 7 年（1932） | 3 月 3 日 | 28 歳 | 同上退職 |
| | 3 月 9 日 | | 三重県津市立病院眼科部長となる |
| | 5 月 | | 木部崎阿やと結婚（挙式 5 日後に兄が死去、松岡病院に帰ることとなる） |
| | 6 月 27 日 | | 津市立病院を退職 |
| | 7 月 1 日 | | 松岡病院を継ぎ、院長となる |
| 昭和 8 年（1933） | 6 月 6 日 | 29 歳 | 医学博士の学位を受ける |
| | | | 蓼風社を結成、本部を松岡病院内に置く |
| 昭和 16 年（1941） | 3 月 8 日 | 37 歳 | 有年文化協会の結成、会長となる |
| 昭和 17 年（1942） | 3 月 | 38 歳 | 有年村壮年団の結成、団長となる |
| | この年 | | 有年村の遺跡標柱の建立 |
| 昭和 21 年（1946） | | 42 歳 | 公職追放の指定を受ける |
| 昭和 22 年（1947） | このころ | | 原小学校裏のはげ山の砂防工事で遺物を発見、埋蔵文化財の保存を決意 |
| | このころ | | 西野山 1 号墳が石取工事の際に発見される |
| 昭和 23 年（1948） | 4 月 7 日 | 44 歳 | 上郡町与井西山瓦窯跡の調査、考古学研究を始める |
| 昭和 25 年（1950） | 1 月 15 日 | 46 歳 | 相生市旧矢野荘内の踏査、荘園研究を開始 |
| | 4 月 | | 有年考古館設立準備委員会を結成、代表者となる |
| | 6 月 25 日 | | 『有年考古館設立趣意書』刊行 |
| | 7 月 | | 有年考古館工事着工 |
| | 8 月 | | 砂防工事により西野山 3 号墳の墳丘および排水施設が一部破壊される |
| | 9 月 20 日 | | 有年考古館創立総会がおこなわれ、理事となる |
| | 10 月 8 日 | | 有年考古館開館式　常任理事となる　44㎡の考古館 |
| | 10 月 1 日 | | 付けで財団法人設立許可申請書提出、『有年考古館陳列品目録』刊行 |

| 年 | 月　日 | 年齢 | 内　　容 |
|---|---|---|---|
| 昭和 26 年（1951） | 4 月 27 日 | 47 歳 | 財団法人有年考古館設立認可、同館館長となる |
| | | | 兵教委学第 16 号の 1 の通知、兵庫県教育委員会指令第 33 号をもって許可 |
| | 5 月 3 日 ～ 13 日 | | 上郡町西野山三号墳の学術調査 |
| | 11 月 22 日 | | 地文総第 485 号をもって兵庫県教育委員会所管から文化財保護委員会所管となるとの通知 |
| 昭和 27 年（1952） | 10 月 | 48 歳 | 『兵庫県西野山第三号墳』刊行 |
| | 11 月 | | 兵庫県文化賞を受賞（文化財保護及び文化振興功績） |
| 昭和 28 年（1953） | 4 月 | 49 歳 | 姫路市へ転居 |
| 昭和 29 年（1954） | 10 月 1 日 | 50 歳 | 『改訂・有年考古館陳列品目録』刊行 |
| 昭和 36 年（1961） | 4 月 | 57 歳 | 赤穂市蟻無山古墳群の墳丘測量調査を実施 |
| 昭和 37 年（1962） | 12 月 | 58 歳 | 【日本考古学辞典】に有年考古館が紹介される |
| 昭和 38 年（1963） | 4 月 20 日 | 59 歳 | 財団法人有年考古館理事長となる |
| | 5 月 | | 有年考古館 53㎡を増築 |
| | 12 月 | | 赤穂駅前の大同生命ホールで（財）有年考古館展を開催 |
| | | | 赤穂市猪壷谷遺跡の調査 |
| 昭和 40 年（1965） | 4 月 1 日 | 61 歳 | 赤穂市文化財調査委員長となる |
| 昭和 41 年（1966） | 2 月 | 62 歳 | 赤穂市丸山で猪壷谷遺跡を発掘調査 |
| | 8 月 | | 赤穂市丸山で猪壷谷遺跡を発掘調査 |
| | 11 月 | | （赤穂市文化財調査委員会が赤穂市内を分布調査） |
| 昭和 42 年（1967） | 3 ～ 4 月 | 63 歳 | 猪壷谷遺跡の調査 |
| | 11 月 25 日 | | 兵庫県社会文化協会評議員となる |
| 昭和 43 年（1968） | 6 月 1 日 | 64 歳 | 山陽新幹線・中国縦貫道文化財対策審議委員となる |
| | 6 月 | | 赤穂塩業資料館管理委員会委員に委嘱される |
| 昭和 44 年（1969） | 2 月 16 日 | 65 歳 | 有年史蹟を守る会を結成 |
| | | | 上郡町の遺跡分布調査を実施 |
| | 3 月 | | 『赤穂郡原村史料百年史』刊行 |
| | 7 月 | | 『兵庫県上郡町別名出土の銅剣』刊行 |
| 昭和 45 年（1970） | 4 月 | 66 歳 | 上郡町高田の住宅団地建設予定地で古墳（4 基）が発見される |
| | 4 月 | | 有年史蹟を守る会古墳立札設置（75 基） |
| | 5 月 31 日 | | 県の文化財対策審議委員を辞職 |
| | 11 月 3 日 | | 文化財保護の功績により、文化庁長官より表彰される |
| | 11 月 | | この段階で、市内の古墳 165 基、貝塚 1 基、縄文・弥生遺跡 11 ヶ所の埋蔵文化財調査を実施。 |
| 昭和 46 年（1971） | 9 月 | 67 歳 | 上郡町の史蹟を守る会を結成、中山古墳群の保存運動を行う |
| | 10 月 | | 西野山古墳群（中山古墳群）の 2 基が保存される方針となる（後に変更、協議継続） |
| | 12 月 26 日 | | 中山古墳群の調査開始開始 |
| 昭和 47 年（1972） | 11 月 25 日 | 68 歳 | 中山古墳群 11 号墳を有年考古館に移築する |
| | 12 月 30 日 | | 5 次にわたる中山古墳群の調査を終了 |

| 年 | 月　日 | 年齢 | 内　　容 |
|---|---|---|---|
| 昭和 48 年（1973） | 1 月 | 69 歳 | 赤穂市の第二次埋蔵文化財分布調査を終了 |
| | 11 月 | | 西播地域皮多村文書研究会が発足、世話人代表となる |
| | 11 月 | | 『中山古墳群発掘調査報告』刊行 |
| | この年 | | 有年老人大学で「ふるさと有年の歴史」の講演を始める |
| 昭和 49 年（1974） | 6 月 | 70 歳 | 赤穂歴史研究会を結成し、会長となる |
| 昭和 50 年（1975） | 11 月 3 日 | 71 歳 | 文化財保護の功績により、勲五等瑞宝章を受賞 |
| 昭和 51 年（1976） | 1 月 | 72 歳 | 赤穂市塩屋岩山廃寺跡の調査 |
| | 1 月 | | 松岡秀夫先生論文集の出版 |
| | 3 月 | | 赤穂市立赤穂西小学校（鶉和）建設に伴う調査 |
| | 5 月 | | 県立赤穂養護学校（大津）建設予定地で確認調査 |
| | 7 月 18 日 | | 赤穂市上高野で銅鐸の鋳型片を発見する |
| | 8 月 | | 赤穂市高野において群集墳の分布調査 |
| | 10 月 | | 赤穂高校建設の土砂取り地において横穴式石室を発見、調査 |
| | 11 月 | | 有年考古館移築・増築を開始する |
| 昭和 52 年（1977） | 1 月 16 日 | 73 歳 | 赤穂市生島古墳の墳丘測量調査 |
| | 3 月 13 日 | | 塩谷賞（個人・学術部門）受賞 |
| | 4 月 | | 日本考古学協会会員となる |
| | 5 月 1 日 | | 有年考古館改築工事竣工、旧館に有年民俗資料館を併設する |
| | 5 月 | | 西播流域史研究会により、有年考古館蔵品の実測作業開始 |
| | 8 月 1 日 | | 赤穂市史編さん専門委員となる |
| | 8 月 14 日 | | 赤穂市天和で確認調査 |
| | 8 月 | | 上郡町立高田幼稚園建設に伴う試掘調査 |
| 昭和 53 年（1978） | 8 月 | 74 歳 | 上郡町立高田小学校運動場拡張に伴う調査 |
| | 8 月 | | 赤穂歴史研究会名誉会長となる |
| | 10 月 | | 赤穂市西有年馬路池の発掘調査 |
| | 11 月 | | 赤穂市立原幼稚園建設に伴う発掘調査 |
| 昭和 54 年（1979） | 1 月 | 75 歳 | 山陽自動車道赤穂インター侵入路予定地で遺跡の確認調査 |
| | 2 月 | | 上郡町立高田小学校改築に伴う試掘調査 |
| | 4 月 | 76 歳 | 塩屋堂山遺跡の発掘調査団長となる |
| | 8 月 | | 上郡町立船坂幼稚園建設に伴う試掘調査 |
| | 10 月 21 日 | | 塩屋堂山遺跡の調査報告会を赤穂市民会館で開催 |
| | 11 月 21 日 | | 赤穂市西有年北山で発見された横口式石槨墳の調査 |
| | 12 月 | | 赤穂市西有年馬路池の発掘調査 |
| | | | 赤穂市立原小学校運動場拡張に伴う発掘調査 |
| 昭和 55 年（1980） | 2 月 7 日 | 76 歳 | 赤穂市西有年与井谷口で積石塚を発見、発掘調査 |
| | 3 月 | | 上郡町尾長谷西部木場の分布調査 |
| | 5 月 3 日 | | 神戸新聞平和賞を受賞 |
| | 7 月 | | 赤穂市立有年小学校の建設に伴う発掘調査を実施 |
| | 8 月 | | 相生市陸池ノ上古墳の発掘調査 |
| | 11 月 | | 赤穂市立原小学校の屋内運動場建設に伴う発掘調査 |
| | | | 猪壺谷遺跡の発掘調査 |
| 昭和 56 年（1981） | 1 月 27 日 | 77 歳 | 赤穂市文化財保護審議会会長となる |

| 年 | 月　日 | 年齢 | 内　　容 |
|---|---|---|---|
| | 3 月 | | 上郡町金出地・奥・楠地区ほ場予定地の分布調査 |
| | 4 月 | | 上郡町の遺跡分布調査を開始 |
| | 7 月 | | 上郡町立赤松幼稚園建設に伴う発掘調査 |
| | 8 月 | | 相生市入野窯跡発掘調査団編成、1・2 号窯の発掘調査 |
| | 8 月 | | 相生市大塚ハザ古墳の墳丘測量調査 |
| 昭和 57 年（1982） | 3 月 | 78 歳 | 赤穂市周世・楢原ほ場整備に伴う分布調査 |
| | 3 月 | | 上郡町立高田小学校体育館建設予定地の発掘調査 |
| | 3 月 | | 西播地域総括責任者であった『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』刊行 |
| | 4 月 | | 上郡町の遺跡分布調査 |
| | 5 月 13 日 | | 高田小学校体育館建設予定地で見つかった竪穴住居跡の保存決定 |
| | 6 月 | | 旧赤穂高校校舎保存のため署名運動を始める |
| | 7 月 | | 相生市スポーツセンター建設地の発掘調査 |
| | 8 月 5 日 | | 赤穂市文化財保護審議会会長辞任 |
| | 8 月 | | 相生市丸山古窯址群の発掘調査 |
| | 8 月 | | 相生市緑ヶ丘二号窯の発掘調査 |
| | 8 月 | | 入野古墳の実測調査。提瓶、メノウ耳環、管玉出土 |
| | 10 月 | | 有年考古館で盗難事件がおきる |
| | 12 月 26 日 | | 相生市福井池ノ下遺跡の発掘調査 |
| 昭和 58 年（1983） | 3 月 | 79 歳 | 赤穂市立資料館運営委員会委員に委嘱される |
| | 4 月 | | 上郡町立高田小学校プール・高田公民館建設に伴う試掘調査 |
| | 4 月 | | 上郡町の遺跡分布調査を再開 |
| | 5 月 | | 堂山遺跡の調査 |
| | 5 月 | | 赤穂市周世ほ場整備に伴う分布調査 |
| | 6 月 | | 赤穂埋蔵文化財調査会を結成、会長に選任される |
| | 7 月 | | 相生市緑ヶ丘一の谷二号窯の発掘調査 |
| | 8 月 | | 史跡赤穂城跡調査委員に選任される |
| | 9 月 | | 赤穂市文化財保護審議会委員に再任される |
| | 12 月 | | 相生市下土井遺跡の発掘調査 |
| 昭和 59 年（1984） | 1 月 | 80 歳 | 赤穂市周世入相遺跡の発掘調査 |
| | 3 月 | | 赤穂市堂山遺跡の発掘調査 |
| | 4 月 | | 上郡町の遺跡分布調査 |
| | 5 月 | | 赤穂市御崎大塚古墳の発掘調査 |
| | 7 月 | | 相生市西後明窯跡の発掘調査 |
| | 8 月 | | 上郡町立高田小学校増築に伴う発掘調査 |
| | 10 月 | | 史跡赤穂城跡調査委員に再任される |
| | 10 月 | | 『兵庫県赤穂郡西野山第三號墳』報告書復刻される |
| | 11 月 | | 姫路文化賞を受賞 |
| | 12 月 | | 相生市西後明窯跡の発掘調査 |
| 昭和 60 年（1985） | 1 月 20 日 | | 句集『発掘日記』が刊行される |
| | 4 月 | | 姫路市民芸術文化大賞を受賞 |
| | 8 月 30 日 | | 81 歳で逝去 |
| | 9 月 25 日 | | 『松岡秀夫傘寿記念論文集　兵庫史の研究』が刊行される |
| 平成元年（1989） | 2 月 20 日 | | 松岡秀樹氏により遺稿歌集『蟻無山』が刊行される |

## 2　平成 23 年度企画展「有年農村舞台の復活記録」

復活上演された農村舞台（平成 23 年 11 月 5 日）

（1）　農村舞台

映画、テレビなどが人々の日常生活に入ってくるまでは、芝居が何よりの楽しみでした。江戸時代より、農村では、たまにやってくる芸人の芝居（歌舞伎、人形芝居）を心待ちにし、その芝居をみることが、日常の厳しい農作業をしばし忘れ、ホッと出来るひとときでありました。芝居は、村の中のいろいろな行事の時に行われました。昭和 6 年（1931）に有年横尾の験行寺が建てかえられた時、地元の青年が芝居をしたと思われる写真があります。村の生活にとっての「楽しみ」であっただけでなく、行事には「なくてはならぬもの」であったと言えるかもしれません。そして中には、芝居を観るだけでなく、自分で演じる者もあらわれました。そうした芝居を上演するため、村々にできた舞台を農村舞台と呼んでいます。

芝居は、神さまへの「奉納」という目的で、神社の秋祭りの時に演じられることが多く、農村舞台はふつう神社の境内に建てられました。赤穂市内では、有年牟礼山田の八幡神社に農村舞台が残されていますが、これが、市内にただ一つ残された農村舞台です。構造は一般的なもので、木造の舞台建物に、野天の客席広場が付いていました。

戦前（昭和 20 年以前）の舞台の様子は、よくわかっていません。有年だけでなく隣の相生市や上郡町の人も加わって芝居をしていて、それを見たような気がするという話を聞きました。その頃、舞台は使われていなかったかもしれません。舞台の前の広場には土俵が作られていて、相撲をとっていました。戦争が激しくなると、若い男の人はどんどん戦地にとられていきました。舞台の前の広場は耕されて、さつまいも畑になりました。毎日の生活がきびしくなり、芝居どころではありませんでした。

（2）　農村舞台の復活

昭和 20 年（1945）8 月、戦争は終わりました。亡くなった人も多くいましたが、無事帰ってくることが出来た人もいました。こうした若者達が、新たな時代に向けて村を明るくしていこうと張り切るようになりました。そうしたところ、傷みがひどく壁も落ちかけていた舞台を修理して、人々の楽しみの場にしようとする動きがありました。有年牟礼の村井芳郎という人が、その頃勤めていた煙草収納所（栽培されていた葉たばこを役所におさめるところ）の材木をもらって来て、大工さん達に頼んで修理しました。そして昭和 21 年（1946）10 月、八幡神社の祭礼の時に牟礼青年団による芝居の幕が開きました（こけら落とし）。秋祭りの時は、有年牟礼・有年原・有年横尾の３つの地区が、毎年輪番で獅子舞をしていました。これに芝居が加わって輪番されることになり、それぞれの地区の青年団 *1 の若者が競うようになりました。

（3）　農村舞台のにぎわい

ここでは、昭和 21 年の舞台の様子を、聞き取りを元に辿ってみましょう。8 月に盆おどり（土俵の上にやぐらを組んでいた）が終わると、すぐ芝居の稽古に取りかかりました。毎晩、夕食が済むと倶楽部（集会所）に集まり、練習を重ねました。指導をするのは東有年の山本伊太郎氏や有年横尾の川上芳郎氏 *2 らでした。

彼らが所属していた相生市の「寿劇団」の活動は、昭和 21 年（1946）頃までと言われているので、この時期、各青年団の指導をしていたことは当然考えられます。山本氏は人々から親しみをこめて「イーチャン」と呼ばれていました。セリフは「イーチャン」が語るものを文に起こして使用しましたが、教えられた通りに言っても注意されることがあり、「前言うたこととちゃう（違う）」とこぼされることもありました。「ここでにらむ」、「外へ出る」といった「ト書き」も書き添えていました。練習中、婦人会によるおにぎりが出されることもありました。芝居は地区全体で応援し、舞台づくりや花道つけなどは、青年団の兄的な存在である消防団（18 才～ 30 才、一軒に一人は団員となっていた）の力を借りていました。また、八幡神社や村の方からも費用が出されていたようでした。衣装をはじめ大道具や小道具は、矢野・若狭野 *3（相生市）の貸衣装店から借りていました。時には「農協のバタコ（単車）を借りて」佐用の平福まで足をのばしました。

昭和 35 年の上演の様子（内波久榮氏提供）

当時の八幡神社の祭（本宮）は、10 月 25 日と決まっていました。獅子舞をする人と芝居をする人とを分けていた地区もありましたが、有年牟礼地区は両方出なければ

上演時の衣装（木下一也氏提供）

なりませんでした。当日の昼すぎ、舞台前の広場で最後の獅子舞が済むと、休む間もなく芝居の準備に取り掛かりました。着付けや化粧も「イーチャン」らが教えました。広場は、消防団員らによってむしろを敷かれ、客席となりました。前の方の「いい席」をとろうと、子どもを座らせたり、ゴザ・座ぶとんを置いたりすることもありました。参道や広場に行く坂のところには露店が並び、大層にぎやかでした。祭りの日は、親類のお客に加え、近くの村々からも多くの人が集まりました。重箱に詰めた弁当(なれ寿し、煮しめ等)や酒を持って来て、芝居見物をしました。

午後４時頃より「三番叟」で始まり、女子青年団員の踊り、手品、浪曲・漫才（有年横尾に漫才師が住んでいました）といった演目が続きました。地元の達者な人が三味線・義大夫などの特技を披露し、手品などは青年団員で行うこともありました。夜はかなり寒く感じました。客席では酒が入り上機嫌の人もいましたが、言い争いやケンカが始まることもありました。いよいよトリは青年団員による芝居です。芝居は「俄」「二〇カ」と呼ばれていました。演目としては「忠臣蔵」「太閤（大功）記」「義経千本桜」などでしたが、ＧＨＱの通達で仇討ちものは禁止されていました。昭和 21 年（1946）の演目は二幕ものの捕物帳だったとのことです。

上演後の記念写真（木下一也氏提供）

殺陣の時「とにかくケガをさせないよう」気を使いました。舞台の上で格子の戸を立てて出入りしたりしました。花道の下（客席から見えない所）で祝儀（ハナ）を受け取り「金一封○○」と書いた紙を舞台の袖に貼りつけていきました。芝居が終わると午後 10 時を過ぎていました。

（4）　もう一つの農村舞台

ところで有年地区では、芝居をする時に組み立てられる農村舞台が、有年牟礼のほかに数カ所ありました。東有年の舞台屋敷（市道山手線の重ね荒神の東）、八幡神社の御旅所の辺り（有年保育所付近）、西有年では大避神社の境内に舞台が作られ、「二○カ」芝居が行われました。

西有年の大避神社では普段、材木は社務所横にまとめて置かれてあり、行事の時に組み建てられました。舞台の大きさは巾 3.5 間（約 6.3m）、奥行き 2 .2 間（約 3.6m）で少し高くなった台が置かれていました。西有年の祭 *4（10 月 17 日）の時、青年団員は獅子舞が大きな役割でした。

西有年の原組に聞き取り調査をしたところ、地元の浪曲師であった赤松氏（エッチャン）に教えてもらい練習を重ねたことがわかりました。セリフが口伝えであったり、衣装などを相生市矢野から借りるといったことは同じでした。組み立て舞台の芝居は戦前から行われていたようでした。子ども心に、白い着物を着た役者が毒を盛られたシーンで、口から血（赤絵具）を吐き、行灯がまっ赤になる様子にひどく驚いたことを、よく記憶されている人もいました。芝居は、本宮（10 月 17 日）の夕方より幕が開き、夜遅くまでにぎやかな声が聞かれました。また秋祭り以外でも、大円寺のお大師（太子）さんの時にちょっとした演芸会を開くこともありました。

（5）　農村舞台のその後

再び有年牟礼地区のことにもう少し触れたいと思います。有年牟礼地区は昭和 24 年（1949）、昭和 27 年（1952）に獅子舞の当番を担当し、芝居も行われました。戦後の芝居は昭和 21 年を含めた 3 回のみで、昭和 30 年（1955）以降は獅子舞のみが行われました。詳しい事情はわかりませんが、獅子舞と芝居を同じ人が行うのは、負担が大きかったと思われます。有年原、有年横尾地区の担当する芝居は、その後もしばらく続けられたようで、昭和 35 年（1960）の有年横尾地区による芝居の写真が残されています。昭和 38 年（1963）、いよいよ自分の番だと楽しみにしていた青年団が、自治会から「もうやめとけ」とストップがかかり、結局出来ないことになりました。おそらく昭和 35 年が、最後の芝居の年だと思われます。

昭和 35 年（1960）という年は、有年地区からも多くの働き手を出していた相生市の播磨造船所が石川島重工業株式会社と合併し、石川島播磨重工業株式会社が発足した年でした。本格的な高度経済成長の波がおしよせ、農村の生活も変化していくことになりました。

その後の農村舞台は、祭の日のくじの抽選会場、餅まきの舞台として利用される程度でした。祭の日も 10 月第○日曜日という設定になっていきました。実際に、この舞台で芝居をしていたことを知る人も少なくなって来ました。

しかし、平成 23 年（2011）、神社氏子らによる「有年農村舞台復活保存実行委員会（室井伊佐夫代表）」が立ち上げられ、「赤穂まちづくり研究会」（山本建志代表）の協力を得て、舞

農村舞台の修理作業（平成 23 年 7 月 18 日）

農村舞台の修理完成（平成 23 年 7 月 18 日）

背景絵の製作（平成 23 年 8 月 27 日）

背景絵の製作（平成 23 年 8 月 27 日）

完成した背景絵

復活上演（平成 23 年 11 月 5 日）

復活上演（平成 23 年 11 月 5 日）

# プログラム

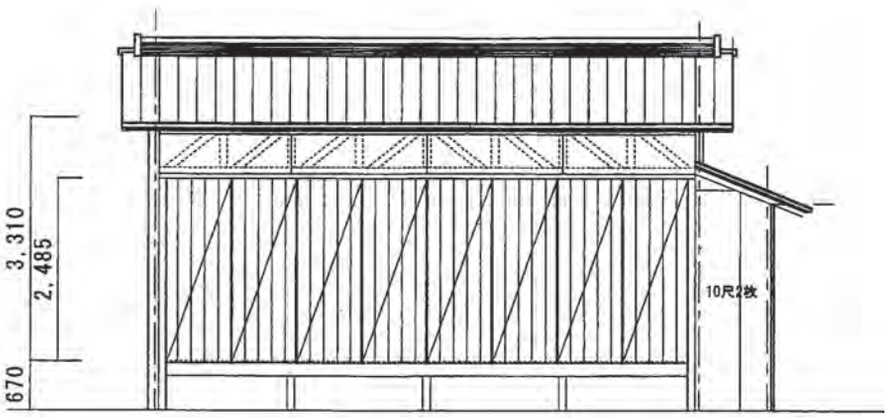
**平成２３年１１月５日（土）　午後１時から開演**

| 出　演　団　体 | 出　演　演　目 |
|---|---|
| 有年農村舞台復活保存実行委員会 | 会長あいさつ |
| １．原小学校原っこ和太鼓（有年） | 和太鼓演奏（２０１１「和」） |
| ２．原幼稚園はらっこだいこ（有年） | 竹太鼓演奏（忍者参上） |
| ３．有年みらい会（有年） | 人形劇（ちくさ川） |
| ４．The 47 Black Cats Planning（赤穂） | 紙芝居（赤穂義士物語） |
| ５．西有年西龍会（有年） | 雅楽演奏（越天楽、五常楽、抜頭） |
| ６．木村勝代（塩屋） | 日本舞踊（雪の南部坂） |
| ７．赤穂宝専寺恵比寿大黒舞保存会（尾崎） | 恵比寿舞・大黒舞 |
| | （恵比寿舞　誕生の巻） |
| | （大黒舞　年徳玉の舞） |
| | 【兵庫県無形民俗文化財指定】 |
| ８．舞踊同好会（赤穂）福本久子 | 日本舞踊（黒田節） |
| 山下静代 | 日本舞踊（助六） |
| ９．詩吟同好会（有年） | 詩吟（合吟、独吟、合吟、構成吟） |
| 10．鍵盤ママクラブ（有年） | 鍵盤ハーモニカ演奏 |
| | （まるまる、アンパンマン、童謡赤とんぼ） |
| | （トトロ、キセキの花を咲かせよう） |
| 11．尾崎公民館サークル大正琴部（尾崎） | 大正琴演奏（黒田節、里の秋、ふるさと） |
| 12．赤穂民謡サークル（赤穂） | 民謡（ソーラン節、斎太郎節、花笠音頭） |
| 13．民謡さくら会（塩屋） | 民謡（四季の舞音頭、真室川音頭） |
| 14．友舞傘（尾崎） | 傘踊り（平成音頭） |
| 15．門前太鼓（高雄） | 和太鼓演奏（高雄ばやし） |
| 16．有年中学校防犯委員会（有年） | 小劇・マモルンジャー |
| | （事件にまきこまれないために） |
| 17．赤穂義士ライダー47プロジェクト（赤穂） | 小劇（赤穂義士ライダー47ショー） |

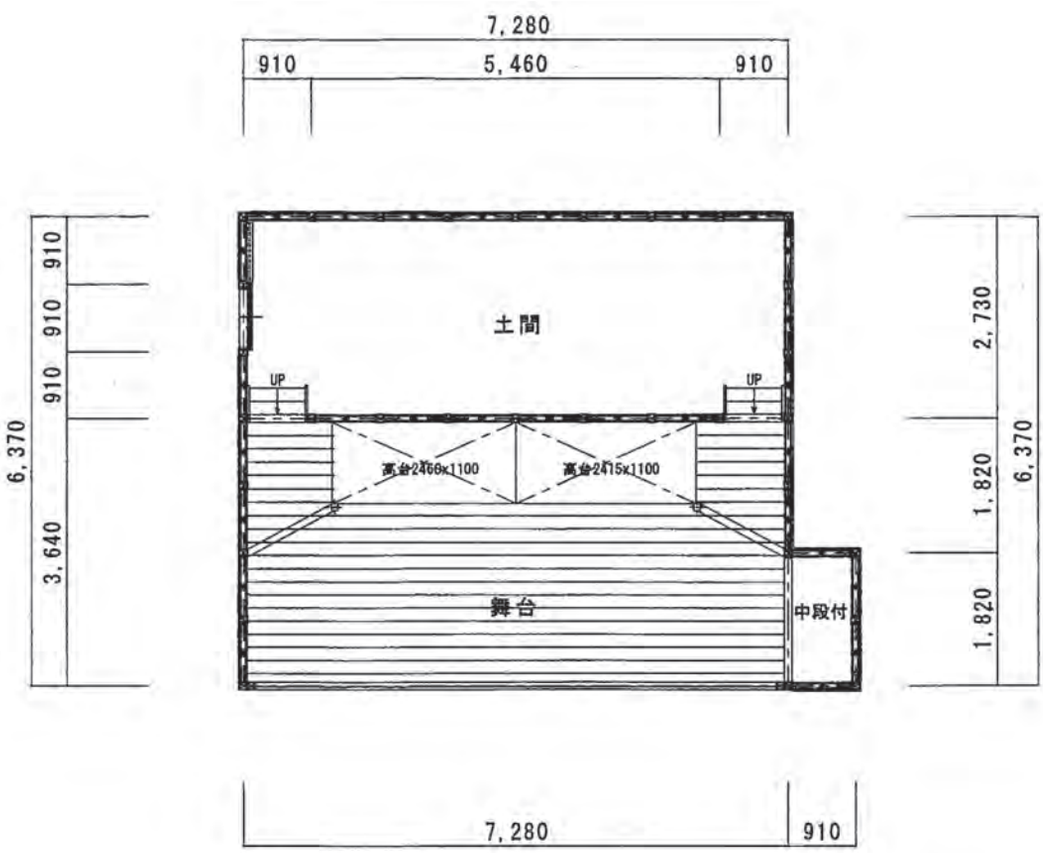
**平成２３年１１月６日（日）　午前10時から開演**

| 出　演　団　体 | 出　演　演　目 |
|---|---|
| 有年農村舞台復活保存実行委員会 | 会長あいさつ |
| １．この本だいすきの会（有年） | 大型絵本の読み語り |
| | （おまえうまそうだね） |
| | （ねずみくんのチョッキ） |
| ２．尾崎小学校恵比寿・大黒舞クラブ（尾崎） | 恵比寿舞・大黒舞 |
| | （恵比寿舞　誕生の巻） |
| | （大黒舞　年徳玉の舞） |
| ３．楢原松涛会（有年） | 雅楽演奏（越天楽、五常楽、抜頭） |
| ４．坂越船檀尻囃子保存会（坂越） | 船檀尻囃子 |
| | 海岸から沖へ出港の時 |
| | ①ドンガラカ　②ギオンバヤシ |
| | ③ナガシ |
| | 沖から入港接岸の時 |
| | ④ギオンバヤシ　⑤ドンガラカ |
| | ⑥シャギリ　⑦サガリ |
| ５．赤穂塩濱音頭保存会（尾崎） | 赤穂塩濱音頭 |
| ６．坂越盆踊り保存会（坂越） | 坂越盆踊り |
| | 【赤穂市無形民俗文化財指定】 |
| ７．赤穂浜鋤き唄保存会（尾崎） | 赤穂浜鋤き唄・実演振り付け |
| | 【赤穂市無形民俗文化財指定】 |
| ８．劇団『蔵』（塩屋） | 殺陣（赤穂浪士吉良邸討ち入り） |

**※平成 23 年 11 月 5 日は、雨天のため中止**




正面立面図




平面図

有年農村舞台実測図（1:100）

台の修理が施されました。また、地元の赤穂市立原小学校の児童やＰＴＡによって、舞台背景絵の製作協力も行われました。そして、「有年地区まちづくり推進協議会（木虎勇会長）」の協力のもと、11 月 6 日、市内各団体の参加を得て 50 年ぶりの復活上演が実現しました。年齢、地域を超えた活動のよりどころとして、今後も積極的に活用していくことが期待されています。

**【調査協力者】**

福井詔生・松井宏安・木下一也・松原公篤・柏木邦宏・澤　収宏・小林良明・立花良和・田中　強・野勢数馬・山田昌弘・平田源也・本田勝一・金礪尊紀・横山嘉人・内波久栄・内波義隆・山本康作・谷口康明・有年地区まちづくり推進協議会・赤穂市立原小学校・赤穂市立原小学校ＰＴＡ・験行寺・有年牟礼八幡神社・有年農村舞台復活保存実行委員会・赤穂まちづくり研究会　他関係各位（順不同、敬称略）

＊1　青年団は昔からある若者の集まりで、地区の行事には大きな役割を果たしました。牟礼地区では、15 才～ 25 才の若者が入っていました。（女子は女子青年団）。全員が入らなければならないという訳ではありませんが、大半の若者は入団していました。

＊2　山本氏、川上氏は大正 12 年（1923）頃、相生市若狭野に作られた芝居の一座「寿劇団」に入っていて、近くの村々に芝居をしに出かけていました（角田一郎編『農村舞台探訪』Ｐ 138~ Ｐ 139）

＊3　相生市には 10 ヶ所の農村舞台がありました（6 カ所現存）。その全てが矢野（5 カ所）、若狭野（1 カ所）で、昔から芝居の盛んな所でした（『相生市史 4』ｐ 67）

＊4　西有年の祭の当番は「北組」「上組・横山」「原組・宮原」「東中野・西中野」の 4 組に分けられています。芝居は○○年祭という区切りの際や熱心な人が「今年やろかー」と声をかけて話がまとまるようでした。一つの組が獅子舞と芝居の両方を担当するということはありませんでした。

【参考文献】

相生市 1987『相生市史』第四巻

赤穂市教育委員会 1985『赤穂の民俗』その三－有年編（一）

赤穂市教育委員会 1986『赤穂の民俗』その四－有年編（二）

有年公民館 1979『ふるさと思考その 2』

角田一郎 1994『農村舞台探訪』和泉書院

文化庁文化財保護部監修 1969『日本民俗資料事典』

## 3　平成 24 年度特別企画展『松岡與之助医学博士没後 80 年
## －松岡眼科病院と有年文化活動をふり返る－』

### (1)　はじめに

有年考古館の玄関から蟻無山方向に目をやると、木立の中に銅像があります。当地、有年楢原新田に生まれ、松岡眼科病院を開業し、地域の医療に力を尽くした松岡與之助博士（明治 21（1888）年～昭和 7（1932）年）を顕彰したものです。松岡眼科病院の敷地内に建てられたこの銅像は、松岡先生頌徳思慕会という、松岡病院の患者達によって作られた会の拠金を基に造られました。

松岡與之助　銅像

銅像建設は、献身的に地域の医療に尽くした博士の恩に感謝する、患者達の思いによるものでした。博士は医療活動に留まらず、『郷土研究』という研究雑誌を創刊するなど、有年の文化活動に大きく貢献しました。有年考古館を設立した、弟松岡秀夫博士（明治 37（1904）年～昭和 60（1985）年）の活動も、與之助博士の存在に大きく影響を受けています。松岡與之助博士とは、どういう人物で、どのような人生を送られたのでしょうか。彼の願いはどのように継承されたのでしょうか。没後 80 年にあたり、彼の足跡をたどってみることにしましょう。

この特別企画展では、與之助博士の孫にあたる松岡徹、壽子御夫妻、與之助博士次女西田美枝子氏の全面的なご協力を得ました。この場をお借りして、厚く御礼申し上げます。展示資料は、注記のないものは全て松岡徹氏所蔵のものであることをおことわりしておきます。

### (2)　幼少期～中学時代

松岡與之助は、明治 21（1888）年 10 月 25 日、赤穂郡有年村楢原（現在の赤穂市有年楢原）に生まれました。松岡家は農業のかたわら染物業を営んでいました。父兼助は、同郡高田村宇野山（現在の赤穂郡上郡町宇野山）より松岡津右衛門の養子となり、松岡家を相続しました。與之助は兼助、母コトの長子で、後に、半助（明治 26（1893）年生）、チカ（明治 28（1895）年生）、圭三（明治 33（1900）年生）、秀夫（明

松岡家家族写真（明治 42 年 1 月 6 日）

松岡與之助（龍野中学校時代）

治 37（1904）年生）、ヒサヱ（明治 41（1908）年生）が生まれました。

與之助は、赤穂郡有年村立原尋常小学校に入学しました。明治 5（1872）年、学制が公布されて以来、教育に関する施策は教育令、小学校令と改定が繰り返されました。当初は就学率の低さが指摘されていましたが、明治の中頃にもなると、小学校入学は当然の通過儀礼という意識が浸透して来ました。

與之助の小学生時代は、明治 23（1890）年に改正公布された小学校令に基づくものでした。尋常小学校の修業年限は 4 年で、明治 31（1898）年 3 月に原尋常小学校を卒業しました。その際に渡された「卒業生徒心得書」には「子ハ幸ヒニ萬世一系ノ皇室ヲ戴ケル大日本帝國ニ生レタレハ其皇室ニ對シテ至誠ヲ盡シテ大恩ニ報イ奉ルヘシ・・・」と記されており、改正小学校令と同時に発布された「教育ニ関スル勅語」を強く反映しています。「帝国臣民」の育成を図る、戦前の教育の基盤が作られようとした時期に、與之助は学校教育を受けることになります。その後、與之助は、上郡村（現在の赤穂郡上郡町上郡）に設置された赤穂郡上郡村外五ヵ村学校組合立上郡高等小学校（修業年限 4 年）に進学します。当時は、まだ有年に高等小学校が無く（明治 36（1903）年に有年尋常高等小学校が開設）、千種川の土手沿いを徒歩で通学しました。時おり、注文の染物を持参したり、途中の高田村與井（現上郡町與井）のあたりで染物を頼まれたりといったことがありました。在学中の成績は「上ノ上」という抜群のもので、明治 35（1902）年 3 月の高等小学校卒業後、兵庫縣立龍野中学校への入学を果たしました。

中学校の開設についても、明治 19（1886）年 4 月の中学校令公布以降、紆余曲折が続きました。姫路以西の播磨地域の住民にとって、念願の中学校（尋常中学校）が設置されたのが明治 30（1897）年のことで、明治 34（1901）年 5 月 1 日より兵庫懸立龍野中学校の名称が使われるようになりました。與之助が入学した時（第 6 回）の志願者が 380 名、その内 76 名が入学するという狭き門でした。與之助のように遠方の生徒に対しては、寄宿舎（養浩寮、明治 32（1899）年設置）が用意されていました。

当時の中学校の教師達は、それぞれの分野に精通している個性的な人物が集まっていました。英語・倫理・西洋史を担当した山崎来代矩はスパルタ式の教え方で、廊下で彼の靴音を聞いただけで、生徒が急に静かになったそうです。しかし、生徒の成長を考慮した真摯な態度は龍野中学校の大黒柱的存在で、彼がその後、群馬縣立高崎中学校に転じた時は惜しむ声が大きかったそうです。当時入学した一年生全員に金銭出納帳をつけさせ、定期的に担任教師に提出させていました。與之助も「中学校在学中、入費記載帳」を残しています。それによると「クツ 2 円 60 銭、帳面 8 銭、算術の本 75 銭・・・」と当時（明治 35（1902）年）の物価が正確に記されています。1 カ月に 1 円の授業料が支払われていますが、中学生の経費として年間 30 円程度かかりました。学費として、年間 7 ～ 8 俵を充てることが出来る程度の農家であることが必要であると言われましたが、龍野中学校の生徒の保護者は農家が多かったようです。父の兼助

は、実直な人柄で家業の染物業、農業に日々励んでいました。研究熱心な性格で、野菜作りにも熱心に取り組み、上郡の野菜の品評会で上位に入るほどの腕前でした。子ども達への教育費は惜しまず、與之助をはじめ弟妹もそれぞれ上級学校へ進学させました。

小学校と同様に中学校も、明治政府の教育政策を反映した過渡的な時期に当たります。龍野中学校の校訓は「報国尽忠」「礼儀廉恥」「身体錬磨」で、体育の際には兵式体操、挙手注目の敬礼法が指導されていました。明治 31（1898）年、姫路に第 10 師団司令部が置かれると、軍事演習の見学などが身近なものとなり、銃剣なども授業で積極的に行われるようになりました。在学中に勃発（明治 37（1904）年）した日露戦争の影響は大きく、卒業生の進路も陸軍士官学校・海軍兵学校などの軍関係の学校が増えて来ました。

カリキュラムについては、当時の校長の裁量に依る所が大きかったようです。中学校開校当初は漢学者も多く、生徒の漢文のレベルは相当高かったとされています。体育は軍事的な色彩の強いものだけでなく、テニス、野球、水泳なども取り入れられました。初代校長・佐藤弘毅はテニス（ローンテニス）の採用に熱心で、教師の中にも積極的に取り組む人がいました。

松岡與之助（第三高等学校時代）

次に、與之助の中学校時代について見ていきましょう。普段は寄宿舎あるいは下宿（個人宅）で生活し、長期休暇前の土曜日の午後などに帰省していたようです。明治 23（1890）年に山陽鉄道が有年駅まで開通し、龍野～有年間の汽車を利用することもありました。前に触れた出納簿によると、当時（明治 35（1902）年）の汽車賃は 12 銭です。時には徒歩で帰省することもあったようで、「ミカン水 2 本 1 銭、小犬丸村」の記述から現在の県道 5 号線を通って帰ったことがうかがえます。校内の與之助の足跡をたどる手がかりとして、明治 35（1902）年に発足した同窓会の会誌『龍雛』があります（第 4 号以降は校友会誌）。その 4 号に、卒業式を控えた明治 40（1907）年 2 月 9 日に開かれた講演会において、「談話」として発表した記事が載っています。演題は「北は南より強し」というもので、南に位置する国よりも北の国の方が戦争など強い例を多く示し、それにもかかわらず日露戦争で日本が勝利したことから、国の位置、規模にかかわらず国民の努力が重要であることを発表しました。それに対し、文芸部長は以下のように記しています。

卒業証書

「（前略）音声大に、且強く、力あり、弁流暢にして態度大にあがる。其論旨の如きは、実に明瞭、論拠確実、記者の不文を以てしては、其活躍の状をうつす能はず。好個の弁士、それよく自愛せよ。談話中の白眉。」

（『龍雛』第４号　龍野中学校友会　明治 40（1907）年５月 31 日　40 頁）

その賞賛ぶりからも、堂々とした演説の様子がうかがえます。

翌月の３月 25 日は卒業式で、６回生 76 名が入学したなか、卒業までこぎつけた者は 32 名。半分以下という厳しさでした。当時の進級の厳しさに加え、経済的事情、健康状態から断念せざるを得なかった者もいたに違いありません。心身両面とも充実した生活であったことは、卒業の際に受けた皆勤賞からもうかがえます。そして與之助の前途は、新たな局面を迎えます。中学校時代を締めくくるに当たって、彼が交友会誌に記した「座右之箴」を紹介します。與之助の人柄、態度を見事に反映したもので、その後の生き方を象徴しているように思われます。

「座右之箴」

一、人事を尽くして天命を待て。

一、天は此世に、善と美とをのみ作り給わで永悪と醜とを交え給うなり。愚鈍も長く生き、聖賢も早く死す。悪人も栄え、善人も窮す。天命それ偉大なるかな。されど、妄りに、天命を呼ぶ勿れ。要は、人事を尽くして、後天命を待つにあり。

一、自らを知れ。されど、他人を、忘るる勿れ。自らを信ぜよ。されど、傲慢なるなかれ。自らを頼め。されど、他人を失える勿れ。自らを省みよ。されど、躊躇する勿れ。

一、中庸は念珠の緒の如きか。総ての徳を一貫す。

一、平和は、一に、愛の有なり。されど、世は平和のみにては、進化せざるなり。世はそれ河の如し。嗚呼。吾人をして河川に、親しましめよ。万千の箴は、其の中に得られん。

（3）　医学修業時代－京都第三高等学校・京都帝国大学・長崎医学専門学校－

明治 40（1907）年７月、與之助は第三高等学校第三部（医学進学課程）受験の為に滞在している岡山市（当時、第三高等学校第三部の分校があった。後の岡山医科大学へと発展する）から、父兼助にハガキを送っています。自らを奮い立たせる文面で決意が伝わってきます。見事合格を果たし、京都での生活が始まりました。当時の高等学校は、９月入学７月卒業という現在話題になっている秋入学であったことがうかがえます。住まいは第三高等学校寄宿舎南寮、全国から集まった俊英７名が同室でした。課外活動として短艇部（ボート部）に所属、選手としての写真も残っています。高校時代は母校との連絡も密で、龍野中学校校長より修学旅行（京都）の宿泊先を知らせるハガキも残っています。明治 43（1910）年７月、第三高等学校大学予科第３部を卒業し、いよいよ本格的な医学の修業が始まります。

第三高等学校短艇部時代

第三高等学校と京都帝国大学とはほぼ同じ

場所に立地しているため、生活にはほとんど変化がなかったように思われます。実習等の授業もあり、比較的自由な生活を謳歌していた高校時代に比べ、多忙な毎日であったと想像されます。大学卒業後、専門分野を決定することになりますが、與之助は眼科を選択しました。比較的貧しい患者の多い眼科を専攻したことは彼の医師としての姿勢であり、民衆の医療事情を考えた上でのことでもあったのでしょう。また、指導教官となる浅山教授の人柄によるものも大きかったようです。弟秀夫は、師との出会いについて「…浅山先生のお話程身に染みたものはないと何時も言ってゐた。どんなお話だったか精しくは聞きもらしたけれど、とても長時間に亘ったので後で手術の準備を整へて先生の御出を待ってゐられた当時の医局長盛先生に叱られたと言ってゐた。」（『松岡與之助論文集』序にかへてより）と記しています。ところが、師と仰いだ浅山教授は大正４（1915）年に急逝、その後を受けた市川清教授が與之助の指導に当たりました。秀夫の表現によれば「浅山先生によって孵化せられ、市川先生によって育てられた。」と言えます。大正５（1916）年に医学部助手、翌年には講師と、順調な研究生活が続けられました。その間、ゑつと結婚、長女綾子も生まれ（大正５（1916）年５月７日）、家庭的にも充実した毎日でした。学会誌にも論文を発表するなど、熱心に研究に励んでいました。現在も、網膜のグリコーゲンに関する研究のために使用した数千枚のプレパラートが残されています。

そうしたなか、慣れ親しんだ京都での生活から、次なる展開を迎えることになります。大正７（1918）年２月12日、長崎医学専門学校教授に任命され、長崎の地に赴任しました。同時に県立長崎病院眼科部長も委嘱され、長崎の眼科学におけるリーダーとして、研究

市川　清　教授

医学部の研究仲間と

長崎医学専門学校時代

及び学生の指導、診察と忙しい日々が続きます。長崎は、江戸時代では唯一といっていいほどの医学の盛んな地であり、多くの医学者、科学者の若い頃の修業の地として有名です。眼科においても、優秀な外国人教師が集まり、最先端の研究が進められていました。当時の長崎医学専門学校の同僚には、歌人として著名な斎藤茂吉（明治 15（1882）年～昭和 28（1953）年）が精神科教授（大正 6（1917）年 12 月 3 日～大正 10（1921）年 3 月）として勤務していました。特別に交流があったことはうかがえませんが、「長崎くんち」か何かの祭の折に一緒になり、長女綾子が「モキチ、モキチ」と片言で語っていたことが伝えられています。長崎赴任中は弟が遊びに来たり、郷里の家族との交流も続きました。別府、阿蘇などの九州の観光地の絵ハガキが沢山残されていることからも、休暇の際には旅行することもあったのでしょうか。

しかし、そうした充実した日々も続きませんでした。病を得て大正 10（1921）年 2 月 23 日休職を命ぜられ、同年 8 月 20 日退職することになります。医学研究者としての最前線の現場から離れざるを得なかった與之助の心情を察すると、その無念さは想像以上のものだったに違いありません。弟秀夫も「眼科医学者としての前途を放棄せざるを得なかった阿兄の心情を思ふ時気の毒でならない」と記しています。

（4） 松岡眼科病院の設立から急逝、その後

家族とともに郷里に戻った與之助は、次第に健康を回復しました。静養中の與之助の元には、長崎の同僚からの健康を祈念する内容や、長崎の状況についての相談などの書簡が多く残され

松岡眼科病院

ています。こうしたことからも、與之助の長崎での献身的な仕事ぶりがうかがえます。與之助の名声は郷里の人々にも広く知られており、診察の依頼が寄せられるようになりました。そこで、大正 12（1923）年 7 月 1 日より自宅において医業を開始することになりました。現在でも当時、薬を渡していた棚の名残を見ることが出来ます。

自宅での診察の傍ら、與之助は京都、長崎での研究をまとめ、学位論文の作成にとりかかります。当時の衛生状態等の理由から患者の多かった、トラホーム（トラコーマの旧称、クラミジア感染による結膜炎）についてのものでした。忙しい合間に執筆をまとめ、大正 13（1924）年 11 月、京都帝国大学より医学博士の学位を得ました（「トラホーム斑点状白色角膜溷濁」）。並行して自宅前の田を用地とし、病院が建てられることになりました（病院用地の田は収穫高の多い良田だったそうです）。隣の松岡重太郎に建築を依頼、設計は與之助が行ったようです。病院は完成し、大正 14（1925）年 1 月 1 日より松岡眼科病院がスタートしました。その建物の雰囲気は、長崎医学専門学校附属病院の影響を受けていると思われます。道路を隔てた南側には入院病棟も建設されました。白内障の手術なども行っていたため、入院施設が必要だったのです。当時の病院は、現在の様に休診日も無く、急患も昼夜関係なく対応していました。入院患者を抱えていたため、休診ということはありませんでした。次女美枝子の記憶の上では、教専寺（松岡家の檀那寺）の御遠忌の際、にぎやかに稚児行列が行われた時に午後休診になったくらいでしょうか。母コトは熱心な浄土真宗門徒で、朝夕の勤行を欠かしませんでした。病院は、職員、看護婦（当時）も多く勤務していたため、その食事作りなど家族も協力して行っていました（看護婦養成所も設置されていました）。

與之助は酒、煙草をたしなむこともなく、読書することが趣味といえるものでした。唯一の「道楽」といえば、本を集めることで、医学雑誌など外国の文献も含め、創刊号から揃えていました。江戸時代の珍しい医学書も購入しています。妻や母は、「本ばかり買う」とこぼすことも多かったそうです。また、病院内には「研究室」も作られていました。実験器具、薬品にあふれたその部屋は、他の人には「こわい所」という印象が強かったようです。火を出すこともあるかもしれないという心配から、父兼助は、研究室のすぐ外に小さな池を作り、万が一の時の為に備えていました。

松岡眼科病院での與之助の評判は、広く知られることとなります。與之助の診察ぶりについて、「松岡先生頌徳思慕会趣意書」は次のように記しています。

（前略）勝レサセラレザル御健康ヲモ患者ニ接セラル其ノ病者ノ診療ニ当ラルルヤ貴賤貧富ノ差別ナク厳正犯スベカラザル御態度ト御仁慈溢レタル御熱誠トヲ以テ常ニ変フル事ナク確固ナル信念ノモトニ秘術ヲ尽サル様真ニ俗界ヲ去ッテ神域ニ入レルノ感ナクンバアラズ（後略）

松岡眼科病院仲間と（中央が與之助、右前が秀夫）

近隣に留まらず遠方からも多くの患者が

松岡秀夫結婚式にて

集まり、現在の有年考古館から荒神社に至る道は賑やかでした。このころ弟の秀夫は、與之助と同様に京都帝国大学医学部に進学し、兄と同じ眼科を専攻します。同じ市川教授門下となり、帰省時は病院を手伝うこともありました。秀夫は、「私が市川先生の教室に御厄介になる様になってから阿兄の私に対する態度が一変して従来の親子の様な関係から一躍非常に親しい同僚と言ふ様に取り扱はれる様になった。休暇で帰って行くと、お前は新しい眼科学んでゐるのだからと言って色々相談も受ける様になった。反対に私には阿兄の学識が漸く分かってきてかへって敬う様になったので、妙な対称であった。（後略）と記しています。

患者達の與之助に対する敬意は、「松岡先生頌徳思慕会」という形で結実します。松岡病院の患者達が、一口 50 銭という醵金を集め、銅像を建立しようという声が挙がりました。昭和 5（1930）年 2 月のことでした。

與之助は病院での診察だけでなく、地域の衛生状態の向上等、生活環境の改善にも取り組みました。昭和 6（1631）年 1 月に創刊を始めた『郷土研究』第 4 号の「本年度徴兵検査成績」によると、昭和 6（1631）年度の赤穂郡徴兵検査対象者 728 名中、トラホーム患者 266 名という高い率を示していますが、その内有年村 50 名についてはトラホーム患者 9 名という状況でした。記事によると、トラホームは減少傾向にあることから、與之助の尽力があったことがうかがえます。また、学校医としても精力的に診察を行っています。原尋常小学校奥吉重清校長（当時）により、小学校児童のトラホーム全滅をめざし、児童を奉仕的に治療したことに対する感謝の気持ちが記されています（『会報・第一号』原尋常小学校同窓会編 3 頁）。

しかし、昭和 7（1932）年 5 月 7 日、弟秀夫の結婚式の後頭痛を訴え、その後岡山医科大学附属病院に入院、6 月 3 日には帰らぬ人となってしまいました。（享年 45 歳）。松岡眼科病院の大黒柱が失われてしまった驚きは、家族はもとより患者達にとって大きな損失でした。当面の診察は母校京都帝国大学の応援も得、7 月からは弟秀夫が病院を引き継ぐことになりました。継続中であった與之助銅像建設の話は進められ、昭和 8（1933）年 5 月 27 日、除幕式が行われました。碑文は恩師市川清博士によるものです。かって市川教授在職 15 周年記念に、教室を代表して祝辞を述べた愛弟子である松岡與之助の碑文を書くとは、予想だにせず、教授にとっても残念であったと思われます。

さて、その後の松岡眼科病院のことに少しふれておきましょう。與之助と同様、弟秀夫も精力的に診察を続け、眼科として松岡病院は有名でした。有年駅に降りた患者達は徒歩で病院に向かい、行列が出来るほどでした。外部の医師の応援も得て、耳鼻科の診察も行ったこともありました。更に、與之助の長女綾子が父の遺志を継いで医学専門学校に進み、眼科医としての道を歩み始めていました。叔父秀夫の応援も得て、綾子は松岡病院（のち松岡医院）を継承し、結婚した夫、敏夫（内科医）とともに有年の医療に尽力しました。敏夫は、かって與之助が教鞭をとった長崎医科大学で医学を修めました。地域の人々は親しみを込めて「綾子先生」「女

医先生」と呼んでいました。地元、原小学校、有年小学校、有年中学校校医も、敏夫とともに長く勤めました。

平成 17 年 1 月 7 日、綾子は亡くなり、松岡病院は幕を閉じました。病院は同年 3 月に閉院となりましたが、地域への医療活動という点では、綾子の長男、徹（眼科医師として岡山県内で勤務）、その妻壽子（耳鼻咽喉科医師として上郡町内で勤務）へと引き継がれています。さらに赤穂市内では、與之助の三女暢子の長男周が、坂越において澤田医院を開業しています。

### (5)　有年における文化活動―『郷土研究』の創刊

明治 41（1908）年 10 月、政府は戊申詔書を発布しました。日清・日露戦争の勝利に酔うことなく勤倹貯蓄、産業奨励に励めといった内容で地方の自力向上を促すものでした。これを基に地方改良運動が展開します。従来の風俗にとらわれることなく、合理的に農業政策、町村合併を促進させることを奨励し、地方の生産力の向上を図ろうとしました。旧来の風俗等が否定されようとする風潮の中で、地域の歴史をふりかえり、今一度足元を見直そうとする動きも出て来ました。

こうした社会情勢を踏まえたうえで、與之助の活動を見ていくことにしましょう。與之助の文化活動を象徴しているものが、昭和 6（1931）年 1 月に創刊された研究雑誌『郷土研究』です。病院内に郷土研究事務所を設置し、編集・発行にあたりました。『郷土研究』は地方自治、郷土史、産業、自然科学、保健衛生、文学など内容が多岐にわたっています。「郷土を知れ！郷土を誇れ！郷土を愛せ！」のスローガンを掲げ、地域の住民とりわけ青年層の覚醒を願うものでした *1。『郷土研究』は有年村全戸に配布され、原稿を多く募りました。現在の住民に留まらず「出郷の諸

『郷土研究』第一年第一號～第二年第一號

君に特に乞願す」として、郷土を離れた出身者に対しても「生れた故郷育てられた自然は一つであり親を同じうした兄弟同志」として、雑誌への参加を求めています（『郷土研究』第一年第一号 16 頁）。

與之助の郷土史研究については、同郡矢野村の郷土史家小林楓村（久之助）の影響を見ることが出来ます。『郷土研究』第一年第二号の「播磨鑑ニ見エタル有年村」の中で、「私ガ大正十一年七月矢野史談会ヲ経営シ謄写刷ノ会報ヲ発行シ名前ヲ郷土研究トシマシタ。名前ノ同ジノガ何ヨリ嬉シクアリマス。然シ今日ハ改メテ「やの」ト致シテキマス。」と記しているように、近隣の先駆者に大いに刺激を受けたと思われます。

同号に與之助は「有年村楢原新田の郷土史的考察」と題して、古文書を分析した論文を発表しています。與之助の歴史に対する興味はすでに、龍野中学校時代に広く知られており、講演会の批評の中で、「得意の歴史的評論をなして…」と記されています。（「龍雛　第 4 号」39 頁）。與之助の論文は記名のものだけではありませんでした。「愛村生」「新田生」「青洲生」のペンネームのものは、全て輿之助が書いたものです。歴史・自然科学・医学と多岐にわたる内容を、忙しい合間に執筆していたと思われます。推敲を繰り返した大量の原稿が残されています。『郷土研究』の印刷所は高田村與井（上郡町與井）のアサヒ印刷所とありますが、次女美枝子の思い出として、打ち合わせか校正の為に、妹暢子と一緒に姫路に連れて行ってもらったことがあります。ほの暗い廊下のような所で座って待っていただけで、他の所に連れて行ってもらった訳ではありませんでしたが、忙しい父との数少ない外出として心に残っています。

『郷土研究』の発行と並行して、弁論大会も行われました。青年団による弁論大会も当時盛んに行われていましたが、與之助は松岡病院弁論部をつくり、「郷土青年弁論会」を開催しました。昭和 5（1930）年 2 月 11 日（建国祭）の夜に、松岡病院講堂で第 1 回の郷土青年弁論会が開かれ、22 題の演題が挙がっています（『郷土研究』第一年第一号 13 頁）。第 2 回は昭和 6（1931）2 月 11 日に行われ、有年村、高田村の青年約 100 名が参加しました。その際、農村青年問題座談会も開かれ、青年の勉強方法、体育競技、娯楽芸術作品、社会奉仕、宗教、産業といった項目について、3 時間余り活発に議論されました。その後、弁論大会に移り 20 題の演説が披露されました。「息をもつかず火の如き熱烈さを以って野次拍手の中に相続き、遂に夜を徹し翌朝に及んで終わった」（『郷土研究』第一年第二号 15 ～ 16 頁）という盛況ぶりでした。

與之助は、松岡病院の施設を会場として提供するだけでなく、地域のために広く開放しました。自然科学研究のために院内の研究室を開き、顕微鏡、ミクロトーム、孵卵器、温室等機器、薬品を自由に使用してもよいこととしました。また、図書の閲覧、貸し出しも行っていました。自らの郷土に関する研究も進めるかたわら、この『郷土研究』を青年達が利用し、更なる飛躍をはかることを願っていました。第三号の「あと書き」で「段々と号を追ふて青年諸君の投稿者が増加する傾を見るやうになりましたことは郷土将来の為めによろこぶべきであり誠に心強よい感がします」（『郷土研究』第一年第三号 20 頁）と、青年層の意識の高まりに期待を寄せています。

與之助にとって、郷土はかけがえのないものでした。「私にとって楢原新田は真の郷土である。自分の生まれ、培育せられ、生活し、そして土になるべきその土地である。」（『郷土研究』

第一年第二号 12 頁）に彼の思いが込められています。『郷土研究』第二年第一号（5 号）の最後に、昭和 7（1932）年 2 月 11 日に第 3 回の弁論大会の広告が出ています。第 3 回の大会もさぞ盛況だったことと思われますが、その様子を知ることは出来ません。第 6 号の編集のさなか病に倒れ、発行することなく帰らぬ人となってしまったからです。『郷土研究』第二年第一号が最終号となってしまいました。周囲はもとより與之助自身、予想だにしなかったと思われます。有年村前村長小河治郎吉にあてた原稿依頼も、そのまま残されています。少しずつ軌道にのり始めた矢先、郷土の青年活動の羅針盤ともいえる與之助を失った痛手は、相当のものだったことでしょう。

與之助が亡くなった昭和 7（1932）年は、満州国の建設、五・一五事件と軍部の台頭、戦時体制への道を歩み始めた年でした。自力更生運動が行政の関与するところとなり、郷土の下からの盛り上がりではなく、行政を通じた上からの統制という図式になっていきました。しかし與之助の遺志は、弟秀夫による「有年文化協会」の設立という形で受け継がれていきます。戦時体制下の制約のある中ではありましたが、與之助が蒔いた種を、弟秀夫が何とか生長させようと様々な活動を行うことになります。人材育成という点からすると、その第一に挙げられる人物が弟秀夫であるかもしれません。更にもう一人、忘れてはならない人物がいます。與之助のすぐ下の弟半助（明治 26（1893）年～昭和 46（1971）年）です。彼は大阪高等工業で学んだのち、北海道で醸造業を修め、松岡酒造を経営していました。軍人（陸軍中尉）でもあった半助は、在郷軍人会有年村分会長で、『郷土研究』創刊号に「有年村保城ヶ丘忠魂碑」を寄稿しています。また、先にふれた座談会にも出席し、青年達との議論に加わっています。半助はその後有年村村長をつとめ、その役職で昭和 20（1945）年 8 月 15 日終戦を迎えました。長兄與之助の存在を最も身近に感じながら成長した彼らが受けた影響は強く、そのことを通して郷土有年のために力を尽くしたことがわかります。

### （6） おわりに

「有年聖人」。松岡與之助博士がこのように言われる理由が、彼の人生をたどってみて理解することが出来ました。博士の存在なくして、その後の有年の文化活動を語ることは出来ません。今回の特別企画展を通して、『郷土に生きる』ことの意味を改めて考えて頂ければ幸いです。最後に『郷土研究』の最終号に掲載された「二葉のまめ」という詩を紹介します。作者は古狂生とありますが、松岡與之助博士御自身の作と思われます。

二葉のまめ　　古狂生

私は去年荒ずきの
田圃の中にころげ出た
たった一つの豆粒だ
一つの豆がころげても
さしたるひゞきも音もなく

霜や霰のさむさには
あまりにかよわいこの姿
だけれど根には力あり
しっかり「土」をだきしめて
一分一厘展びて行く

黒い「ま土」にいだかれた
埋れて居ても春が来りや
皮も破けて根も下ろし
若い二葉も芽を出す
出ては見たけれど凄い風

二葉は雪をかきわけて
氷雨にこほらず青々と
日ざしめがけて伸びて行く
大日の恵まともにうけて
暢びて茂って花が咲き
やがて実のりを見るだらう

特別企画展開催にあたり多くの方々の御協力を得ました。名前を揚げて謝意とさせていただきます。なお、本文中敬称は省略させて頂きました。

松岡徹・松岡壽子・西田美枝子・澤田暢子・富山和子・横山博光（順不同・敬称略）

註１　與之助の『郷土研究』の発刊の動機、目的とするところは人物の養成にありました。昭和６（1631）年４月、岡兵庫県知事が有年村を訪れた時に述べた「農村の救済は人である。将来人物養成に努力せん」の言葉に感激し、農村救済問題が金銭物質よりも先ず人物の養成によって解決せらるるものなるを訓へられたるところに吾人の発奮激励を感せしめられる」と記しています（『郷土研究』第一年第二号 20 頁）。郷土をになう人材の育成、そのために郷土を知り、誇り、郷土を愛するのであると訴えていたことが理解出来ます。與之助の夢であったという幼稚園の建設は、こうした郷土をになう人材を幼少期の頃から育成したいという願いによるものであったと考えられます。

【参考文献等】

（1）　百年史編集委員会編 1997『龍野高等学校百年史』　25・29・34・60・65 頁
（2）「中学校在学中入費記載帳　龍野中学校第１年級八学級　松岡與之助」（松岡徹氏所蔵）
（3）　龍野中学校友会 1907『龍雛』第４号　8・39 ～ 40 頁
（4）　松岡秀夫編 1934『故松岡與之助論文集』　1・2 頁
（5）「松岡醫学博士追想紀念　思慕録　松岡先生頌徳思慕會」
（6）清水豊章 1985「有年考古館設立史―松岡先生の足跡―」『兵庫史の研究』　725 頁

## 4　平成 24 年度特別展『装飾土器と搬入土器－弥生時代の墓とマツリ－』

### 0　飾るということ

土器は本来、水を入れたり、食物を煮たりするために作られた容器でした。しかし単なる容器という働きだけに満足できなくなった人々は、様々な飾り付けを始めました。単なる容器であるはずの土器に、なぜこのような飾り付けがなされるのでしょう。それは今がそうであるように、弥生時代にも「見た目」が欠かせないものだったのではないでしょうか。そしてその「見た目」は、現代の私たちが考えるようなファッション＝流行というだけではなく、一部のものは、当時の宗教や習俗などに深くかかわっていたようです。当時の人々にとって、装飾や文様をつけることには、とても大きな意味があったのでしょう。

さて、みなさんが縄文時代や弥生時代を思い浮かべたとき、どちらの時代の人々が装飾的な土器を作っていたと思いますか？おそらく、みなさんは縄文土器の方が飾り立てられていると思うでしょう。およそ正解です。しかし、実は縄文時代にも装飾をしない土器を作っていた時期や地域がありました。また弥生時代でも、たくさんの装飾がある土器を作っていた時代や地域があったのです。

今回の特別展では、装飾が少ないと思われている弥生時代の中でも、例外的に特別な文様が施された、弥生時代後期（約 2,000 年～ 1,800 年前）の東部瀬戸内地域（播磨・吉備・讃岐周辺）を取り上げます。そしてこの地域が、古墳時代の幕開けに果たした役割についても、考えていきましょう。

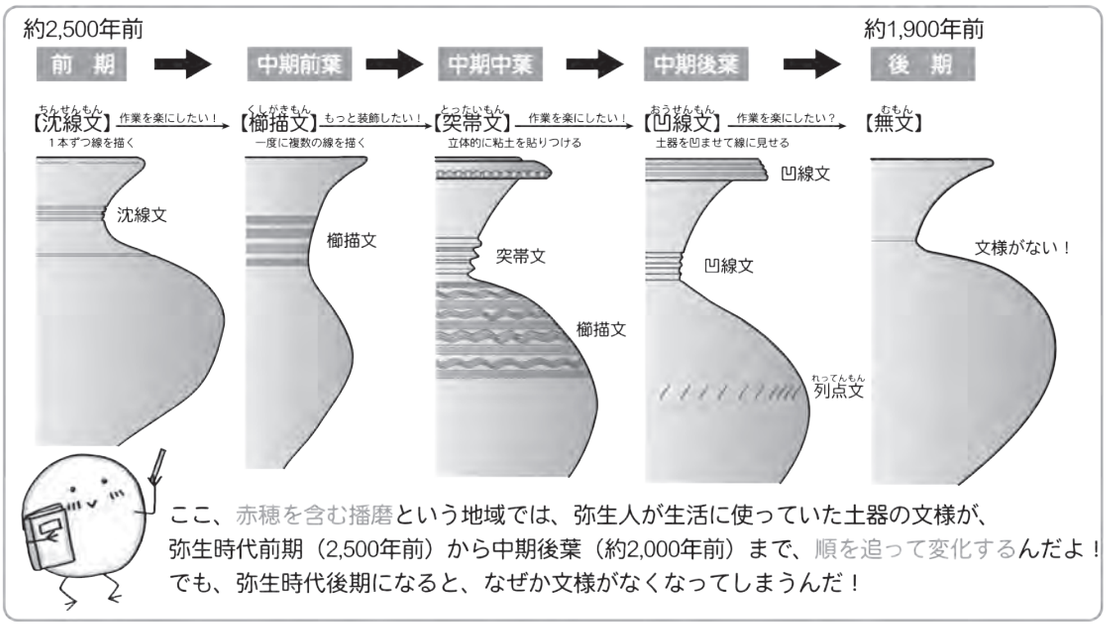
### 1　弥生時代の飾られた土器

#### （1）弥生時代中期以前の「飾られた土器」

弥生土器はふつう、文様が少なくとてもシンプルだと言われています。しかし実は、弥生時代中期頃の土器について見ると、全国どこの地域にも文様が描かれた土器が見つかります。弥生時代中期の人々は、日常生活に、文様を施した土器を使っていたのです。

発掘調査をすると、ムラの中でも装飾のある土器がよく出土することから、人々がこのような土器に特別な意味を持たせていなかったことがわかります。また、土器に描かれていた文様は、弥生時代前期から少しずつ変化していく過程がわかっており、単なる流行の変化と言っていいかもしれません。

弥生時代中期までは、こうした文様の描かれた土器が、ムラの中やお墓など、どこでも見つかります。当時の人々は、ムラで日常的に使っていた土器と、亡くなった人に墓でお供えしていた土器とは、同じものを使っていたようです。時々、墓から見つかる土器には、底に穴を空けたものが見つかります。しかし、こうしたマツリのために特別な形の土器が作られることは、九州地域や東海地域などを除いて、ほとんどありませんでした。

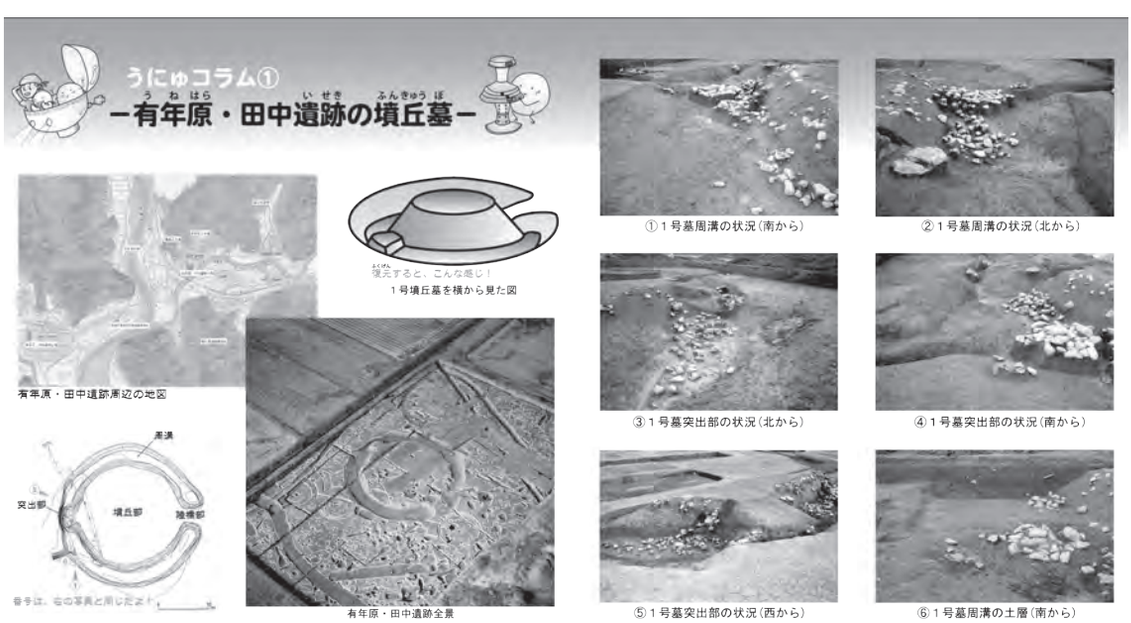



播磨における弥生土器の変遷

（2）弥生時代後期の「飾られた土器」

弥生時代後期（約 1,900 年前）になると、ムラで日常生活に使っていた土器に、大きな変化が出てきます。土器に文様をほとんど施さなくなり、製作の跡がそのまま残されるようになってしまうのです。その一方で、とても念入りに装飾された土器が出てきます。よく装飾された土器の代表的なものには、水やお酒などを入れる壺と、壺をのせて高く捧げるための器台とがあります。これらは、とても大きくて丁寧に作られていることから、飾られた土器の中でも、もっとも大事なものと考えられていたのでしょう。特に飾られた器台や壺の出土量が多い東部瀬戸内地域がこの風習の中心地だったようです。

赤穂市有年原・田中遺跡墳丘墓のように、日常生活にはほぼ使わないような大きさで、特別な文様、装飾のついた土器を墓に供える風習も、東部瀬戸内地域で発達します。器台は、弥生時代中期後葉（約 2,000 年前）に生まれた土器ですが、はじめはムラでしか使いませんでした。




うにゅコラム１　有年原・田中遺跡の墳丘墓

弥生時代後期になって、墓へのお供えにも多く使われだしたのです。この風習は、大阪府や奈良県などではほとんど見られず、東部瀬戸内地域の弥生人たち独自のものであったようです。

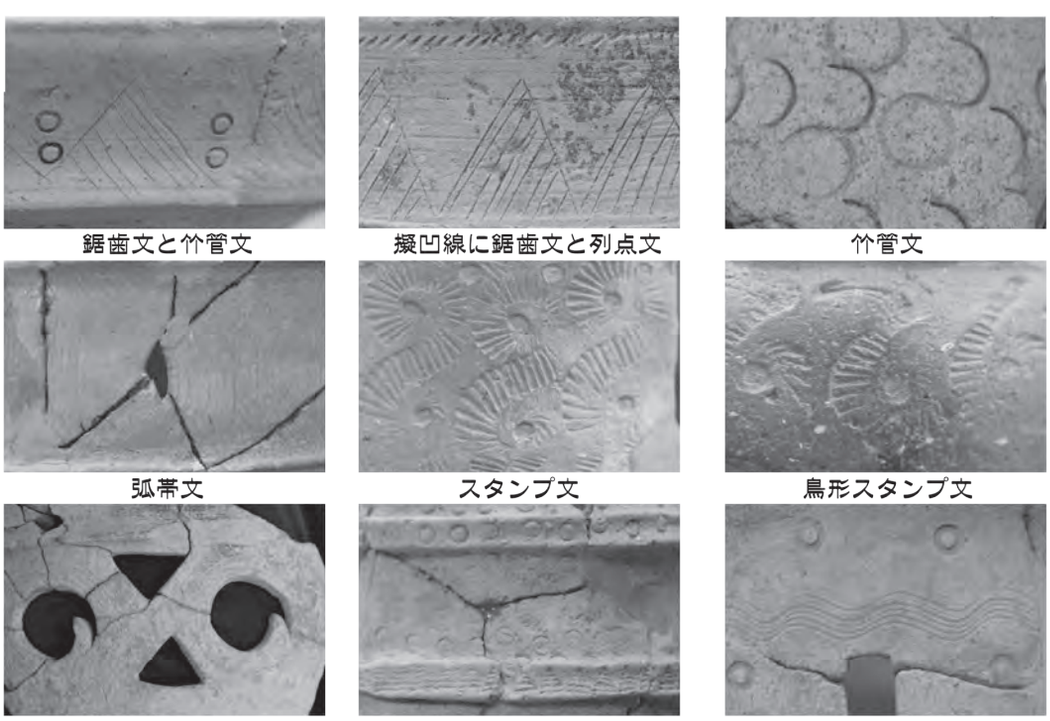
このように、土器の形やどのような場面で用いられたかの違いを調べることによって、当時の人々が、どのような地域の人々と日常的に交流していたのかを知ることができます。しかも、同じような土器を墓に供えるということは、兵庫県南西部から岡山県にいた弥生人たちは、お互いの地域の習慣を見聞きしていたり、もしかすると、よその地域のお葬式に参列していたのかもしれませんね。

赤穂にも、他地域から多くの弥生人が来ていたのでしょうか？それを調べるためにも、土器は良い材料となります。次は、「他の地域から運ばれた土器」について考えてみましょう。

（3）　日常土器と非日常土器へ－土器の機能分化－

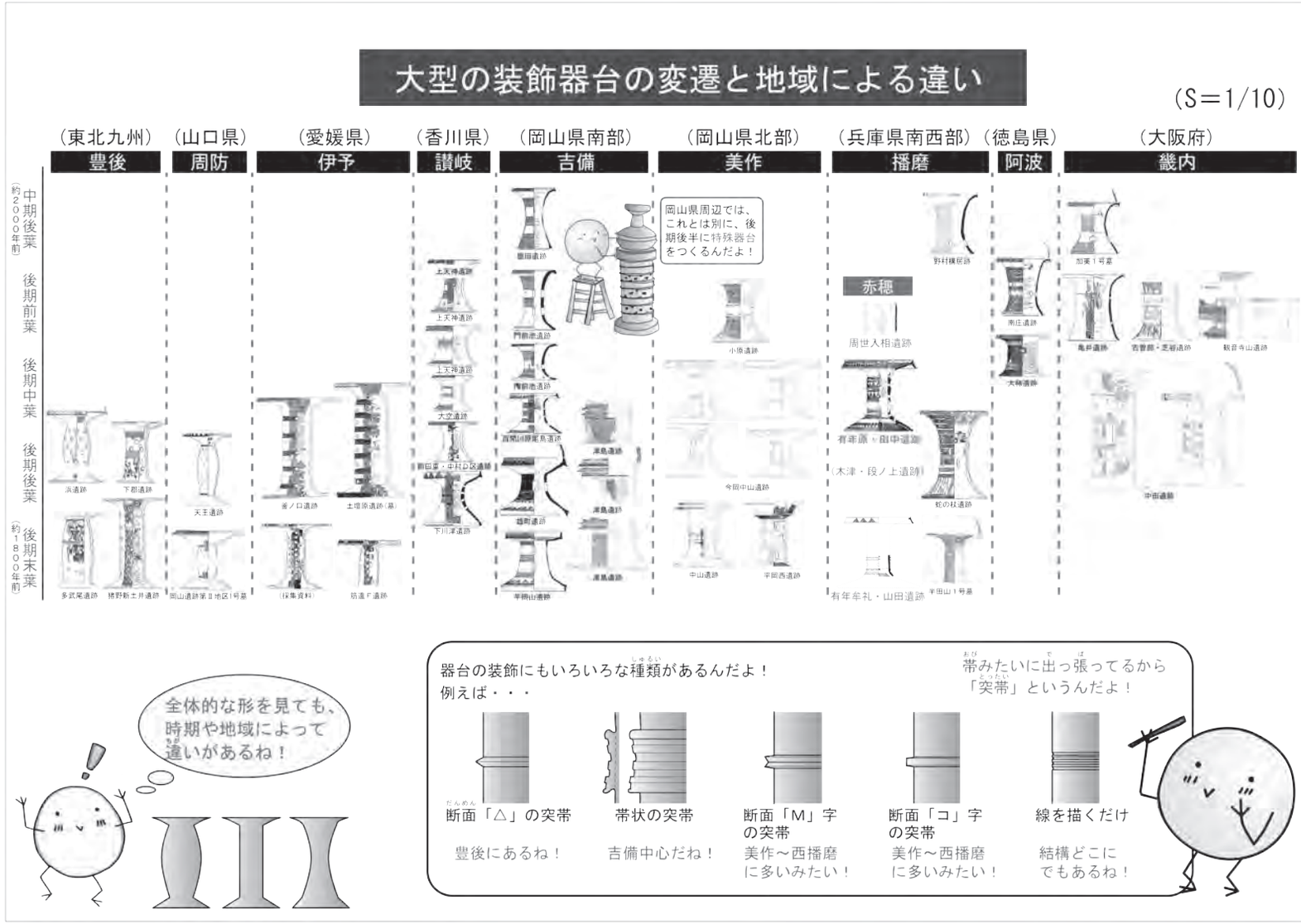
日常生活に装飾性豊かな土器を使っていた弥生時代中期でも、終わり頃になると各地で小さな変化が起こり始めます。日常生活に使っていた土器を一回り以上も大きく作り、さらに特別な装飾を加えた土器が出現するのです。こうした動きは、岡山県で始まったとされています。弥生時代中期末のこうした動きは、後期になると新たな局面を迎えます。日常生活の土器がシンプルなものになっていく一方、特別な土器は装飾性豊かになっていくのです。

この変化が最もよく見えるのは、水や酒などを入れるための壺と、壺を載せて高く捧げるための器台でした。器台は、弥生時代中期後半（約 2,000 年前）から全国各地で使われ始めますが、大型の器台は主に西部瀬戸内（広島県～愛媛県中心）と東部瀬戸内（岡山・香川県～兵庫県南西部中心）で、それぞれ地域性を持ちながら、装飾がなされ、また大型化していきました。一方、近畿地方では、器台の出土数自体が瀬戸内地域と比べると少ないため、壺と器台を用いたマツリを行うという習慣は、東部瀬戸内周辺で盛んだったようです。



鋸歯文と竹管文　擬凹線に鋸歯文と列点文　竹管文
弧帯文　スタンプ文　鳥形スタンプ文
巴形・三角形透かし　竹管文とスタンプ文　波状文と竹管文

弥生時代後期の文様あれこれ




大型の装飾器台の変遷と地域による違い

## 2　弥生終末～古墳初頭期の運ばれた土器

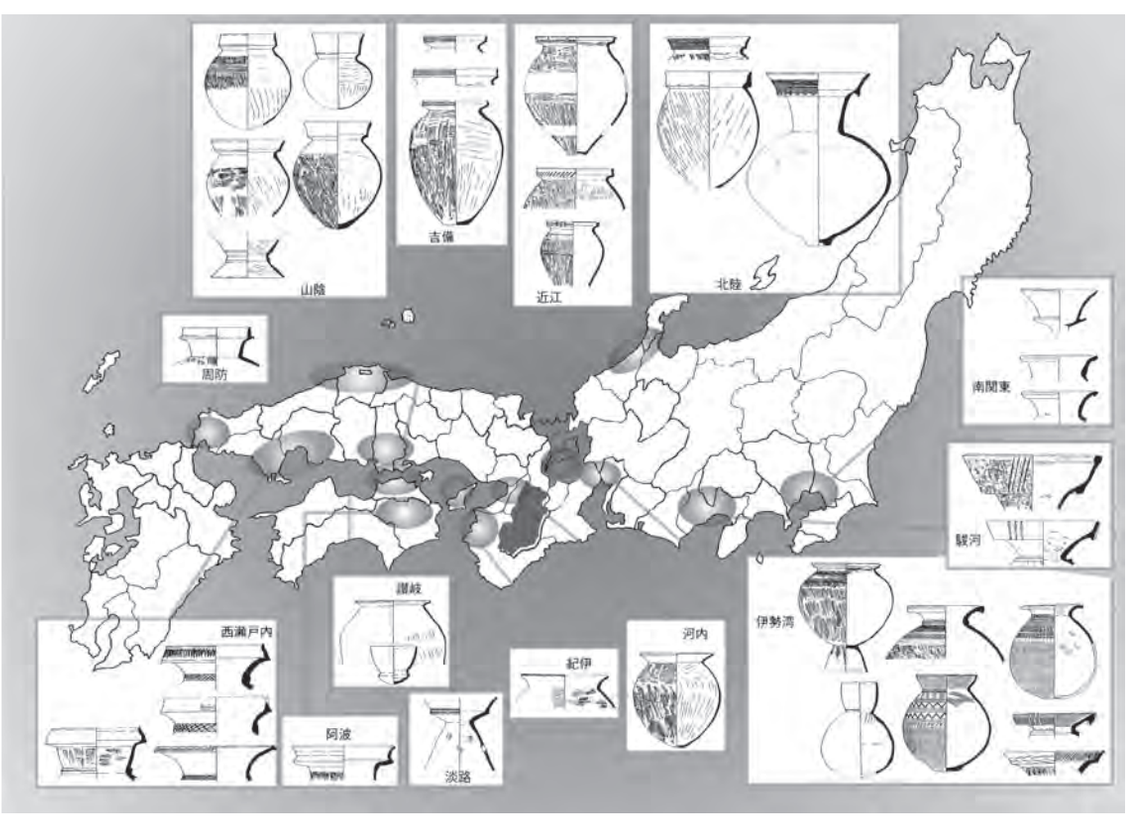
### （1）ムラに運ばれた土器

弥生時代の終末期～古墳時代初頭期（約 1,800 年前）になると、全国各地の土器が広く運ばれるようになります。赤穂市周辺の遺跡では、岡山県、香川県の高松平野、島根県や鳥取県といった日本海沿岸地域、大阪府の大阪平野などで作られた土器がたくさん見つかっています。これら運ばれる土器の多くは、煮炊きをするための薄い甕であり、壊れやすいために持ち運ぶことがとても難しいものです。貯えるための壺ではなく煮炊きに使う甕が動くことは、人の移動があったことを示すと考えられています。また、こうした壊れやすい甕を遠くに運び込むことができる運搬技術が発達したことも、背景にあるのでしょう。

### （2）墓に運ばれた土器

それまで関わりのなかった地域から、多くの人々が訪れ、交流が始まったことで、弥生人たちの社会にも少しずつ変化が訪れます。例えば、香川県や岡山県などから、巨大な土器の棺おけが運ばれ始めます。こうした土器は、ムラでの日常生活用とは考えにくく、埋葬やお葬式のためにわざわざ大きな土器を特別に運び込んだに違いありません。

これは、人の移住に伴って婚姻関係ができ、他地域の方法で埋葬が行われたのだという説もありますが、別の説として、埋葬に使う土器として特別な価値があった可能性や、政治的な意図で運ばれた可能性も捨てきれず、多くの謎が残ります。では赤穂のお墓では、どのような変化があったのでしょうか。




奈良県桜井市纒向遺跡に運ばれた全国各地の土器（寺沢薫■■を改変）

## うにゅコラム②
## ー円形周溝墓と方形周溝墓ー

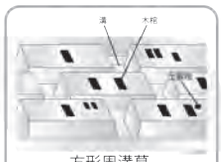
このあたりで見つかる、弥生時代の代表的なお墓は、円形周溝墓と方形周溝墓なんだ。「周溝墓」は字のとおり周りに溝をめぐらした墓のことで、丸いものと四角いものとがあるんだ。ただ丸いか四角いだけの違いに見えるだろう!?でも実は、大きな違いがあるんだよ。

円形周溝墓は、岡山県から香川県で生まれたもので、その後、播磨に入ったのち、大阪の方へと広がっていく「東瀬戸内系の墓」。埋葬は必ず１人なんだ。

方形周溝墓は、もっとも古い墓が大阪周辺にあって、あとで播磨にも入ってくる「大阪湾岸系の墓」。大阪や京都では、円形周溝墓とは違い、数十基の墓が並んで築かれていて、しかも、１つの墓にいくつもの木棺が納められていたんだ。

こういう慣習の違いは、墓に埋葬された人々のムラの、社会のあり方までもが違うと考えていいと僕は考えているよ。

円形周溝墓
上から見ると丸く見えるから「円形周溝墓」。墓はそれぞれ単独で築かれるんだ。埋葬施設（木棺）も一つだけなんだよ。




方形周溝墓
上から見ると四角く見えるから「方形周溝墓」。墓は溝を共有して築かれることが多いんだ。埋葬施設は複数あってもいいんだよ。

（京都府下植野南遺跡）

うにゅコラム２　円形周溝墓と方形周溝墓

## うにゅコラム③
## ー播磨の周溝墓ー

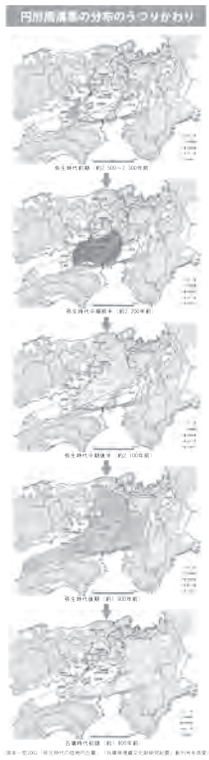
播磨は「円形周溝墓地帯」の代表格と言われることもあるんだけど、実は方形周溝墓の方がたくさん見つかってるんだ。

だいたい、弥生時代中期には方形周溝墓が一般的で、後期になると円形周溝墓がいくつか見つかる、というのが播磨だけでなく近畿地方全体の特徴かな。

ただ播磨は、弥生時代中期に円形周溝墓が多い唯一の地域だから、円形周溝墓が目立つように見られてるんだよ。

あとは、赤穂市の有年原・田中遺跡の墳丘墓の存在も、そのイメージを決めているね！

赤穂は、分布範囲に入ったり入らなかったり、結構いろいろと変わっているようだね。
ちなみに石器の素材も。香川や徳島から運ばれるものがあるんだ！




うにゅコラム３　播磨の周溝墓（岸本一宏 2002 を改変）

## うにゅコラム④
## ー集団墓の慣習ー

播磨の周辺地域を見てみると、いろいろな種類の墓があるんだ。西方の岡山県や広島県では、山の上に数十～数百基の木棺や石棺が納められる集団墓地があるんだよ。

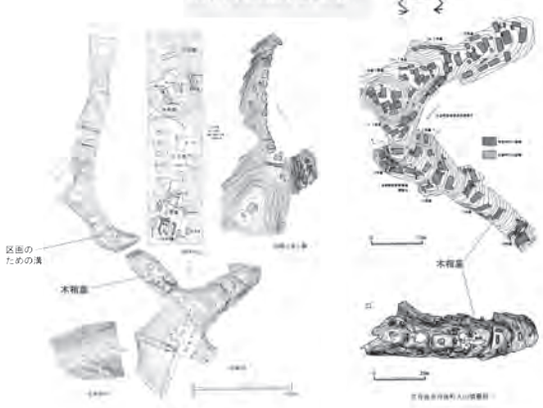
北方の兵庫県北部と京都府北部では、岡山県ほどではないけれど、山の上に溝を掘って区画し、集団墓地を作ってる。

東方の大阪府や京都府南部、滋賀県を見てみると、低地に方形周溝墓を数十から数百の単位で並べるように作るんだ。

こんな風に見ていくと、播磨には集団墓と呼べるような墓がほとんどないことに気付くんだよ。その数少ない事例が、佐用町の吉福遺跡。佐用町なので播磨でも北西部にあたるんだけど、集団墓というあり方は岡山県に近いよね。西播磨は、岡山県東端にあたる吉井川流域と近い文化があったと、と、僕は考えてるんだ。

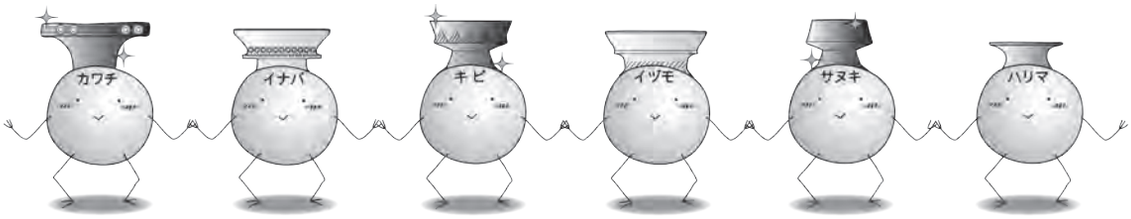
下の図で、たくさん見える四角い線は、ぜんぶ木や石でできた棺おけなんだよ！

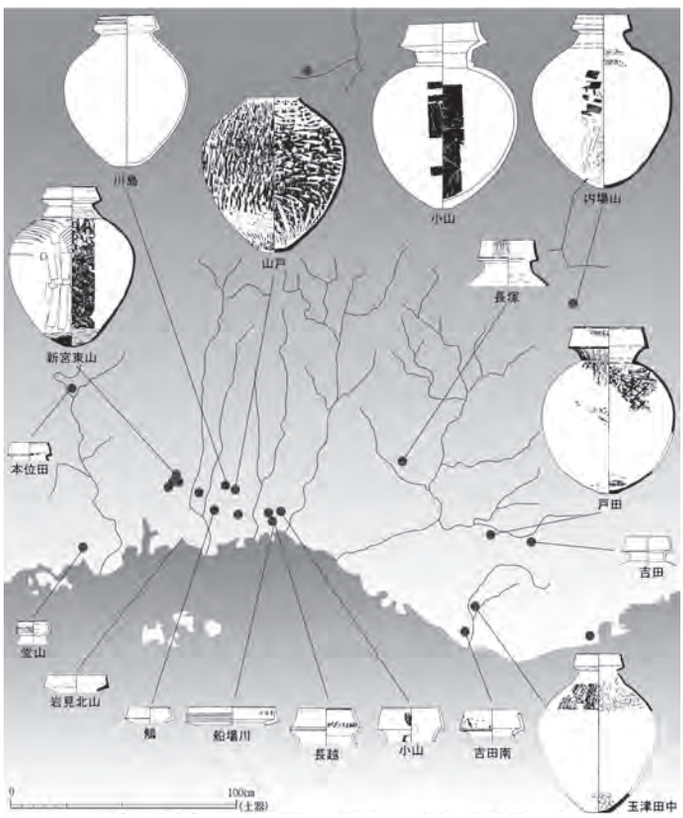
広島県　　岡山県



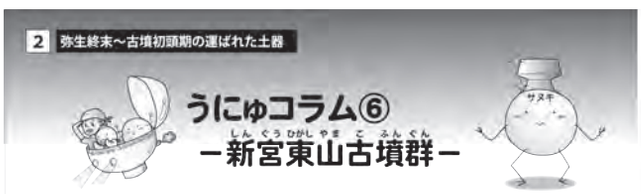

兵庫県北部　　京都府北部

うにゅコラム４　集団墓の慣習




播磨へ運ばれた四国系土器（壺）（岸本道昭 2006）



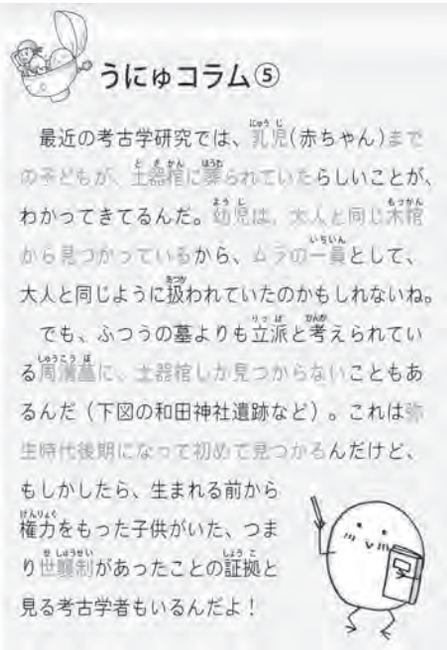

たつの市にある新宮東山１号墳から見つかった、この土器は人を埋葬するための棺おけとして使われたものなんだ。下写真の身と書いてある方だよ。左の展示ケースにある鉢を逆さにして合わせて蓋にしていたんだ。

とても大きなものなんだけど、驚きなのは、土器に角閃石という鉱物が含まれていて、土器の形からも、この土器が香川県から運ばれて来たとわかったことだね。

この古墳群からは、島根県方面のものと似た土器棺も見つかっているんだけど、なぜこうなったのか、とても興味深いね。

たつの市　新宮東山古墳群で土器棺が見つかった状況
（たつの市教育委員会提供）

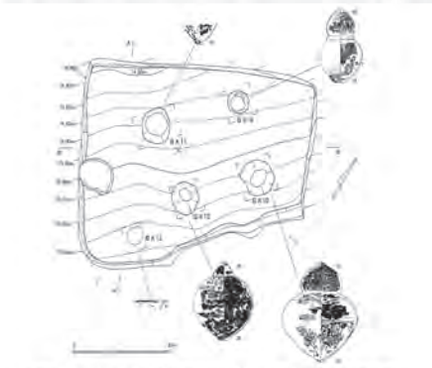
うにゅコラム６　新宮東山古墳群



うにゅコラム⑤

最近の考古学研究では、乳児(赤ちゃん)までの子どもが、土器棺に葬られていたらしいことが、わかってきてるんだ。幼児は、大人と同じ木棺から見つかっているから、ムラの一員として、大人と同じように扱われていたのかもしれないね。

でも、ふつうの墓よりも立派と考えられている周溝墓に、土器棺しか見つからないこともあるんだ（下図の和田神社遺跡など）。これは弥生時代後期になって初めて見つかるんだけど、もしかしたら、生まれる前から権力をもった子供がいた、つまり世襲制があったことの証拠と見る考古学者もいるんだよ！



三木市　和田神社遺跡で見つかった、土器棺だけの区画墓
（岸本一宏編2002『和田神社遺跡』兵庫県教育委員会）

三木市和田神社遺跡（岸本一宏編 2002）

（3）赤穂の墓からみる社会の変化

**■有年原・田中遺跡**

有年原・田中遺跡の１号墳丘墓は、弥生時代後期（約 1,900 年前）に築かれたもので、突出部と陸橋部をもつ、直径約 19 mの円形周溝墓です。円形の墓は、東部瀬戸内地域で弥生時代前期（約 2,500 年前）に生み出され、播磨に定着した、いわば「東部瀬戸内系の墓」。

ここには、岡山県から兵庫県南西部に多く見られる、飾られた壺と器台が供えられていました。このことから、弥生時代後期には、赤穂の人々は岡山県の人々と盛んにかかわりをもっていたと考えられています。この遺跡は、後の前方後円墳につながる墓の形と、出土土器の重要性から、前方後円墳を生み出した地域の一事例として、大変有名です。

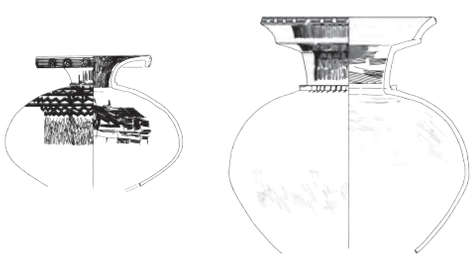
**■有年牟礼・山田遺跡**

一方、弥生時代終末期～古墳時代初頭（約 1,800 年前）のお墓である有年牟礼・山田遺跡の

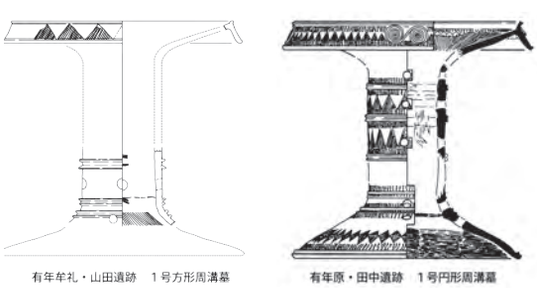
空中写真

１号方形周溝墓　全景

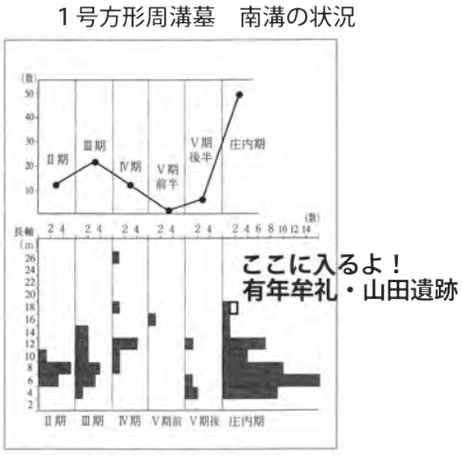
１号方形周溝墓　南溝の状況



有年牟礼・山田遺跡出土　搬入土器（1/4）




装飾器台の比較（1/4）




大阪市域の方形周溝墓の検出数と規模の変遷
（大庭重信2005「方形周溝墓制の理解原理」『考古学ジャーナル』534に追記）

有年牟礼・山田遺跡

１号墳丘墓は、陸橋部を２つもつ、長辺約 19 mの方形周溝墓です。方形の墓は、大阪湾沿岸地域で弥生時代前期（約 2,500 年前）に生み出された、いわば「大阪湾岸系の墓」。

ここには、大阪府から運ばれてきたと思われる大型壺と装飾壺、岡山県から運ばれてきた甕、そして地元産と考えられる装飾器台などが供えられていました。また、この方形周溝墓は、近畿地方の中でも最大級であり、さらに大型の方形周溝墓としては最西端になるもので、この方形周溝墓の重要性を物語っています。

有年牟礼・山田遺跡の方形周溝墓から出土した装飾器台は、有年原・田中遺跡のものによく似たもので、時代の変遷を追うことができます。しかし、それ以外の大型壺、装飾壺は、赤穂では見られない形をしていて、いずれも大阪府方面から運ばれてきたものと考えています。墓の形とお供えの土器が大阪湾沿岸地域との関わりが強いことは、東部瀬戸内的な有年原・田中遺跡と比べてみると、対照的であると言えるでしょう。

このように、時代によって深く関係する地域が、西から東へ大きく変化する事例は、これまで東部瀬戸内地域でも見つかったことがなく、これから議論がなされることとなりますが、まさに東部瀬戸内と近畿地域の境界にある赤穂において、こうした事例が発見されたことは、当時の社会の変化を語るうえで重要です。では、その後の社会がどのように変化していったのでしょうか。ムラの状況から見てみましょう。

## 3　古墳時代前期の社会変化と土器

### （1）前方後円墳でのマツリに供えられた土器

弥生時代終末期（約 1,800 年前）には、全国各地で様々な墓の形、埋葬の習俗がありましたが、古墳時代前期（約 1,700 年前）になると、有力な墓のほとんどは前方後円墳という決まった形になります。墓の形だけではなく、石室や木棺といった埋葬施設、そして方法や副葬品なども似通ったものになるため、古墳時代前期には、前方後円墳という墓とそこで行われるマツリが統一されてしまった、とも考えられています。

最近の考古学研究では、前方後円墳でのマツリは、弥生時代のさまざまな地域の埋葬の方法が混ざり合うことで生まれた、とされています。たとえば、古墳の周りに立てられる円筒埴輪は、主に岡山県で作られた特殊器台が変化したものです。また、古墳の斜面に貼られた葺石は、山陰や四国地方の影響が考えられます。古墳の副葬品として有名な鏡は、九州地域の文化をとり入れたと評価されています。

しかし、播磨を見てみると、こうしたマツリが完全に統一されてしまった、というわけではないようです。岡山県の埋葬方法が使われた古墳もあれば、島根・鳥取県の葬式の方法が使われた古墳もあるというように、いろいろな地域の埋葬の方法が見られたようです。特に、墓に供えられた土器から、それがよくわかります。

### （2）山陰文化の波及

古墳時代初頭～前期ころのムラから、山陰地域の土器が見つかることはそれほど珍しくありませんが、最近の研究では、小型丸底土器、鼓形器台、山陰系円筒土器といった特別な土器が、

姫路市　丁・瓢塚古墳

特殊器台から円筒埴輪への変遷

特殊土器・装飾土器の分布
（安川2002「吉備の特殊器台とその拡散」より）

**特殊土器の変遷と分布**

古墳や墓でのマツリに使われていたことがわかってきています。

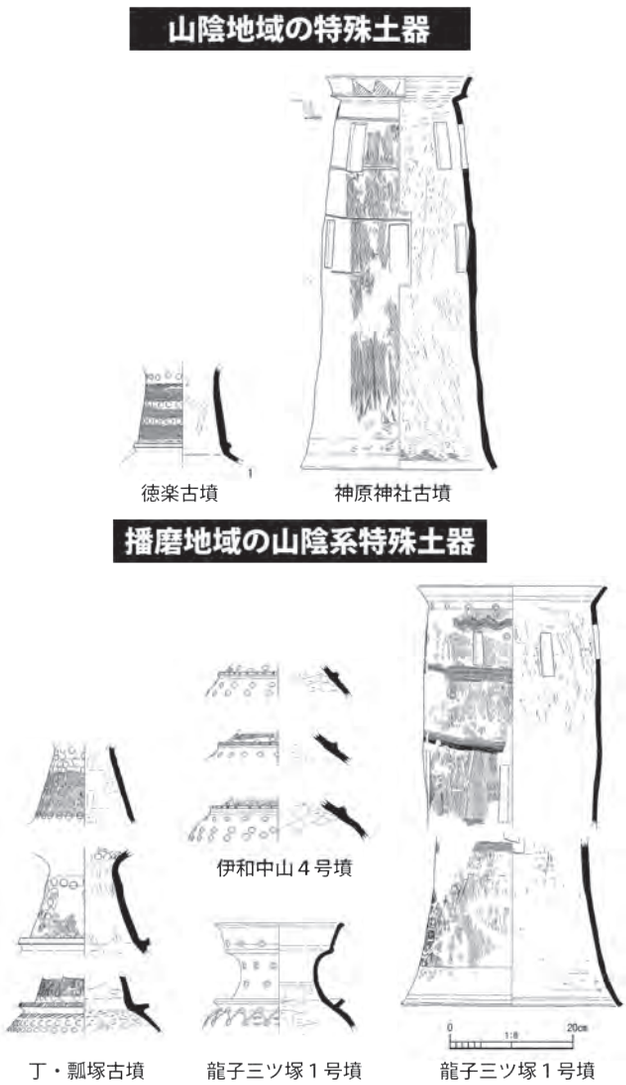
播磨では、代表的な前期前方後円墳である、丁・瓢塚古墳（姫路市）や、円筒形器台が見つかった龍子三ツ塚１号墳（たつの市）などで出土しており、古墳時代前期には主に吉備の文化が波及するとしていた古墳時代の播磨の評価を、大きく変えることになりました。

なお東に隣接する摂津地域では、神戸市の代表的な前期前方後円墳である西求女塚古墳や処女塚古墳で、また北の丹波では、首長墓と目される内場山墳丘墓（篠山市）でも、山陰系土器が見られます。山陰系土器が、各地の主要な墓でのマツリに使用されていた実態が、ようやくわかってきたのです。これより以東では、久宝寺遺跡（八尾市）の方形周溝墓群、御旅山古墳（羽曳野市）といった遺跡で点的に見られますが、奈良県に入ると、纒向遺跡方形周溝墓（桜井市）、波多子塚古墳（天理市）、西殿塚古墳（天理市）、東殿塚古墳（天理市）など、数多くの初期古墳で認められ、山陰の埋葬に関する習俗が、播磨だけでなく、ヤマト政権中央にまで及んでいたことがわかってきました。

（3）土器様式の統一

墓でのマツリに各地の要素が見られた一方、一般的なムラでは、さまざまであった各地の土器の特色が失われ、畿内の土器と似たものになっていきます。例えば九州地方でさえも、大阪府や奈良県と近い形の土器を使いだすのです。縄文時代以来のバラエティ豊かな土器文化は、古墳時代になりかなり統一されてしまいました。

日本の歴史を見たとき、この土器の統一の意味はたいへん大きく、重要ですが、その理由についてはよくわかっていません。ただ、日本列島の多くの地域が、近畿地域と強いつながりを持ち始めたことは間違いないでしょう。

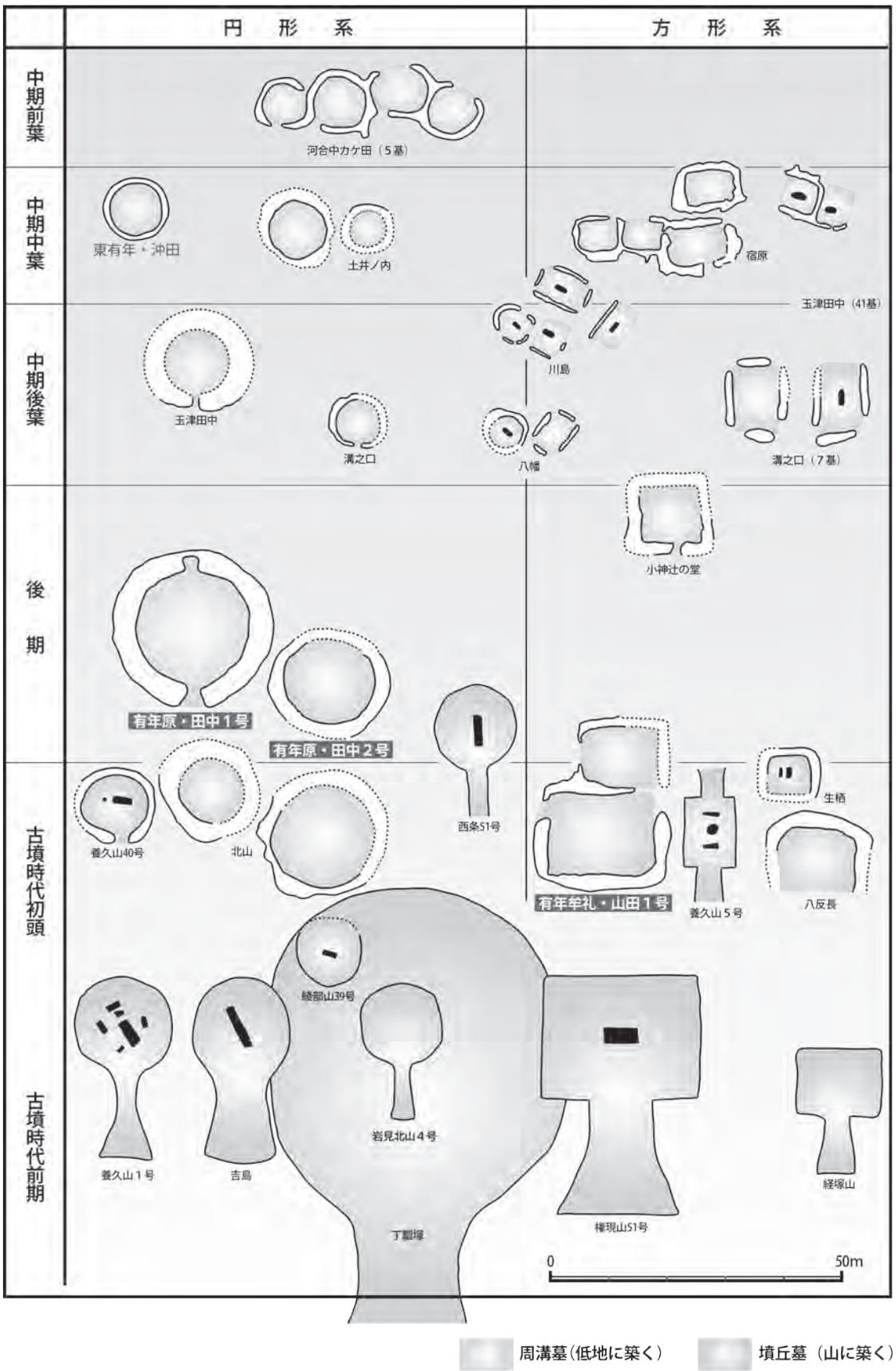


特殊土器の類例

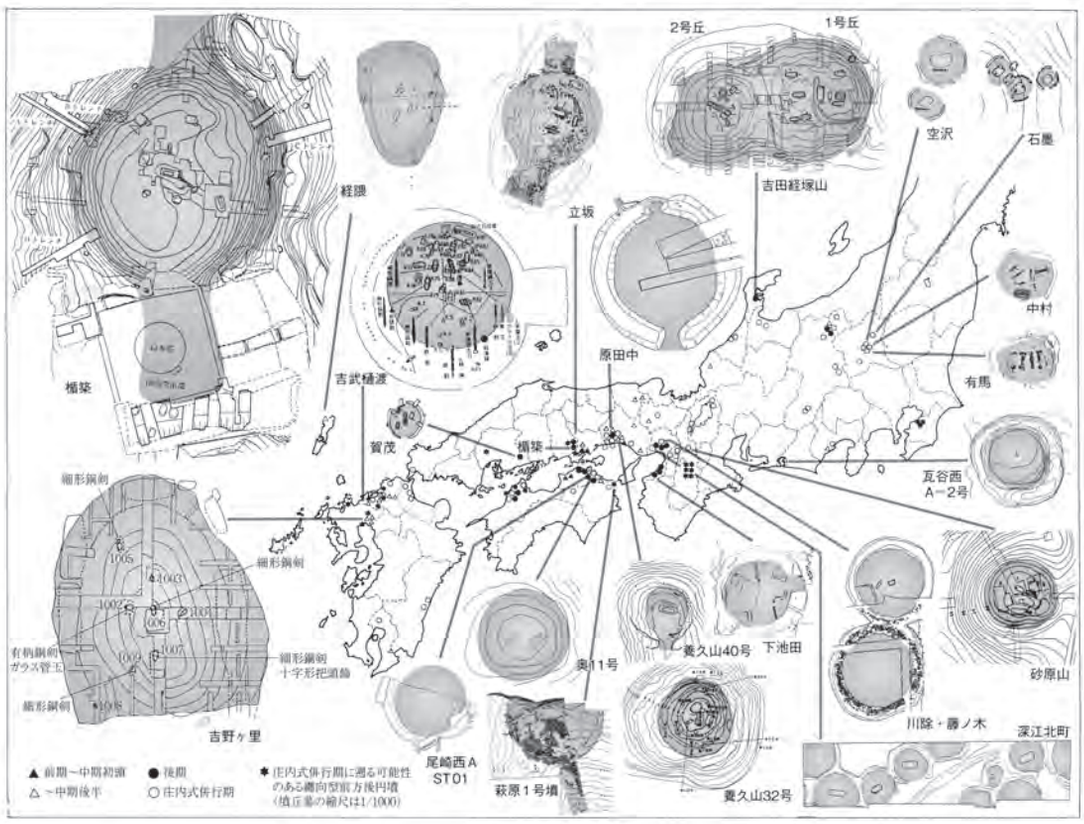
4　東瀬戸内地域が果たした役割

最後に、もう一つ重要なことに触れておきます。東部瀬戸内地域には、弥生時代後期から、前方後円墳のプロトタイプとも言うべき墓がいくつか築かれています。突出部のある墓、前方後円墳の前方部のようなものがある墓、積み石で前方後円形に築いた墓など、枚挙にいとまがなく、東部瀬戸内地域が、前方後円墳を生み出した地域であるという評価は、否定しがたいように思われます。これまで見てきたように、東部瀬戸内地域ではじまった、器台と壺をセットで使った墓でのマツリ、装飾土器の使用、そして前方後円形の墓を築く風習は、古墳時代前期のヤマト政権に引き継がれることとなりました。こうした風習は、弥生時代後期までの比較的狭い地域内での交流から、その後の広い地域での頻繁な交流に至り、一挙に広まったものであると言えます。そして、交流範囲が日本列島のほとんどにまで広がることで、結局のところ、政治のつながりが生み出され、本格的な古墳時代を迎えるのです。

赤穂市には、こうした社会の変化の様子を明確に示す、有年原・田中遺跡と有年牟礼・山田遺跡の墳丘墓があります。東部瀬戸内的な墓とマツリから、近畿的な墓とマツリへの劇的な変化は、東瀬戸内地域内でも大変珍しいものであり、その激動は、まさしく赤穂という地の重要性を物語っているのでしょう。装飾土器と搬入土器は、こうした時代の大きな社会変化を物語るための、重要なキーワードになるのです。




播磨の代表的な墳墓の変遷（岸本道昭 2006 を改変）




**弥生時代の円丘墓（寺沢薫 2011）**

なお、今回展示した有年牟礼・山田遺跡は、平成 23 年 3 月の発掘調査で見つかった、最西端の大型方形周溝墓です。溝内から出土した角礫や河内からの大型搬入土器、吉備からの搬入土器、古墳時代初頭の装飾器台など、検討しなければならないことが多くあります。今後、正式な調査報告を刊行することで、赤穂ひいては播磨の歴史を語る重要な基礎資料となることでしょう。

最後になりましたが、本特別展の開催にあたり、お世話になった方々、機関のご芳名を記載し、感謝の意を表します。

大久保徹也、河合　忍、岸本一宏、岸本道昭、柴田昌児、寺沢　薫、新納　泉、乗松真也、平井泰男、福井　優、藤井　整、松木武彦、松村さを里、森岡秀人、若林邦彦　上郡町教育委員会、佐用町教育委員会、岡山県吉備古代文化財センター、岡山県教育委員会、岡山市教育委員会、岡山大学文学部考古学研究室、宍粟市歴史資料館、高松市教育委員会、たつの市教育委員会、たつの市埋蔵文化財センター、姫路市埋蔵文化財センター兵庫県立考古博物館、真庭市教育委員会、御津町郷土歴史資料館、八尾市埋蔵文化財センター（50 音順）

【引用文献】

岸本一宏 2002「弥生時代の低地円丘墓」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号

岸本一宏編 2002『三木市和田神社遺跡』兵庫県教育委員会

安川満 2002「吉備の特殊器台とその拡散」『邪馬台国時代の吉備と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム資料集

岸本道昭 2006「播磨の集落と初期古墳」『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム 6　香芝市二上山博物館

寺沢 薫　2011『弥生時代政治史研究　王権と都市の形成史論』吉川弘文館

## 5　平成 24 年度特別企画展『佐方渚果生誕 110 年』

### 出　生

旧　家（陶器商）

本名は恒一という。明治 35 年（1902）9 月 26 日、赤穂郡坂越村鳥井で陶器商を営む「佐方屋」の店主で、奥藤家に勤めていた父の佐方卯八（元服名：竹松、号：烏白）と母さわの次男として生まれる。生家は安政 6 年（1859）に建てられ、老舗の商家であった。

### 坂越に帰郷するまで

大正 4 年（1915）3 月に坂越尋常小学校を、大正 6 年（1917）3 月に坂越尋常小学校高等科を卒業する。坂越尋常小学校時代は、毎年、学業優等により褒状を授かるなど、坂越村内でも優等生として知れ渡っていた。卒業後の進学については、父が勤めていた奥藤家（当時は酒造のほか銀行、大地主など多角的な経営をしていた）の大旦那から進学を薦められたが、まじめでかたくなな父に「人の世話になってまでの進学は反対」と言われて進学をあきらめ、大正 6 年（1917）4 月に大阪逓信講習所に入学した。

講習所では逓信士（現在で言う郵便業務）としての講習を 2 年間学び、大正 8 年（1919）8 月には通信書記補として、神戸三宮郵便局に奉職した。大正 13 年（1924）に神戸三宮郵便局を退職して間もない頃、長兄の半次が亡くなった。恒一は、家督相続のため坂越に帰郷することとなる。

坂越尋常小学校時代

少年時代

大阪逓信講習所時代

神戸三宮郵便局時代

## 恒一、表具師「渚果」へ

当時の坂越では、昼間の商売仕事は女性の仕事であった。実家の陶器店でも、店は母のさわが実質的に切り盛りし、父は仕入れこそすれ、昼間は奥藤家に勤めていた。恒一は、今後の生計をどうするか悩み迷った。

郵便局勤務の経験から勤め人には興味がなく、また長兄の半次が営んでいた代書には相当の顧客があったが、これにも一切興味を示さなかった。

坂越大道の井古戸（昭和 30 年 12 月 1 日）

恒一は、自分の手先が器用で手仕事に向いていることを知っており、また同郷で表具師を営んでいた渡海洲蓬に、一種の憧れと尊敬を抱いていたため、表具師になる決心をした。そこで一念発起して赤穂郡上郡町（大正 2 年（1913）には町となっていた）の表具師であった村上官太郎の内弟子となり、昼夜を問わず師匠から手ほどきを受けながら、表具師としての修業を重ねていった。

生来の真面目さと器用さで表具師の技を習得し、昭和 5 年（1930）には表具師として独立。店名を「佐方昭栄堂」と名乗った。「渚果」を名乗ったのも、この頃からと思われる。

ちなみに恒一は「渚果」号を終生愛し、多用したが、堂名である「昭栄堂（しょうえいどう）」をもじって「梢影洞（しょうえいどう）」とも号し、特に愛用、重宝した蔵書には「梢影洞蔵書」を押印して使用していた。このように、洒落たことば遊びが好きだった渚果は、知人らとの文通等の時に「梢影洞」のほか「梢々辺人」などと呼び書きすることがあったり、こよなく愛した河原翠城の揮豪「求放心」にならい、自らの寝起きする部屋を「放心居」と称するなどしていた。

表具師として独立し、少しばかり自由な身となった渚果は、藤江熊陽の『播州赤穂郡志』（1747 年著）に魅せられた。郷土史に関心を持つようになり、郷土資料の収集に取り組むようになったのがこの頃である。また、坂越在住の表具師であった渡海洲蓬に様々な影響を受け、茶・華などを嗜む多趣多芸の域を拡げるようになった。

## 戦争と家族

昭和 6 年（1931）11 月 1 日、渚果は、高野村の高橋まさのと結婚した。昭和 10 年（1935）11 月 27 日に長女さよ子、昭和 18 年（1943）3 月 18 日には次女千里が生まれる。渚果は表具師のかたわら、家業としていた瀬戸物屋（屋号：佐方屋）の主であったが、坂越の旧来の慣習どおり、仕入れは行っても店商売は妻のまさのに任せていた。しかし、昭和 18 年（1943）頃には戦争激化のため、江

自宅にて結婚式（昭和 6 年 11 月 1 日撮影）

漢口陥落祝の門燈籠（昭和 13 年撮影）

金属回収令により各寺院の梵鐘供出
（昭和 17 年 12 月撮影）

戸末期から営んでいた瀬戸物屋（屋号 : 佐方屋）は廃業を余儀なくされる。悲しいことは続くもので、昭和 19 年（1944）3 月 30 日には次女千里が亡くなった。しかし、昭和 20 年（1945）6 月 21 日には三女早苗が生まれ、明るい話題もできた。

### 渚果、郷土史家へ

勤務先の坂越中学校にて
（昭和 32 年 12 月 17 日撮影）

昭和 25 年（1950）4 月になると、坂越中学校の事務職員（書記）に奉職した。そして表具師として独立して以来、約 20 年間に及ぶ坂越を中心とした郷土史研究の集大成として、同年 9 月、郷土史年表『越浦年表』を完成させる。この年表は、昭和 33 年（1958）まで、補遺が続けられた。

これ以後、渚果の郷土史家としての活動が始まる。渚果は、郷土研究に関する長年の成果を、小林楓村らの発行する『西播史談会会報』にはじめて投稿する。『西播史談会会報』第 17 号（昭和 26 年（1951）1 月 25 日刊行）に「春蔭の手紙」「傘露の萩の句」「河原翠城の証文」が掲載されたのを皮切りに、次々と発表していく。

自宅書斎にて（昭和 25 年 4 月 3 日撮影）

西播史談会では、小林楓村をはじめ、松岡秀夫、平尾須美雄らと知り合い、また中央で活躍する柳田国男、今井啓一などと交流を広め、ますます研究活動に邁進した。「西播史談会」「赤穂歴史研究会」などの歴史研究団体に所属し、矢継ぎ早に研究論文を発表すると同時に、「赤穂新聞」「妙道寺季報」「士風時報」などの地方紙にも寄稿し、郷土の歴史民俗をやさしい文体で記述し、ひろく郷土の歴史を紹介した。連載ものの特別寄稿などもあった。

また、昭和30年（1955）頃には大避神社の直選議員となり、昭和48年（1973）頃まで務めあげている。

### 表具師としての文化財保存活動

市民会館茶陶展で（昭和45年10月24日撮影）

昭和35年（1960）3月、坂越中学校事務職員を退職し、表具師を再開し家業として専念することとなった。しばらくして表具師の資格試験制度がはじまったが、生来の負けん気に火がつき、自分の腕を試してみたい気持ちから、昭和42年（1967）9月1日、表具師の資格試験を受験した。

試験は、今と同じく筆記試験と実務試験があり、渚果が表装した製作品が資格試験で認められ、試験に合格。表具師資格を取得した。さらに、昭和43年（1968）5月14日には技能試験を受け、一級表具技能士に認定された。製作品は終生大事にされ、現在も変色なく保存されている（今回展示）。

道　標

また、赤穂市民美術展（現在の赤穂市民文化祭）が始まった頃には、表具師職人としての技を活かし、多くの出品作品の表装を手掛けたりしたほか、渚果が収集した郷土ゆかりの書画、墨跡などの表装し直しを行った。また、木戸門跡の礎石・道標の保存、「旧坂越中学校唱歌」「高徳さん数え歌」の作詞、坂越幼稚園園章デザインの公募採用（現在も使用）、郷土に関するパンフレット類の収集から古文献収集、古地図の収集と修復、古文書の解読と写し作業等々、多岐多様にわたる郷土資料の収集、保存に尽力した。

昭和49年7月14日の赤穂歴史研究会の結成に際しては、松岡秀夫、山崎昭二郎、廣山堯道らといち早く参画し、同会の重鎮として活躍した。また、三木竹夫、牟禮芳雄、大西孜、奥藤研二、茶谷豊らと坂越歴史研究会（のちの赤穂歴史研究会坂越支部の母胎）を結成し、現在の坂越、そして赤穂市の文化財保護・研究活動の基盤を築いた。

しかし、昭和51年（1976）3月23日、脳溢血にて亡くなった（享年73歳）。

### 学芸員のまなざし－佐方渚果を調査して－

（1）佐方渚果の評価

佐方渚果による郷土資料の収集・保存は「私財を投じて行った」という表現より、古くて貴重なものばかりではなく、普段、何気なく目にしているが後世には得がたいものに着目し、保存したと言え、その功績を讃えたい。渚果は、貴重な古文書、古地図など古文献を目の前にし

書　斎

自宅書斎にて

た時、散逸・消滅を憂い、「今やらねば誰がする、今しておかなければやがては消え、忘れなくなってしまう」の一心で収集したのであろうが、それがパンフ、チラシの類は言うに及ばず、郷土に関するあらゆるものに及んでいるのである。

家計の許す限り、家族の理解・協力のもと、将来のため、郷土のため、そして「郷土を愛し、郷土を学び、郷土を知り、郷土を誇り」うるものとなることを信じて、精力的に資料の収集・研究を進めた行為に感服する。渚果の収集した郷土資料は今では貴重な史料となり、例えば歴史博物館等で開催される展覧会にはなくてはならないものとなるなど、先見性のある高い識見により、高い評価を受けている。

（2）渚果の人柄

渚果は、昭和 51 年（1976）3 月 23 日、脳溢血にて倒れた。しかし、心半ばにしたもの、残したものをご遺族が大切に整理・整頓され、いつでも貸出、貸与ができるようにしているばかりでなく、見事に渚果先生の遺稿集なども出版された。

遺稿集に書かれている、渚果の人柄や気質等を紹介していきたい。

**越浦年表**

『越浦年表』では、序文を寄稿した松岡秀夫が「最近の郷土史界にあっては、中央の史家に関心のあるものばかり取りあげられて、郷土の歴史を築き上げた事柄であっても、中央学者の

テーマに関連しないものはそれを捨ててかえりみない」「これは郷土史だ」と中央学会に反骨心をみせている。また、「（越浦年表は）坂越で起きた出来事を細大漏らさず載せてあって、坂越の歴史を知る上での貴重な資料となるものである」と讃えている。また「私の今日あるのは佐方さんに負うところが大きい」「私も蝶ネクタイが好きで馬が合った」とも記している（余談ではあるが、蝶ネクタイはいつも愛妻のまつののあつらえで、自慢げに愛用していた）。

遺稿集の編者で、遺族でもある佐方直陽氏は「生来、几帳面な性格で、絶えず整理整頓に心がけ、物が散逸することを極度に嫌い、何物によらず大切に保存するようにした」「古き物への憧れは強く、一見不用と思われる事物についても、粗末にすることなく、記録、保管に努めた」「感受性が強く、四季折々の風物、行事等に深い関心を寄せ、ひとつひとつの出来事に一喜一憂し、素直に感情を表現した」「言語表現に表裏がなく、腹芸などは全くできない人」と評している。時には職人気質を持ち合わせた人物で「生涯純粋な生き方をした」「社交性に乏しく、気むずかしい人、偏人」更には「大の読書好き」「難解な文章もよく読みこなし」「手先の器用さは、抜群であった。本職の表具は勿論、日常の小道具づくりから修理に至るまで」とも記している。

そして「こよなく坂越を愛し」「坂越の自然、言語、風物、行事、中でも坂越に対する愛着は極めて強く、坂越に関する資料は、むさぼるように収集し、どんな小さな事柄であっても、新しい事実を見つけた」と結んでいる。

### 赤穂の言葉

『赤穂の言葉』では、著者である渚果は「昭和８年頃から集めかけたもの」「方言ではなく、坂越で使われている言葉という意味で集める」「方言を研究するのではなく、集めたもの」と記している。編者の長女さよ子氏は、「亡父渚果が、趣味の郷土史の一環として、方言ではなく坂越の言葉として少しずつ収集し、一応草稿として形付けていました」「原稿を整理するうちに、忘れかけていた昔懐かしい言葉が次々とよみがえり、改めて、これを発願した父の心情が思われました」と後記に記している。

### 赤穂茶人考

渚果は生来の茶飲み好きで、岩崎、田淵、柴原、三木等の茶会によく出かけていたようで、『赤穂茶人考』をまとめあげるため、植田正夫（赤穂高等高等学校教諭）、炭田蓼庵（藪内流師範）に教示を受けている。編著の直陽はここでも「読書好きで、歴史関係の書物を愛読」「郷土の歴史に深い関心を抱く」「古文書や古い品物があれば、それ等を大切に保存し、読解したり眺めたりすることが何よりの楽しみ」「かなりこまめに物事を記録」「自分が生まれ育った坂越の地が大好き」「坂越の事となると大小を漏らさず書き綴っていた」と回想している。

### まとめにかえて

以上の遺稿集は、原本、復刻とも本展で展示していますのでご覧ください。渚果先生の緻密で几帳面な面が読みとれ、比較・検討した努力の姿をよくよく見ていただきたい。その成果は、今日において本当に役立ち、大いに負うところがあり、恩恵を拝借しご理解できるものと確信

自　宅　外　観

元旦の朝祝い（昭和 48 年 1 月 1 日撮影）

元旦を孫と（昭和 48 年 1 月 1 日撮影）

しています。

正に探求心の旺盛な先生で、郷土の赤穂、特に坂越をこよなく愛したことが、これらの展示で読みとれます。生誕１１０年展に合わせ、改めて郷土の魅力を見直していただくとともに、先生の真摯な研究姿勢を理解していただければ幸甚であります。

ご遺族の家人の話では、「渚果が生前いつも常々言っていたことは、我が家は安政６年（1859）の建家で、その時の材木の材料が良いから、できる限り保存し大切にせなならん」が口癖であったと言います。また「墓は建てなくてよい。家運が傾いたり、転居した時は一番放置されやすい。それ故に、墓の代わりに小さな組立式の祭壇をつくり、盂蘭盆には床の間に飾り、お墓同様に祀ること。それもこれも先々代の半六じいさんからの言い伝えであるが、良いことであるからこれからも続けていきたい、とことあるごとに話していたことが懐かしく、今日この頃感心させられることであります。」という話が印象に残った。

本企画展の調査を通じて、少しばかり私見を述べさせていただくなら、ご遺族の聞き取りから、渚果先生は晩年ご家族の愛に包まれた幸せ者であったと想像いたしました。それもこれも、誰もが残された遺品整理する時に、故人がなし得なかったもの、残していったものの事柄を、少しでも手助けする気持ちや志が芽生えることでしょう。今回、佐方直陽・さよ子夫妻が３冊の遺稿集を上梓され、それを拝見させていただいた中で、渚果先生の緻密で几帳面に記された足跡を紐解かれ、探り、そして成し遂げられたお二人の姿は、渚果先生と優劣つけがたい功績であると申し述べておきます。

また、ご遺族の口から「父は口から入る物は全部好きであった。いわゆる口から入る物、つまりご飯などの食事もの、甘辛の酒、菓子類、煙草、お茶など何でも好きであった」と聞かされた時、そのあたたかい口調に家族愛が感じ取れました。家族の団らんが失われ、家族の語らいが希薄になりつつなる今日、あえて略年譜で家族の出生、結婚、死別を書き留めたのは、誰しも人生において喜怒哀楽を経験し、おそらく渚果先生も同じく経験されたであろうと想像したためでもあります。先にも述べたように、家族愛に満ちあふれ、きっと幸せ者

であったに違いないと、あえてこの場に記した次第です。

最後になりましたが、本展の開催にあたり、ご遺族の佐方直陽・さよ子夫妻をはじめ、関係各位に終始ご教示、ご協力をいただき、記して感謝申しあげ、心より厚くお礼申しあげる次第であります。

**【聞取者】**

佐方直陽、佐方さよ子、大西　孜

**【協力者】**

佐方直陽、佐方さよ子、大西　孜、枡田美和子、牟禮清美、牟禮宗弘、田川英生、久保昭臣、谷中蘭子、大浦祥一、大浦啓文、大浦福寿堂、（順不同、敬称略）

【参考文献】

協同組合京都表装協会編 2011『表具の事典』
佐方渚果遺稿『越浦年表』他（遺稿復刻 佐方直陽 1982）
付録として、氏が『播磨』に投稿した論文を再録。
佐方渚果遺稿Ⅱ「坂越の言葉」（遺稿復刻　佐方さよ子）
赤穂市教育委員会 1982『赤穂の民俗　その二　坂越編（二）』
佐方渚果遺稿Ⅲ『赤穂茶人考』（29.8.13）（遺稿復刻　佐方直陽・さよ子 1995）

## 6　平成 24 年度企画展「有年の遺跡発掘調査速報展」

第 1 章　有年のあけぼの－縄文時代－

赤穂市の北部にあたる有年地域は、ＪＲ播州赤穂駅のある南部の町とくらべて、田んぼが多いんだ。でもね、JR 播州赤穂駅のまわりは、平安～鎌倉時代（1,200 ～ 800 年前）にかけて、やっと地面ができたところだったんだ。たとえば 2,000 年前は海の中だったんだよ！

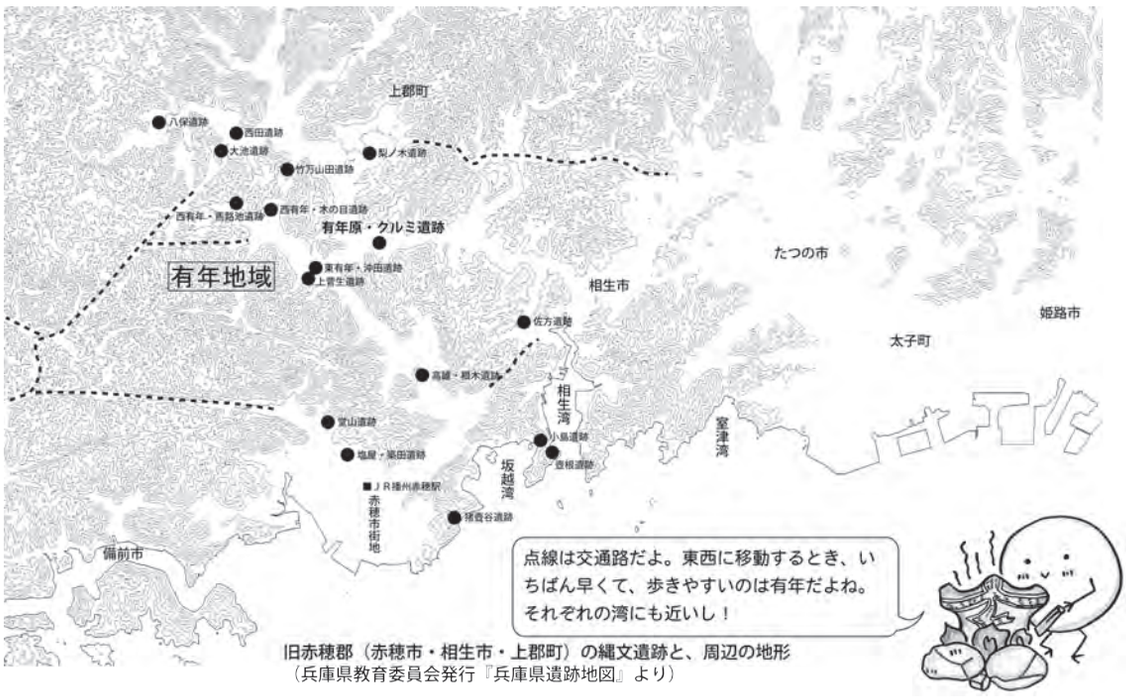
あと地図をみてもらえばわかると思うけど、東の姫路から西の岡山へ行くときには、ＪＲ播州赤穂駅のほうに行く必要はなくて、むしろこの有年を通る方が、一番早く行けるんだ。昔の人たちは自然の山道を歩いたりしていたわけだから、南部の町より有年が栄えていたということは、よくわかるよね。

ちなみに今、有年でいちばん古いと言われているのが「西有年・馬路池遺跡」。とっても小さな「矢じり ( 弓矢の先 )」が見つかっているんだ。三角形の一辺が大きくくぼんだ形をしてるんだけど、この特徴は縄文時代早期（約 10,000 年前）から前期（約 6,000 年前）のものなんだ。古いよね！

でもこの時に住んでいた人たちは、ずっとここに住んだわけではなかったんだ。シカやイノシシをとっては、「エモノ」がいなくなると移動していったんだよ。有年に人々がとどまって住み始めるのは、縄文時代後期（約 4,000 年前）になってからだ。赤穂市の周りの町でも、この時期からたくさんの遺跡が発見されるんだよ。

縄文時代の人たちは、シカ、イノシシ、ドングリ、魚といった自然のものを食べて生活して

いたんだ。最近発掘された有年原・クルミ遺跡では、縄文時代後期の遺跡が発見されたんだけど、ここでは石鏃（弓矢の先）、削器（ナイフ）、磨石（木の実を粉にする道具）とかが見つかって、当時の人々の生活のようすがよくわかる資料になったんだ。あと、市内で唯一、縄文時代晩期（約3,000 年前）の生活跡も発見されたんだよ！




旧赤穂郡（赤穂市・相生市・上郡町）の縄文遺跡と、周辺の地形
（兵庫県教育委員会発行『兵庫県遺跡地図』より）

有年原・クルミ遺跡　縄文時代晩期の焼失建物跡？
（上写真：焼土・炭の出土状況、下写真：焼土面）

有年原・クルミ遺跡　縄文時代後期の遺跡発見！

## 第２章　有年、大いに栄える－弥生時代中期－

弥生時代になると、人々は田んぼでお米を作り始めるんだ。田んぼをつくると、1 年をとおして同じ場所に住み続けられるし、田んぼに水を入れるために、周りのムラとの話し合いも必要になるよね。縄文時代から弥生時代になり、お米を食べるようになると、こんなふうに生活場所や生活のスタイルが変わってくるんだ。おもしろいよね。しかも、田んぼは大きければ大きいほど、たくさんのお米を作ることができるんだ。お米は保存もできるし、たくさん作れるムラが豊かになるので、大きな平地をもつ地域が、どんどん豊かになっていったんだ。

有年は、千種川の流域で 1、2 を争うほど平地が広いんだ。また、さっき話したように交通の便もよかったから、有年はとっても栄えたんだよ。

有年の弥生時代のムラといえば、有年原・田中遺跡、東有年・沖田遺跡が有名だったんだけど、最近の発掘調査で、有年牟礼・井田遺跡がとっても大きなムラだったことがわかってきたんだ！

発掘調査では、弥生時代中期後半（約 2,000 年前）の竪穴建物跡が 10 棟も見つかったんだよ。このうち 2 棟は火事で焼けた建物の一部が残っていて、当時の家のようすがよくわかる資料になったんだ。この発掘調査では、川や谷といった周りの自然地形も見つかったから、自然地形の中で、人々がどう暮らしていたのかも、よりよくわかったんだ。

とても栄えた有年だったんだけど、実は弥生時代後期 (1,900 年前 ) になると、人々はこれまで住んでいたムラを捨てて、住みにくい山の上に住み始めたり、社会が大きく変わるんだ。有年牟礼・井田遺跡や有年原・クルミ遺跡でも、この時期のムラはほとんど見つかっていない。有年原・田中遺跡や、東有年・沖田遺跡にはムラが見つかっているから、みんなが集まってきたのかもしれないね。大きな謎なんだよ。

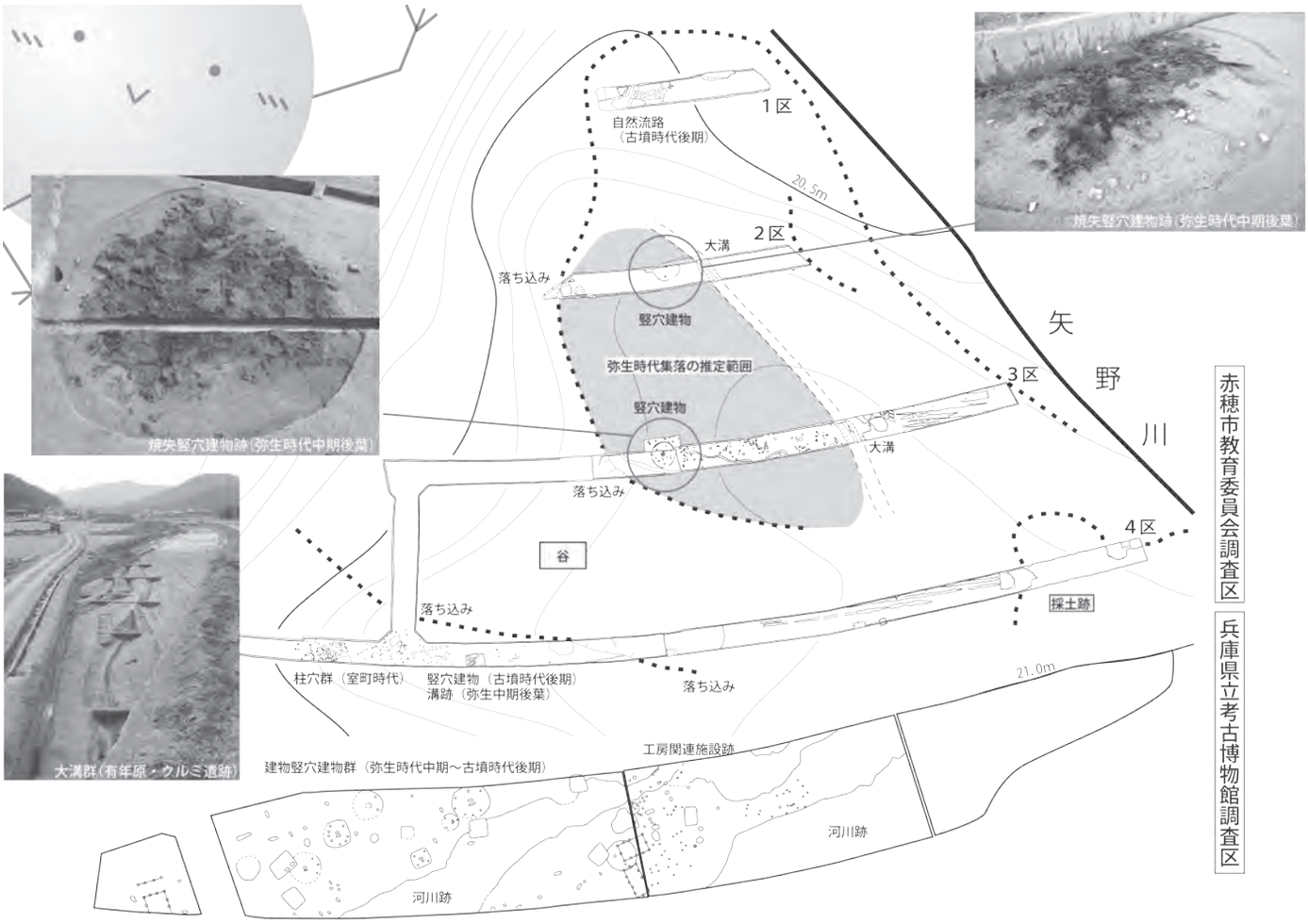
## 第３章　地域の拠点へ－古墳時代初頭～古墳時代前期－

弥生時代後期末～古墳時代初頭（約 1,800 年前）にも、全国で大きな変化が起こってるんだ。

まず、それまで各地でつくられていた、地域オリジナルの大きな墓がなくなって、代わりに「前方後円墳」と呼ばれる墓をつくり始めるんだ。また、全国各地の土器が、いろいろな場所へと運ばれるようになるんだ。たとえば大阪の土器が、九州で見つかったりするんだよ！　すごいよね。あとは、弥生時代のムラは「環濠」という大きな溝のなかで集まって暮らしていたのが、古墳時代に入ると環濠がなくなってバラバラに住むようになったとも言われてる。何が起こったんだろうね。

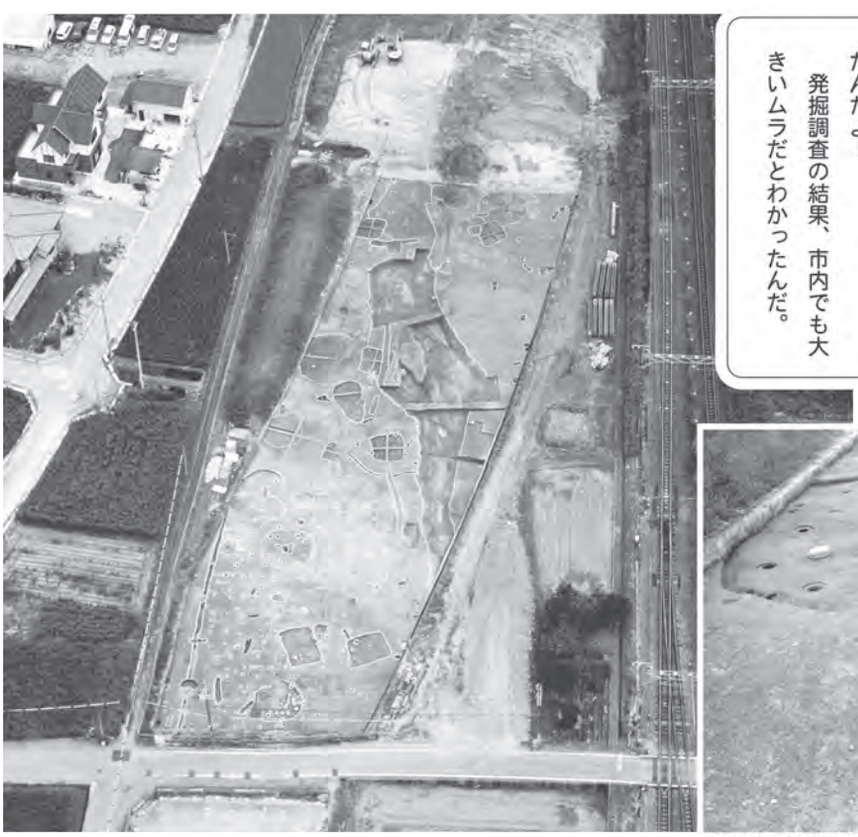
有年では、この時期のムラがたくさん見つかっていて、有年原・田中遺跡や東有年・沖田遺跡はもちろん、有年原・クルミ遺跡や有年牟礼・井田遺跡でも、竪穴建物跡などが見つかってるんだ。さっきの話の中で、土器が運ばれる話をしたけど、この有年にも香川県の土器や岡山県の土器が多く運び込まれてるんだ。香川県からは舟を使って運ばないといけないから、大変だったろうね。あと有年牟礼・井田遺跡では、島根県あたりから運ばれた土器や、「素文鏡」という小さな鏡も見つかってるんだよ！　この種類の鏡は、赤穂市で初めて見つかったんだ。

こうした、ムラの発掘がたくさん行われたほかに、平成 23 年度には、墓の遺跡、有年牟礼・




## 有年牟礼・井田遺跡の調査全体図（縮尺任意）

赤穂市教育委員会編　2009『有年牟礼・井田遺跡発掘調査報告書』
兵庫県立考古博物館編2012「ひょうごの遺跡」82号等より作成



兵庫県立考古博物館2012年度調査区（兵庫県立考古博物館提供）

竪穴建物跡群（弥生時代中期～古墳時代後期）（兵庫県立考古博物館提供）

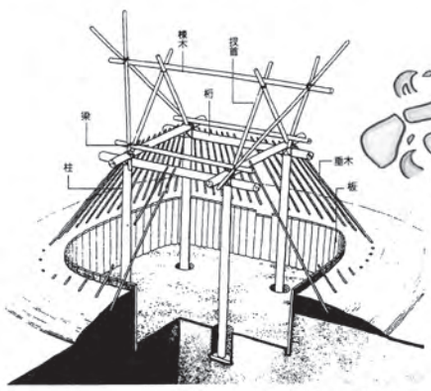
（写真提供：兵庫県立考古博物館）

## 有年牟礼・井田遺跡

竪穴建物跡

大溝群

出土した素文鏡




竪穴建物跡の模式図

有年牟礼には、大きなムラの有年牟礼・井田遺跡と、大きな墓のある有年牟礼・山田遺跡があるんだ。
でも井田遺跡に住んでいた人が、山田遺跡の墓に葬られたのかどうかは、わからないな。山田遺跡の墓は、有年全体を治めていた、偉い人のためのものだと思ってるんだ。

## 有年牟礼・山田遺跡

上から見た写真

横から見た写真（溝を掘る前）

## 有年原・クルミ遺跡

土器群

山田遺跡が発掘調査されたんだ。ここでは２基の四角い墓「方形周溝墓」が見つかったんだけど、１号墓が長辺 19 m、２号墓が長辺 12.2 m以上と、とっても大きいんだ！

うにゅコラムで説明するけど、墓の形や見つかった土器には、たくさんの謎が残ってるんだ。今後、調査研究をしなくてはね。

## 第４章　蟻無山の時代－古墳時代中期－

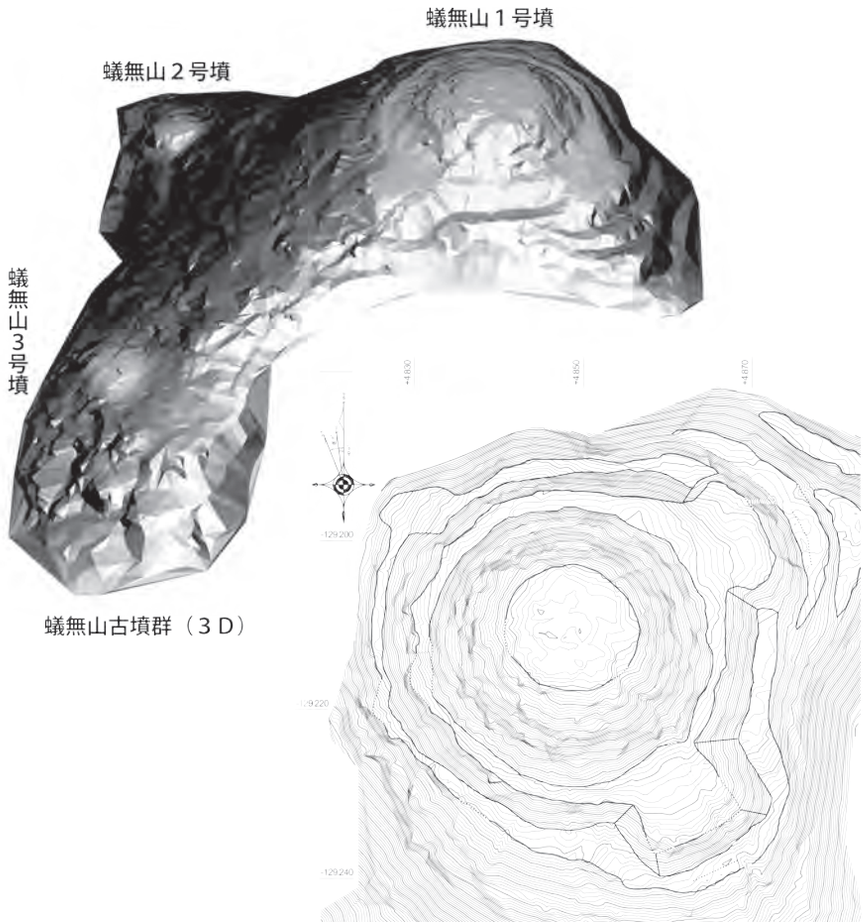
前章で話したように、古墳時代の初めには大きな社会の変化があったんだけど、それが収まるのが、古墳時代中期（1,600 年前）かな。この時期になると、古墳時代初頭までのような大きな社会変化を示す遺構や遺物は少なくなるんだ。人々がふつうの生活で使っていた土器も、これまでの地域ごとのオリジナルの土器ではなく、全国でだいたい形も似てくるし、墓も同じようなものになってくるんだよ。これは、奈良県を中心とするいわゆる「ヤマト政権」の支配がだいぶ整ったからかもしれないね。

これまで、古墳時代中期のムラは、実は有年でほとんど見つかっていなかったんだ。でも最近の有年牟礼・井田遺跡の発掘調査で、ムラの周囲にあったと思われるお祭りの跡が見つかったんだよ！　たいへん貴重な成果なんだ。

ちなみに、古墳時代初頭から前期にかけて、旧赤穂郡（赤穂市・相生市・上郡町）でいちばん栄えていたのは上郡町南部で、大きな前方後円墳がいくつか見つかってるんだ。でも古墳時代中期になると、こうした立派な墓は有年でつくられるようになるんだよ。まず古墳時代中期初めに蟻無山古墳群が、そのつぎに奥山古墳群ができるというように、ずっとこの場所で墓がつくられ続けたんだ。ただ、古墳時代初頭から栄えていた上郡町南部と、中期になって栄えた有年の場所の間は、たった 3km しか離れてないんだ。だから、古墳時代初頭から中期にかけては、有年から上郡町南部が一番栄えていたと言えるね。

蟻無山１号墳周辺の古墳分布

古墳時代前期から中期の変化は、播磨では実はお墓で見えてくるんだ。それはね、古墳時代前期には前方後円墳がたくさんつくられていたのに、中期になるとすっかり姿を消して、ほとんどの古墳が「円墳」か、「帆立貝形古墳」になってしまうんだよ。とっても不思議だね。帆立貝形古墳の蟻無山１号墳は、当時、千



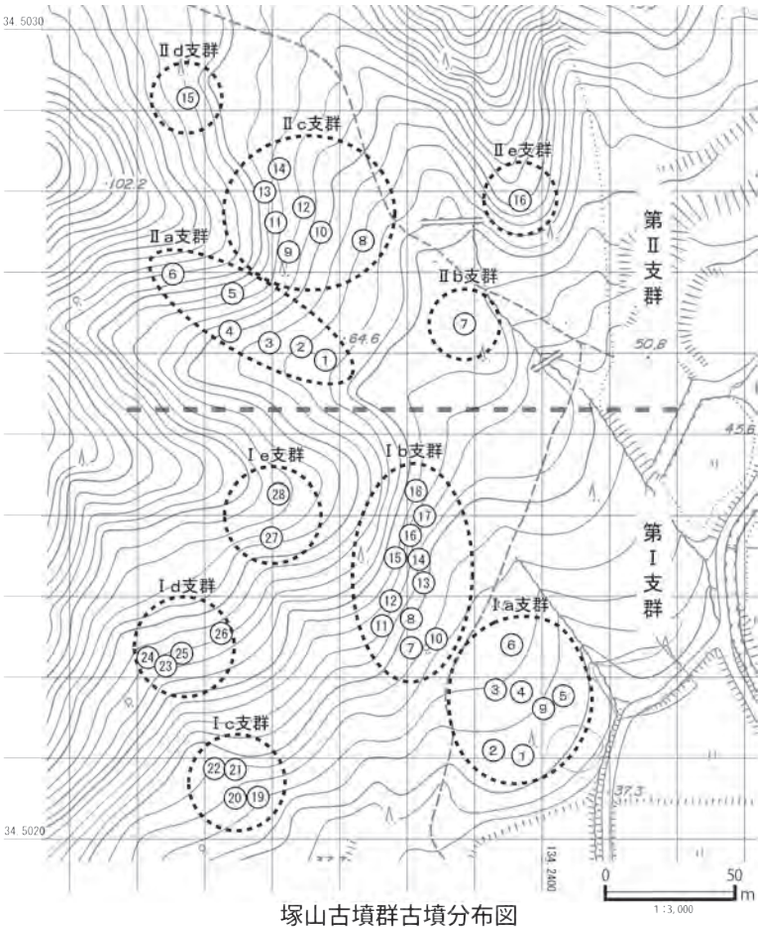

種川流域で一番大きい古墳で、権力が大きかったことがよくわかるんだ。

この古墳も、平成 22 年度に測量調査をして「造出し付き帆立貝形古墳」であると初めてわかったんだ。あと、これまでに拾っていた埴輪を大学の先生に見ていただいたところ、船形や鳥形をした埴輪も発見することができたんだ！　蟻無山 1 号墳は渡来人との関係も考えられてるから、船の埴輪はとても興味深いと僕は思ってるよ。

## 第 5 章　横穴式石室の時代－古墳時代後期－

大きな古墳がつくられていた古墳時代中期とくらべると、古墳時代後期（約 1500 年前）の墓は、実は小さくなるんだ。でも、墓の形が大きく変わってるんだよ。

古墳時代中期までは、穴を掘って棺おけなどをおさめ、一度埋めてしまうと二度と空けることはなかったんだ。それに対して古墳時代後期の墓は、石を積んで広い部屋をつくり、なかに棺おけをおさめるんだけど、部屋は入口だけを埋めて、後で何度も別の人を葬られるようにつくられたんだ。はじめに葬られた人と、あとで葬られた人の関係はあまりわかっていなくて、この墓が家族の墓だ！という人もいれば、代々の偉い人の墓だ！という人もいるんだ。この時期の古墳は、中期に比べると小さくなったんだけど、それでも大きめの古墳には貴重な副葬品がたくさんおさめられているので、偉い人と偉くない人の違いはちゃんとあったようだね。

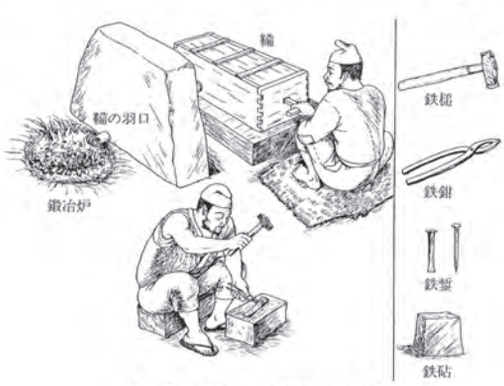


塚山古墳群古墳分布図

有年では、平成21年度の測量調査で古墳の数が52基とわかった、有年牟礼の塚山古墳群が、今のところいちばん大きい古墳群だね。このうちもっとも大きな古墳は塚山6号墳で、長径約17・5 mの土盛りの中に、長さ10・3 m、幅1.9 mの石室がつくられてるんだ。大きいね！　塚山古墳群は、ほかの古墳群に比べてそれぞれの古墳も大きいし、数も段違いに多いので、有年でも特に偉い人たちが葬られていたようだね。あと珍しいつくりとして「間仕切り」というものがあって、古墳の石室のなかを区切る壁がいくつかの古墳で見つかってるんだ。

最近の調査では、古墳だけ

塚山６号墳



鍛冶のようすと、使われる道具

有年牟礼・井田遺跡竪穴建物跡

有年牟礼・井田遺跡竪穴建物跡内の土器出土状況
（写真提供：兵庫県立考古博物館）

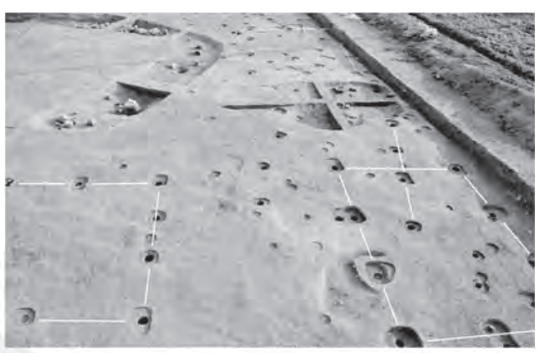
じゃなくてムラの様子もわかってきたんだよ。これまで有年の古墳時代後期のムラは、東有年・沖田遺跡や西有年の遺跡だけだったんだけど、有年原・クルミ遺跡と有年牟礼・井田遺跡のそれぞれでムラが見つかったんだ。

有年原・クルミ遺跡では、竪穴建物跡と掘立柱建物跡が見つかったし、有年牟礼・井田遺跡では、竪穴建物跡 4 棟と鍛冶工房関連施設があったんだ。すごいのは鍛冶工房関連施設で、高い温度で焼き固まった「焼土面」があったほか、鍛冶工房でしか見つからない鞴の羽口や鉄滓などが見つかってるんだよ。このムラで見つかった竪穴建物跡は、柱が一つも見つからない珍しい形をしていたから、もしかしたらムラ全体が鍛冶に関係したムラだったかもしれないね。

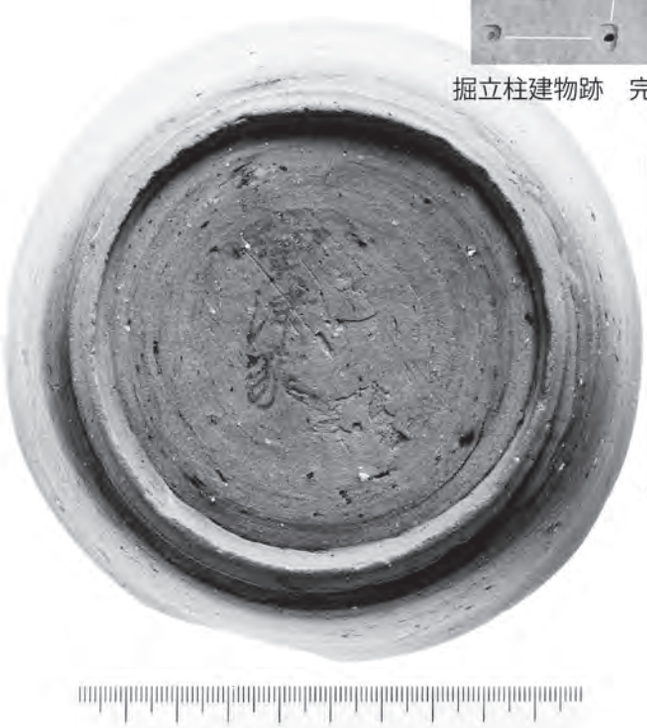
## 第 6 章　古代の集落－飛鳥～奈良時代－

最近まで、有年にある飛鳥～奈良時代（約 1,400 ～ 1,300 年前）のムラは、有年原・田中遺跡、西有年・長根遺跡でしか見つかっていなかったんだ。

でも最近の発掘調査では、有年原・クルミ遺跡と有年牟礼・山田遺跡で、土器やムラの跡が発見されたんだ。有年原・クルミ遺跡では、なんと「奥津家」と墨で書かれた土器が見つかっ



掘立柱建物跡　完掘状況写真（柱穴を掘った写真）



「奥津家」と墨で書かれた須恵器の赤外線写真

た。この土器はほぼ全体が残っていて、字の形もとてもキレイだったから、奈良の都（平城京）から運ばれてきたと言ってもいいくらいのものなんだ。でも周辺を発掘してみると、残念ながらムラは見つからず川を埋め立てる時に混じった土器とわかったんだ。

有年原・クルミ遺跡から東へ 1km ほどの有年牟礼・山田遺跡では、ちゃんとムラが見つかった。平成 23 年度の調査で飛鳥時代の掘立柱建物群が発見されたんだよ。この時期の建物は、柱で床を高く上げて生活していたから、実は土器が見つかりにくいんだ。

でもこの遺跡ではたくさんの土器が見つかったから、飛鳥時代の土器を研究するうえで、たいへん大事な調査になったんだ。

## 第 7 章　水田化と大避神社－中世から近代－

平安時代から鎌倉時代（約 1,200 年～ 800 年前）になると、発掘調査で見つかる遺跡の数は増えるんだ。たぶん、人々がいろんな土地に住むようになって、弥生時代のような、特別な集住もしなくなったかじゃないかな。あと水田開発がたくさん行われたこともわかっていて、有年原・クルミ遺跡では大きな「あぜ」（大畦畔）が見つかってるんだ。

このあぜは、最近まで道として使われていたんだよ。水田をたくさんつくるため、これまでにムラがあった場所はぜんぶ水田となって、大きな農業用の水路も流れていたんだ。

一方の有年牟礼・井田遺跡では、鎌倉～室町時代にかけてのムラが見つかった。クルミ遺跡にくらべて、洪水を受けにくかったからかな？　簡単な鍛冶炉も見つかってるんだ。あと明銭の「永楽通宝」も見つかったよ。

有年原・クルミ遺跡の北側、矢野川沿いには、むかし大避神社があったんだ。大避神社っていうのは、旧赤穂郡内に 28 もの神社があった、「秦河勝」を神さまとする神社だ。ここの神社は、明治 38 年 3 月 18 日に有年牟礼の八幡神社に合せて祀られることになって、無くなったと古い文献に書かれてたんだ。でも、いつ建築されたかわからなかったので、この大避神社跡を発掘調査してみたんだ。すると、江戸時代より古い地面は見つからず、川の砂の上にできていたことがわかったんだ。できた時代は江戸時代であったことがわかったんだよ。発掘調査では、神社が取り壊される前の祀りに使われていたお茶碗が見つかってるんだ。

## 第 8 章　これだけ変わった！有年の歴史

このように、最近の発掘調査によって多くの成果があがり、有年の歴史も大きく変わってきました。

**1　縄文時代後期の遺跡の発見**

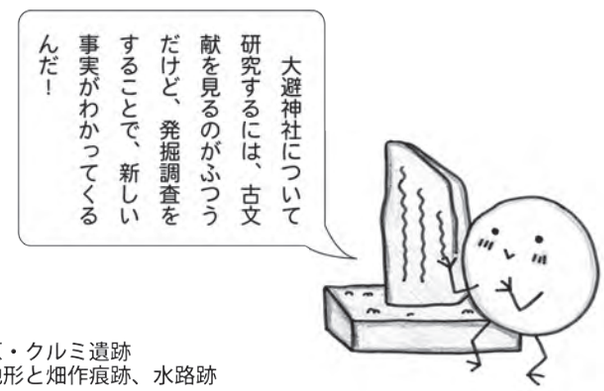
クルミ遺跡では、東有年・沖田遺跡に続き 2 例目の生活跡を発見しました。有年牟礼・井田遺跡、有年牟礼・山田遺跡でも石器等が出土しています。

**2　縄文時代晩期の遺跡の発見**

市内で初めて、生活跡を発見しました。焼失建物である可能性が高く、今後の調査研究が期待されます。

有年原・クルミ遺跡　大畦畔（矢印部分）

有年原・クルミ遺跡
自然地形と畑作痕跡、水路跡



有年牟礼・井田遺跡
鍛冶炉跡と掘立柱建物跡

有年原・クルミ遺跡
大溝を見つけた状況（上）と完全に掘りきった状況（下）

**3　弥生時代中期の集落跡の発見**

有年牟礼・井田遺跡は区画整理事業に伴って初めて発掘調査された遺跡であり、焼失建物跡の貴重な調査事例となったほか、たくさんの遺物が出土しました。

**4　古墳時代初頭の集落跡の発見**

有年原・クルミ遺跡、有年牟礼・井田遺跡で、それぞれ竪穴建物跡を発見。市内で初の調査事例となりました。また有年牟礼・井田遺跡では、当時の大溝がたくさん見つかり、集落縁辺部の様相もわかりました。

**5　有年牟礼・山田方形周溝墓群の発見**

昭和 63 年度に一部の発掘調査がなされたものの、詳細が不明だった有年牟礼・山田遺跡を発掘調査したところ、大規模な方形周溝墓が 2 基見つかりました。多くの謎を残しており、今後の調査研究がまたれます。

**6　古墳時代中期の蟻無山 1 号墳の形状把握、船形埴輪の発見**

中期古墳として千種川流域最大の蟻無山 1 号墳。詳細な測量調査を行った結果、「造出付き帆立貝形古墳」であることが判明しました。また兵庫県内でも珍しい船形埴輪の存在などもわかりました。

**7　古墳時代後期の鍛冶を行った集落跡の発見**

有年牟礼・井田遺跡で見つかった竪穴建物跡は、すべて柱穴が見つからない珍しい構造であることがわかりました。また周囲では鍛冶炉、鞴の羽口、鉄滓などが見つかり、鍛冶を行っていることが明らかとなっています。竪穴建物は、こうした生業と深く関連した建物である可能性があり、類例を探索中です。

**8　市内随一の群集墳の発見**

これまで、市内における古墳時代後期の群集墳は、どれも同じような規模と考えられてきましたが、分布調査や測量調査により、塚山古墳群の大規模さが明らかになりました。また今回は触れませんでしたが、飛鳥時代の里長が葬られた可能性のある古墳も見つかり、播磨地域を代表する群集墳であることがわかりました。

**9　奈良時代の墨書土器の発見**

有年原・クルミ遺跡では墨書土器が出土し、奈良文化財研究所の協力により赤外線撮影を実施したところ「奥津家」と判読できることがわかりました。その意味についてはさまざまな説がありますが、今後の調査研究が必要でしょう

このように、地道ながら測量調査や発掘調査を行うことで、有年の歴史はさらに明らかになって行きます。最近の成果を活かした研究は、まだ出発の途についたばかりであり、今後、資料の分析を行うことで、より有年のさまざまな歴史に光を当てることができることでしょう。

**協力者名**

池田征弘　岸本一宏　室井正彰　横山博光　渡辺　昇　有年原自治会　有年牟礼自治会　有年横尾自治会　公益社団法人兵庫県まちづくり技　術センター埋蔵文化財調査部　独立行政法人国立文化財機構奈良文化　財研究所　兵庫県立考古博物館

## 付録　有年考古館　講演会記録一覧

| 日　付 | 講　師 | 演　題 |
|---|---|---|
| 1950年10月8日 | 梅原末治 | 有年考古館の意義について |
| | 島田清 | 有年考古館と赤穂郡上代文化について |
| 1951年10月10日 | 宮川満 | 矢野庄の研究（中世庄園について） |
| | 魚住惣五郎 | 南北朝と西播地方 |
| | 島田清 | 赤穂郡の古墳文化について |
| 1952年10月12日 | 小林行雄 | 考古学より見たる日本古代文化について |
| | 島田清 | 赤穂郡古代文化の特異性について |
| | 楢崎彰一 | 西野山三号墳調査報告遺構について |
| | 上田宏範 | 西野山三号墳調査報告遺物について |
| 1953年10月12日 | 野地脩左 | 日本古代の建築について |
| | 島田清 | 坂越児島の古墳より出土せる十字刻印の石について |
| 1954年12月8日 | 望月信成 | 埴輪の美 |
| | 島田清 | 赤穂郡の石造美術について |
| 1955年12月4日 | 田澤担 | 日本上代文化の特質 |
| | 島田清 | 龍野西宮山古墳 |
| 1956年12月3日 | 長広敏雄 | 日本上代文化と大陸仏教文化 |
| | 島田清 | 千種川流域の青銅器文化 |
| 1957年12月1日 | 藤島亥治郎 | 日本上代の住宅について |
| | 島田清 | 赤穂の石造重層塔 |
| 1958年12月7日 | 石田茂作 | 最近に於ける上代寺院阯研究の成果 |
| | 島田清 | 吉備文化と播磨 |
| 1959年12月6日 | 藤田亮作 | 考古学より見た朝鮮と西日本－特に古墳時代を中心として－ |
| | 島田清 | 兵庫県下の指定文化財 |
| 1960年12月4日 | 末永雅雄 | 日本の古墳－特に前方後円墳について－ |
| | 島田清 | 兵庫県指定文化財について |
| 1961年12月10日 | 酒詰仲男 | 人と環境－先史考古学から見た－ |
| | 島田清 | 宍粟郡新発見の銅鐸 |
| 1962年12月2日 | 梅原末治 | （未詳） |
| | 島田清 | 佐用郡の寺阯 |
| 1963年12月8日 | 網干善教 | 新沢千塚古墳群の調査 |
| | 島田清 | 播磨町大中弥生遺跡について |
| 1964年12月6日 | 村田治郎 | 上代における日本と中国の文化交流について |
| | 島田清 | 赤穂地方における考古学研究史 |
| 1965年12月 | 三本文雄 | （未詳） |
| | 島田清 | （未詳） |
| 1966年12月4日 | 梅原末治 | 銅鐸について |
| | 島田清 | 兵庫県考古学発見史 |
| 1967年12月3日 | 大場磐雄 | 瀬戸内地方における祭祀遺跡 |
| | 島田清 | 兵庫県考古学発見史（第二講） |
| 1968年12月8日 | 中村哲 | 古代人の政治と祭祀 |
| | 島田清 | 兵庫県考古学発見史（第三講） |
| 1969年12月7日 | 斎藤忠 | 古墳の壁画について |
| | 島田清 | 兵庫県考古学発見史（第四講） |
| 1970年 | 江坂輝弥 | （未詳） |
| | 島田清 | 兵庫県考古学発見史（第五講） |
| 1971年12月5日 | 藤沢一夫 | 古代寺院の遺構に見る韓日の関係 |
| | 島田清 | 兵庫県考古学発見史（第六講） |
| 1972年12月3日 | 網干善教 | 高松塚壁画を発掘して |
| | 島田清 | 西播古代史に見る朝鮮文化 |
| 1973年12月2日 | 伊達宗泰 | 高松塚周辺の古墳 |
| | 島田清 | 兵庫県考古学発見史（第七講）<br>－佐用郡下本郷銅鐸について－ |
| 1974年12月1日 | 森浩一 | 古墳の研究と天皇陵 |
| | 島田清 | 兵庫県考古学発見史（第八講） |
| 1975年12月7日 | 梅漢昇 | 日本史研究について思うこと |
| | 島田清 | 兵庫県考古学発見史（第九講） |
| 1976年12月 | 松下隆章 | （未詳） |
| | 島田清 | （未詳） |
| 1977年5月1日 | 柴田実 | 村のくらしとその移りかわり |
| 1978年4月2日 | 近藤義郎 | 前方後円墳の成立について |
| 1979年4月1日 | 西谷真治 | 石の宝殿と益田岩船 |
| 1980年4月6日 | 坪井清足 | 平城出土の播磨国木簡と平城の発掘 |
| 1981年4月5日 | 間壁忠彦 | 播磨竜山石の石棺と古墳時代 |
| 1982年4月4日 | 佐原真 | 日本食物史 |
| 1983年4月3日 | 近藤義郎 | 土器製塩の話 |
| 1984年4月1日 | 楢崎彰一 | 古代末・中世の須恵器生産と丹波窯の成立 |
| 1985年4月7日 | 鎌木義昌 | 考古学上からみた邪馬台国 |
| 1986年4月6日 | 田中琢 | 三角縁神獣鏡をめぐって |
| 1987年4月5日 | 田辺昭三 | 古代の焼物について |
| 1988年4月3日 | 喜谷美宣 | 銅鐸にみられる絵画について |
| 1989年4月9日 | 石野博信 | 藤ノ木古墳について |
| 1990年4月1日 | 水野正好 | 古代のまじないについて |
| 1991年4月14日 | 都出比呂志 | 前方後円墳について |
| 1992年4月12日 | 小野山　節 | 古墳時代の馬具と寺院の荘厳具について |
| 1993年4月25日 | 村田修三 | 中世の城郭について |
| 1994年4月17日 | 原口正三 | 弥生時代の集落－環濠集落と高地性集落 |
| 1995年4月23日 | 八木哲浩 | 西播磨の歴史を規定した大地の傾動－地質時代から近世まで |
| 1996年4月7日 | 田淵敏樹 | 日本人の生活と床<br>－その成立と展開－ |
| 1997年5月27日 | 工楽善通 | 稲作の始まりと播磨国 |
| 1998年4月26日 | 長山雅一 | 難波宮の調査とその将来 |
| 1999年4月18日 | 檀上重光 | 西播磨の石造物 |
| 2000年4月9日 | 櫃本誠一 | 弥生墳墓から前方後円墳へ<br>－播磨地方中心に－ |
| 2001年4月29日 | 今里幾次 | 蓮華紋帯鴟尾の生産と流通<br>－西播磨特産の鴟尾は語る－<br>（開館50周年記念講演会） |
| 2002年4月21日 | 堀田浩之 | 中世の城郭に関する二、三の問題点 |
| 2003年4月27日 | 松村恵司 | 飛鳥池工房と富本銭 |
| 2004年 | 諸事情により開催見送り | |
| 2005年4月24日 | 町田章 | 私の考古学40年 |
| 2006年5月14日 | 猪熊兼勝 | 壁画古墳に関わって三十五年<br>－高松塚とキトラ古墳－ |
| 2007年5月13日 | 河上邦彦 | 壁画古墳とその保存問題<br>－高松塚キトラ古墳の考古学的意義と壁画の取出し－ |
| 2008年 | 諸事情により開催見送り | |
| 2009年5月17日 | 和田晴吾 | 古墳の他界観 |
| 2010年 | 諸事情により開催見送り | |
| 2011年11月20日 | 石野博信 | 松岡秀夫先生と有年考古館 |
| 2011年12月10日 | 水野正好 | 松岡秀夫先生と播磨の古代史 |
| 2012年8月5日 | 寺沢　薫<br>森岡秀人<br>岸本一宏 | 基調講演　邪馬台国時代の墓・マツリ・社会変化（寺沢薫）<br>シンポジウム　邪馬台国時代の墓・マツリ・社会変化 |
| 2012年9月30日 | 佐方直陽 | 佐方渚果という人 |
| 2013年3月10日 | 水野正好 | 上高野鋳型と銅鐸の世界 |
| 2013年3月24日 | 篠宮正 | 上高野鋳型からみた弥生時代の播磨 |
| 2013年7月14日 | 豆田正明市長ほか5名 | フォーラム廣山堯道博士の足跡を語る |

赤穂市立有年考古館報告書　第１冊

# 有年考古　創刊号

－赤穂市立有年考古館平成23・24年度年報－

平成26(2013)年3月31日発行

編　　集　　赤穂市教育委員会　生涯学習課
〒678-0292　兵庫県赤穂市81番地
TEL 0791-43-6962　FAX 0791-43-6895

発　　行　　赤穂市立有年考古館
〒678-1181　兵庫県赤穂市有年楢原1164番地1
TEL･FAX 0791-49-3488

印　　刷　　東洋紙業合資会社
〒678-0239　兵庫県赤穂市加里屋89番地2
TEL 0791-45-2123